

ア！安全・快適街づくりニュース

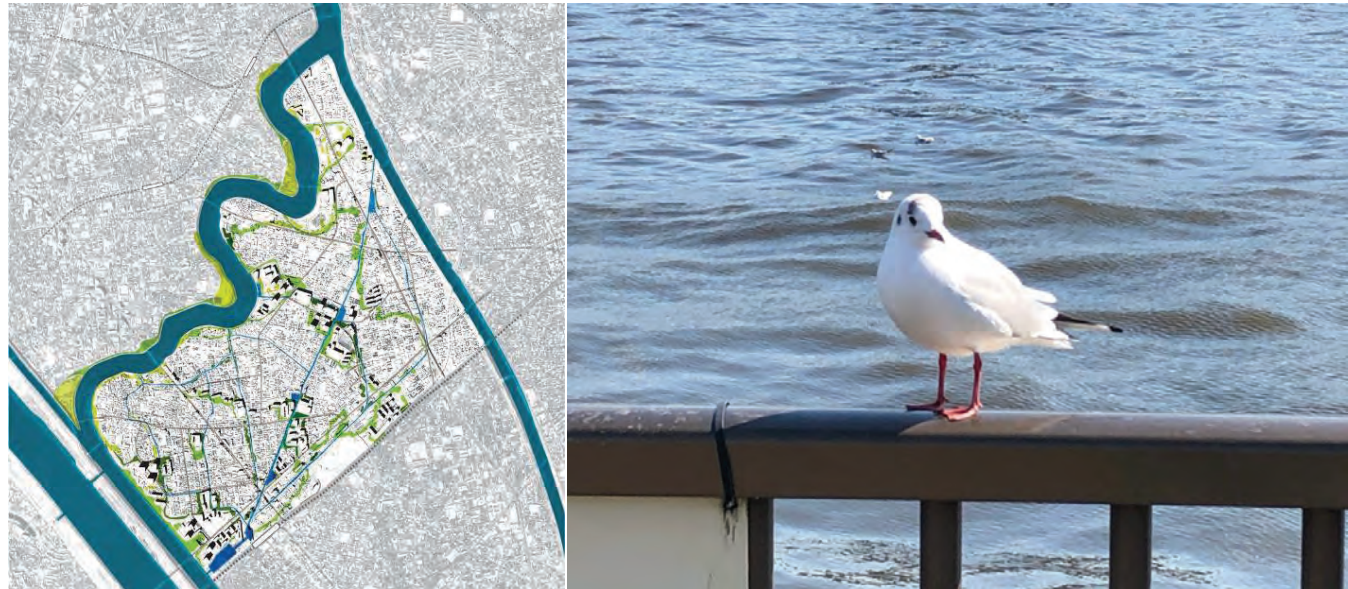
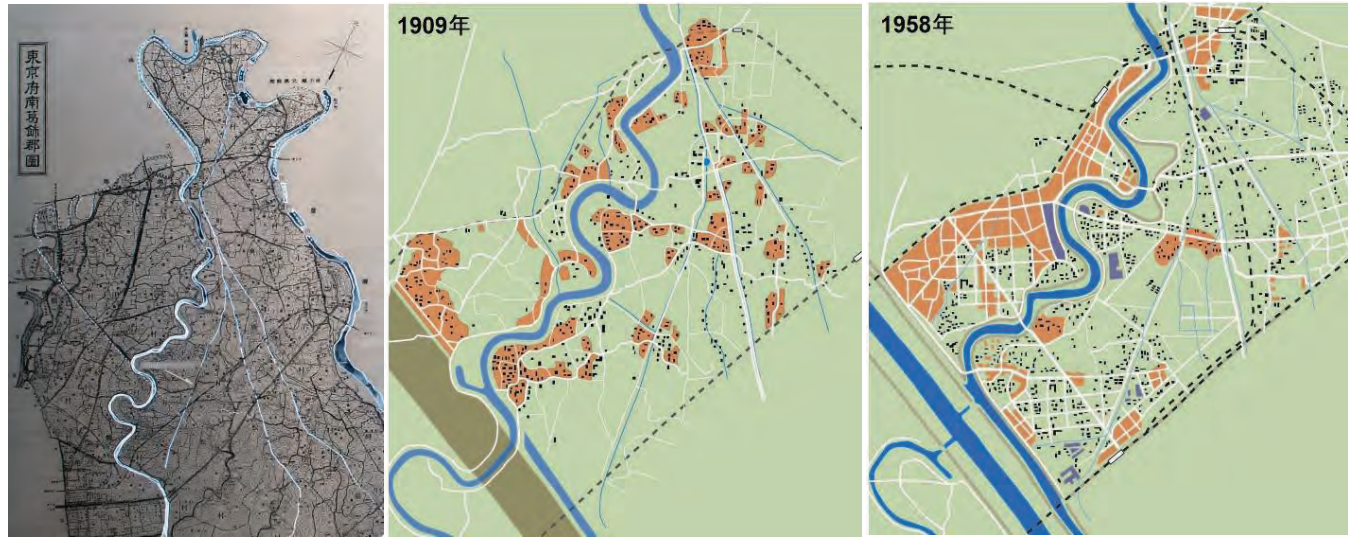
2023年3月 vol.28 NPO 設立 20 周年記念号

人を育み川 中川

朝日映る
空の青い山
夕日に染まる
スカイツリー
老舗の街
9はむ街
森羅の家
万葉の昔から
人を育み川
中川
如重 石川金治



特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり



表紙・裏表紙の写真の解説

ア！安全・快適街づくりニュース
2023年3月 vol.28 NPO設立20周年記念号

人を育み街を創る 中川

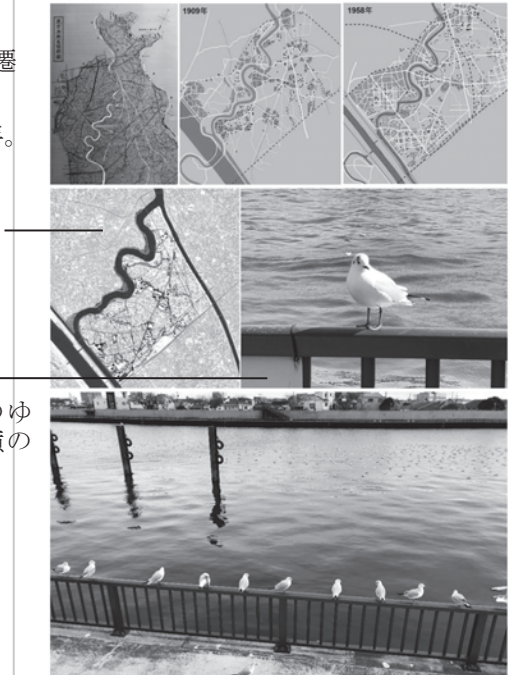
特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり

荒川中堤から望む富士山、スカイツリー、東京の街並み。(撮影：南)

中川七曲りの変遷
左から 1905 年、
1909 年、1958 年。

学生が構想した、
2058 年の新小岩
北地区の将来像。

東立石緑地公園のゆ
りかもめ。目の横の
黒い模様が特徴。
(2022/2/2
撮影：古川)



ゆりかもめの大渋滞 冬は中川に集まります。
(2022/2/5 撮影：古川)

クローバーの葉っぱで知られるシロツメクサ。
春～夏にかけて中川テラス土手にもたくさん咲
いています。
(2022/6/12 葛飾区総合スポーツセンター裏の
中川テラスの土手にて)



輪(わ)じゅうかいぎ！
(撮影：古川)

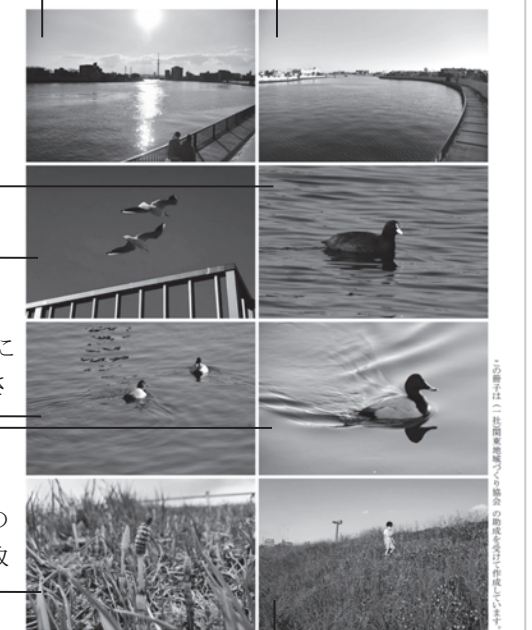
中川テラス東立石から さようなら森永乳業 東立
新小岩方向を望む。 石より新小岩方向を望む。

オオバン：カモと
よく食べ物の取り
合いをしますが、
すぐ引き下がります。
控えめな性格
なのでしょうね。

飛び立つかもめ。

ホシハジロ 優雅に
泳ぎながら餌をさ
がしていた。

東新小岩の中川の
土手でつくしが取
れました。



中川テラスの土手
にてシロツメクサを
摘む古川翔吾くん。

目次

はじめに	
NPO 設立、20 年の節目に当たって	成戸壽彦 5
令和 3 年度の活動結果について	宇賀俊夫 8
理事から 11	
地域の安全、安心の為に	荒川利夫 12
今こそ学びの時、備えの時	竹本利昭 12
理事就任のご挨拶	寅ヶ口敬祥 13
葛飾区西新小岩五丁目の取り組み・活動	町山光司 14
二つの受賞の思い出	松本八郎 15
新小岩を「あなたが一番すきな街」に	青柳 勇 16
輪中会議の今後の展開の方向性	加藤孝明 17
「NPO ア！創設から 20 年」 この体験そして持続性は超！貴重	渡邊喜代美 20
NPO も BCP（事業継承）を	山上 忠 22
特集： NPO 設立 20 周年 & 輪中会議 10 周年に寄せて 23	
ア！安全・快適街づくり 20 年に思うこと	青山 侑 24
「学び、成長、そして創造」 ～NPO 20 年間を振り返って～	加藤孝明 25
温故知新—20 年の思い出とこれから—	成戸壽彦 30
20 周年に思う	山上 忠 33
NPO ア！安全・快適街づくりの 20 年を振り返って	宇賀俊夫 34
NPO ア！安全・快適街づくり 設立二十周年に寄せて	佐藤伸朗 36
縄文海進・明治 43 年洪水・バンクタウン	小森和雄 38
NPO 設立 20 周年に寄せて	増澤一朗 40
NPO ア！安全・快適街づくりと私	中川榮久 42
徳倉さんとの思い出	江原悦次郎 44
“ア！安全・快適街づくり” 設立の頃	松田芳夫 45
ア！安全・快適街づくり 20 周年に寄せて	竹内直佐 46
徳倉会長さんと石川さんの思いを受けて	土屋信行 47
NPO 設立 20 周年、「輪中会議」10 周年を迎えまして	方 明哲 48
“私” のすきな東京一番の街に：これからの 20 年を見据えた変化と継承へ	南 貴久 49
設立 2002 年から 2022 年まで 20 年間の活動足跡	52

学校から 93	
新生「地域防災ボランティア部」	太田恵理子 94
地域防災ボランティア部の活動	浅賀日菜美 94
出前授業のこれから ～多様化・継承・連携へ～	南 貴久 98
防災・減災×アクティブラーニング	寺島 玄 99
出前授業の講師を通して	小豆嶋勇誓 100
出前授業の副読本作成事業	南 貴久 104
地域から 107	
関上から学ぶ防災意識と街づくり	小豆嶋勇誓 108
貴重な体験	増渕桜太郎 113
2019 年の 19 号台風から教えられたこと	久保欣一 114
行政から 115	
荒川を舞台にした強くしなやかで 持続可能な地域づくりをみんなで取り組む！！	
～ River Basin Disaster Resilience and Sustainability by All ～	出口桂輔 116
川の手・人情都市「かつしか」の実現に向けて（5）	情野正彦 118
京成本線荒川橋梁部における水防活動について	石合 一成 120
東日本大震災 被災地訪問記 122	
東日本大震災 11 年目の被災地訪問	南 貴久 123
陸前高田の視察から見た「復興」と「復興事業」	金 裁澁 125
未来の防災を発信する「宮城県気仙沼市」訪問記	金 池潤 129
「南三陸訪問の記」から、いろいろ	渡邊喜代美 132
東北研修を経験して	吉満隆裕 136
私と東日本大震災と亘理町	南 貴久 139
3 つの「けど」の視点から考える原発事故の復興過程	杉山高志 143

荒川流域訪問・交流記	146
埼玉県のと幾川流域 現地見学会の記録.....NPO ア！安全・快適街づくり	147
令和元年台風 19 号による東松山市被災状況の視察記.....成戸 壽彦	148
荒川源流への旅.....山上 忠	149
20 年の取り組みを振り返って（令和元年台風第 19 号被災現場等見学会を通じて）.....情野正彦	150
令和元年台風 19 号のと幾川堤防決壊現場と浸水被害家屋を訪ねて.....増澤一朗	153
自然の力の恐ろしさを改めて再認識.....吉満隆裕	154
広域連携で治水を考える ～荒川上中流域との交流から～.....南 貴久	155
特別寄稿	157
災害関連死の裁判例について.....吉満隆裕	158
活動のダイナミクスで「Extreme Events（極端現象）」をサバイブ.....河野博子	165
インタビュー：防災活動と日常生活のレジリエンス.....ダシュティ・ソヘイル	167
事務局から	170
「天サイ！まなぶくんⅡ」機能拡張について.....古川 修	171
アプリ開発の現状と今後の展開.....山上 忠	172
葛飾区地域活動団体助成事業「親子で語り継ぐ大雨時の避難について」.....増澤一朗	173
前田利郎先輩を悼む.....増澤一朗	175
荒川に関する書籍が刊行されました！.....NPO ア！安全・快適街づくり事務局	176
編集担当から	177
新小岩北地区における取り組みと系譜（年表）.....	178
表紙の書の紹介 / 編集後記.....	184

NPO 設立、20 年の節目に当たって

成戸 壽彦
NPO ア！安全・快適街づくり 理事長

2022 年度は、2002 年に故石川金治前理事長により NPO が設立されてからちょうど 20 年の節目に当たります。そこでこの「街づくりニュース」も、20 周年記念特集号として編集することと致しました。今まで支えていただいた多くの皆様の思いをそれぞれのお立場で振り返っていただくことで、さらなる発展につなげていかなければと考えています。私も別項で振り返りますが、よろしく願いいたします。

さて昨年度を振り返ってみますと、ここ二年あまりはコロナ禍により十分な活動ができなかったような印象ではありますが、そのような状況にもかかわらず、出前授業や助成事業としての「天サイ！まなぶくんⅡ」の開発を中心に活動を行ってまいりました。

出前授業は、葛飾区地域活動団体助成事業の一環として、毎年 10 回ほどの実績を積み上げてまいりましたし、関東地域づくり協会の助成を受けここ 2 年ほど取り組んできた「天サイ！まなぶくんⅡ」の開発も、昨年度をもって一つの完成形とすることができました。これらについても、別項にて詳しく紹介されます。



NPO のもう一つの柱である「輪中会議」につきましても、コロナ禍で従来の一室に会しての開催ができず、将来のあり方についてコアメンバーで話し合いをいたしました。その結果輪中会議には、①多様な人々の交流によるトップグループの触発の場 と ②多様な人々と地域の担い手との交流の場 という二つの役割が必要であるとの結論に達し、グループを二つに分けて活動することと致しました。即ち、「輪中会議シンポジウム（輪中専門家会議）」と「輪中会議（輪中地域会議）」です。

さらにこの 20 年の間に高齢化した NPO が今後も持続的に発展し地域に貢献していくことができるように、「NPO の BCP 計画」を取りまとめつつあります。この点についても、後程概要を紹介したいと思います。

このように昨年は、20年の節目に当たりながらコロナ禍で大々的なイベントができない点をむしろ逆に活用して、新しい NPO に向かう道を模索してまいりました。

さて今年度についてですが、ここ二年ほどコロナ禍でオンライン方式での活動が中心となった点を反省し、基本的な方向としては「地元回帰」にしたいと思っています。もちろんコロナの感染には十分注意しつつということではありますが、できるだけ地元・葛飾区新小岩に出かけて活動したいと考えています。

具体的に申し上げますと、まず最初に輪中会議があります。二つに分けたうちの輪中会議（輪中地域会議）を、この 10 月 15 日（土）に開催すべく準備を始めました。

輪中地域会議は、経験や情報の共有を主な目的として開催し、十年の節目を迎えています。この際原点に戻るつもりで、「情報の共有」を目的に行いたいと思います。その共通する情報に「流域治水」や「内水氾濫」が考えられますので、これらの最新情報を共有したいと考えています。開催にあたっては、地域の皆様が参加しやすいように、現地「にこわ新小岩」（新小岩地域活動センター）を会場として行うことと致します。また従来行っていた輪中会議後の全体での懇親会は、今回行わないことと致します。その他詳細はこれから詰めてまいります。

またもう一つの「輪中会議シンポジウム（輪中専門家会議）」については、年度内を目途に加藤先生を中心に準備を進めてまいりたいと思います。

次に出前授業を中心とした「副読本の作成」についてですが、関東地域づくり協会の助成に今年度も応募し、幸い一部ではありますが助成が得られました。このため、「出前授業の副読本作成委員会」を立ち上げ、コアメンバーにて案を作成のうえ、講師の皆様方や上平井中学地域防災ボランティア部の関係者のご協力を得て作成してまいります。特記すべきことは、こうした会合にかつての地域防災ボランティア部員であった小豆嶋・増渕・勝又の三君が出席してくれていることです。出前授業の経験者が再び地域に帰るといふ、当初の想いが形になることは大変喜ばしいことです。

こうした今年度行われる一連の輪中会議や副読本の作成については、ささやかではありますが NPO 設立 20 年の記念事業として位置づけられるものでは



で、コロナの感染に注意しつつ心して取り組みたいと思います。

ところで NPO の総会についてもひと言申し上げます。

新型コロナの感染者は東京などの大都市では一時は減少傾向に向かいましたが又増加に転ずるなど予断を許さない状況にあります。従いまして 2022 年 6 月に予定していました総会は、今年度も書面表決にて行いましたことをご理解いただきたいと思います。

さて最後になりましたがここで一言感謝申し上げたいことがあります。東新小岩七丁目町会の中川町会長さんがこのたび竹本町会長さんに、また上小松町会の東原町会長さんが、寅ヶ口町会長さんに変更されました。新しい竹本町会長さん及び寅ヶ口町会長さんには、理事としてまた事務局会議など NPO の活動にご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

中川さんと東原さんには、NPO の活動に理事としてまたいろいろな面で協力いただけてまいりました。心からお礼申し上げますとともに、今後は NPO の評議員として引き続きご協力いただきたいと思います。また中川さんには引き続き出前授業のご協力をよろしくお願いいたします。まずは今までのご活躍に敬意を表し、お礼申し上げますとともに、今後ともご協力いただきますようよろしくお願いいたします。



令和 3 年度の活動結果について

宇賀 俊夫

NPO ア！安全・快適まちづくり

令和 3 年度もコロナ禍の蔓延防止のために 3 密を避けることになり、一堂に集まっの活動は大きな制約を受けることになりました。事務局会議も毎月 ZOOM を使った会議を行うことで相互の連絡・討議を行うことにより、活動を継続することになりました。総会も会員の方に一堂に集まっていただく形で行うことが出来ず、議案を郵送したうえで賛否をメールまたは FAX でいただくことで実施することになりました。このような状況下で行われた活動の結果をご報告いたします。

1. 輪中会議の開催について

「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」の活動として実施してきた輪中会議はコロナ禍の影響で開催日を変更し、5 月 9 日に WEB 方式で開催し、自宅からオンラインでの参加が出来ない方には、新小岩北地区センターの会議室に三密を避けてお集まりいただき、そこから WEB で参加いただくというハイブリッド方式での開催でした。当日は 75 名ほどの方が参加し、そのうち 4 割ほどの方が初めての参加で、活発な意見の交換が行われました。ただ、WEB 方式に慣れていない地元の高齢の方の参加が少なかったのは残念なことでした。このことは前号で詳しくご報告した通りです。その後、この結果を踏まえてこの先どのような形で開催していくのか検討会を重ねた結果、今後輪中会議を「輪中会議シンポジウム（輪中専門家会議）」と「輪中会議（輪中地域会議）」の 2 本立てで実施すること、併せて「学習会」を適宜開催するということになりました。とりあえず令和 4 年度には「輪中地域会議」を 9 月頃に主として対面で開催することとし、その際のテーマは「地域活動のデジタル化」とすることで検討をすすめています。一方「輪中専門家会議」は WEB 方式での年内開催を目指しています。

2. 「共助支援アプリ『天サイ！まなぶくん II』の開発」について

「共助支援アプリ『天サイ！まなぶくん II』の開発」については荒川下流河川事務所、葛飾区役所の推薦を得て関東地域づくり協会から令和 3 年度も助成を受けることが出来ました。具体的には災害発生時に救助を求める人が赤旗を立てたときに救助要請者の周辺の会員に自動的に通知され、救助可能な会員は白旗を上げて救助に赴くこと、もし現場について一人では救助が難しいときにはオレンジの旗を出し追加の支援者を募ること、救助が完了したときはその旨地域の管理者（町会本部を想定）に連絡すること、この間地域の管理者は全体の動きを注視し、必要な支援を救助者に行うというものです。当面活動は町会単位で実施するものとし、予め登録した町会員に限定して使用可能なものとす

ることにしました。そこでモデル地区として選んだ東新小岩 7 丁目町会で、機能を絞ったプロトタイプのアプリを使ってオンライン方式による実機テストを実施し、問題点の摘出と解決を図った上で、成果品として関東地域づくり協会に提出したことは前号でご報告した通りです。その後、令和 3 年度も関東地域づくり協会から助成金を受けることが出来たので機能の充実を図りましたが、この助成は令和 3 年度で打ち切りとなるため、今後導入するアプリの機能の取捨選択を開発委員会で慎重におこない、目標とする近所による救助「近助」の実施に役立つものとして使用可能なアプリとするため、モデル地区となる「東新小岩 7 丁目町会」でこのアプリを使っての救助訓練を実施するとともに、管理者側のアプリ機能の活用についても訓練を実施しました。今後も町会内の利用者を拡大するとともに、インプットされたデータの鮮度を常に保っていく体制の確立を行うことが重要となってきます。また、利用者が災害時にアプリがすぐ使用できるためには、ただ、災害時だけにこのアプリに触れるのではなく、常日頃からこのアプリに触れてもらうことが重要であり、そのためにはこのアプリにどんな機能を付加すればよいのか、その方法について検討する必要があると思われます。これらを考慮しつつ他の町会への展開を進めてゆく予定です。

3. 地域小学校への出前授業等について

昨年度も葛飾区地域活動団体事業費助成制度を利用しての地域の小学校での出前授業や中学校での部活支援活動、保育園での講演活動を行いました。コロナ禍の続く環境下でも、小学校に対する出前授業は引き続き学校授業のカリキュラムに組み込まれ実施されたことは、これまで 10 年余りにわたり継続的に行われてきてその必要性が学校側に評価されてきたものとして喜ばしいことでした。加えて小松南小からも出前授業の要請があり、令和 4 年度からは新小岩地区のすべての小学校で出前授業が実施されることになりました。

この他、松上、二上、上平井の 3 校で、ワークシートによる「家庭で親子で語り合う災害発生時の避難方法」の学習を、うらら保育園では中村先生のビデオ講演が開催されました。一方、上平井中学「地域防災ボランティア部」の支援活動は部活がコロナ禍で制約を受けたために、対面での支援活動は限られ、WEB による支援とならざるを得ませんでした。これらの事業は引き続き来年度も実施していくべく、区に申請を行っています。

4. 街づくりニュースの発行について

NPO の前年度の活動報告を兼ねて毎年発行している「街づくりニュース」は、ますます多くの方々からの寄稿を得て、第 26 号が令和 3 年 9 月半ばに会員及び関係先の皆様にお送りすることができました。内容は 5 月に実施された「輪中会議」の結果報告を中心としたものでした。今年は当 NPO の創立 20 周年を記念した特集号になる予定です。

5. 20 周年記念事業「出前授業の副読本」の作成について

2022 年 9 月に当 NPO は設立 20 年を迎えます。その記念事業の一つとして出前授業の副読本の作成を行うことになりました。当 NPO は過去 10 年余にわたり地域の小学校で防災に関する出前授業等の学校支援事業に携わってきました。この出前授業では大学院生や地元住民が講師となって毎回スライドや配布資料を準備してきており、10 年分の資料が蓄積されています。これらは地域の防災への取り組みが網羅された良い資料となっていますが、授業後には十分活用されているとは言えない状況にあります。

そこで本事業ではこの資料を再編集し、出前授業の副読本として冊子化し、完成した冊子を来年度以降の小学生に配布することで授業内容の理解を深め、継続的・発展的な学習につなげることが可能なると思われます。さらに、家庭に持ち帰り、家族にも活用してもらうことで地域全体の防災意識の向上に役立てることも期待されます。

またこの冊子の作成にあたっては、これまで小学校で出前授業を経験した中学生が専門家と協働して小学生向けの「副読本」の企画・編集に携わることで、将来彼らが出前授業の講師として、学んだことを小学生に伝えることも期待されます。幸い趣旨にご理解をいただいて、関東地域づくり協会から「副読本」作成にあたり助成金をいただけることになりました。当面は冊子としての「副読本」作成となりますが、将来はデジタル版の作成も視野に入れて取り組んでいく予定です。

6. その他の活動

今年もこの地域で計画されている新小岩公園高台化計画、蔵前橋通りと堤防道路の平面交差とそれに付随する緩傾斜堤防の建設計画、西新小岩 3 丁目地区での高規格堤防建設計画の進捗状況について情報の収集に努めましたが、いずれの計画も具体化されるには至らないまま推移しました。NPO としては引き続きこの三事業の進展について注視していく所存です。一方、20 年の間に高齢化した NPO が今後も持続的に発展し、地域に貢献していくことが出来るように、NPO の BCP 計画（事業の継続化計画）を策定すべく取り組んでいます。これも来年度に向かってとりまとめを進めてまいります。

7. おわりに

今年度も 20 周年記念事業としての出前授業の副読本の作成、「天サイ！まなぶくん II」を使つての訓練の実施とその結果を踏まえてアプリ機能の向上と利用者の拡大、地域 5 小学校での出前授業等の実施と上平井中学地域防災ボランティア部の活動支援、輪中地域会議及び輪中専門家会議の開催など取り組むべき課題は山積しています。

これらの課題に着実に取り組んでまいりますので、引き続き皆様方のご支援をお願い申し上げます。



理事から



地域の安全、安心の為に

荒川 利夫
新小岩北地区連合町会 / 西新小岩三丁目町会 会長

NPO ア！安全・快適街づくりニュース第 28 号発刊に際しての寄稿依頼を頂き、私の記憶に残る思い出は十数年前に防災施設の見学会で静岡に旅行に行った事が最初の機会でした。東南海巨大地震に備えての津波避難タワーの見学は、改めて地震規模の巨大さを実感しました。理事の皆さんと一緒に見学した久能山東照宮や静岡駅前で食べた「黒おでん」の味の思い出が浮かんできます。その後数年間のブランクがありましたが、昨年 10 月 15 日に開催された輪中会議に出席させて頂いた時に、改めてスタッフや理事の方々の 20 年間の活動実績に地域を代表として敬意と感謝を申し上げます。特に活動範囲が日本国内は基より海外まで広まっている事には、改めて理事の皆様の熱意を感じました。災害に対しての備えについては、国や地域行政機関に委ねる事になりますが、私たちが住んでいる地域の安全、安心の為に町会組織として今後取り組む課題が多い中で、これからも継続してアドバイスや御提言を頂けますようお願い申し上げます。最後に今年が NPO ア！安全・快適街づくり設立 20 周年、輪中会議 10 周年を迎えるとの事、誠におめでとうございませう。これからも私達、地域の為に良きパートナーとして御指導頂けますようお願いいたします。

今こそ学びの時、備えの時

竹本 利昭
東新小岩七丁目町会 会長

今期より東新小岩七丁目町会会長を務めさせて頂く事となりました、竹本としあきです。ア！安全・快適街づくり、活動 20 周年、誠におめでとうございませう。私個人としては、市民消火隊、防火防災部長時代より、ア！安全・快適街づくりに関わらせていただき、早いもので 12 年が経過しました。災害に弱い地域、とりわけ水害の危険度はたいへんに高いと言われている葛飾、新小岩地域。ここに住まう者として、知恵も知識も、そして危機感も持たぬままに過ごしてきた頃より水害リスクや対応策そして日々の備えなどについて、様々な提案や提言、学術的な講演を開催し、また時には共に考えながら一歩ずつ歩みを進めることが出来たことに大変感謝しております。最近では、災害共助アプリ「天サイ！まなぶくんⅡ」（仮称）の開発に加わせてもらい、町会一丸となって防災意識の醸成にも取り組ませて頂いています。

近年全国各地で豪雨災害、土砂災害など「水」に起因する災害が多発しています。予見出来る災害「水害」について、未だ発生していない今こそ学びの時、備えの時として取り組んで参りたいと考えています。どうぞこれからもよろしくお願い致します。

理事就任のご挨拶

上小松町会長 寅ヶ口 敬祥

1. ご挨拶
この度「特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり」の理事に就任いたしました葛飾区上小松町会長の寅ヶ口敬祥（とらがぐちけいしょう）です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

2. NPO 法人との関わり
上小松町会の区域内には東京都第五建設事務所があり、有名な「地盤沈下の生き証人『古井戸』」がある海拔ゼロメートル地帯です。
そのため、当 NPO 法人については以前から存じておりました。その活動は、地元住民を交えて水害等自然災害に関する知識の講習及び危機感の保持、自然災害時の対応（防災対策）はどうあるべきか等、生活に密接かつ安全・快適な街づくりに関することを学習・実践するもので、重要性は年々増しております。

3. 災害に対する考え方
昨今、全国各地で局地的豪雨による水害や土砂災害、地殻変動等による地震、さらには火山の噴火等が多発しています。自然災害そのものはどうすることもできませんが、常日頃から危機感を持ち、予め被害を想定した防災対策を行うことで被災規模は小さくなる可能性があると思っています。

4. 防災街づくりへの考え方
私は国立大学等施設の整備やキャンパス新設・再生などに携わってきましたので、地区計画や建築に関する事柄には詳しい（一級建築士）ですが、防災という観点からは「地区計画や建築に関する」という一部分のみでなく、社会インフラ全体を対象としなければ安全で快適な街づくりは出来ませう。
例えば、更地に新しい街をつくるのとは異なり、既存の都市においては人が住み続けてきた街並みがあり、その歴史的な経緯を踏まえた上で防災対策を推進する必要があります。

また、学校施設等の公共施設については、子どもたちの教育活動に留まらず、災害時に避難所となるなどの地域防災上の役割に留意しながら水害・防災対策を検討する必要があることから、文部科学省も水害リスクを踏まえた学校施設の水害対策の推進に向けて取り組みを始めています。

5. 当 NPO 法人の意義
では具体的にどうするか、それは「その地域に相応しい防災の強化」を進めるしかありません。その地域の子どもから大人まで、住んでいる土地を知り、お互いに情報を共有するとともに知識を向上させる取り組みを続けること、地域の防災対策を住民と行政が一体となって作り上げること、それによって実際

の災害時に滞りなく対応・対処することが出来る、それこそが一番重要な防災活動だと思っています。

当 NPO 法人はその活動を強力に支援する組織です。ぜひ積極的に活用していただくとともに、皆さまとご一緒に防災意識をさらに高めて参りたいと思います。

葛飾区西新小岩五丁目の取り組み・活動

葛飾区西新小岩五丁目町会長 町山 光司

葛飾区西新小岩五丁目では 1,802 世帯、約 3,600 人が生活をしています。マンションは 3 棟だけ、古い住宅街・アパートが密集し、一人暮らしの高齢者も多い典型的な下町です。環境は、都内約 5,200 町会中下から 70 番目です。住宅の密集したこの町は「治安」「防災」「防火」「水害」「地震」の危険度がすべて (5)、オール 5 です。2019 年の台風 19 号の対応時、避難所になった学校に行くよう呼びかけ回りました。高齢者、若者、夫婦、ペットがドッと押し寄せるのです。みなさんをどの部屋に割り振りするか、ペットをどうするか、名簿作成は誰がするか、布団は薄い段ボール、区の職員はほとんど来ない、一部の役員のみ、中川や荒川の氾濫もなく、皆さん朝には早々に帰宅されましたが、あの状態が何日も続いたらと考えたら暗澹たる気持ちになります。この体験から、町内に 3 棟あるマンションでの垂直避難所を確保しました。区とマンション理事会と町会の三者契約で、洪水発生時、マンションの主に共用部分を利用し、500 名位避難させて頂きます。年一回の避難訓練でも参加者は少なく、私の父親の頃は土手も完備されていなく、何度も水害に合い、各家にボートがあり、危機意識は今よりずっと強かったように思います。課題が一杯あります。又、火災が多く発生するため【災害に強く安心して住み続けられる街】にするために、昨年 6 月から「西新小岩五丁目地区防災まちづくり構想」を立案し、取り組みを始めました。その骨子は (1) 緊急車両が円滑に通行できる骨格の道づくり (防災生活道路等)、(2) 防災性の高いまちづくり (建物不燃化等)、(3) 災害時に活用できる公園や広場の確保等です。これらを五丁目町会の提案書として令和 3 年 10 月に青木区長に提出しました。

まちづくり構想の実現は困難が多く、時間がかかるでしょうが、子ども、孫の世代の安心・安全のために町会が一体となり取り組みます。

又、活動は人です。人さまのためにやると言う人がいないと町会は動きません。役員の協力はむろんです。五丁目の防災拠点で、住民のコミュニケーションの場・居場所として 2 年前に会館を新築しました。高齢者、障害者に配慮したバリアフリーの素晴らしいホールです。

そして、みんなで健康教室を始めました。社協の協力も得て「歌声喫茶」「麻雀・囲碁」「脳トレ」「盆踊り」「落語」「折り紙教室」「はつらつ健康教室」

など盛りだくさんのイベントを用意しています。これは、二人の副会長が先頭に立って企画・運営をしています。コロナ禍が下火になった昨年 10 月からは「満員御礼」。1 ヶ月で参加者は 160 名にもなりそうな勢いです。

もう一つの活動が「モンチッチ公園」の拡張・整備でした。この度用地を広げ 4 月 2 日にオープンしました。ミニミュージアムもあり、子どもやモンチッチファンのたまり場として、また住民の避難所にもなり、防災倉庫も整備されました。住民の「浸水」「親水」を兼ねた広場です。

近い将来「西五のモンチッチ公園」を葛飾の観光ルートにしたいですね。

二つの受賞の思い出

西新小岩四丁目町会長 松本 八郎

NPO ア！安全・快適街づくり (以下 NPO) 設立 20 周年おめでとうございます。

新小岩北地区連合町会 (以下連合町会) のメンバーの一町会会長として NPO と共同して活動した中で受賞した二つの受賞に係る思い出を綴ってみたいと思います。

最初のきっかけは連合町会が平成 24 年ボートを活用した大掛かりな防災訓練を行ったことでした。訓練を行った場所は葛飾区西新小岩三丁目の上平井橋から水門までの中川です。この防災訓練は連合町会が本田消防署上平井出張所、葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会 (連合町会、葛飾区、NPO、広域ゼロメートル市街地研究会、認定 NPO 日本都市計画家協会の 5 団体で構成、以下協議会) と共同して行ったものでした。

まず西新小岩三丁目町会の鈴木町会長が干潮の時間を選んでボートへの乗り降りが大丈夫か等を点検し、各町会のボートを実際に中川に浮かべ、大規模水害に備えた操艇訓練を実施すると共に救援物資の搬送などの訓練も行いました。その後本田消防署の署員の皆さんによる人命救助訓練や消火活動のデモンストラーションなどを見ることができました。

近年異常気象による集中豪雨・ゲリラ豪雨の多発が予想される中でこのような救援訓練を実施することが出来たことは自助・共助の精神を引き継ぐ上で大いに役だったものと思います。

このような活動を着実にに行っていることが新小岩地区の様な「ゼロメートル市街地における大規模水害対策への取り組み」ということで東京都消防局から表彰されることになり、平成 26 年 1 月 20 日に「第 10 回地域防火防災功労賞理事長賞」を授与され、鈴木町会長と共に私が表彰状を受け取ってまいりました。

その後平成 25 年 12 月、私が新小岩北地区連語町会長を務めていた時に総務省から連合町会が表彰されることになった旨の通知がありました。何も知らな

かったのでなんで我々が表彰されるのだろうとびっくりしていたところ、本田消防署上平井出張所長の菊川さんから電話があり、何か総務省から連絡がなかったかと問い合わせがあったので、表彰される旨伝えと「やった！」と言われ、何のことかさっぱりわかりませんでした。そこで NPO に問い合わせると、実は菊川さんが連合町会と協議会の長年にわたる防災活動について消防庁に立派な推薦状を出していただいていたことが分かり、「防災まちづくり大賞総務大臣賞」というとてつもない大賞を頂くことになったことが判明したのです。平成 26 年 2 月 6 日に連合町会と協議会を代表して NPO の皆さんと受賞会場に行き、表彰状を受け取りました。この賞の受賞は私が連合町会長を務めている時期に頂戴したもので、本当に幸運なこととうれしく思った次第です。

表彰式の終了後受賞者有志が残って法曹会館に席を移して交流を図った際には加藤先生から防災問題について有益なお話を伺うことが出来たのもありがたいことでした。

新小岩を「あなたが一番好きな街」に

東新小岩五丁目町会長 青柳 勇

世の中、コロナウイルスの感染拡大でいろいろな組織や事業所、そして人間関係も変って来たと思う。あらためてウィルスのこわさを、認識させられた 2 年半である。

日本の文化の中に「飲みにケーション」と言うコミュニケーションツールがある。人とのつながりに潤滑油的な役割があったと思う。人が集い気安く会話が出来、アルコールが入る事により心の中の思いが話せる事は楽しみの一つであり健康にもつながると思う。

町会長を受けて早 10 年になる。ア！安全・快適街づくり NPO に係わりを持ってから地域との係わりを見直すきっかけになったと思う。最初は事務局会議が長くて苦痛でした。一般の会議は 1 時間以内であるが NPO は 2 時間以上である。あまり会議になれない者には苦痛であったが、組織としての有り方・考え方は勉強になった。

最近区で取組んでいるこのまちの将来像「マスタープラン」の地域別勉強会が行なわれている。それに参加して思う事が、石川前理事長が提案していた「あなたが一番好きな街になるためには」と言うヒントを頂いた事がとても参考になっている。もちろん安全・安心に暮せる街は当然ですが、好きなまちは、人それぞれ好みは違っている。いろいろな異見が出る中から、この地域に合った事柄を選んで行く事が、この街が住良く、安全、安心なまちになると思う。葛飾区に住んで、この新小岩地区がより良く住やすい街になる事を願っています。

輪中会議の今後の展開の方向性

加藤 孝明

東京大学生産技術研究所教授／社会科学研究所特任教授

1. はじめに

輪中会議は、2012 年 9 月に第 1 回を開催し、コロナ禍前の 2019 年 4 月、そしてコロナ禍が始まり、2020 年の中止の後、2021 年 5 月はオンラインで開催した。そして 2022 年 10 月に第 15 回をサテライトでのオンライン会場と並行して、3 年半ぶりに対面開催した。

当初、輪中会議は、それまで行われてきたワークショップの後継として 2 つの目的を持って始まった。一つは、木曽三川の「輪中」にちなんで、水害を意識した地域文化を創っていくこと、そしてもう一つは、「地域のみなさん、輪の中に入って会議をしよう」という地域の中での多様な人々をつなげていくことである。最近では、地域社会での多様な活動が行われる中、現状の活動状況の共有の場、そして活動主体の経験・悩み・工夫の共有の場としての役割が強調されてきた。

本稿では、昨年、ちょうど 10 年の節目を迎えたこと、またコロナ禍を挟んで対面での開催頻度が落ちたことを契機とし、輪中会議のこれまでの到達点と課題を整理し、今後の展開を展望したい。

2. 輪中会議の到達点と課題

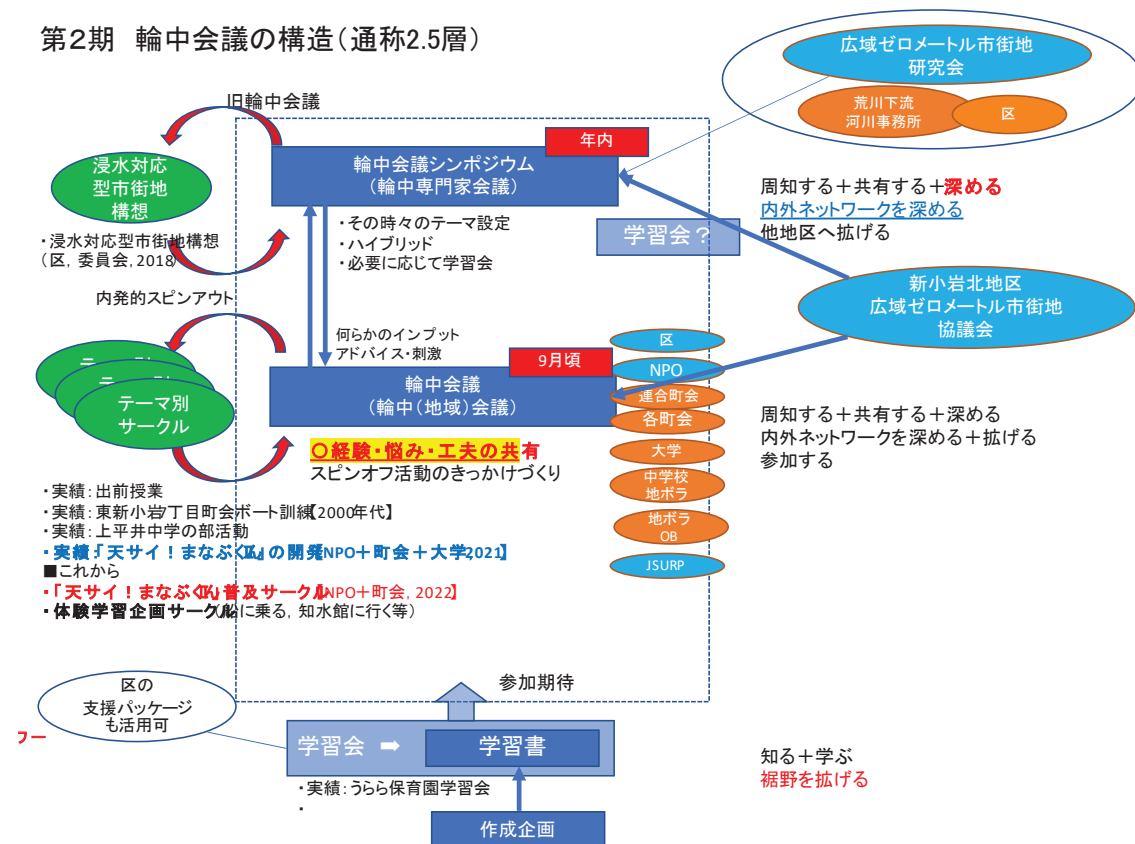
輪中会議は、当初の目的通り、①多様な人々の交流、②すでに地域で活動するコアメンバーの相互触発の場として機能した。参加者はその時々で多様化した。中学生、そしてその OB、医師会、そして商店街の空き店舗を相続した方等、多様な方の参加がみられた。また、小学校での出前講座の拡充、中学校の部活との連携強化、天サイ！まなぶくんⅡの企画開発等の契機となった、或いは、少なくとも後押しにはなったと言える。輪中会議の成果については改めて構造的な分析が必要ではあるが、少なくとも当初の目的は達成しているといえる。今後も持続的にすすめていく価値がある。

一方で、持続性を高めるためには、発展的改善が必要である。2020 年の中止、2021 年オンライン開催と、対面開催が 3 年半の空白を挟んだことの影響もあって、参加者層が激変した。特にコロナ禍の 2 回は、高齢女性の参加が減少している。また、コアメンバーの活動深度が深くなることによって、新規参加者にとっては話についていけない一方で、コアメンバーにとっては大半の情報は既知レベルとなるといった初心者とベテランのギャップ問題の存在を指摘できる。また拡大・深化する多様な活動を限られた時間で共有するため、どうしても情報交換の時間が長くなり、議論の時間が短くなり、触発の効果が薄れるという問題も感じられる。

3. 今後の輪中会議に向けた提言

従来の①多様な人々の交流，②すでに地域で活動するコアメンバーの相互触発の場としての役割を維持した上で，上記の課題を解消していく必要がある．課題解決のためには，初心者でも輪中会議に追いつけるようにすること，活動主体向けに活動状況を共有する機能の強化，コアメンバーに対する触発の場としての機能を強化することが必須である．

その実現のためには，これまでの輪中会議を 2.5 層とも呼べる新たな構成に再構築する必要があると考える（図）．



第 1 層は，(仮称)「輪中会議シンポジウム」である．専門性の高い情報共有と最先端の議論を行う場である．普段の活動の進化への刺激を生み出す場である．輪中会議が始まる前に行われていた「シンポジウム」の機能を復活させて，重ね合わせたものとも位置づけられる．当時は，年に 1 回程度，不定期にシンポジウムを開催していた．2012 年には，当時 NHK に所属した大越健介キャスターを招いたこともあった．ここでは，行政，学識経験者，研究者，海外等から最新の情報提供を受け，最先端の議論を行う．コアメンバーにとっては触発の場となる．年 1 回程度が想定される．

第 2 層は，(仮称)「輪中地域会議」地域社会で活動する主体が参加する経験・悩み・工夫を共有する場である．新たな活動を生み出すような相互触発を

目的とする．現輪中会議のメインの機能である．現在と同じ年 1 回か，テーマを変えて年 2 回程度，気軽に行うことが想定される．

そして第 2.5 層は，初心者が輪中（地域）会議に円滑に入れるようにするための準備を兼ねた一般向けの啓発，学習の場づくりである．学習会の開催に加え，学習会や自主学習に使う学習書を作成することが想定される．

上記の提案は，これまでよりも企画運営の負荷が各段に高くなる．NPO のみならず，新小岩北地区広域ゼロメートル市街地協議会を構成するメンバーの役割分担が不可欠であろう．第 1 層については，広域ゼロメートル市街地研究会（研究者中心），第 2 層については，町会連合会と NPO が想定される．これまでの輪中会議の企画では NPO の比重が高かったが，地域社会にウェイトを移していくことも一案である．2.5 層は，NPO をコーディネーターとして出前講座講師経験者，中学校の地域防災ボランティア部，研究者，行政等，既存の学習用素材，学習ノウハウを有するメンバーが連携して進めることが想定される．

次年度以降，この提案をたたき台として輪中会議第 2 幕の幕開けに向けて議論を深めることが望ましい．

「共有する，深める，周知する，そして裾野を広げる」．これが明るい未来を拓くために地域に定着させるべき機能である．皆さんの主体的な参加を期待して本稿を閉じたい．



「NPO ア！創設から 20 年」 この体験そして持続性は超！貴重

渡邊 喜代美
NPO ア！安全・快適街づくり 理事

NPO ア！創設から 20 年。この継続性、持続性は、地域に根差しての活動、地元人が中心にある活動だからともいえる。

改めて紹介しますが、機関誌の表紙にある書は、初代理事長の故・石川金治による。＜人を育みし川 中川＞ 詩文全体は“北新小岩地域を流れる、中川の豊かさを、いつも感じている”ので、讃辞の詩だと言っていた。

この“老キ千里”の文言は、私達と一緒に活動の屋台骨を支えている人の顔を想像しやすい文言を探した結果ですともいった。渡邊が老騏、老驥とは、と問うたら、馬小屋に寝ていても志は千里にあり、老騏、老驥は個性あふれる表現という。

また作詞のもう一つの動機は、事務局会議終了後、渡辺と塩崎と石川さん 3 人で、夕日の中のスカイツリーを見た時の感動が大きかったから、その感動が原動力となって、作詞をしました“と石川さんは語った。ロマンティスト石川さんは千の風にのって逝ってしまったが、書は今も生き、NPO ア！の活動も持続している。

中川があるかぎり生きる書は、しばらく表紙にも登場いただくつもりである。

2016 年、鈴木町会長、徳倉会長、石川理事長と重要な人たちと惜別するも、3 人の志は今も活動の中で生きている。また地元の方々に、引き継がれたことによって新たな展開をしている。

この NPO ア！のような 地元・専門家・大学などがいっしょになって真摯に災害に取り組む、継続している、若ものも参加している、老若男女の参加このような事例はなかなか少ない。すばらしい。これからも地元に立った活動を大事にしていきたい。

また、南三陸町や、伊座利のような津波や河川水害を受けた人たちとの交流も貴重な行動であった。相互交流やシンポジウムなどの場を得て深い意見交流も重要な体験であった。交流がその後も持続的に行われていることも特記したい。すてきである。

川のもつ魅力は大きい。私のように川のない町に住む者にとっては川の魅力は絶大である。だがリスクもある。

リスクは近代技術で河川管理が進むことで、安心安全は担保されると信じている。しかし、地球環境の変動は予測をこえることしばしばである。河川管理にとどまらず、取り巻く環境や人のつながりが安全安心をつくる。

人と人のかかわりこそが地域を発展させ、守ることだと思う。それは、地元中学生の参加、そしてそこから巣立った地元の若者の参加があることで、先に開かれた印象である。育つ若者たちと、ともにあることは、実にうれしい限り

である。

コロナ渦中といえども、地域の学校支援授業、部活支援も、Web で輪中会議参加とか、部活卒業生が高校生となって独自に河川を観察しているなど、うれしい発信もあった。

はたまた、誰でも使える「天サイ！まなぶくんⅡ」のツール完成も待ち遠しい。

災害と避難は、コロナ禍が加わって、新たな局面をむかえるも、地域と一体となって役立つツールの誕生が待たれる。

コロナ禍中にて 2021 年は、Web「輪中会議」で行いました。進行は、渡邊、加藤、南の連携プレイで参加者総勢 70 から 80 人。初体験にしては、結構うまく運営できたと思っています。全体のお席はそれぞれ Web 上で、参加者記念撮影をするという離れ業もあって、おもしろかった。全記録収録は頑張りました。

また事務局会議や編集会議も Zoom 会議となりました。

人類の大惨事となって、地球上がコロナウイルスにやられた感です。

NPO ア！の活動もコロナ渦中にては創意工夫が求められそうですが、そこから見えるものもあります。例えば、遠方に居ても参加できる！などは、最大のメリットかもしれません。しかし、顔を合わせて空間共有することの大事さもわかりました。

近年水害被害も超多発。地球環境はますます災害の巨大化が進む方向にある予感もします。災害ニュースは日常的で、水害、火災、地盤の崩壊、世界共通の被害が続発している感です。また災害と避難は、コロナ禍が加わって、新たな局面をむかえる。こちらも世界共通の課題といえる。

これからも“災害リスクと賢く共生した親水都市”“浸水対応型市街地形成”“浸水対応型建築”“避難のかたち”も議論を重ねるだろう。そして世界へ発信することにもなろう。

私たちの暮らし方の問題も大きい。環境共生、災害抑止など日常の中で考えることなど心してかかりたい。

渡邊は介護体験から新たなことごとくも学びました。改めて機会をみてまとめたいと思っている。

20 年はア！というまでであった。

NPO も BCP（事業継承）を

山上 忠

NPO ア！安全・快適街づくり事務局 理事

BCP（Business Continuity Plan）とは企業や団体が何らかの障害により重要な業務が継続できなる危機に対する方策を用意し、継続や継承ができるようにしておくための戦略を記述した計画書です。

NPO の事務局も設立 20 年を迎え活動の要を担うスタッフの高齢化が進み万一に備えたそれなりの Plan の作成に取り掛かりました。

先ず従来は担当者が個別に行っていた活動についてそれぞれがマニュアル化します。マニュアルでは表現できない部分についてはやむを得ず一覧表なり概要書などの補助資料を用意します。

次に作成したマニュアルを元にして全員で担当者不在の状況を想定した模擬訓練を行いマニュアルの欠損部分の追加修正を行います。完全な形は無理ですが、これにより全員の活動内容のかなりの範囲を共有することが出来るようになり定期的な見直しと訓練は必要ですが万一の場合も事務局の運営が継続可能になるはずです。

マニュアル作成について現在まで作成中

- NPO 監督官庁への定時報告と更新手続き
- 年次総会の招集／議決／報告
- 年次計画と前年の結果
- 会員名簿更新
- 会費徴収
- 外部活動資金の獲得ノウハウ
- 会計手続き
- 会計及び監査対応
- 事業計画作成
- 事業資金調達ノウハウ
- 出前授業運営ノウハウ
- 輪中会議継続
- ニュースレター作成
- 過去の交付金応募資料

などのマニュアル化に取り掛かり一部を完成して継続作業中です。

※なお、これらのマニュアルは何年か後、次世代の皆様が NPO の活動内容を一括または個別に引き継ぐにあたって、それぞれの事業の内容把握に役立てることをイメージして作成しています。

特集: NPO 設立 20 周年 & 輪中会議 10 周年に寄せて



ア！安全・快適街づくり 20 年に思うこと

青山 脩
明治大学名誉教授・元東京都副知事

今は亡き石川金治さんに誘われて NPO 法人ア！安全・快適街づくりの設立シンポジウムに参加させて頂いた 20 年前の日のことを昨日のことのよう思い出します。

あのとき、私たちは、東京のいわゆるゼロメートル地帯に住む 200 万人以上の人たちのために広幅員の堤防を建設し快適な街づくりを進めることや、他の安全な地域に多数の人たちを輸送する広域的な拠点整備の大切さについて熱く語り合いました。

それから 10 年ほど経過した 2010 年にスーパー堤防事業廃止論が出てきたとき、石川さんも私も、内陸部に小さな高台を建設するより、堤防を広幅員化するスーパー堤防の方が、周辺地域との環境問題やアクセス方法の問題が生じないことなど現実的なまちづくりであることを説きました。

今日、江東 5 区（墨田区・江東区・足立区・葛飾区・江戸川区）の広域避難推進協議会が大規模水害広域避難計画をつくるなど協同して、国や都と水害からの避難計画を協議している現状を見ると、20 年前にくらべると人々や各関係機関の水害からの避難を考えたまちづくりについての理解がずいぶん進んできたと思います。

古来、関東は水害と戦いながらまちづくりを進めてきました。江戸時代の利根川東遷や荒川西遷という大土木工事、大正時代には荒川放水路という幅 500m の人工河川掘削、昭和時代以降は治水ダムの建設や白髭東・西そして亀戸・大島・小松川地区第二種市街地再開発事業など江東再開発基本構想実現の取り組み、平成時代には環 7 地下トンネル等地下遊水池の建設、そして令和の時代に入ってマンションの防災機能の強化についても盛んに議論されるようになりました。

私たちは、元々は遊水池だったような地域に近代的な都市計画を施してきたうえに気候変動も相まって、水害に強いまちづくりの大切さがますます増してきています。現代の優れた技術や知見も役に立ちます。何よりも、そこに住み働く人々や関係機関相互の協力が快適なまちづくりのために必要です。

NPO 法人ア！安全・快適街づくりのこの 20 年間の活動は、日本における防災まちづくりの活動のひとつのモデルだと思います。私は 2005 年のニューオーリンズにおけるハリケーン・カトリーナの水害からの復興について、フォード財団の助成を受けてお手伝いをしたことがあります。あのときも実際に復興の原動力になったのは現地における市民活動でした。

成戸理事長をはじめ多くの旧知の皆様がこの 20 年、取り組んでこられた活動に深く敬意を表するとともに、これからの活動の発展を心から祈っています。

「学び、成長、そして創造」 ～NPO 20 年間を振り返って～

加藤 孝明
NPO ア！安全・快適街づくり 理事
東京大学生産技術研究所教授／社会科学研究所特任教授

1. NPO に参加する

NPO に参加したのは、NPO 設立して 2 年が経った 2004 年のことである。当時、地震防災を対象とした防災まちづくりをシミュレーション等、科学的な手法を用いて適正に促進させるという研究者らしい研究を行っていた。

NPO との出会いは、東京都の外郭団体主催のまちづくり講座の講師として地震火災の延焼シミュレーションをテーマに講演を行ったときのことであった。2003 年頃のことだったと思う。講演後、年配の受講者の方がその後の私の研究歴に大きな影響を与えることになる言葉をかけてきた。「市街地の延焼も水害も被害が拡がるという点では同じである。水害についても研究しないか」と。その方こそが石川金治・前理事長である。

私は、この声掛けを 2 つの驚きをもって受け止めた。

一つは、水害のことをすっかり忘れていたことである。私自身、濃尾平野の海拔ゼロメートル地帯育ちである。小学生低学年の頃には、役場の前には「現在の過去の海面の高さ」という標識があり、今年海面、昨年海面、と徐々に海面が上昇している、つまり、地盤が沈下している事実を示していたことを幼いながらも記憶している。しかし時が経つ中で、川や海が地面より高いところにあることは、いつのまにか当たり前のことになり、同時に水害リスクはそれほど高くないという相矛盾する感覚を常識として持つようになり、大学・大学院で防災まちづくりの研究を始めてもなお、水害の危険性には全く着目していなかった。そういう当時の自分自身のある意味、鈍感な感覚に驚いたのである。高いところに大量の水があり、でも水害は大丈夫という自然の法則に反することが社会常識化し、水害は建設省河川局（当時）に任せておけば、自然の法則に反する社会的な過信が定着していた事実気づかされたのである。

またもう一つの驚きは、後で知ることになるのだが、石川さんは、東京都技監・建設局長を務めた方であるにもかかわらず、外郭団体が企画する街づくりの講座に、1 受講生として欠かさず勉強にいらしていたことである。その分野で上り詰めた方が近接分野とはいえ、別分野を一から学び直している姿に感銘した。専門性に対するリスクペクトと異なる専門分野に対する謙虚な姿勢は、その後の私の姿勢にも影響している。なお、NPO との出会いのきっかけとなる講座を企画していたのが、NPO 理事の渡邊喜代美さんである。

この出会いの後、すぐさま水害に対するまちづくりについてレビューを行い、この領域が如何に手薄であったかを知り、ある種の時代的使命感すら感じなが

ら水害について研究を行うことを決め、すぐに NPO に入会する。石川金治さんは、実行力の人である。すぐさま予算を準備してくださり、私は研究グループを組成し、研究の第一弾の水害シミュレーションの研究に着手し、完成させる。2004 年のことである。

さらに 2006 年、夏か秋ごろ、石川理事長からワークショップを行わないかと渡邊喜代美さんとともに声を掛けられた。ワークショップは、現場の生のまちづくりである。生のまちづくりは、いつ終わるか分からない永遠の取り組みである。当時の私は、大学という中途半端な立場のものがむやみやたら入ることは行ふべきではないという考えであった。というのも、手を付けて無責任にもすぐに立ち去る、すなわち、まちに迷惑をかけるような事例、もっと言えば、まちを壊すような事例が散見されていたからである。ただ、今回の場合、NPO という組織があることが大きかった。このことが私の背中を押してワークショップに進むことになる。

私自身、それまでこの手の活動の経験があったわけではなかったし、やりたいというスタンスでもなかった。加えて、当時、答えがみえているワークショップが溢れる中で、出口が見えない中でのワークショップ、しかも水害という新しいテーマである中、参考になるものはなかった。未知未経験の社会課題に対して一緒に考え、一緒に試しながら取り組む仲間づくりをすすめた。都市計画家協会事務局長（当時）土肥英生氏、東大研究員（当時）中村仁氏（現・芝浦工業大学教授）らである。また同時に若手の参加も呼び掛けた。その中には、プランナーとして活躍する鴨川美紀さんや木村美瑛子さん（現オリエンタルコンサルタンツ）、そして研究者になった塩崎由人さん（現、防災科研）である。特に塩崎さんはその後の活動で欠かせない中心人物になっている。2006 年秋から始まるあのワークショップはみんなで考え、みんなでやって創り上げた結果である。ここでいうみんなは、企画側だけではない、町会の人を含む、あのワークショップにすべての参加者である。企画者側の一方通行ではない。参加者からの刺激、フィードバックを敏感に感じて次の企画へと創造的に展開していった。

こうした活動は、2010 年新小岩北地区広域ゼロメートル市街地協議会の設立につながった。なお、この協議会は、NPO ア！安全・快適街づくり、葛飾区、新小岩北地区町会連合会、広域ゼロメートル市街地研究会（研究者の集まり）で構成し、NPO と葛飾区が共同事務局を務める会議体として設立された。すべての構成組織がフラットな関係で創造的な検討を行う、他に例をみない画期的な会議体であった。

以上が 2010 年ごろまでの展開である。こうした活動は、第 18 回防災まちづくり大賞・総務大臣賞に結実した。この後の展開も書きたいが、紙面の都合上、ここ辺りで止めて、この後の展開は、次の機会にしようと思う。

この 20 年間を振り返り、改めて感じることは、タイトルにある「学び、成

長、そして創造」である。すべての参加者に共通するものだったのではないかと思われる。参加者が学び合い、そして成長し、それまでとは違う自分を発見してきたプロセスだったのではないかと思う。そしてその活動は、どこかに見本があるわけではない創造的なものであった。創造的だからこそ、その楽しさ、喜び、達成感をそれぞれの立場で感じ、それが推進力となってきたのだと思う。たからこそ、また人が集い、新たな創造を生み出す。

さらに創造の秘訣は、多様性に尽きる。創造は一人から生みだされない。この 20 年間、実に多様な人々が参画している。まちの多様なメンバーでの議論の中からニーズ、つまり、これからやるべきことが見出され、それをするために新たなメンバーを巻き込んでいく、そして新たな相互触発が生み出され、創発的に創造が生み出されていく。「天サイ！まなぶくん」の技術開発を担った古川修さん（現・NPO メンバー）、浸水対応型市街地構想の検討の中で拠点街区・建築物を描いた今井公太郎氏（建築家、東大生研教授）もそうである。中学生もそうである。そういえば、シンポジウムでお招きした、今やテレビの夜の顔になっている大越キャスターもそうである。こうした好循環を次の 20 年間にもつなげられるとよいと心から思っている。

2. 先見性、柔軟性、実行力、そして熱い思い

NPO の活動の大きな「方向感」は、設立当初からである。当時は、今でこそ当たり前になっているハザードマップも世の中に存在しない時代に水害まちづくりに着目し、また東日本大震災を経験してやっと複合災害という言葉を目にするようになったが、活動当初から地震水害という複合災害をも対象としていた。極めて高い先見性である。加えて、現状を何とかしたいという熱い思いの存在である。NPO の副理事長でもあった大成化工の徳倉真治会長（当時）が思い出される。

先見性と熱い思いという確固たる基礎から、大きな「方向感」が打ち出され、関係者に共感され、そして共有されていった。あえて方向感と言いたい。そこには極めて柔らかい柔軟性が備わっているからである。剛ではなく、柔であることが結果的にみんなの力を引き出してきたのだと改めて感じる。実にこれまで自由に議論させてもらい、やらせていただいた。見守りつつ、多様な動きを誘発し、動き出したものについては動きやすい環境をつくるべく、努力がはらわれていたように感じる。改めて感謝したい。

そして加えて、実行力である。これも柔な実行力である。未知未経験のテーマで、とりあえずやってみるという実行力である。NPO の活動では、議論はしっかり行い、考えた結果、分からないからやらないではなく、分からないなりにまずはやってみて、その上で検証し、さらに前進する、そういう姿勢が通底したいと感じる。当初、私は元来慎重な性格なので、当初こそはドキドキしながら取り組んできたが、一連の取り組みの中での成功体験を通じて自信をも

って前に進められる雰囲気は確実に全体に浸透したと思われる。2010 年以前、土肥英生さんが「小さな成功体験」を積み上げることの重要性を話していたことが思い出される。

3. 学ぶこと、創造することの基盤

国の指導に沿って地方が動く、行政の指導のもと地域が動く。学識の先生から指導を仰ぐ。ごくごく瞬間的な断面では正しいかもしれないが、大部分では誤りであろう。すべては一方通行ではなく、相互の学び合いから始まる。「住民は先生から防災やまちづくりについて学ぶ、先生は住民から町会や地域社会のことを学んでいる。そういうことだ」、西新小岩 5 丁目の故・赤穂町会長の言葉である。参加者のそれぞれの経験に敬意を払い、それぞれから学びあう関係性であることが学び合いの基盤である。学び合い、刺激し合い、そしてそれぞれがそれぞれの伸びしろを大きくしていく。軽々しく「協働」という言葉が使われるが、まさにこれこそが協働の基盤である。

「日本語使い」。西新小岩 3 丁目の故・鈴木町会長の言葉である。学び合い、創造、いずれも対話から生まれる。対話の必要条件は、相互に理解できる言葉を使うことである。当初、頻繁に言われたことである。確かに私たち専門家はカタカナ言葉をよく使う。しかし、指摘されて、よくよく自分自身を振り返ってみると、カタカナ言葉を使うときは、自分自身、その概念を咀嚼しきれていないときに使っていることに気づかされた。それでは、そもそも相手に伝わるわけがない。この「日本語を使い」という教えは、その後の活動、人生で最も注意を払っていることであり、このことは表層的な対話のためだけではなく、新たな概念の定義、それを発展させる段階で極めて重要である。最近、経済産業省や国土交通省の様々なガイドラインや計画では、カタカナ用語が満載である。あえて概念を曖昧にするために自覚して使っているのであればよいのだが、どうもそうでもないようだ。天国の鈴木さんにぜひ一括してもらいたい。

「百人百様」。これは、加藤研のサテライト研究室を置かせてもらっている、徳島県にある先駆的な取り組みを行う 100 人集落のモットーの一つである。100 人でできることは、1000 人、1 万人になれば、10 倍、100 倍のことができるはずが、逆にできなくなっている矛盾に私は直面している。誰しも独自の個性があるにも関わらず、同質化し、大衆の中に埋没しているからであろう。個性を尊重する地域社会があり、それぞれが自分の個性を活かし、得意なことが展開できる。それを実現できる懐の深さが創造の基盤であろう。創新、これはイノベーションの漢語表現である。イノベーションについては、異なる背景の者がぶつかり合い、相互に刺激し合うことがその必要条件と言われている。単なる仲良しグループからはイノベーションは生まれにくい。これまでの協議会、輪中会議は、地域社会の創新（イノベーション）の基盤であったともいえる。

4. 地域の力とは

20 年を振り返ると、何よりも地域社会の力の奥深さを感じる。まだその可能性の一部を見たに過ぎないと思っている。ここでは印象に残っている言葉を引用したい。

「先走るリーダーと取り残されそうになる町会員との間に立って、町会長の手綱を引き、町会員を引き上げる。それが俺の役割だ」。そこには絶妙なバランス感覚と俯瞰力の存在がある。さらに「俺はがんばらないよ。分かるよな」。私に投げかけられた奥深い言葉である。詳細は、説明しにくいので説明しないが、本当に奥が深い。がんばらないことががんばる秘訣だと納得できた。「自分たちのことだから当然だよ」、「いよいよ楽しくなってきましたね。30 年も楽しみながら水害対策出来るなんて！！」。これは最近、聞いた言葉である。

地域の力は、きっと無限大である。ただし、ゼロにもできるし、マイナスにもできる。まずは 100 人で先駆的 100 人集落のレベルへ、そして 1,000 人でその 10 倍、10,000 人でその 100 倍となるような地域社会となることを目指せるといい。

5. これからの 20 年に向けて

「加藤先生、こんなになっちゃって。昔は格好良かったのに」。ワークショップに当初から参加していた年配女性の言葉である。確かに始めたのは 30 代終わり、今は 50 代半ばである。写真をみると、確かに 30 代終わりの私はスマートでシュッとしていた。今はその面影はない。NPO を支える中核メンバーも当初は 60 代、今や 80 代である。とんがっていた喜代美さんも角がとれて丸くなっている。当初、学生だった若手も今や組織の中堅である。確実に時間は刻まれている。次の 20 年間で展望するにあたっては、次の世代にどうつなげるかが喫緊の課題である。これまでに培われたマインド、関係性という資源を持続させることを必要条件とし、これを次の世代にいい形でつなげることが課題である。しかし、ただ伝えればすむということではない。これまでに培われたものは、言葉や文章だけでは伝えきれないものが多い。その言葉の背景、行間、経験したからこそわかる感覚、今時の AI では理解できないものがほとんどである。こうしたことは、一緒に悩み、議論し、活動したからこそ、即ち協働したからこそ伝わることだと思われる。今後に向けては、協働するテーマを再構築し、地域社会の各地、各層で、協働する時間の共有を高めることが必要だと思われる。

20 年後、40 年を振り返ってという特集まで生きていられるように健康に心がけたい。同時にこの先も自分自身が学びと創造を通して、どこまで成長、変化できるのか、楽しみである。

温故知新 —20 年の思い出とこれから—

成戸 寿彦
NPO ア！安全・快適街づくり 理事長

NPO の故きを温ねるとすれば、まず石川さんのことから始めねばなりません。

1. 石川さんとの出会い —スーパー堤防勉強会—

私は都庁の現役時代に、石川さんと直接仕事をしたことはありませんでした。私が区画整理部の計画課長の時に、道路建設部長でいらっしゃったとか、そのぐらいの関係です。それでも石川さんは、私がメトロの理事をやっている時に 2 度ほどいらっしゃって、「今度、NPO をつくるんだよ。スーパー堤防のことをいろいろやっていくのだけど、スーパー堤防は区画整理と一緒にできないので、区画整理のことは俺は分かんないんだよな。手伝ってくれないかな」と、ああいうふうニコッとやられると、「あ、いいですよ」という形で引き受けて、それでスーパー堤防の勉強会を始めました。

石川さんのついで、荒川下流河川事務所が当時のリバーフロント整備センター（現、リバーフロント研究所）に調査委託をする。そこで委員会をつくって、国の人、あるいは東京都の都市計画局、建設局が集まり、私が委員長になって 3 年ほど勉強会をしました。スーパー堤防と区画整理や再開発との合併施行は、当時としてはまだあまり行われていない分野でした。

しかし勉強会で詳しく検討してみると、この地域での区画整理とスーパー堤防との合併施行はあまりにも課題が多い、ということが分かってきました。石川さんには、「課題にある程度のめどをつけないと現地に入れませんよ」と申し上げ報告書を作って、それでひとつの役目が済んだということで、私はいったん身を引いたわけです。

後でお聞きしたところによりますとこの勉強会の成果をもって地元に入ったということですが、うまくいかなかったようです。

2. 石川さん地域密着型へ

そこで石川さんは、地元を受け入れてもらえるよう、方向転換をします。

まず徳倉さんが「地域に貢献したい」という気持ちの表れとして東新小岩七丁目町会に寄付したボートで、葛西の砂浜において子供を交えたボート訓練をする。また西新小岩三丁目の鈴木町会長さんの賛同を得て、水位表示板の設置に取り掛かる。

そして石川さんが非常に先見の明があったと思うのは、NPO 単独で活動しなかったということです。葛飾区、地元の町会また東京大学生産技術研究所加藤研究室とともに活動をしていくために、新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会という組織を作りました。もちろん、NPO はその中の中心的な役割で事

務局を務めています。活動自体は現在に至るも、ゼロメートル市街地協議会のもとに行っています。

そうした地域の活動が評価されて、2014 年に NPO と町会が総務大臣賞を受けました。これは大変なことだと思います。地域で祝賀会もやりました。私は身を引いていましたのでその祝賀会には参加しませんでした。石川さんにとっては大変華やかな時期ではなかったかと思います。

3. NPO のピンチ

しかし残念なことに、石川さんは大変な病気を抱えることになり、状況は一変してしまいます。それまで私は活動の節々に顔を出す程度でしたが、石川さんから病状の告白を受け「NPO を少し手伝ってほしい」旨告げられました。それ以降、毎月の事務局会議には必ず出るようにしました。

石川さんがそういう状況に置かれて、それで私に声を掛けられたということは相当なことだろうなということは分かりますから。今までは私自身も、できれば特定の地域ではなく東京という地域で広範な都市計画をやるような分野に余生の時間を割きたいなという思いはありました。しかしこうしたことがあって、NPO の活動を中心に時間を割くようにしたわけです。

しかし残念ながら、石川さんは 2016 年の 2 月に亡くなられてしまいました。

その四～五日前のことですが、夜中に携帯電話が鳴りました。ほどなく切れたのでそのまま寝たのですが、朝起きて気になり確認したら、石川さんからでした。驚いてこちらからかけましたが、出られない状態のようでした。そして訃報です。きっと何か私に話しておきたいことがあったのかもしれませんが。このことは心に残り、まわりに押されて理事長をお引き受けする動機の一つになりました。

不思議なことにその前後一年の間に、盟友の徳倉さんと鈴木さんも亡くなられてしまいました。その年の十一月、葛飾区長をお招きして「三氏を語る会」を開催したのも、昨日のような思いです。

4. 新しいきを知る

現在の NPO は、冒頭の文章にも書きましたように、「輪中会議」「出前授業」「新分野の研究・開発」を活動の三本の柱としていますが、そのうちの一つ「出前授業」に次の時代へつなぐ成果が見え始めているように感じます。

出前授業を受けた小学生が中学の部活動を経て高校へ大学へと進む。そうしたプロセスにおいて、NPO が取り組んでいる「出前授業の副読本づくり」に参画してくれているのです。こうした動きがこれからも続くことによって、加藤研究室や葛飾区と連動した活動が今後とも続けていかれるものと確信しています。

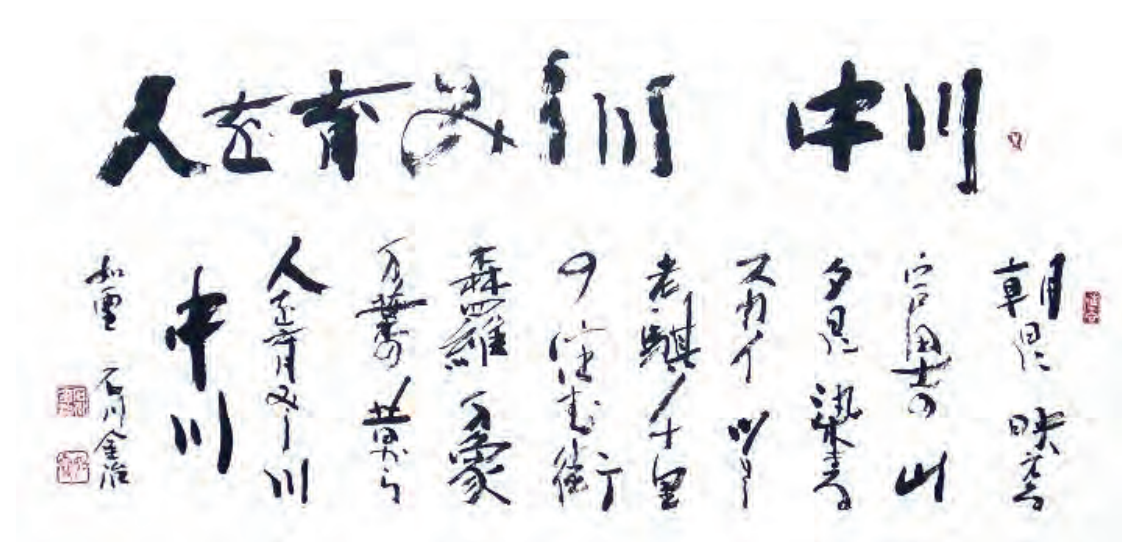
キング牧師ではありませんが、「私にも夢があります」。出前授業が NPO の申請のもとに行われる事業ではなく、当然必要な区の事業として組み込まれ

NPO がそして地元の有志がそれに協力してゆく。そして将来的には、出前授業を経験し成長した人々が町会活動の担い手となり、「浸水」と「親水」に対する取り組みが日常的に行われてゆく。そしていざという時に、災害に弱い方々を含めお互いを助け合うような地域活動が平然と行われていく。そうした地域になるものと、信じています。

5. 石川さんの想い

NPO の機関紙「ア！安全・快適街づくりニュース」の表紙に、石川さんご自身が書にされたご自身の詩を載せるようにしています。

その詩の中ほどに「老驥千里（ろうきせんり）」という言葉があります。これは杜甫の言葉で、「老驥櫪（れき）に伏するも志千里に在り」という言葉からとっています。老驥というのは老いた馬で、櫪というのは馬小屋です。年とった馬は、馬小屋にあって千里を走る、そういった志は持っている。言ってみれば、「年は取っても志は高いところにある」という内容です。石川さんは、こういう思いで NPO を設立し動かしていた、ということをつくづく感じて、この気持ちは常に忘れないでいようということで、必ずこの『街づくりニュース』の表紙に入れるようにしています。



20 周年に思う

山上 忠

NPO ア！安全・快適街づくり事務局 理事

私の自然災害の体験ですが最初の出会いは集中豪雨による土石流でした。それは卒論のテーマに取り組むためヒグマの気配の濃い北海道の日高山系山奥の崩壊地帯に 40 日間籠って調査中に会ったもので、激しい降雨が続いた後突然大量の真っ黒な濁流が高台に設置していたテントの脇まで迫り、目の前を凄まじい轟音と振動と共にトラック大の巨石が倒木を巻き込んで流れ下り、その巨石同士がぶつかり合って発する「擦過香」の強いにおいが充満しました。上流のどこかで発生した土砂崩れが一時流れを堰き止めそのあと一挙に下ってきたのが原因と思われます。僅か 1 時間足らずでしたがその大迫力には完全に圧倒されました。

二つ目は在職中の 1995 年に発生した阪神淡路大震災に対する職務上の被災地調査です。訪れた神戸市内のビル街の大量の割れガラスや瓦礫を踏んでたどり着いて見た横倒しになった高架橋橋脚、中川を思わせる淀川に移動して見た堤防に大量に発生した崩壊や破壊の跡など、改めて地震の恐怖を感じました。

退職後にア！安全 NPO 活動に本格参加してからは多くの災害専門家の方から教えを頂いていますが、三つめの体験は 2011 年の加藤先生も加わった NPO による東日本大震災訪問調査の折で、特に被災地の惨状と被災者との意見交換から過去にも同じ高さまでの津波災害に襲われていたことがあったことが判明した時で、改めて防災の「継承」の重要さと同時にその難しさを感じた次第です。

一方、普段の事務局の日常ですが、輪中会議やシンポジウム、パネル展示や町会行事などが開催された日の終わりにいつもその場で雑談になり、アルコールも出て巾ひろい話題や意見交換を幾度も繰り返したことが思い出されます。当時健在だった石川金治さん徳倉眞治さん鈴木一喜さんなど NPO にとって重要な役割を担った方たちですが、いつも加わっての多くの事を教えてくれた気がします。3 人の方達は残念なことに 2016 年に相次いで亡くなられています。

今年は長い間 NPO 活動にご理解とご協力を頂いてきた中川榮久さん、東原洋子さんなどが相次いで勇退され、町会長の世代交代が行われています。

NPO の運営も BCP（企業継続活動）などを考慮しながら近未来の想定へ取り組みを開始しています。

NPO ア！安全・快適街づくりの 20 年を振り返って

宇賀 俊夫

NPO ア！安全・快適街づくり 事務局長

NPO ア！安全・快適街づくりは今年の 9 月に設立以来 20 年を迎えます。この団体に設立以来かかわってきたものの一人としてどのような役割を果たしてきたのか振り返ってみたいと思います。

振り出しは大学の同級生で、ともにクラス会の幹事を務めていた NPO の初代副理事長の徳倉真治氏から今度新たに NPO を設立することになったのでその監事をしてもらえないかとの要請を受けたことでした。ちょうど 40 年勤めた会社を退職し、その古巣からの臨時の応援仕事を断続的に 4 年ほど勤め、それからも解放された時期であり、監事なら 1 年に 1 回業務と会計監査を行うだけだから大した負担にならないことと、そのころから急速に増えてきた NPO という新しい法人がどんな活動をするのか興味もあって気軽い気持ちで引き受けることにしたのですが、その団体の活動に 20 年にもわたって関与することになろうとは夢にも思いませんでした。事実当初 2 年は監事として都庁 OB のもう 1 名の監事の方と監査業務を年 1 回行うだけのつながりでしたが、不幸なことに事務局長を務めた方が相次いで病気等で退任され、突如として初代理事長の石川金治氏から、月 1 回事務局会議を開くのでそれに出席して議事概要を書いてくれればよいこと、それ以外は徳倉氏が社長を務める大成化工（株）の秘書の方や、スタッフの方がすべて事務的な作業はやってくれるからとのことで事務局長の役を引き受けることになったのです。とにかくこの NPO に関係するまで、水害については 1959 年 9 月に名古屋市を襲った伊勢湾台風での経験しかありませんでした。この時はその年の 4 月に社会人になったばかりで、名古屋市西区のナイロンの糸を作っている工場をやっと現場実習を終え、8 月から事務部労務課で働き始めた時でした。5,000 人以上の犠牲者を出した伊勢湾台風により、ナイロン糸の原料を作っていた名古屋市港区の工場がその向かいにあった貯木場から流失した大量の原木により被害を受け、あふれた水で工場の 1 階にあったモーターが全て水浸し、使えなくなったモーターを取り外し、洗浄し、整備・再使用する間原料がなくなって 1 か月ぐらい糸が作れなくなってしまったのです。加えて両工場の従業員の中には自宅が被害を受けた方も多く、その家族の方などの救出・支援活動に忙殺されることになったのです。ただ、この時新入社員だった小生は罹災 3 日目に水浸しになった名古屋工場に炊き出しの握りを届けた以外は本部詰めで、被災地の現場にはほとんど行ったことがなく、現地の惨状は話で聞くだけでしたが、それでも水害の恐ろしさは充分感じることはできました。しかしながら、その後は水害にあうことはなかったため、水害の恐ろしさについては身近な問題として認識することはありませんでした。

NPO に入ってはじめて NPO の事務所のある新小岩の地域が海拔 0 メートル地帯で、堤防に守られていなければ魚やカニの住むようなところとだということ、これを水害から守るためには今の堤防をたとえ溢水しても崩れないようなスーパー堤防に作り替える必要があること、ただそのような堤防を作るためにはその地域に住んでいて影響を受ける人々の合意を得て一時他地域に移動してもらい、完成したら戻ってきてもらう必要があることなどむづかしい問題があり、簡単にはスーパー堤防の建設をすることはできないこと、しからばもし洪水が起こったときにはどこに避難したらよいのか、そのための避難の方法はなどを NPO の活動を通じて皆様と一緒に学んでまいりました。

近年地球温暖化の影響でしょうか、台風は大型化し高潮による溢水や集中豪雨による内水氾濫などの危険が高まっています。加えてむこう 30 年の間に 70%の確率で起こると予想されている首都直下型の地震が起これば堤防の破堤も恐れなしとはしません。このためには手近なところに避難できるような高台を設けることは喫緊の課題といえましょう。新小岩地区でも新小岩公園の高台化や西新小岩 3 丁目地区での高規格堤防建設などの計画が報じられています。これらの浸水対応型まちづくりの拠点となる高台化計画が早期に実現され、この地区が水と緑に囲まれた東京一番の町になる日の来るのを願って皆さんと一緒に頑張っていきたいと切に願うものです。

以上

NPO ア！安全・快適街づくり 設立二十周年に寄せて

元東京都技監（都市整備局長兼務）
公益財団法人東京都公園協会理事長 佐藤 伸朗

NPO ア！安全・快適街づくりの設立 20 周年、おめでとうございます。

今から 20 年前、私は葛飾区に在籍していました。平成 13～15 年度、京成押上線青砥～四つ木間の鉄道高架化に関連するまちづくりの担当課長として、区に出向していたのです。

建設局区画整理部時代の上司だった竹内直佐さんが、当時、こんなことを始めたんだと教えてくれたのが私にとっての最初の出会いです。メンバーには、私が存じ上げている諸先輩方が参加されており、何だか面白そうなことがこれから始まる予感がしました。その時、なぜ、ア！という名前にしたのかというネーミングの秘密も教えてくれました。

区では同じ部の課長が、新小岩地域の地元のまちづくりへの対応として取り組んでいたのを覚えております。葛飾区は、荒川、綾瀬川、中川、新中川、江戸川、大場川と、川に囲まれた立地で、カスリーン台風による被害の記憶も語り継がれている土地柄です。水害に対する危機意識は日頃から高いものがありましたから、区も最初はどう対応していいか戸惑ったような気配でしたが、地元のやる気が少しずつ伝わり、地元との関係も深くなっていったように記憶しています。

さらに、私自身はもう少しつながりがあります。葛飾区の前の職場が都市整備局の施設計画課で、まさにスーパー堤防の担当でした。平成 11 年度に荒川沿川基本構想が策定され、私も平成 12 年度の江戸川沿川基本構想策定に関わり、面整備を知る人間として、江戸川下流事務所や江戸川区の方々と一緒にまちづくりの議論をしておりました。ですから、スーパー堤防に関連した面整備を地元主体で検討するという動きは、大いに応援していたテーマでした。

まだあります。葛飾区の次の異動先が国の都市再生本部でした。そこでもまた、当 NPO の活動を目にしたのです。平成 16 年の全国都市再生モデル調査にエントリーされ、見事、国の調査費の採択を受けました。調査名は「浸水シミュレーションによる防災まちづくり」というものでした。この調査費は、地域が主体となって取り組んでいる全国のまちづくりを応援するためのもので、全国各地から個性豊かな特徴ある取組の提案が寄せられ、競争率が非常に高かったのですが、そこで選ばれたのは、さすがだと思いました。選定された調査は、全国のまちづくり関係者が参考にできるように、都市再生本部の HP など様々な機会を通じて取り組み内容を発信していました。ア！安全・安心街づくりの活動が全国区になったのだとひそかに感動していたものです。

その後はしばらく接点がなくなってしまったのですが、その間、葛飾区では平成 23 年の都市マスタープランに高台化まちづくりを位置づけ、平成 29 年か

ら検討を続けた「浸水対応型市街地構想」を令和元年に打ち出しました。これは、当時、検討が進められていた東京都の都市計画区域マスタープランにも影響を及ぼしたのは間違いありません。昨年、決定した東京都のマスタープランにおいては、水害に強い都市づくりを大きく取り上げて位置づけることとなりました。当 NPO の取り組みから始まった動きがきっかけとなり、水害に対する意識の高い葛飾区が新たな市街地像を提示し、それが東京都全体の都市づくりの方向性も示唆するものとなったのです。

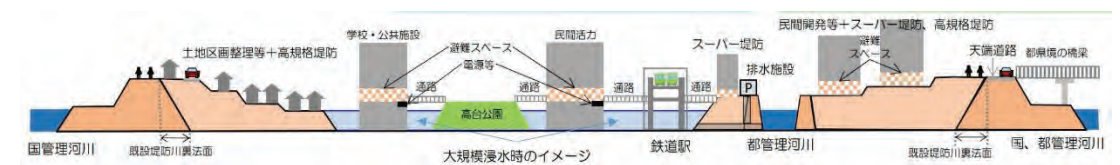
そして、近年の水災害の多発化、激甚化の時代、さらなる動きにつながっていきました。令和元年 8 月、スーパー堤防上に作られた都立大島小松川公園を小池都知事と石井国土交通大臣（当時）が共同で現場視察し、その場で都知事から大臣に、都と国で防災まちづくりについて実務レベルでの協議を提案したのです。

翌年 1 月から「災害に強い「東京」形成に向けた連絡会議」が開催され、沿川地域の高台化などを議論し、12 月に高台まちづくりなどを盛り込んだ「災害に強い「東京」形成ビジョン」を発表。これを受けて、昨年からは国・都・沿川区などによる高台まちづくりワーキンググループが始まりました。このワーキングにおいて、葛飾区からは、浸水対応型市街地構想とともに、具体例として新小岩地区の公園の高台化などが提案されています。

こうして今、最も新しいまちづくりの動きの一つとして、高台まちづくりに取り組もうとしている時代に、20 年前を振り返ってみると、あの時、安全・安心街づくりのために石川金治初代理事長をはじめ専門家の人たちと地元の人たちが現場から声を上げたのが、いかに時代の先を行っていたのかが分かります。

そして、この 20 年、変わらずにずっと川に向き合い、地域と語り合っ、活動を発展させ、時代の先頭を走ってきたこの NPO のすばらしさ、しなやかさ、ぶれない強さに敬意を表します。このような活動は他には例を見ないのではないのでしょうか。

成戸理事長をはじめ、諸先輩方には、引き続き、フロントランナーとして、先進的なまちづくりを進めていただきたいと願っております。私も葛飾サポーターの一人として、できる限りの応援をしてまいります。今後とも、貴 NPO の益々のご発展と、NPO のメンバーの方々の安全・安心（ご健勝）を心からお祈りいたします。改めて、20 周年おめでとうございます。



高台まちづくりのイメージ

縄文海進・明治 43 年洪水・バンクタウン

小森 和雄
NPO ア！安全・快適街づくり 会員

1. 設立直後に石川さんのお誘い

2002（平成 14）年 5 月 22 日、職場の OB 会で、前理事長石川さんから「東京東部地域を水害から守る NPO を手伝ってくれないか」にこやかな顔で、声をかけられました。

内容をお聞きすると、スーパー堤防による街づくりで、面的整備に詳しい職場の OB が何人か参加されているということでした。今考えると、5 月 10 日に設立総会をしたばかりだったのです。

6 月 25 日に開催された第 1 回スーパー堤防勉強会に参加したのが、この会と関わるようになった最初です。

事務局会議の一員として、特に、写真記録を担当すると共に、広報担当の伊藤さんのお手伝いをしていたと記憶しています。

当時私は未だ、ワープロ（オワシス）を使用していました。データ保存はフロッピーで、容量は 1.4M でした。今も、ワープロを保管しており、当時の資料を見るべく、フロッピーを開こうとしましたが、フロッピーが壊れているとの表示で見えることは出来ませんでした。また、ワープロの液晶画面は、劣化しており、輝度調整をしてやっと文字が読める状態でした。

写真はフィルムで、デジタルに代わりましたが、画素数は今とは格段に劣っていました。街づくりニュース Vol.9 の「白髭西地区見学会」における屋上からの俯瞰写真はカメラを一脚に付け、自動シャッターにして、一脚を高く持ち上げて撮影しました。デジタルは、直ぐに確認でき、撮り直しがきくので、楽になりました。

事務局会議は、ほぼ毎月大成化工で開催されました。事務局会議の大半は、石川さん繋がりのため、職場の元同僚が多く、気心も知っているので、気楽に参加させて頂きました。

2005 年 3 月には、西新小岩地区に「水位表示ポール」が設置されました。活動の成果を実感しながら事務局会議に通ったことを思い出します。（街づくりニュース Vol.6）

その後、私は他の街づくりに関する NPO の設立、事務局長をすることになり、事務局会議に参加したことが、大いに役立ちました。

私は親の介護で関東を離れるまで数年間、事務局員として係わりました。介護も終わり他の NPO に係っていたことから、再び笑顔で石川さんから頼まれ、現在は監事としてお世話になっています。

2. 埼玉県に海があった

今から数千年前は、地球が温暖化しており、海面が高く、東京湾は大宮台地の東は栃木県境まで、西は川越まで入り込んでいました。東京東部低地帯を理解する上で土地の成り立ちを知ることは重要です。旧石器から現在までの変遷地図がパネルとして事務局に保管されています。

私は、当時海沿いだった「水子貝塚(富士見市)」で、22 年前からガイドをしています。このことから、東京東部地域の成り立ちは、良く承知していました。

水子貝塚は狭山丘陵が荒川低地へ張り出した縁辺地であり標高 18m ですが、荒川や新河岸川沿いは、数 m しかなく、荒川の堤防は民家の屋根より高く、富士見市域の半分は洪水時には水没地域です。このため、洪水時の緊急避難先として「水塚」が作られました。今も水田地域の農家で見る事が出来ます。



3. 水害は何度も起きている

利根川の東遷・荒川の西遷により、江戸以降洪水は少なくなりましたが、明治 43 年の大洪水(★)は、河川の改修・放水路建設などのきっかけになりました。今は、遊水地なども作られて、治水は強化されましたが、河川その他、地震・津波・高潮など水害の危険性は指摘されている通りです。

抜本的方法としてのスーパー堤防は、面整備であり、他の面整備と同様に時間を必要とします。このため、当 NPO は迫りくる危険から命を守る対策と組み合わせて活動を行っているのはご承知の通りです。

今は亡き石川さんの笑顔に誘われ当 NPO の手伝いも 20 年となりました。輪中地域ご出身で水の怖さを熟知した石川さんの、バンクタウンへの思いに少しでもお応えしたいと思っています。

(★:街づくりニュース Vol.16 に私の投稿記事あり)

NPO 設立 20 周年に寄せて

増澤 一郎
NPO ア！安全・快適街づくり事務局

1. NPO に関わって感じたこと

発足当初から関わって来た者の一人として、二十年二昔と言うかどうかはさておき、あつという間の年月でした。立ち上げた故石川理事長は、「小さく産んで、大きく育てよう。走りながら考えよう。貧乏所帯だから。」が口癖でした。又故徳倉副理事長は事ある度に「世の役に立つことをしよう。今まで地域の人達に迷惑をかけてたので、お詫びにお返しをしたい。」でした。

設立当時からお二人には、心から新小岩を東京一番の緑豊かな安全で、快適な街にしようとの意気込みがあり、その熱意は末端の私迄伝わりました。

設立総会後直ぐに、お二人はスーパー堤防先進地域を見学することと、大成化工（株）及びその周辺をスーパー堤防と一体となった街づくりに取り組みました。

私は故理事長が現職当時、一時期上司として仕えましたが、議会中でも新聞を丹念に読んだり、席を長時間外したり、読めない字で指示したりしていたので、まともに文章を書いている姿はついぞ見掛けませんでした。退職後は一層その度が増すだろうぐらいに思っていた私はとんでもない勘違いをしていました。

文字通り率先垂範、自ら文章を考え、パソコンに打ち込み「案だよ。」と言って見せる上司だとはついぞ思って無かっただけに驚きでした。本当は、言って聞かせてやって見せ、褒めてやらねば人は動かじの言葉を地で行く方でした。

次から次へと頭が働き、飽くことを知らない感じで退職後も八面六臂の活躍をし、話し上手で、難しい交渉もいつか自分の方に相手を引き込む名手でした。

一方、故副理事長は本業以上に NPO の目的実現に向け、時間とお金を惜しまず、一会員に過ぎない者の意見も良く聞きながら、想像や推測を交えず自らの目と足で確認して整理し、ご自分の考え主観をビジュアルにパネル化して、説得力ある説明をされる方でした。

このお二人と、昔から地元に住んでられる町会長の鈴木さんが時折、NPO を訪ねて来られ、雑談をしながら NPO の活動を側面から支えて下さいました。

こうして三人の方はタッグを組み、万が一「堤防・護岸が大地震や大型台風で破堤したり壊れたら新小岩は水の底に沈んでしまう。」と警鐘を鳴らし続け、国・都・区の議会と行政に、そもそも新小岩がゼロメートル地帯となったのは「地盤沈下」が原因なのだから、この公害に真正面から向き合うよう訴え続けられました。

こうした訴えが功を奏し、近年新小岩での三事業（荒川西新小岩地区高規格堤防、中川堤防道路と蔵前橋通りの平面交差、新小岩公園高台化再整備）がや

っと目に見え動き始めた矢先お三方が次々と黄泉の国へ旅立たれてしまわれました。

舵取りを失った私共は現在、後任理事長奮闘の下、地域の新小岩北地区連合町会（7 町会 2 自治町会）のご協力と、東京大学加藤研究室のご指導で、何とか命運を保っています。

2. NPO 設立 20 周年に思うこと

設立当初のあの高揚感は何だったのか。西新小岩三丁目の中川は、時を経ずしてスーパー堤防が出来上がるのではと思う方が居ても不思議ではないくらいの盛り上がりでした。

加えて、若しかしたら東京一番の緑豊かで安全な街が出来るのではと期待した方も大勢居られたのではないのでしょうか。

事実、当 NPO は地域の方々との結び付きを最も大切にしたいとの思いで、積極的にスーパー堤防が完成した街を川から、陸から見て欲しいとお誘いしたり、皆さんに新小岩が低地のゼロメートル地帯なので万が一を考え、水防訓練を始め、避難訓練や広域避難訓練に参加して欲しいと、新小岩北地区連合町会共々お願いしていました。

精力的にスーパー堤防と一体となった街を見学すると共に、地元企業を含めた地域の街づくり勉強会を立ち上げ、その後数年間、現理事長（当時理事）を座長に、東京都と葛飾区の街づくり担当者が集まり多角的議論を重ね、更に国をも動かし、現行制度の下でのスーパー堤防と一体の街づくりについて検討を続けました。

結果、平成 31 年 1 月 10 日関東地方整備局事業評価監視委員会は、「荒川西新小岩地区の高規格堤防整備事業を実施することが妥当と考えられる。」との結論を出しました。

一方、当 NPO の目標でもある荒川以東のゼロメートル地帯を、東京一番の安心・安全な街を目指して葛飾区をはじめ、江戸川・足立区も誘い、シンポジウムやパネルディスカッション等の催しを重ねて来ました。

この間、スーパー堤防は予算の無駄遣いと切り捨てられた時期もあったものの、スーパー堤防事業化のお墨付きが、事業評価監視委員会から得られた現在、新小岩で今後進めて行かなければならない二事業（堤防通りと蔵前橋通りの平面交差化及び新小岩公園高台化再整備）があります。

にも拘らずこの三事業は、直ぐには進まないのではとの疑念が NPO 会員や住民の方からも聞かれる昨今、設立当初会員だった多くの方が退会を申し出られ、事務局のメンバーも次々と去って行きました。

設立 20 年を迎えても環境は二昔前と何ら変わらず、我々もいつしか歳を重ねてしまい、往年の熱気と体力が失せがちの昨今、事態が急展開し、荒川下流河川事務所施行の西新小岩地区高規格堤防が動き出しさえすれば、当 NPO の出番も屹度来るものと信じる今日この頃です。

NPO ア！安全・快適街づくりと私

中川 榮久
前 東新小岩七丁目町会長
前 新小岩北地区連合町会長

NPO ア！安全・快適街づくり設立 20 周年にあたり、地域の防災力の向上に、多大なるご指導を頂き、心より深謝致しております。

私事ですが、太平洋戦争終結（9 歳）・昭和 22 年カスリーン台風（11 歳）・23 年狩野川台風（発電所の吊り橋長さ 104m が流失し再建の設計・製作に参加）・34 年伊勢湾台風・39 年新潟地震（信濃川河口堤防決壊・流失の復興に参加）・東京湾外郭堤防建設・墨田川・中川・綾瀬川の堤防強化等に関わり、災害・減災の必要性を強く感じ、町会役員になってからは、住人の安全のために、災害時に役員・市民による、災害対策市民組織（現在の市民組織の原型）を作り昭和 45 年より防災訓練を実施し、その後数年間の空白もありましたが、私が町会長に就任の平成 14 年度（2002）より本格的に災害・減災に取り組み今日に至っております。

NPO と私の出会い。

何れの新聞社の記事か不明ですが、ページをめくっていると、右上段かなり大きなスペースで東京下町地域で川に囲まれた地域（葛飾区）の地震水害の記事に心の動揺と新潟地震の液状化による被害後の新小岩地区が想像され、地震水害を心配していた私と同様に考え、早急に対処しなければいけないと考えていてくれる方（徳倉副理事長）がおられたことに、驚きと、感謝で心が熱くなりました。

程無くして、当時東新小岩五丁目町会・新小岩北地区連合町会会長の江原悦次郎会長より、連絡を頂き江原宅で NPO 徳倉副理事長さんとお引き合わせいただきました。

徳倉副理事長さんのお考えをお聞かせいただき、地域の為の安全を考え行動してくれる 団体 NPO に感動し、私の出来る限り、ご指導を頼りに頑張りたいと、誓いました。

その後、NPO の役員の皆様方・東京大学大学院加藤孝明研究室加藤先生はじめ研究室の皆様方と交流させていただき、お知恵を拝借し、ご指導を参考にして、町会の防災・減災の考え方や訓練を重ね、葛飾区約 240 町会中で防災に関しては上位を占めるよう になりました。

※ NPO より新小岩北地区連合町会 6 町会に、水害時の救援・救助用ゴムボートを 6 艇ご寄付頂いたことを原点に、現在は各町会がエンジン付きゴムボートを導入して、町民の安心・安全が格段に向上致しました。

私が NPO ア！安全・快適街づくりと出会わなかったら。

当町会の防災は進行せずにいたと想像されます。当町会が、旧態依然であれば、新小岩北地区連合町会・葛飾区防災も現在とは異なるものになっていたと考えます。

NPO・加藤研究室加藤先生に推薦頂きまして、当町会の防災活動をテレビ（地上波各社複数回）・新聞（大手各社複数回）・防災研究機関・大学・大学院・消防・警察・全国防災関係団体等に報告することが出来たことは感謝に堪えません。

報告例（抜粋）

- 2006.9.1 NHK スペシャル「首都直下地震 浮かび上がってきた危険」
- 2008.10.3 まちづくりフロンティア 2008 都市災害に強いまちづくり
- 2008.12.11 東京都 23 区職員研修会
- 2011.2.8 世田谷区地域連合会 大型バス 3 台で来町
- 2011.4.11 日経ビジネス特集（2011.3.11）不屈の国 掲載
- 2015.9.16 第 23 回治水の日（カスリーン台風による利根川決壊の日）継承式典（埼玉県加須市）
- 2015.9.9 全国自主防災リーダー研修会（麹町ホテルループル）
- 2018.3.7 消防制度 70 周年記念式典（両国国技館平成天皇・皇后・三権の長 他各県代表者約 7,000 名ご参列）
- 2018.9.5 ロイター通信取材・同ニュースウィーク誌に掲載
- その他 アフリカモザンビーク・アセアン訪日研究者・フィリピン留学生などに報告致しました。

NPO 東京大学の皆様のお陰を持ちまして当 0 メートル地域の安全・安心が格段向上したことに深く感謝致しております。

末文に成りましたが、NPO ア！安全・快適街づくりのご隆盛をお祈り申し上げますとともに、豪雨水害・地震水害等に苦慮する全世界の人々の安全にご尽力下さいます様お願い申し上げます。

徳倉さんとの思い出

江原 悦次郎
新小岩北地区連合町会 相談役

NPO ア！安全・快適街づくり設立 20 周年、誠におめでとうございます。

20 年前、当時の西新小岩三丁目の鈴木町会長より、「大成化工の徳倉社長が、水害について相談があるのでよろしく。」との電話がありました。翌日鈴木町会長からの紹介で伺いましたと、徳倉社長がみえて、この新小岩北地区は西も東も 0m 地帯で、いつ水害があるかわからない。私もこどもの頃、郷里で台風で何日も水が引かないで大変な思いをした経験がある。西新小岩三丁目だけでなく、北地区連合町会さんと私どもで協力して、快適で住みよい街づくりをしたいので、ぜひとも各町会長さんに話をしていただきたい。私の同級生の石川が蔵前通り沿いの東京都第五建設事務所で所長をしていたが、定年退職したので、石川くんと一緒に話を進めていきたい。という事でした。

私は大いに賛同し、当時北地区連合町会長でしたので、「この趣旨については、町会長会議で話します。ところで、徳倉さんは愛知県の一色町の生まれですか？」と聞くと、「えー。なんで私の出身を知っているのですか？」と驚かれたので、「実は、私の妻も一色町の出身で、妻の幼なじみの岡部さんという女性が、高校の同級生が西新小岩で大成化工という会社の社長をしている。と言っていたことを思い出しました。頭がよくて、背が高くて、とても格好よくて、女子生徒の憧れの的だと言っていましたよ。」と言うと、徳倉社長も「あー。岡部さんのことは私もよく覚えています。すらっとした美人で、私の初恋の人でした。一度会いたいなあー。」と言って大笑いしました。

その後、岡部さんも徳倉君に会いたいと言うので、一色町出身者数名で集まり、水害の事や思い出話、一色町の鰻は日本一だ。等々。大いに話に花が咲きました。徳倉社長も粋な和服姿で、故郷の同窓会のような。と大いに喜んでおられました。

町会長会議では、代表決めでいろいろな意見が出ましたが、多くの町会、多くの人に、より多く、より長く協力と関心を持ってもらいたいということで、連合町会長が代々代表になることが一番良いという結論になり、今も続いています。

水害は、毎年いつどこで起こるかわかりません。NPO ア！安全・快適街づくりの皆様方と共に 20 年 30 年と続け、これからも安心安全の住み良い街にしていきたい。と思います。

“ア！安全・快適街づくり” 設立の頃

松田 芳夫
元 日本河川協会会長

前の理事長の石川金治さんとは、石川さんが東京都の河川部長時代の頃、私が旧建設省の河川局で仕事をしていた時以来のおつきあいでした。

もともと河川行政は河川局が地方自治体を指導する立場にあり、又、国庫補助金制度もあるので、都道府県の河川畑の職員は河川局に遠慮しておられ、おつきあいといっても少し垣根越しだったかも知れません。

そうはいっても、私は石川さんの温厚で几帳面な人柄に好意を感じていました。

石川さんが都を退職されてからしばらく経ってからでしょうか、突然私の处にお見えになって NPO を創るので参加してくれと言われるのです。

NPO といっても何をやるのかと尋ねると、同郷の親しい友人が葛飾区の荒川の側に工場を持っていて、そこを舞台にゆくゆくはスーパー堤防事業をやりたいのだということでした。

敬愛する石川さんの頼みですので、断るわけにもいかず理事も引き受けさせられて今日に到っております。

私は理事会に出席するだけで NPO の活動には参加してないので申し訳ない限りです。

ところで、その NPO の名称はどうするのとお聞きすると“ア！安全・快適街づくり”というのです。

少々変った名前なので理由を尋ねると、NPO のリストに掲載されるとき少しでも前の方になって欲しいからというのです。思わず笑い出してしまいました。

その後の活動は、まず地元の葛飾区の人たちに水害の恐ろしさや治水事業の意義をわかって頂くことを主眼に、種々の活動をされてきたようにお見受けします。

その甲斐あって、又、近年の全国的な水害の多発もあり、地元の方々にも水害対策の必要性が浸透してきています。

残念なことは、石川さんとその御友人の徳倉さんが相次いで亡くなられたことです。

後に残された私たちも頑張らなければ申しわけないと思うのですが会員の高齢化が進んでおります。

葛飾区をはじめ下町の低地の安全性の高い街づくりに関心を持って下さる若い人の参加を痛切に期待しているものです。

ア！安全・快適街づくり 20 周年に寄せて

竹内 直佐
NPO ア！安全・快適街づくり 評議員

ア！安全・快適街づくり 20 周年おめでとうございます。
成戸理事長からこの特集号への投稿のお話があった時、家庭の状況のためとはいえ 10 年以上 NPO 活動不参加の私が、との思いが巡りました。が、20 年前、まだ私が都庁職員時代、故石川理事長からこの NPO へのお誘いを受けたときの驚きを中心にと思い至り投稿しました。

20 年前の驚き

20 年前、私が都庁職員時代、故石川さんからこの NPO のお誘いを受けたときの驚きは、「ア！安全・快適街づくり」という名称と「あ！」でなくなぜ「ア！」なのかの二点でした。そこで、私は故石川理事長にこの二点を質問しました。答えは「NPO に興味のある人が NPO の名簿を調べたら、最初にア！あ、とア行が続く、ア！安全・快適街づくりが目に入るだろう。そして見てもらえるだろう」、また「あ！、よりはア！のほうが印象が強いだろう」という意味のお答えでした。名称一つとっても、人々にどのように印象出来るか、目に留まるようにするのか、答えを求めている故石川さんに驚かせました。

同時に、当時、東京都建設局の目玉事業の一つであった「すいすいプラン」事業は、石川さんが名付け親であったことを思い出しました。東京の渋滞解消に少ない事業費で効果は大きい、地味で東京都の目玉事業となりにくい交差点改良事業を「すいすいプラン事業」と命名したことにより、目玉事業として推進でき、大きな効果を上げていたことを思い出しました。

20 年後の今驚いていること

故石川理事長の先を見る力、目の付け所の良さに驚いています。
20 年前、23 区内ゼロメートル地域における水害対策の啓蒙、高規格堤防整備と沿川街づくりの合体による沿川高台化の必要性を石川さんから教わりました。その当時はそうなんだろうなあ程度の意識でした。その後、2011 年東日本大地震での東京湾における想定以上の高潮、ここ数年の線状降水帯による水害・内水氾濫等を目にすると、当時石川理事長はこのような状況を想定していたのでは、と驚いています。

街づくりは地元の方々と長期間お付き合いできるかどうかです。NPO も同様と考えます。20 年に渡り、活動内容の範囲を広げながらの活動、会員の方々のご努力に弥栄をおくります。

徳倉会長さんと石川さんの思いを受けて

土屋 信行
リバーフロント研究所 審議役

大成化工会長の徳倉俊一さんと初めてお会いした時、徳倉さんは着流しで颯爽と現れた。私が東京都から江戸川区へ出向してまもなくだった。その時石川金治前東京都建設局長もご一緒だった。区役所の執務室に和服でおいでになるとさすがに目立つ存在だったが そんなことはお構いなく話を始めた。お話は私が課長時代に担当した江戸川区平井 7 丁目のスーパー堤防を葛飾区のエリアでも実現したいので協力してほしいということであった。

大成化工の社屋の屋上に上がると中川の水面が高く迫って見え、それに比べて堤防の東の広がるエリアは、水害になるとほとんどの家が完全に水没する恐怖に私は迫られた。徳倉会長は社屋の 3 階にこの地域の水害の危険性を示す様々な図面や資料を大きなパネルにして説明する常設の啓発センターを作られた。その資料は大変わかりやすく国、東京都、葛飾区、江戸川区の職員たちは機会あるごとにそこで、葛飾区の住民が安心して暮らすには何としてもスーパー堤防が必要だと言う徳倉会長の熱い思いを伺った。

また徳倉会長は自ら避難用のゴムボートを購入し、それを近隣の町会に贈り災害時の備えの防災訓練を呼びかけた。今ではボートが増えて大々的なボートによる避難訓練が実施され、テレビニュースなどで盛んに取り上げられているが、そのきっかけを作ったのが徳倉会長だった。

ある時徳倉会長に新小岩公園に呼び出され、公園を全面的に高台にする計画を伺った。江戸川区の区域ではないのでとお断りしたところ、すかさずこの公園の災害時避難者数は葛飾区民よりも江戸川区民の方が多い、だから、これは江戸川区の責任だと叱られた。調べてみると公園は両区の避難場所となっており、確かに江戸川区民の方が多かった。自分の認識の足りないことに恥じ入るばかりであった。その後徳倉会長の段取りで葛飾区の杉本部長と会うこととなった。まさに両区の仲人役として、動いて下さったのだ。

徳倉さんと石川さんお二人の活動が今では「災害に強い首都「東京」形成ビジョン」として大きな実を結んでいる。高規格堤防に留まらず地域全体を高く盛土する「高台まちづくり」計画として東京都・国交省の計画となり、更には全国的な展開を目指すまでになっている。お二人の目指した「安全・快適街づくり」の草の根活動が大きな国家的プロジェクトになったのだ。徳倉会長がいつも座右の銘としておっしゃっていたのが「我が田に水をひかず」という言葉であった。私もこのお二人の目指した地域の安全を実現したいという、その思いを受け継いでいかなければならないといまさらながら心に刻んでいる。

NPO 設立 20 周年、「輪中会議」10 周年を迎えまして

方 明哲
大成ホールディングス株式会社

「NPO ア！安全快適街づくり」設立 20 周年、「輪中会議」開始 10 周年の節目を迎えられましたこと、誠にありがとうございます。

2002 年、秋を彩る実りゆたかな季節と共に設立され、今日に至るまで、当 NPO の地域への貢献は計り知れない確固たるものと存じます。

水害からゼロメートル市街地を守るための定期的なスーパー堤防勉強会、河川堤防近隣冷気測定実施と検証イベント、地域住民や学生、専門家との交流ワークショップ、更に、災害から守る街づくりから災害リスクを逆手にした「防災“も”まちづくり」を掲げてご活躍され続けている当 NPO の今の姿に、深い感銘を受けております。みなさんの情熱と本気度は長い年月が経った今でも衰えていません。

一方、当 NPO の設立時から微力ながら諸掲示物の制作など、地域の一人としてお手伝いできたことを誇りに思っております。

当初、様々なデジタル制作を想定したコンピューター等設備の選定、導入から始まりましたが、制作過程においては資料集めにみなさんのご協力なしでは恐らく途中で挫折したかと思います。様々なルートよりみなさんに苦勞をかけて集めた資料があったからこそ、掲示用大型パネルやビデオ製作、提供ができたと思います。その節のいろいろなエピソードを思い出しますと、みなさんには大変ありがたく、懐かしい思いでいっぱいです。

近年は、気候の急激な変動に加えて蔓延を繰り返す新型コロナ禍により、環境的に困難を極める逆境が続いておりますが、当 NPO はどんな困難があっても必ず乗り越え、さらなるご発展とご活躍を続けるものと信じており、心から祈っております。



“私”の好きな東京一番の街に —これからの 20 年を見据えた変化と継承へ—

南 貴久
東京大学生産技術研究所 加藤孝明研究室

1. 私と NPO ア！との出会い

私が NPO ア！安全・快適街づくりの活動に参加させていただくようになって、早 8 年となった。大学 4 年時の 2014 年に加藤研究室の所属となり、加藤先生や研究室の先輩方に誘われ、第 7 回輪中会議に初めて参加させていただいた日のことが昨日のことにように思い出される。輪中会議では、先輩方とともに渡邊さんの近くに座らせていただき、さまざまな立場の方がフラットな関係性のもとで活発に議論を交わす様子を聞きながら、少しでも学びを得ようとメモをとっていたことを思い出す。

その後塩崎さんに誘われ、小学校の出前授業や中学生の地域防災ボランティア部支援、町会の避難所運営訓練などの催しにも参加させていただくようになり、輪中会議で耳にしていた地域の諸活動に自らも関わっていくことになった。小中学生からは、柔軟な発想による避難や河川空間の活用等のアイデアに驚かされ、刺激を受ける日々である。新小岩の街の方々は、みな気さくに接してくださり、よそ者扱いせずに自然と“輪”の中に迎え入れてくださった。その点がまさに、この地域の活動が人を惹きつける所以なのではないかと思う。また、ボート乗船体験や現場見学会など、皆が活動を楽しみながら参加していることも、継続の秘訣であることは疑いない。

石川前理事長とは、輪中会議や加藤研究室での打ち合わせで何度かお話をさせていただいたが、ニコットとした表情で穏やかに語りかける姿が非常に印象に残っている。他の方々の寄稿を拝読するに、NPO の創設期に多くの人々が集って発展を遂げた裏には、こうした石川さんの人心をつかむ温厚な人となりと、この地域を良い街にしたいという強い信念があったのだと改めて実感し、我々の世代がその思いを引き継いでいかなければならないという思いを強くした。



2. “あなた”を主語に考える、これからの葛飾のまちづくり

今号の青柳さん（東新小岩五丁目町会長）の寄稿に、石川前理事長の「あなたが一番すきな街になるためには」という言葉が引用されていた。この言葉を読んで、私が学部生時代の演習の授業でグループ討議をしたことを思い出した。都市計画は従来、社会の最大公約数的な幸福を実現すべく行われるものであるが、そもそも幸福の評価軸は一人一人異なるのだから、これからの時代は都市の中で一人一人が“お気に入りの空間”を見出せるようなまちづくりを目指していくべきであり、それゆえに多様性・多面性が重要なのだという議論である。

すきな街、理想の街の将来像も確かに一人一人異なる。真に皆が“すきな街”といえるためには、“価値観押しつけ型”の街づくりではいけない。その意味で“あなた”を主語に置いた石川さんの言葉から学ぶところは大きい。青柳さんは石川さんの言葉を受けて、「いろいろな異見が出る中から、この地域に合った事柄を選んで行く事が、この街が住良く、安全、安心なまちになると思う。」と述べられているが、私も本当にその通りだと思う。

そういう意味では、葛飾はそもそも非常に多様性に富んだ文化や空間を持っている。両さんやキャプテン翼、モンチッチなどの多様なキャラクター、下町情緒のある街並み、河川を軸にした豊かなオープンスペース、再開発の進む駅前——。“異見”はあれど、“なんとなく”いろいろな面白さの混在した街になっている。はじめてやってきた人も、創造的・実験的に楽しさを見出せる素地がある。ここに水辺空間の活用がさらに進めば、さらに多くの人の“すきな街”になっていくことだろう。この街の未来が非常に楽しみでわくわくする。私もそんな未来の実現にわずかでも貢献できればとの思いで、これからも活動を継続していきたい。



3. NPO のこれから：変化しながら受け継ぐということ

素晴らしい経験と知見と行動力を持たれた先輩方に支えられ、「高度成長」を遂げてきた NPO ア！であるが、20 年の節目を迎えるとともに最前線で活躍されてきた方々の多くが高齢となり、今後の「安定成長」に向けて NPO の理念や事業の継続・継承が課題となってきている。

今回本誌の編集に携わって、改めて先輩方の作り上げてきた「新小岩をさらに素晴らしい街にするための協働」という土台を継承する責務を、我々の世代が担っていかなければならないと感じた。しかし、継承していくということは、ただ単に同じことを続けていくということではない。

NPO ア！が始動した 2002 年、私は小学 4 年生であった。20 年を振り返れば、私の背丈や体型だけでなく、世の中の様々な物事が変化してきた。マクロなところ言えば、世界の人口は 63 億人から 80 億人まで増加したが、日本の人口は 2008 年をピークに減少に転じ、高齢化率は約 10%増加した。一方、訪日外国人数はコロナ前の 2019 年には 2003 年の 6 倍以上となった。

2011 年に東日本大震災を経験し、防災に対する人々の意識も変化した。葛飾では、2019 年の令和元年東日本台風（台風 19 号）の経験により水害への意識も高まった。気候変動の問題は遠い将来の話ではなく、すでに影響を与え始めていることを我々は実感してきている。さらに 2020 年からはコロナ禍を経験し、これまで当たり前であった生活スタイルを大きく見直す機会をも得た。ICT の発展の助けもあり、NPO の事務局会議や輪中会議にもオンライン会議が導入された。

このように、普段は少しずつの変化のため実感しにくい、20 年というスパンで改めて振り返ってみることで、我々を取り巻く社会・自然環境は大きく変化していることが分かる。これまでの“当たり前”をそのまま続けていくだけでは、いつの間にか時代に取り残されてしまい、目の前の課題に対処できなくなっている可能性がある。先人たちの素晴らしい知恵と経験を受け継ぎながらも、時には川の流れのように変幻自在に活動していくことが必要ではないか。

加藤先生は地域防災のキーワードの 1 つとして「悠々として急ぐ」という言葉を使われているが、これは古くはローマ皇帝アウグストゥスの言葉であり、開高健も座右の銘としたそうである。切迫した課題が山積した時代であるからこそ、視野を大きく持ってしっかりと考えながら、大きく前へ進んでいかなければならない。常に変化していくこともまた、先人から受け継がれた知恵である。

4. むすびに

これからの 10 年・20 年、どんな世の中に変わっていくのか、未知の部分も大きい。しかし、分からないからこそ面白いこともあるし、分からないなりに未来を見据えた街づくりを考えることもまた重要だ。我々も石川さんをはじめ先輩方が持っていたような先見の明は“変わらず”に持ち、時代を先取りし我々自身も変化しながら「安全・快適な東京一番の街」を目指して、NPO ア！の理念と活動を継承していければと思う。

設立 2002 年から 2022 年まで 20 年間の活動足跡

NPO ア！安全・快適街づくり（記録/作成：増澤・渡邊・南）

○ 設立の発端

2001 年（平成 13 年）11 月、愛知県で高校時代同級生だった故石川理事長と故徳倉副理事長が、マイナスイメージの強い東京東部の低地帯を水と緑と安らぎのある東京一番の地域に出来るのではないかという思いから始まった。

二人は、高校卒業後はそれぞれ官と民の道に進み、石川理事長は東京都の河川行政を、徳倉副理事長は西新小岩で会社経営を担い、手腕を発揮し年月が経過した。

この間、東京東部を水害から守るスーパー堤防を提唱し推進していた者と、方や西新小岩を緑豊かでより安全な街にしたいと願っていた者とが或る時再会し、両者の思いが一致した 2001 年（平成 13 年）11 月、本 NPO 立ち上げを決め、翌年の 1 月 23 日法人設立準備委員会が発足した。

○ NPO の発足

2002 年（平成 14 年）5 月 10 日、設立準備委員会は都庁関係の経験者を中心に組織され、周到且つ活発な議論の末、大成化工（株）で設立総会が開催された。

当日の出席者は地元の方々はじめ多方面から総勢 44 名が出席し、設立趣旨や定款・事業計画及び予算収支等が審議され、役員及び設立代表者の選任が行われ、ここに「ア！安全・快適街づくり」が発足した。

2002 年	
○ 当初の活動	
5 月 13 日	東京都生活文化局に特定非営利活動法人の設立認証を申請し、6 月 11 日付で東京都広報に公告され、8 月 30 日付で認証書の交付を受け、9 月 13 日設立登記を完了後、9 月 20 日都生活文化局に報告。
6 月 6 日	第 1 回事務局会議を大成化工（株）会議室で開催し、各種街づくり勉強会の立上げや、NPO 法人の認証申請後の活動等を打ち合わせた。事務局会議は、以後月 1 回（8 月の旧盆月を除く。）の開催を現在まで 237 回続けている。
6 月 12 日	理事長と副理事長が早稲田大学の佐藤滋先生と面会。
6 月 13 日	理事長と副理事長が東京大学の方大・小泉両先生と面会。
○ 各種勉強会始まる	
6 月 25 日	川づくり勉強会が「平井 7 丁目地区スーパー堤防工事現場」を見学。参加者 32 名。
7 月 3 日	都庁で「スーパー堤防とまちづくり勉強会（仮称）」を成戸理事が座長の下、立上げ第 1 回会議を都庁特別会議室で開催する。都庁と葛飾区の都市計画及び建設部局関係職員並びに NPO 会員から構成。以降 2004 年 5 月 20 日まで計 11 回開催。
8 月 30 日	東京都知事石原慎太郎より石川金治宛 NPO の認証書交付。
○ 機関誌発行始まる	
10 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 1 号を発行。
10 月 9 日	川づくり勉強会が主宰し、東京大学の方大・小泉両先生と学生ら 26 名が、荒川下流河川事務所の「あらかわ号」に乗船し、荒川・隅田川スーパー堤防の各地区を船上から視察。

○ 行政機関等への各種活動始まる	
10 月 10 日	理事長と副理事長が青木葛飾区長と多田江戸川区長に「Bank Town 建設に関する要望書」を提出。 要望要旨：国や都が民間活力を引き出す「都市再生や東京再生」を荒川以東にも適用し、スーパー堤防と街づくりが同時に出来る仕組みを考えて頂きたい。
○ 各種イベント参加始まる	
10 月 12 日	「全国川サミット in 江戸川」が船堀の江戸川総合区民ホールで開催されるに合わせ、同 2F バンケットホールでパネル展示とビデオ映写を行う。
11 月 1 日	東京都庁・都民ホールで開催された、東京都建設局河川部主催の「21 世紀の東京の河川、NPO との連携のあり方を考える」に理事長がパネリストとして参加し、事務局員が意見発表を行う。
11 月 19 日	理事長と副理事長が日本大学の岸井先生に「Bank Town 建設と東京臨海部の開発整備について」支援を要請する。
11 月 21 日	理事長と副理事長が青山東京都副知事に「Bank Town 整備等に関する支援」を要請する。
12 月 9 日	これまで（10 月 10 日から 11 月 21 日）の要請行動と 4 回に亘る『スーパー堤防と街づくり勉強会』の議論から、荒川下流河川事務所に、スーパー堤防とまちづくりモデル調査を委員会方式（国、都、区、NPO 等）で行うよう申し入れ理解を得る。
12 月 20 日	江戸川区総合文化センターで「街づくりと公務員の役割」と題する講演を理事長が行う。参加者：150 名
2003 年（平成 15）	
2 月 7 日	（財）リバーフロント整備センター会議室で、「高規格堤防とあわせた木造密集市街地整備手法のモデル検討（西新小岩地区）」研究会発足、座長に（財）リバーフロント整備センター研究第二部長を選任する。 以降 2007 年 2 月まで検討が行われる。
2 月 12 日	第 1 回ホームページ部会を第五建設事務所にて立ち上げる。 参加者：部員 5 名
3 月	スーパー堤防と街づくり勉強会コア会議（第 1 回）開かれる。 東京都 3 名、NPO 4 名（理事長、成戸座長、前田、中田） 以降 2007 年 3 月まで計 4 回開催。
4 月 17 日	川づくり勉強会が第 2 回現場見学会：市川市の「江戸川高規格堤防と一体の街づくり『パークシティ市川』」を主宰する。参加者：41 名
5 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 2 号を発行。
○ ホームページ開設される	
5 月 1 日	3 回にわたる準備会の末、ホームページ開設。
5 月 13 日	第 2 回総会
8 月 5 日	川づくり勉強会が西新小岩 3 丁目町会員対象の「船から街を見る会」を主宰する。参加者：25 名
8 月 22 日	理事長が国土交通省河川局 清治真人局長と懇談。
9 月 22 日	理事長がリバーフロント整備センター主宰の「河畔再生研究会」で講演。
10 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 3 号を発行。
10 月 3 日	川づくり勉強会が、日本女子大学生・建築防災センター・コレクティブハウジング社員対象の船上見学会を開催する。参加者：25 名
10 月 16 日	川づくり勉強会が「江戸川高規格堤防と一体の街づくり『市川市妙典地区』現場見学会」を主宰する。参加者：30 名
○ NPO が主催するシンポジウムが始まる	
11 月 5 日	テクノプラザかつしかで「荒川・中川等の沿川を東京一番の街に ～川と街づくりのシンポジウム～」を開催。

	基調講演：青山東京都前副知事 パネラー：成戸理事ほか 参加者：約 250 名
11 月 19 日	理事長が荒川下流河川事務所長に、「平成 16 年度全国都市再生モデル調査」に「スーパー堤防とまちづくり事業」を応募するに際し、協力を依頼。
11 月 25 日	副理事長が葛飾区長に、「平成 16 年度全国都市再生モデル調査」に「スーパー堤防とまちづくり事業」を応募するに際し、協力を依頼。
2004 年（平成 16）	
2 月 25 日	環境共生型コーポラティブエコロジー住宅「経堂の杜」見学。参加者：6 名
○ 東京大学加藤先生が当 NPO に入会	
3 月 1 日	東京大学加藤先生が開発した「火災の延焼シミュレーション」について当事務局員がヒアリングを行い、当会への入会を勧め、会員となる。
3 月 23 日	川づくり勉強会が『『荒川高規格堤防整備事業』と『住宅市街地整備総合支援事業』の一体の街づくり『足立区新田地区』現場見学会』を行う。 参加者：21 名
4 月 15 日	川づくり勉強会が、明治大学生の「あらかわ号」による『荒川・隅田川船上街づくり見学会』を行う。参加者：25 名
5 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 4 号を発行。
5 月 13 日	第 3 回総会
○ 国・東京都・葛飾区・各財団が募集する各種助成事業に応募、採択されるようになる。	
6 月 30 日	内閣官房都市再生本部事務局より、当会が提案した「浸水シミュレーションによる防災まちづくり調査」(1)水害・地震水害対策支援システムの検討、(2)水位表示版の設置、(3)河川冷気と暖気の市街地への影響調査、が「全国都市再生モデル事業」に選定された旨の通知。全国応募件数 566 件中 162 件（東京都 14 件）が採択される。
7 月 15 日	NPO 法人都市環境研究会主催によるシンポジウム「水辺からの都市再生」が銀座ブロッサム大ホールで開催され、基調講演「東京の川～水辺再生に向けて～」を理事長が行う。
7 月 22 日	大成化工（株）大ホールにて文化財指定庭園保護協議会 会長 樋渡達也さんによる「ヒートアイランド原論」講演会開催。参加者：11 名
7 月 23 日	理事長が関東地方整備局長に「全国都市再生モデル事業」に選定された旨の報告。
8 月 19 日	川づくり勉強会が、「あらかわ号」による麻布大学生の「スーパー堤防船上見学会」を行う。参加者：15 名
8 月 20 日	西新小岩三丁目町会役員を中心とする「川と街中の気温測定会」を行う。
9 月 3 日	川づくり勉強会が「多摩川左岸下丸子地区スーパー堤防と街づくり現場見学会」を行う。参加者：25 名
10 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 5 号を発行。
10 月 13 日	第 1 回「地震時水害浸水シミュレーション勉強会」を都庁第 2 本庁舎 22F OA 会議室にて開催。 出席者：加藤先生、荒川下流河川事務所、東京都河川部、葛飾区、（株）グローシスジャパン、NPO 計 18 名
10 月 22 日	『NPO アワード 2004 ～公益循環型社会の構築へ～』に参加（103 の NPO 団体が申請し、30 団体選定）。 東京海上日動火災保険（株）本社でパネルを展示。
11 月 4 日	第 2 回「地震時水害浸水シミュレーション勉強会」を都庁第 2 本庁舎 22F OA 会議室にて開催。 出席者：加藤先生、荒川下流河川事務所、東京都河川部、葛飾区、（株）グローシスジャパン、NPO 計 16 名

11 月 12 日	川づくり勉強会が「多摩川右岸稲城地区スーパー堤防と街づくり現場見学会」を開催。参加者：15 名
11 月 17 日	全国都市再生モデル調査「浸水シミュレーションによる防災まちづくり調査」に関する覚書を葛飾区長と締結。
12 月 6 日	全国都市再生モデル調査「浸水シミュレーションによる防災まちづくり調査」について関東地方整備局長と葛飾区長とで「受委託契約」。
12 月 15 日	第 3 回「地震時水害浸水シミュレーション勉強会」を都庁第 2 本庁舎 22F OA 会議室にて開催。 出席者：15 名（加藤先生、荒川下流河川事務所、東京都河川部、葛飾区、（株）グローシスジャパン、NPO）
12 月 24 日	[水位表示板と気温測定] を西新小岩 3 丁目町会役員へ説明。 場所：上平井集会所、出席者：15 名
2005 年（平成 17）	
1 月 22 日	気温測定事前講習会 場所：上平井集会所、参加者：25 名
1 月 29 日	中川沿川（上平井水門～総武線計 41 地点）で、気温測定を午前 10:00～午後 4:00 まで行う。参加者：松上小学生と西新小岩 3 丁目町会員 31 名。
2 月 2 日	第 4 回「地震時水害浸水シミュレーション勉強会」開催 場所：都庁第 2 本庁舎 22F OA 会議室 出席者：13 名（加藤先生、荒川下流河川事務所、東京都河川部、葛飾区、（株）グローシスジャパン、NPO）
2 月 4 日	全国都市再生モデル調査「浸水シミュレーションによる防災まちづくり調査」を葛飾区へ補助金交付申請。
2 月 25 日	同上調査を葛飾区より「補助金交付決定通知書」受領
3 月 3 日	松上小学校 4 年生が校外学習会で、中川付近の気温測定を実施する。
3 月 7 日	第 5 回「地震時水害浸水シミュレーション勉強会」開催。 場所：都庁第 2 本庁舎 22F OA 会議室。 出席者：12 名（加藤先生、荒川下流河川事務所、東京都河川部、葛飾区、（株）グローシスジャパン、NPO）
3 月 24 日	第 6 回「地震時水害浸水シミュレーション勉強会」開催。 場所：都庁第 2 本庁舎 22F OA 会議室 出席者：14 名（加藤先生、荒川下流河川事務所、東京都河川部、葛飾区、（株）グローシスジャパン、NPO） 内容：水害・地震水害対策支援システムの検討報告書をまとめる。
4 月 18 日	理事長が清治国土交通省河川局長を訪ね、「全国都市再生モデル調査『浸水シミュレーションによる防災まちづくり調査』等を終了した旨報告した。
4 月 22 日	川づくり勉強会が、新東京丸で「東京湾ぐるっと一巡り」を主宰し、松島東町会員等 53 名参加
5 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 6 号を発行。
5 月 12 日	スーパー堤防と街づくり勉強会打合せ 場所：東京メトロ（株）応接室 出席者：3 名（座長、理事長、NPO 事務局員） 内容：スーパー堤防と街づくり勉強会を過去 2 年間、計 10 回開催して明らかになった問題点と平成 17 年度議論する事項。
5 月 16 日	第 4 回総会
7 月 25 日	理事長が岩井国土交通副大臣に『浸水シミュレーションによる防災まちづくり調査』等を説明。
10 月 1 日	荒川ロックゲート完成記念式典に、パネル展示を行う。 シンポジウム：防災とレクリエーション パネリスト：理事長
10 月 6 日	東京高潮連盟主催の「講習会」開催 講演：理事長と加藤先生 場所：東京文化会館 4F 大会議室

	参加者：28 名（13 区職員）
11 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 7 号を発行。
11 月 7 日	理事長、副理事長が多田江戸川区長（三大湾のゼロメートル地帯の高潮対策有識者検討会委員）を訪問。
11 月 18 日	シンポジウム「葛飾江戸川区民を大水害から守る～中川沿川の安全を考える～」を、地元の「中川堤防の安全を守る会」、「新小岩北地区連合町会」、「新小岩地区連合自治町会」の共催で開催する。 場所：江戸川区総合文化センター小ホール 参加者数：約 350 名 基調講演：岡村次郎荒川下流河川事務所長 パネラー：加藤孝明東京大学大学院、青木葛飾区長、多田江戸川区長、小池平井七丁目北部土地区画整理事業審議会委員、新谷景一東京都河川部副参事 コーディネーター：石川金治 アンケート回収数：120 枚
12 月 20 日	第 1 回「江戸川区スーパー堤防整備基本計画」策定委員会に理事長がオブザーバーでスーパー堤防の必要性を説明。
2006 年（平成 18）	
2 月 13 日	第 2 回「江戸川区スーパー堤防整備基本計画」策定委員会に理事長がスーパー堤防と街づくりについて説明。
2 月 16 日	講演「建設資源広域利用センターの事業を、建設資源広域利用センター奥秋事業課長が講演。 場所：大成化工（株）厚生棟、参加者：11 名
3 月 14 日	第 3 回「江戸川区スーパー堤防整備基本計画」策定委員会に理事長がオブザーバーとして参加。
3 月 22 日	江戸川「あなたの手のひら」コンサートを高田事務局員プロモートで開催し、当 NPO が協賛。 会場：タワーホール船堀・大ホール 出演者：朗読・歌手・ピアノ演奏者他 参加者：約 700 名
4 月 13 日	川づくり研究会が「春うららの隅田川河畔へのお誘い」を主宰し、水天宮駅～箱崎地区熱供給センター～隅田川スーパー堤防～リバーシティー21～月島駅を散策。参加者：39 名
5 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 8 号を発行。
5 月 16 日	第 5 回総会に 58 名の参加者。
5 月 30 日	河川環境管理財団から、理事長と会員東京大学加藤先生の共同研究「水害・地震水害対策支援システム」が助成を受ける。
6 月	理事長と会員東京大学加藤先生の共同研究が、河川環境管理財団の助成を契機に、学識経験者と NPO で構成する研究グループを結成。（広域市街地研究会の母体）
6 月 28 日	河川環境管理財団小林専務理事に、理事長が「水害・地震水害対策支援システム」を紹介する。
7 月 19 日	団体会員東京ガス（株）小林副社長に理事長が会の活動を説明し、一層の協力を要請。
8 月 10 日	上平井集会所で、西新小岩住民を対象に、「地震で堤防が壊れた時、あなたならどうしますか。」の地元説明会を開催し、地域住民 43 名が参加。この様子を NHK がテレビ取材する。
9 月 5 日	まちづくりフロンティア 2006 講座「首都直下地震への備え～より早くよりよい復興を目指して～」 講演：加藤先生「被害想定から考える対策」 松川理事「地震発生・・・その後」

	場所：東京都防災・建築まちづくりセンター大会議室
9 月 8 日	石原東京都知事が記者会見で、「NHK の 9 月 1 日『ゼロメートル地帯の堤防等の震災対策特集番組』を観て、大地震と高潮がぶつかった時、河川の護岸に未だ不備があるという指摘にこれを見て、自分だけでなく多くの都民が不安を感じたと思い実情を調べた。結果、高潮と大地震が重なるという確率が非常に低い場合でも外郭堤防はほぼ完成しており、内側の堤防や水門の震災対策も更に万全を期すため今後速やかに完了するよう取り組む旨、述べる。
9 月 28 日	川づくり勉強会が、「白鬚西地区防災拠点見学会」を開催 場所：荒川区南千住 8 丁目 市街地再開発事業（第二種事業） 参加者：25 名（新小岩北地区、江戸川区松島西町会員、NPO） 内容：昭和 44 年 11 月江東再開発基本構想 昭和 58 年 3 月都市計画決定 防災拠点 57.9ha 住宅 4500 戸 公園 12.0ha
10 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 9 号を発行。
10 月 25 日	東京都議会各会計決算特別委員会第 3 分科会、樺山委員質問 「河川専門の元東京都技監で NPO 理事長の地域活動（大地震と集中豪雨が相次いで襲って来る事象）について」高橋河川部長との質疑応答がある。
11 月 8 日	石川理事長宛「東部低地帯の治水対策について」河川部大坪計画課長名の下記要望文書が低地担当副参事より当 NPO 事務局員が手渡される（11 月 16 日）。 東部低地帯で、当 NPO の活動から高潮災害や地震水害に不安と混乱を生じさせないようにされたい。確率的に、大水害と大地震が同時に発生する極めてまれなケースを喧伝しないで欲しい。地域住民に不安をかきたて、不安を生じさせないで貰いたい。
11 月 14 日	清治河川環境管理財団顧問を理事長が訪ね理事長と会員東京大学加藤先生の共同研究「水害・地震水害対策支援システム」を説明。
11 月	会員東京大学加藤先生が、地域安全学会の論文賞を受賞
11 月 27 日	理事長が国土交通省門松河川局長を訪ね、加藤先生との共同研究「水害・地震水害対策支援システム」を説明。
○ ワークショップ始まる	
12 月 16 日	内閣官房都市再生本部と河川環境管理財団の助成を得た、理事長と東京大学加藤先生の共同研究「水害・地震水害対策支援システム」で、第 1 回ワークショップ「水害の危険性を自分の問題として理解する。」を開催。 場所：大成化工（株）厚生棟 参加者：56 名（各町会員 43 名、専門家 7 名、補助者 6 名）
12 月 21 日	リバーフロント整備センターが「木造密集市街地整備手法モデル検討」結果を荒川下流河川事務所へ提出。
2007 年（平成 19）	
1 月 21 日	第 2 回ワークショップ「地域の防災体制を確認し、自助、共助の考えるべきことを明確にする。」 場所：大成化工（株）厚生棟 参加者：48 名（町会員参加者 39 名、専門家 4 名、補助者 5 名）
2 月 23 日	徳倉副理事長が「東京都地域防災計画（素案）」に対する『緊急提案』（「荒川以東の東部低地帯に居住する 120 万都民」に『水害時のいのちの保全』を!!、東京都総務局総合防災部防災管理課を通じ、石原慎太郎東京都知事に、例えば「水没しない高台（新小岩公園）の確保やスーパー堤防の建設等」の緊急提案を行う。
2 月 26 日	伊東事務局員が利根川水系河川整備計画策定の公聴会に公述人として公述。

2 月 26 日	「木造密集市街地整備手法モデル検討」第 4 回コア会議で検討まとめを、荒川下流河川事務所とリバーフロント整備センター、東京都、葛飾区の関係職員及び NPO により行う。
4 月 21 日	第 3 回ワークショップ「『自助・共助』の備え方を考える。」 場所：大成化工（株）厚生棟 参加者：57 名（町会員 34 名、行政関係 6 名、専門家 9 名、補助者 8 名）
5 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 10 号を発行。
5 月 15 日	第 6 回総会開催 於：大成化工（株）会議室 58 名出席
5 月 18 日	OECD 国際未来プロジェクトチームが洪水・地震等に関し、加盟国の危機管理施策を評価し、警鐘を鳴らし、関連施策促進等を促すことを目的として、大成化工（株）を調査し、副理事長にインタビューする。
6 月	土木計画学発表会「広域ゼロメートル地域における住民の水害リスク認知の適正化と対策検討ワークショップの取り組みー西新小岩地区での試みー」に加藤先生、理事長、市子先生が参加。
6 月 25 日	内閣官房都市再生本部が募集していた平成 19 年度全国都市再生モデル調査 489 件の中から 157 件を選定し、当 NPO が応募した「街づくりの担い手育成を含め、多様な主体が参画する安全・快適なまちづくりの推進」が選定された。
10 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 11 号を発行。
10 月 24 日	水防避難訓練「ボート乗船下船」の事前訓練 場所：葛西臨海公園「西なぎさ」、参加者：運営スタッフ 37 名 内容：当日の会場配置、スタッフの役割、進行体制、ボート取扱い、操船、安全管理体制、天候状況等の確認。
10 月 27 日	「第 16 回全国川サミット in 荒川」パネル展示とビデオ放映 場所：江戸川区総合文化センター
11 月 4 日	河川環境管理財団の助成と、内閣官房都市再生本部の全国都市再生モデル調査の助成を受け、水防避難訓練「ボート乗船下船・親水体験イベント」を開催。 場所：葛西臨海公園「西なぎさ」で開催した。 参加者：102 名（新小岩北地区連合町会 54 名、スタッフ 48 名）
11 月 15 日	NPO 事務局会議で、10 月 20 日、28 日に西新小岩三丁目 1～4 番地の土地所有者を対象に、スーパー堤防化について意向を打診した旨、副理事長が報告。
○ 広域ゼロメートル市街地研究会発足	
11 月 19 日	広域ゼロメートル市街地研究会（西新小岩地区）発足（第 1 回） 設立目的：ゼロメートル市街地整備手法として、高規格堤防と市街地再開発事業との一体的整備に関するモデル検討（リバーフロント整備センター研究報告No.18）
12 月 15 日	第 4 回ワークショップ「短期的対策を具体化し、実現に向けた対応を考える。」 場所：大成化工（株）厚生棟 参加者：新小岩北地区町会員
12 月 22 日	先進地域（NPO 向島学会）との交流・視察（墨田区向島地区） 場所：東武東向島駅→梅若地域→墨堤通り→ハトのまち→一寺言問のまち
2008 年（平成 20）	
1 月 23 日	第 2 回広域ゼロメートル市街地研究会 場所：市政会館
2 月 23 日	第 5 回ワークショップ開催 場所：大成化工（株）厚生棟 テーマ：「長期的対策の目標設定とアイデアだし」 概要：10 年程度先を見越して、安全な地域の姿を考え、具体化し実現に

	向けた対応を考える。
3 月 11 日	第 3 回広域ゼロメートル市街地研究会開催。 場所：市政会館 概要：西新小岩地区をモデルとした、安全・安心な市街地形成のための市街地整備の方向性を議論する。
3 月 15 日	川づくり勉強会が、平成 19 年度内閣官房都市再生本部の全国都市再生モデル事業の一環として、船上座学を行う。 コース：葛西臨海公園→荒川ロックゲート→亀大小のスーパー堤防→中川水門→上平井水門→（船上座学）→葛西臨海公園 参加者：54 名（葛飾・江戸川両区民 28 名、両区公園協会、講師、事務局等 26 名）
5 月 10 日	シンポジウム「大規模水害に地域で備える～「広域ゼロメートル市街地」における地域住民の取り組み～」を新小岩北地区連合町会と広域ゼロメートル市街地研究会及び当 NPO が主催して開催する。 場所：新小岩地区センター 参加者：110 名 概要：内閣官房都市再生本部と河川環境管理財団の助成を得た、理事長と東京大学加藤先生の共同研究「水害・地震水害対策支援システム」構築に向け、2 年間の取組とその成果を共に活動された、新小岩北地区各町会の方々に報告し、話合うシンポジウムである。最後に「大規模水害への備えを通じた街づくりアクション『新小岩宣言』」を唱和し、シンポジウムを締めくくった。
6 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 12 号を発行。
6 月 18 日	第 7 回総会開催 場所：大成化工（株）会議室 出席者：53 名
	◎雑誌「人と国土」9 月号に「NPO ア！安全・快適街づくり 水と緑の東京一番の街をめざして」が掲載される。 記事編集：渡辺理事
○ 葛飾区との協働事業始まる	
9 月 1 日～5 日	葛飾区との協働事業の一環として「災害に備えよう我がまち新小岩！」のパネル展示開催。 場所：新小岩北地区センター「玄関ロビー」 来場者：約 1,100 名
9 月 25 日	東京江戸川ロータリークラブが主催する、「パネルディスカッション『あなたにもできる CO ₂ 削減』」に、事務局員高田信一氏がコーディネーターを務める。
10 月 3 日	セミナー「まちづくりフロンティア 2008ー21 世紀の都市モデルを目指してー」 場所：東京都住宅供給公社本社 3 階 大会議室 主催：財団法人東京都防災・建築まちづくりセンター 講演：中川町会長、加藤先生 テーマ：「広域ゼロメートル市街地における防災まちづくり」
10 月 12 日	東新小岩 7 丁目町会の中川町会長（NPO 事務局員）はじめ役員が、七福寿会（同町会老人会）会員を広域避難場所（市川市国府台方面）へ車 7 台で避難誘導する訓練を行う。 参加者：35 名 避難先：江戸川河川敷菖蒲園駐車場
11 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 13 号を発行。
12 月 6 日	セミナー「水害の制圧から融合の街づくりへー利根川の治水の変遷からー」 場所：新小岩地区センター 講師：大熊孝新潟大学名誉教授 参加者：40 名
12 月 11 日	自治体経営研修「危機管理～震災対策の中でも避難所運営を考えます～」 講義「わが町会の防災対策、災害への備え」

	講師：中川会員 場所：特別区職員研修所 受講者：50 名
12 月 15 日 ～17 日	「海抜ゼロメートル『世界都市サミット』地球環境展」にパネル展示参加。 場所：江戸川区「タワーホール船堀」
2009 年（平成 21）	
1 月 5 日～9 日	葛飾区との協働事業の一環として「災害に備えよう我がまち新小岩！」の パネル展示開催。 場所：葛飾区本庁舎 2 階正面入口ロビー 来場者：約 1,500 名
2 月 7 日	江戸川区松島西町会員のハザードマップ説明会に理事長出席。 場所：江戸川区松島西町会会館 参加者：90 名
2 月 9 日	日本開発構想研究所による第 1 回 GIS（地理情報システム）講習会開催。 場所：新小岩北地区センター会議室 参加者：新小岩北地区町会員 テーマ：水害時の緊急避難 内容：GIS とは？、GIS の利点、GIS の機能・データ
2 月 23 日	日本開発構想研究所による第 2 回 GIS 講習会開催。 場所：新小岩北地区センター会議室 参加者：新小岩北地区町会員 テーマ：水害時の緊急避難 内容：GIS を使って防災地図を開く、見る。
3 月 16 日	日本開発構想研究所による第 3 回 GIS 講習会（ワークショップの開催） 場所：新小岩北地区センター 中会議室 参加者：新小岩北地区町会員 テーマ：水害時の緊急避難 内容：GIS データの構造。
4 月 19 日	日本開発構想研究所による第 4 回 GIS 講習会（ワークショップの開催） 場所：新小岩北地区センター 多目的ホール 参加者：新小岩北地区町会員、ファシリテーター、NPO 58 名 テーマ：GIS を利用した防災地図作成と水害時の避難。 内容：GIS を使って棒グラフの作成、画像を出力する。 主催：東新小岩七丁目町会
5 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 14 号を発行。
5 月 17 日	日本開発構想研究所による第 5 回 GIS 講習会（ワークショップの開催） 場所：新小岩北地区センター 大会議室 参加者：新小岩北地区町会員 38 名、ファシリテーター他 15 名 テーマ：身近なところで今後の進めるべき対策を検討する。
5 月 20 日	第 8 回総会開催 場所：大成化工（株）会議室 出席者：56 名 講話：人間国宝 小宮康孝氏
6 月 28 日	地域の底力再生事業：「災害時の共助強化を通した地域の底力向上」第 1 回 現地地下見 場所：松戸市 21 世紀市民の森 参加者：6 名
7 月 15 日	◎毎日新聞朝刊「くらしナビ・安全・安心」ページに当 NPO と理事長・副 理事長の記事が掲載される。
7 月 21 日	平成 21 年度地域の底力再生事業助成金交付決定。 交付先：新小岩北地区連合町会（福島郷氏）
9 月 21～22 日	全国まちづくり会議 2009In 川崎にパネル展示とトークセッションに参加。 場所：サンピアン川崎 2F 第 2 交流室 参加者：8 名 （中川、赤穂、東原、加藤先生、塩崎、理事長、事務局員 2 名）
10 月 24 日	「地域の底力再生事業」の広域避難場所へ避難訓練実施第 2 回下見

	場所：松戸市 21 世紀市民の森 目的：遠隔地への公共交通機関を利用した避難訓練の下見。 参加者：26 名（新小岩北地区連合町会 22 名、NPO4 名）。 内容：当日の行程を実地確認（駅集合場所、電車停車位置、下車駅、目 的地までの道路と交通量の状況、21 世紀の森中央口確認、催事地の選定、 その他）
11 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 15 号を発行。
11 月 15 日	「地域の底力再生事業」による新小岩北地区連合町会の防災訓練。 目的：遠隔地（21 世紀の森）へ公共交通機関を利用した避難訓練。 内容：JR 新小岩駅→新八柱駅→市道（徒歩）→松戸市千駄堀（21 世紀の 森）→避難体操、アンケート→昼食→解散 参加者：137 名（9 町会員 118 名、NPO・大学 16 名、区役所 3 名）
11 月 29 日	「地域の底力再生事業、炊き出し・防災訓練」を実施。 場所：西新小岩第 3 防災公園 内容:お湯・アルファ米・豚汁・ビスケット・お茶 280 人分 本田消防署（上平井出張所）による初期消火・通報・AED 応急救護、か まどベンチ、仮設トイレ 参加者：263 名
12 月 8 日	ゼロメートル市街地研究会（仮称）の立上げについて打合せ。 場所：葛飾区役所 3F 都市整備部会議室 出席者：まちづくり推進課長、まちづくり計画担当課長、事業調整担当 係長、理事長、理事、事務局員 検討の方向：①地域活動の継続・充実 ②高規格堤防優先整備の位置付け。 打合せ結果：① 来年 1 月中に発足。地域のニーズに合った整備手法を推 進。 メンバー：行政、地域、学経、
2010 年（平成 22）	
2 月	「地域の底力再生事業」の一環として「荒川洪水ハザードマップと水害への 備えに関する意識調査」結果纏まる。 内容：2009 年（平成 21）11 月郵送により、西新小岩三・五丁目、東新小 岩七・八丁目{水深 0.5m～4.0m}の 750 世帯、計 3,000 票のアンケート調査 を行い、631 票の回収を得た。
5 月 20 日	第 10 回総会開催 場所：大成化工（株）会議室 出席者：51 名 講演:高橋友昭氏国土交通省都市・地域安全課企画専門官 演題：震災に強いまちづくり（安全・安心まちづくり）
5 月 21 日	葛飾区西新小岩三丁目周辺地域をモデルにした安全・快適街づくり勉強会 開催 場所：葛飾区役所 7F705 会議室 出席者：18 名（青木区長、理事長、加藤先生、学経 3 名、行政 5 名、町 会 3 名、ゼロメートル市街地協議会 1 名、大成化工（株）、事務局員 2 名） 参考：以降 2012 年（平成 24）2 月 28 日第 5 回まで開かれる。
5 月 26 日	葛飾区西新小岩三丁目周辺地域をモデルにした安全・快適街づくり勉強会 の作業部会開催（第 1 回） 場所：葛飾区役所 7F705 会議室 出席者：31 名（理事長、加藤先生、学経 2 名、行政 15 名、町会 2 名、 ゼロメートル市街地協議会 3 名、事務局員 7 名） 参考：以降 2011 年（平成 23）4 月 28 日第 8 回まで開かれる。
6 月 23 日	国際交流基金が「東アジアの次代を担う若手防災研究者」を NPO を訪問。 人員：26 名（ASEAN10 か国、随行者）

6 月 27 日	水害に備える 安全・快適まちづくりシンポジウム～地域力で親水・耐水まちづくりを～ 場所：新小岩地区センター 基調講演:川を守る・川と生きる・東京低地の履歴書― 講師：橋本直子（葛飾区郷土と天文の博物館） 内容：(1)これまでの取組み 新小岩北地区連合町会：鈴木連合町会長、 東新小岩七丁目町会：中川町会長、 NPO：土肥日本都市計画家協会 研究者：市古首都大学東京 葛飾区：情野まちづくり計画担当課長 (2)討論：次の展開へ「新しい行動計画を考える」 パネリスト：加藤先生、理事長、鈴木連合町会長、中川町会長、 橋本郷土と天文の博物館、情野課長 コーディネーター：土肥日本都市計画家協会 (3)新小岩行動宣言―1…広げる。深める。長期的展望に立つ。 (4)地域主体で進める
7 月 3 日	街なか研究会（日本都市計画家協会）による「スーパー堤防計画地域の現場視察」 行程：大成化工（株）屋上→パネル説明→荒川左岸→平井大橋→ 平井七丁目整備済地域視察→JR 平井駅 人員：9 名
8 月 7 日	松島地域避難方法検討会（第 1 期） 場所：松島東町会会館 参加者：27 名 目的：中川の堤防が大地震や台風の高潮により万一破堤した場合自助・ 共助・公助の在り方とその限界などを具体的に考え話し合い、自 らの命を守るための行動について、『避難行動指針』を作成する。 以降、2011 年 2 月 19 日までに 4 回の話し合いを行い、町会・行政への要 望と避難行動指針をまとめ、同年 3 月 18 日江戸川区議会議長宛「堤防強化 目的税の新設の陳情書」を提出した。
8 月 17 日～ 12 月 15 日	葛飾区協働事業「パネル展示」 場所：葛飾区役所総合庁舎ロビー他 12 地区センターロビー 展示日数：95 日間 内容：NPO が製作した大・中のパネル 20 数枚を展示・説明・冊子「洪 水に備えて」を配布し、アンケートに答えて頂く。アンケート 1,655 通回収。
9 月 15 日	荒川学会が「東京大洪水から 100 年」記念シンポジウムを 3 回にわたり主 催した内の第 3 回目に、理事長がパネリストとして参加。
11 月 1 日	今年度のワークショップ開催に当たり、中学生を対象とすることから NPO とゼロメートル市街地研究会メンバーが、上平井中学校殿村校長先生を訪 問
11 月 16 日	◎都政新聞 理事長投稿「スーパー堤防発想の原点に戻れ」の記事が掲載 される。
12 月 3 日	今年度ワークショップ開催の準備 場所：東京大学加藤研究室 参加者：9 名（葛飾区と NPO 及びゼロメートル市街地研究会員）
2011 年（平成 23）	
1 月 14 日	防犯・防災まちづくりのためのリスクコミュニケーションのあり方等検討 調査でヒヤリングが行われる。 場所：大成化工（株）会議室

	調査元：都市環境研究所 NPO：理事長、副理事長、事務局員 2 名 概要：結成経緯、活動内容、東京大学との連携、広域ゼロメートル市街 地研究会や地元町会、小中学校との関り、行政との関り、今後の 活動等。
1 月 22 日	JENESYS 東アジア大学院生受け入れ。 テーマ：防災と人々の繋がり災害に強い社会の構築を目指して。 場所：大成化工（株）3F 会議室 人員：32 名（各国大学院生 19 名と関係者 13 名） 内容：中川の堤防を歩き、大成化工（株）屋上から中川水面を眺望、そ の後会議室で低地帯の現況とその由来及び水害等の講義を行う。 引き続きグループに分かれ、討議を行う。
1 月 30 日	第 6 回 全国防災まちづくりフォーラムに参加 場所：有明の丘基幹的広域防災拠点施設 会議室 参加者：約 400 名（新小岩北地区町会員と NPO28 名） テーマ：安全・快適街づくり「川の恵みと脅威を考える」を当 NPO と広 域ゼロメートル市街地研究会とで共同発表し、トークセッショ ンの後、提言を行う。
2 月 20 日	ワークショップ① 場所：新小岩北地区センター テーマ：「非常時の具体策を考える・子供たちへの継承を考える」 参加者：53 名（町会会員、NPO、ゼロメートル市街地研究会） 内容：溢水し、取り残された時の状況を把握し、通信・生活インフラが 使えるか否かと、避難のためのパンフレットを評価する。 概要：これまでの活動と湛水時のライフラインの状況を説明し、次に避 難チラシの配布とその評価を行った後、Google Earth の講習誤操作・演習 を行った。
3 月 6 日	ワークショップ② 場所：新小岩北地区センター テーマ：「子供たちと街を考える・世代を超えてリスクマネージメントを共 有する」 参加者：26 名（上平井中学校理科部生徒 11 名、関係者 15 名） 内容：① 町会員が PC を使い、生徒達に水害時の街の様子を説明。 ② 生徒達で水害への備えを検討。 ③ 街歩き 概要：Google Earth の講習誤操作・演習を学んだ後、要援護者についてで きることを考える。
3 月 28 日	第五建設事務所内手押しポンプ保存についての関係者間会議建替えに伴 う、保存方法等を、第五建設事務所、新日本製鉄（株）、丸八ポンプ製作 所、NPO とで話し合う。 場所：現地及び第五建設事務所 2F 会議室 参加者：10 名（第五建設事務所長、同副所長、新日鉄、丸八ポンプ製作所 社員、NPO 事務局員）
4 月 11 日	◎雑誌「日経ビジネス」に特集「東京は都民を守れるか」で、東新小岩七 丁目町会と当 NPO の取組が紹介される。
4 月 28 日	西新小岩三丁目周辺地区における安全・快適街づくり勉強会（第 8 回作業 部会） 場所：葛飾区男女平等推進センター4F 第 1 研修室 内容：平成 22 年度検討事項を整理し、ゼロメートル市街地における 4 項目 を提案する。 浸水対応型建築物整備 / 安全避難高台確保 / 近隣関係継続計画（LCCP） /

	輪中会議の立上げ
5 月 18 日	上平井中学校殿村校長先生とミーティング 場所：上平井中学校校長室 参加者：理事長他事務局員 3 名 内容：理科部の募金活動、浸水危険地域の認識、10 月 29 日の学芸発表会に向けて、総合学習時に外部講師を招く。
6 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 17 号発行。
6 月 19 日	第 10 回総会開催 場所：新小岩地区センター
7 月 3 日	講座「いま考えよう！葛飾の防災 実践編」 テーマ：ひとつ先を行く 防災の市民活動 場所：葛飾区市民活動支援センター 集会室 講師：理事長、中川東新小岩七丁目町会長 参加者：20 名
7 月 4 日	東京都第五建設事務所敷地（東新小岩 1－14－11）に併設されている都営住宅立替えに伴い「地盤沈下の生き証人とも言える古井戸（葛飾区有形文化財指定申請中で復旧が必要となる。）が支障となる。一時移設が必要となり、現場に関係者が集まり現場協議を行う。 参加者：6 名（第五建設事務所長、副所長、新日本製鐵（株）2 名、NPO 事務局員、（株）永山設計事務所）
7 月 5 日	上平井小学校石川校長先生と NPO との打ち合わせ 場所：上平井小学校校長室 内容：① 葛飾教育の日に NPO の特別授業を行うのは可能。 ② 特別授業を NPO は、葛飾区の協働事業とするよう努める。 参加者：理事長他事務局員 5 名
7 月 7 日	市民活動団体（NPO）協働事業提案制度 第 1 次審査 事業名：親から子に語り継ぐ大水害の避難とパネル展示 場所：葛飾区支援センター
○ ゼロメートル市街地協議会結成	
8 月 9 日	東京都「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」に応募。 申請者：NPO、葛飾区、新小岩北地区連合町会、ゼロメートル市街地研究会、日本都市計画家協会を統合した「ゼロメートル市街地協議会」を結成。
9 月 14 日	市民活動団体（NPO）協働事業提案制度 第 2 次審査 選定
9 月 26 日	葛飾区西新小岩ゼロメートル市街地協議会が、東京都知事石原慎太郎より「東京都新しい公共支援事業 新しい公共の場づくりのためのモデル事業」に選定される。 事業名：新小岩北地区輪中まちづくり事業 代表者：石川金治 助成金:3,550,000 円 協議会構成団体：葛飾区新小岩北地区連合町会、葛飾区役所、ゼロメートル市街地研究会、日本都市計画家協会、NPO
10 月 1～2 日	「全国まちづくり会議 in さいたま」が埼玉大学で開催。 加藤。中村両先生が分科会の「首都直下地震に備える～事前復興の取り組み」で、「県土事前復興プログラムの策定について」を報告。ポスターセッションで当事務局員がファシリテーターを務める。
10 月 23 日	「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」の一事業として避難訓練（避難所設営）が行われる。 場所：新小岩学園 対象：運営管理者、町会会員 内容：加藤先生の講話と避難対策のワークショップ

10 月 29 日	上平井中学校校内学芸会 場所：上平井中学校体育館 対象：生徒と保護者及び地域住民 内容：同中学校理科部員の「若し、堤防が切れたらどのくらいの浸水家屋が出るか」を、GPS を使って説明し、街歩きで浸水の危険個所を確認出来たことを報告。 参加者：約 350 名（生徒、教職員、父兄、地域の方々）
11 月 27 日	「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」の一事業として避難訓練（避難所設営）が行われる。 場所：上平井小学校 対象：運営管理者、町会会員 内容：加藤先生の講話とワークショップ及び質疑応答
2012 年（平成 24）	
1 月 30 日	五建庁舎改築に伴う古井戸の一時撤去・保管について打合せ。 場所：土木技術支援・人材育成センター 対象：土木技術支援センター主任研究員、丸八ポンプ製作所社員、NPO 事務局員 内容：井戸の内部を調査し、高さを測量・一時撤去・保管
2 月 2 日	理事長が殿村上平井中学校長を訪問し、NPO の活動と防災教育を説明し、参加と協力を求める。
2 月	◎雑誌 SHINTOSHI VOL.66 No.2 2012 に渡辺理事が「コミュニティを生かした減災まちづくり～地域の底力を育てる～寄稿
2 月 26 日	二上小学校通学区区域の避難所設営と運営管理者による避難訓練実施。 場所：新小岩北地区センター 参加者：3 町会避難所運営委員会役員、町会会員 内容：理事長と加藤先生の講話に続き、参加者を総務、衛生、資材の 3 部の班に分けて討議し、結果を報告する。。
3 月 11 日	防災・救助訓練（震災時の火災と洪水時の逃げ遅れを想定） 場所：上平井橋下流 主催：本田消防署上平井出張所 参加者：新小岩北地区連合町会（東新小岩七丁目他、NPO）
3 月 18 日	シンポジウム「街を、暮らしを、皆でどう守るか～大規模災害に備えて～」 場所：江戸川区総合文化センター研修室 参加者：210 名 アンケート回答者：138 名 基調講演：「私たちはこんなところに住んでいる」 加藤先生 報告その 1：「水害についての研究」 上平井中学校理科部 パネルディスカッション：「地域・NPO・行政・専門家の協働とこれから」 報告その 2：地域・NPO・行政の減災への取組み中川町会長、理事長 パネリスト：新小岩北地区連合町会、荒川下流河川事務所長、足立・葛飾・江戸川区担当部長、当 NPO 理事長 コーディネーター：加藤先生 宣言：「ゼロメートル市街地の安全・安心な暮らし実現に向けた街づくり」
4 月 10 日	◎東京新聞夕刊 1 面「地盤沈下を語る古井戸葛飾区の文化財に」が掲載される。
4 月 16 日	シンポジウム「復興を俯瞰して考える」 場所：東京大学・駒場リサーチキャンパス

	主旨説明：加藤先生 パネルディスカッション：コーディネーター：加藤先生
5 月 2 日	本田消防署菊川上平井出張所長が新小岩北地区連合町会主催の「ボートを活用した防災訓練実施企画書」を説明 場所：NPO 事務局 参加者：出張所長、理事長、副理事長、連合町会長、各町会長、事務局員
5 月 21 日	シンポジウム「三区長による大規模災害に備えて」の会場「天空劇場」下見 目的：シンポジウム会場を事前に視察して、問題点を共有・解決し、当日の円満・円滑な会議が行われるようにする。 参加者：足立区都市建設部企画調整課担当係長、葛飾九地域振興部防災課主任、江戸川区土木部計画課主任、日本芸術センター企画担当、NPO 事務局員
6 月 1 日	「ア！安全・快適街づくりニュース」第 18 号を発行。
6 月 13 日	(株) 三菱総研が国立国会図書館の委託を受け、NPO を訪問。 目的：震災関連のデジタル資料・データをどのように利用しているかを把握し、東日本大震災アーカイブの画面設計や機能開発の参考とする。 対応：理事長、副理事長、事務局員
6 月 13 日	本田消防署長 NPO 訪問 対応：理事長、副理事長、事務局員
6 月 23 日	第 11 回総会 場所：新小岩地区センター4F 会議室 参加者：約 220 名 講演：葛飾区郷土と天文の博物館専門調査員伊藤綾乃さんによる「水と産業と文化財」
6 月 29 日	新小岩北地区連合町会宛「地域の底力再生事業助成金」交付決定通知 事業名：地域の「津波等による水害対応力」強化事業～稲村の火を灯そう～ 交付額：1,000,000 円
8 月 29 日	プレ・イベント「輪中会議」開催。
9 月 2 日	松上小学校で、組み立て式ボートの組立て訓練実施。 参加者：40 名（各町会役員、葛飾区防災課職員、NPO 事務局員 内容：区役所職員指導の下、各小中学校に配置されている組立て式ボートを最初から組立・解体作業を繰り返し行い、習熟する。
9 月 9 日	地域の底力再生事業による「ボートを使った避難訓練」実施 場所：中川「上平井橋～上平井水門」 参加者：約 350 名 主催：新小岩北地区連合町会 訓練団体：7 町会、2 自治会、本田消防署、同上平井出張所、本田消防団、同分団、小岩・浜町水難救助隊 訓練内容：ボート組立・操舵、救命浮き輪、水難救助・救出、放水、応急救護、搬送、起震車体験
9 月 20 日	避難道路指定に関する陳情を江戸川区議会島村議長宛提出。 代表者：伊東春海事務局員他 4 名、11 月 21 日区議会で審査。 内容：区内の幅 6.0m 以上で、広域避難場所へ避難するに相応しい道路を指定して頂きたい。
○ 輪中会議始まる	
9 月 23 日	第 1 回輪中会議開催
10 月 日～日	「街づくり in 神戸」に理事長、渡辺理事、東新小岩七丁目町会役員 2 名が参加。
10 月 28 日	第 2 回輪中会議開催
11 月 10 日	葛飾区との協働事業「親から子に語り継ぐ大水害の避難の講演とパネル展

	示」が道德地域交換会第 3 時限授業で講演会が、又パネル展示を同校体育館で行う。 場所：新小岩学園体育館 参加者：約 300 名（松上小学校 5、6 学年生、新小岩中学校 1、2 学年生及び保護者） 講師：中村先生（芝浦工大教授） テーマ：「地域防災を通じて助け合う心を培おう」 その他の内容：ワークシートを生徒に配布し、自宅で親子で話し合った結果を先生に提出する。NPO は回収したワークシートを、集計・分析。
11 月 18 日	二上小学校「こどもまつり」で、iPad を子供達に手渡し、順に浸水深さを疑似体験する。 又、東新小岩七丁目町会では、町会のゴムボートをプールに浮かべ、子供達にボートの乗降りを体験して貰い、避難に役立てる。
12 月 9 日	第 3 回輪中会議開催 場所：たつみ集い交流館 内容：(1)上平井中学校理科部の発表 (2)iPad の利用と改善点及び名前を考える。
12 月 16 日	川づくり研究会が「あらかわ号」で川から街を見る会を開催 視察区間：荒川岩淵リバーステーション～荒川ロックゲート～番所橋船着場 参加者：30 名（上平井中学校理科部と顧問の先生 10 名、輪中会議・ゼロメートル市街地研究会・NPO 計 20 名）
12 月 21 日	シンポジウム下打合せ 場所：足立区役所特別会議室 参加者：足立区岡野都市建設部長、須藤事業調整担当課長、土田企画調整課長、長澤企画調整担当係長、他 4 名 NPO 理事長、事務局員 2 名、広域ゼロメートル市街地研究会加藤先生、研究会員 1 名 内容：式次第、出演者、時間の割振り、ステージの段取替え、音響効果、雨天時対応、控室等の確認、館内配置等
2013 年（平成 25）	
2 月 3 日	第 28 回 ICUS オープンレクチャー開催 場所：東京大学・駒場リサーチキャンパス An 棟 参加者：46 名 内容：基調講演 これからの防災まちづくり 加藤先生 パネルディスカッション： 地域コミュニティをベースとして、経験の共有を図る。 パネリスト： 葛飾区防災課長、NPO 事務局員
2 月 10 日	第 4 回輪中会議開催 場所：新小岩北地区センター 内容：(1)I パッドで地域を観察する。 (2)I パッドのネーミング（候補：天さい学くん、浸水シミュレーション葛飾守くん）
2 月 15 日	江戸川区民が災害時の避難先に指定されている広域避難場所（新小岩公園）の高台化早期実現方を江戸川区議会区議会島村区議会議長宛提出、陳情者伊藤春海他 9 名
2 月 22 日	葛飾区との協働事業「親から子に語り継ぐ大水害の避難の講演とパネル展示」の出前授業「安全で安心な街づくりを」 場所：新小岩学園中学校体育館 講師：東京大学大学院塩崎先生 対象：小学 6 年、中学 1 年、2 年生、保護者 参加者：約 260 名

3 月 9 日～ 10 日	被災地交流 行程：東京～古川～南三陸町 9 日、戸倉（高台から俯瞰）、ホテル観洋で地元の方からのお話。 南三陸町中心地の商店街の方からお話を伺う。 上山八幡宮神職の方からお話を伺う。 10 日、袖浜と仮設公共施設（校庭は仮設住宅）を見学、被災庁舎に献花。 伊里前商店街、歌津地区、平和の森（仮設団地）で地元の方からお話を伺う。
3 月 18 日～ 29 日	葛飾区との協働事業「親から子に語り継ぐ大水害の避難の講演とパネル展示」の「パネル展示」実施 場所：葛飾区役所 1F ホール 期間：9 日間 内容：東日本大震災関連のパネルを加えて展示する。
3 月 23 日	シンポジウム「大規模災害に備えて、暮らしを、みんなでどう守るか」 場所：東京芸術センター天空劇場 内容：開会挨拶 理事長 来賓挨拶 近藤やよい足立区長 広域ゼロメートル市街地の現状とこれから（加藤先生）。 三区の取組み（足立区は地域の方・葛飾区は地域の方と中学生、江戸川区は行政の方） 被災生活の経験を共有する。 （南三陸町の現状と被災生活で得た経験と助け合い。） トークセッション：コーディネーター大越キャスター、加藤先生 まとめ 来場者：約 350 名
3 月 30 日	「カスリーン台風を語り合おう」に中川町会長と寺島講師が語り合う。 場所：新小岩北地区センター 主催：「カスリーン台風水害点描」刊行委員会 共催：葛飾区防災課 内容：カスリーン台風の体験談を聞き、今後の防災や街づくりにどのように生かすかを語り合う。 参加者:約 100 名
4 月 11 日	ホームページ・トップページを（株）キャドセンターに委託。
5 月 30 日	東京都建設局邊見河川部長と理事長打合せ。 場所：河川部長室 出席者：計画課長、事務局員 2 名 内容：(1) 荒川河川整備計画にも利根川河川整備計画同様,超過洪水対策を盛り込むよう働きかけて欲しい。 (2) 葛飾区の都市計画マスタープラン（平成 23 年 7 月）では、新小岩公園（中川左岸）を高台による避難場所と位置付けているので、NPO は、この区間を含めその上流もスーパー堤防で整備するのが望ましいと考えている。そこで、東京都都市づくり公社のまちづくり支援制度を活用した街づくり勉強会を立ち上げたい。については勉強会のメンバーに東京都も加わって欲しい。
6 月 29 日	第 12 回総会開催 場所：大成化工（株）厚生棟 講演：荒川放水路と新小岩のあゆみ 講師：寺島玄先生（荒川学会会員）
8 月 3 日	「未来の大人の防災まちづくり会議 in 東京」開催 場所：東京大学生産技術研究所 内容：全国 4 地区（東京地区は、上平井中学校理科部）から未来の大人

	達が集まりそれぞれの活動を発表した後、感想・質問試合交流を深める。 参加者：約 80 名
8 月 12 日	東京都都市づくり公社宛まちづくり支援申請書提出 住民グループ名：西新小岩三丁目町会 水害時避難場所高台等整備勉強会 目的：どんな水害が起きても命だけは助かるための緊急且つ一時的に避難する高台の確保に付いて構想をまとめ、区に提案し、その実現に向け研究し活動する。
葛飾区地域活動団体助成事業始まる。	
8 月 22 日	地域活動団体助成事業における上平井小学校との打合せ 場所：上平井小学校校長室 参加者：6 名（石川校長先生、副校長先生、4 学年主任先生、NPO 理事長、事務局員 2 名） 内容：(1) 日時を 10 月 5 日第 3 時限目とする。 (2) 対象を 4, 5, 6 学年生 242 名と保護者とする。 (3) 体躯館内にパネルを展示する。 (4) ワークシートとアンケート用紙を配布する。 (5)6 学年生の日時は 1 月 18 日第 1 時限とする。
9 月 7 日	まちづくり支援事業運営会議（準備会） 場所：西新小岩 3 丁目集会所小会議室 出席者：10 名（町会 5 名、NPO 理事長、事務局員 4 名） 内容：設立趣旨説明、幅広い堤防が緊急に避難する場所として必要、成功モデルの先導役になれば。
9 月 12 日	地域活動団体助成事業における松上小学校との打合せ 場所：同校来客室 参加者：白木 3 学年主任先生、NPO 理事長、事務局員 内容：(1)授業の場所を大成化工（株）厚生棟と屋上とする。 (2)授業はスライドとパネルを使用する。 (3)授業は生徒を 2 班に分けて行う。 日時は複数案から学校側が連絡する。
9 月 30 日	東京都生活文化局都民生活部渡邊事業調整課長より「東京都新しい公共支援事業『新しい公共の場づくりのためのモデル事業』における東京都新しい公共支援事業運営委員会の意見・評価等について（通知）を受取る。
10 月 1 日	上平井中学校理科部生徒による i-pad を持つての街歩き。
10 月 5～6 日	全国まちづくり in 長岡 場所：長岡市シティホールプラザアフォーレ長岡 参加者：事務局員 1 名、ゼロメートル市街地協議会 1 名 展示：東大加藤研究室作成パネル
10 月 5 日	上平井小学校で出前講座とパネル展示を行う。 場所：上平井小学校体育館 講師：理事長 テーマ：地震水害から命を守る。 参加者：約 260 名（4～6 学年生、教職員、保護者） 内容：「新小岩は日本で一番低い所、自分の命は自分で守ろう」 をポインターで分かり易く説明し、併せて館内でパネル展示を行い、ワークシートを配布した。
10 月 6 日	西新小岩 3 丁目高台等整備勉強会（第 1 回）開催 場所：西新小岩 3 丁目集会所小会議室 出席者：14 名（町会 9 名、NPO 理事長、事務局員 4 名） 内容：過去の経緯と設立趣旨説明、東日本大震災後幅広い堤防が緊急に避難する場所として必要と判断。

	以降月 1 回、第 1 土曜日、午後 6 時から、上平井集会所で行う。
10 月 18 日	小中一貫教育校 研究発表会に合わせパネル展示を行う。
11 月 2 日	上平井中学校学芸発表会で同校理科部員が「水害についての研究」を発表。 場所：上平井中学校体育館 参観者：約 400 名（中学校生徒と父兄及び地域の方々） 内容：(1) iPad を使って街歩き、浸水深さを疑似体験し、避難経路と避難場所を確認。 (2) 荒川下流河川事務所のあらかわ号で川から街を見て、学んで (1)と合わせてスライドにまとめ報告した。
11 月 2 日	上平井小学校創立 100 周年記念展示会に中川東新小岩 7 丁目町会長と渡辺理事が参加。
11 月 17 日	上平井小学校で災害時の避難所設営訓練と理事長による講演。 場所：上平井小学校校庭と体育館 参加者：約 200 名（西新小岩 3～5 丁目町会会員と消防団員） 内容：避難所設営訓練 備蓄倉庫内の確認と各班毎に AED、スタンド放水の取扱いを習熟し、訓練終了後理事長の講演に参加。
11 月 25 日	◎朝日新聞朝刊 31 面「災害時 旗掲げて 葛飾の町内会、赤は SOS・白は無事 近所助け合い命を守りたい」の記事 東新小岩 7 丁目の訓練が掲載される。
11 月 28 日	松上小学校第 3 年生による校外学習。 場所：大成化工（株）厚生棟と社屋屋上。 参加者：82 名（生徒 76 名、先生 4 名、父兄 2 名） 内容：まちを知る授業の一環として、厚生棟で iPad を使って浸水深さを体感し、屋上に上がって中川の水面と家の高さを見比べて住んでいる土地の低さを実感する。
12 月 6 日	第 138 回事務局会議で理事長から「河川管理者への提案 高台（命山）建設の進め方」が示される。
2014 年（平成 26）	
1 月 11 日	まちづくり支援事業勉強会（第 4 回） 場所：大成化工（株）厚生棟 参加者：20 名（町会 9 名、荒川下流河川事務所波多野所長、三好沿川再開発課長、諸星調査係長、葛飾区役所 1 名、NPO 理事長、事務局員 6 名） 内容：荒川下流河川事務所から高台（命山）の事例（静岡県袋井市）と命山事業を河川防災ステーションとして作る方法が例示された。
1 月 18 日	地区公開授業で上平井小学校第 6 年生に出前授業を行う。 場所：上平井小学校家庭科室 対象：同校 6 学年生 参加者：40 名（生徒 36 名、教職員 4 名） 内容：浸水と親水をテーマに洪水と豪雨そして台風と高潮、及び地盤沈下を分かり易く問答形式で、生徒を飽きさせない授業を行う。
2 月 6 日	第 18 回防災まちづくり大賞「総務大臣賞」受賞 場所：総務省講堂 受賞事例：新小岩ゼロメートル市街地における大規模水害対策への取り組み 表彰団体名：新小岩北地区連合町会 新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会 受賞者代表：新小岩北地区連合町会長 松本八郎 出席者：24 名（連合町会 5 名、NPO 理事長、事務局員 2 名、

	ゼロメートル市街地協議会加藤先生、土肥事務局長、本田消防署、消防団 7 名、葛飾区役所 7 名）
2 月 7 日	総務大臣賞受賞を青木区長に報告 場所：庁議室 出席者：16 名（連合町会 4 名、NPO 理事長、事務局員 2 名、本田消防署長、上平井出張所長、区長、副区長、都市整備部長、地域振興部長、情野課長他 2 名）
2 月 8 日	第 5 回輪中会議 テーマ：経験の共有 ー地域力を蓄え、平時に、非常時に、生かす人知の語らいー 出席者：22 名
3 月 30 日	シンポジウム「広域ゼロメートル市街地における大規模水害に備えて」～これからの協働のあり方を考える～ 場所：葛飾区ウィメンズパル 多目的ホール 講演：広域ゼロメートル市街地の現状 加藤先生 内容：地域からの報告 ・東新小岩七丁目町会 ・小中学校 PTA の取組み ・中高生の取組み ・児童・民生委員の取組み ・NPO の取組み パネルディスカッション：これからの協働のあり方 地域を越えた経験の共有 ゲストコメンテーター：半井小絵（気象予報士） 布村明彦（河川情報センター）
4 月 17 日	東京都建設局中島河川部長を理事長が訪問 場所：河川部長室 出席者：理事長、事務局員 2 名 内容：(1) 総務大臣賞受賞 (2) 葛飾区の水害を考える会への出席要望 (3) 高規格堤防見直し検討会答申後の国と打合せ (4) 中川（総武線上流～）の緩傾斜堤防整備
4 月 22 日	事務局会議（第 142 回）で新小岩北地区センター長から「東京都の地域の底力再生事業の助成を受け、各町会がスタンドパイプの購入申請（手続きは新小岩北地区センター）をし、消火訓練を合同で行ったかどうか」との提案があり、各町会は持ち帰った結果、申請をお願いすることとなる。
4 月 22 日	事務局会議（第 142 回）に徳倉副理事長、病気で欠席
5 月 22 日	公益社団法人 土木学会より「市民普請支援事業」助成対象となる旨の通知
6 月 14 日	西新小岩三丁目町会総務会 場所：上平井集会所 参加者：西新小岩三丁目町会総務部員、NPO 理事長、事務局 内容：絆旗事業の計画概要を説明。
6 月 28 日	第 13 回総会開催 場所：新小岩北地区センター1F ホール 講話：荒川放水路と新小岩のあゆみ 講師：寺島玄先生（荒川学会）
6 月 29 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校地域防災研究部現地調査 場所：堀切菖蒲水門 参加者：9 名（部員 7 名、顧問 2 名）
7 月 6 日	第 6 回輪中会議開催 場所：新小岩北地区センター テーマ：多様な側面から、これからの協働のあり方を考えると共に、大

	規模水害に備えて暮らしの継続（LCCP）についても考える。 殊に学校関係の方から災害時に子供たちをどう守るか、災害対策と備蓄品の状況等も話し合う。 講話：加藤先生 パネリスト：新小岩北地区の各小学校長先生と PTA 会長、 民生児童委員、うらら保育園長、各町会長、 荒川下流河川事務所、葛飾区
7 月 17 日	ベトナムからの防災関係職員 10 名が NPO を訪問し、事務局員の説明を受けた後、大成化工（株）の屋上から中川水面と道路沿いの家の高さを見比べる。
8 月 29 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校地域防災研究部が「あらかわ号」に乗船し、川からの街を視察。 参加者：24 名 （部員 10 名、顧問教諭、町会、各 1 名、NPO2 名、大学生 10 名）
9 月 19 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校 3 学年校外学習 場所：上平井水門とテラス部および水門下流部堤防 対象：99 名（第 3 学年 3 クラス 88 名、教諭 4 名、 父兄と大学生及び NPO7 名） 内容：出発前、校庭でタブレットと iPad の操作説明を受け、上平井水門に向かい、堤防天端で班分けを行う。水門の説明を受ける班と、 タブレットで洪水時の水面の高さを疑似体験する班とで交代して 全員が一通り終わった後、普段下してない水門を下ろして扉が、 水をはじく様子を観察する。
10 月 19 日	第 7 回輪中会議開催 場所：新小岩北地区センター 1F ホール 参加者：30 名（各町会、民生児童員、各小学校長・PTA、行政、NPO） 内容：多様な側面から、高台化のあり方を考える。 プログラム：(1) 東大院生による事例研究発表 (2) 西新小岩三丁目融資による勉強会報告 (3) 河川防災ステーション (4) 暮らしの継続計画（LCCP）
10 月 22 日	新小岩中学校避難所訓練準備運営会議開催。 場所：新小岩中学校会議室 出席者：15 名（葛飾区 3 名、各町会長と役員 6 名、医師会、消防署、 保健所、校長・副校長、NPO） 内容：災害時医療・救護、炊き出し、簡易トイレ組立等。
10 月 25 日	上平井中学校学芸発表会 場所：同校体育館 参加者：516 名（生徒、教職員、父兄、地域の方々、NPO） 内容：同校地域防災研究部員による、乗船体験、街歩き、川歩き等の調査・研究成果を発表
11 月 8 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校第 4 学年出前授業 場所：草の根プレイルーム 参加者：65 名（生徒 59 名、教職員 4 名、NPO2 名） 講師：理事長 テーマ：大きな地震が来た時あなたならどうする
11 月 30 日	避難所訓練開催 場所：新小岩中学校 参加者：422 名（生徒 294 名、教職員 25 名、町会・自治会員 85 名、 葛飾区・医師・消防団等 7 名、NPO・学生 11 名） 内容：ボート組立、要介護者の救助・移送、AED 操作、飲料水浄化、

	公衆電話設置、非常食点検等。
12 月 10 日	「西新小岩 3 丁目まちづくり勉強会」の葛飾区への中間報告 場所：葛飾区都市整備部担当部長室 出席者：NPO 理事長、事務局員 2 名、葛飾区杉本担当部長、 泉山まちづくり調整課長 内容：(1) 河川防災ステーションについて (2) 高規格堤防事業（新小岩公園高台化）について
12 月 13 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校第 4 学年出前授業 場所：体育館 参加者：70 名（生徒 59 名、保護者他 7 名、教職員 3 名、NPO1 名） 講師：塩崎先生、南先生 テーマ：安全で快適な街をめざして～水に親しみ、水に備えよう～
12 月 18 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校第 6 学年出前授業 場所：工作室 参加者：54 名（生徒 49 名、教職員 4 名、NPO1 名） 講師：寺島先生 テーマ：葛飾の今昔と水害の歴史について
2015 年（平成 27）	
1 月 17 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校講演会とパネル展示 場所：二上小学校体育館 対象：約 281 名 （4・5 学年 222 名、教職員 8 名、保護者・地域の方々 47 名、NPO4 名） 講師：岡田雅樹先生（国立極地研究所）、理事長 テーマ： 岡田 PTA 会長「地球環境の変化から葛飾の自然災害について知ろう！」 理事長「大きな地震が来た時あなたならどうする」
2 月 12 日	第 8 回輪中会議の準備会を開催する。
2 月 22 日	新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会活動報告会開催 場所：新小岩北地区センター多目的大ホール テーマ：専門家に聞く{災害に弱い葛飾区の現状について} 内容：報告「水害に強いまちづくり」加藤先生 〃 「葛飾区の水害対策」葛飾区 〃 「輪中会議」の「これまでとこれから」理事長
3 月 13 日	事務局会議（第 153 回）で定款の一部変更を決める。 場所：大成化工（株）3F G 会議室 出席者：14 名（理事長、ゼロメートル市街地協議会員 4 名、 青柳町会長、中川町会長、事務局員 7 名） 内容：(1) 「スーパー堤防事業」を「新しい街づくり」とする。 (2) ゼロメートル市街地協議会の一会員が、YouTube に輪中会議の 映像を公開する他、Facebook に会議の内容を公開することを提 案。 (3) ゼロメートル市街地協議会の一会員が、町会役員にインタービ ューを通じて、NPO と輪中会議への感想・意見・提案等まとめ 報告。
3 月 18 日	新小岩北地区連合町会長会で、理事長が町会に NPO 加入を諮る。 場所：新小岩北地区センター1F 会議室 出席者：12 名（町会・自治会長、センター長、理事長、事務局長） 内容：定例 7 町会・2 自治会長会議に、地域と NPO が一層緊密に連携す ることを提案し、その後 7 町会が会員となる。
3 月 28 日	第 8 回輪中会議を開催する。

	場所：新小岩北地区センター1F センターホール テーマ：地域での経験を共有し、掘り下げ、取り組みの輪を広げる 内容：新小岩北地区における各地域の活動報告 防災“も”まちづくり 日頃から交流の場づくり
6 月 28 日	第 14 回総会開催 場所：新小岩北地区センター 講話：岡田雅樹先生（国立極地研究所） テーマ：「南極の自然と観測隊の防災対策に学ぶ」
7 月 4 日	上平井中学校地域防災研究部員の調査研究活動 場所：東京臨海広域防災公園内「そなエリア東京」見学 参加者：12 名（研究部員 10 名、顧問、NPO 各 1 名） 内容：公園面積 13.2ha 内の防災体験学習施設「そなエリア東京」で、地震災害後の支援が少ない時間を生き抜く知恵を学ぶ。
7 月 16 日	JICA 研修ベトナムの方々が訪問 場所：大成化工（株）会議室と屋上 参加者：10 名 （8 名ベトナム農村開発省党行政担当者、2 名通訳・随行者） 内容：防災意識の啓発・向上と風水害に関する自然災害に取り組んでいる事例を具体的に知るため来室。
8 月 19 日	上平井中学校地域防災研究部員の調査研究活動 場所：北区志茂知水資料館船着場乗船→荒川河口→荒川ロックゲート→番所橋船着場 参加者：25 名 （部員 10 名、顧問 1 名、町会会員 9 名、大学生 3 名、NPO2 名） 内容：川から街を見、橋をくぐり眺望の広がった東京湾を垣間見て、閘門で水位差を解消している仕組みを実体験して下船する。
8 月 24 日	上平井中学校地域防災研究部員の調査研究活動 場所：総武線を挟んで、小松南地区と北地区の踏査。 参加者：11 名（部員 8 名、町会役員 3 名） 内容：小松南地区と北地区の避難場所を、町会の方と徒歩で確認し、図面に避難所へ行くルート落とし込み、問題箇所・区間を朱線で強調する。
9 月 14 日	事務局会議（第 158 回）に理事長退院後静養のため欠席。
9 月 16 日	第 23 回「治水の日」継承式典開催。 場所：加須市 童謡のふる里おおとね アスタホール 出席者：約 250 名 内容：カスリーン台風の教訓を風化させず後世に語り継ぐ中で、中川町会長が体験者として当時の様子を話された。
10 月 3～4 日	「全国まちづくり会議 in 東京」開催される。 場所：東京大学生産技術研究所 内容：パネル展示、車座交流会、輪中会議の番外編
10 月 22 日	事務局会議（第 160 回）で定款の一部変更を決める。 場所：大成化工（株）3F A 会議室 出席者：13 名（青柳,中川,松本,東原各町会長,事務局員 9 名） 内容：「新しい街づくり」を「防災もまちづくり」とする。
10 月 24 日	上平井中学校で、校内学芸発表会が開催される。 場所：同校体育館 参加者：516 名（生徒、教職員、父兄、地域の方々、NPO） 内容：同校地域防災研究部員による、乗船体験、街歩き、川歩き等の調査・研究成果を発表

10 月 24 日	葛飾区地域活動団体助成事業うらら保育園で講演会とパネル展示。 場所：うらら保育園講堂 講師：中村先生（芝浦工大教授） 参加者：35 名（保護者 26 名、教職員 8 名、NPO1 名） テーマ：「大規模水害と避難について」 概要：近年の水害と新小岩の地勢的・人為的特性を説明し、逸早い避難を強調すると共にパネルを展示する。
10 月 25 日	「つながれ！コラボかつしかまつり」に参加 場所：勤労福祉会館 主催：コラボかつしかまつり実行委員会（葛飾区社協が主体） 内容：各団体活動発表、立石縁日、まちづくりシンポジウム NPO は活動概要のチラシを配布し、iPad を使い『天サイ！まなぶくん』のデモ。 参加者：約 1,500 人（NPO2 名）
11 月 7 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校で講演会。 場所：二上小学校体育館 講師：寺島玄先生（荒川学会） テーマ：新小岩の今昔と水害について 対象：第 6 学年生
11 月 12 日	「新小岩公園防災高台整備事業」の説明 場所：大成化工（株）3F 会議室 出席者：14 名（葛飾区杉本担当部長、まちづくり調整課主査、中川町会長、三丁目勉強会員 1 名、大成化工（株）3 名、江戸川区土屋土木部長、松島東町会伊東、NPO5 名） 内容：(1) 国の了解が得られ、近く区と国との間で協定を結ぶ。 (2) 区が事業者となり、関東地方整備局か NEXCO 東日本のいずれかを入札で決める。 (3) 盛土搬入の目途と、工事期間の予定が立った。 (4) 連合町会、まちづくり協議会への説明は 16 日以降。
11 月 18 日	鈴木一喜西新小岩三丁目町会長逝去
11 月 20 日	「静岡市津波避難施設見学会」催行する。 場所：静岡市清水地区、三保地区『避難ビル、避難タワー』 〃 日本平（津波危険地区を俯瞰） 参加者：13 名（西新小岩三丁目在住・在勤者 8 名、区役所・専門家各 1 名、NPO2 名） 行程：地元発（7：00）→清水駅コンコースと駅前駐輪場の避難施設（10：30）→三保南・北避難タワー（3 階屋上）（12：30）→清水港（13：45）→久能山から津波危険地区を俯瞰（14：30）→静岡駅前避難ビル（16：30）→地元帰着（20：30）
11 月 24 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校で出前授業。 場所：同校集会室 講師：中川町会長、塩崎先生（東大院生） 対象：第 4 学年生 内容：カスリーン台風の体験と浸水・親水
11 月 27 日	中川七曲り工事現場見学会 場所：江東治水事務所発注工事現場 参加者：新小岩北地区連合町会役員、奥戸町会役員
12 月 1 日	全国自主防災リーダー講習会 場所：東京平河町都道府県会館会議室 参加者：約 100 名（47 都道府県から各 2 名） 内容：新小岩北地区 7 町会のゴムボートによる日常の定期訓練を中心

	に、中でも東新小岩七丁目町会は、折に触れ催しに合わせた実践的な避難訓練を永年、独自に工夫して行っている点を報告する。
12 月 7 日	ゼロメートル市街地研究会打合せ。 場所：加藤研究室 出席者：4 名（加藤先生、研究会員 3 名） 内容：「新小岩公園防災高台整備事業」の具体化を受け、現況把握と今後の取組みを話し合う。
12 月 10 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校で出前授業。 場所：同校集会室 講師：塩崎先生、南先生（東大院生） 対象：第 6 学年生
12 月 11 日	新小岩公園防災高台整備事業について国へ請願 場所：石井国土交通大臣室 出席者：10 名（区長、区都市整備担当部長、衆参議員 3 名、南北連合町会長、新小岩まちづくり南北会長、中川町会長） 内容：事業の早期着手と早期解放、住民要望を尊重し、避難所機能を併せ持つ施設の整備等。
12 月 12 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で出前授業。 場所：同校集会室 講師：寺島玄先生（荒川学会） 対象：第 6 学年生 テーマ：新小岩のまちを辿り、カスリーン台風を語る。
12 月 20 日	荒川水系河川整備計画（素案）意見発表 場所：関東地方整備局 出席者：中川町会長
12 月 25 日	◎広報かつしかに、「新小岩公園の高台化がいよいよ実現へ」の記事が掲載される。
2016 年（平成 28）	
1 月 23 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で出前授業。 場所：同校体育館 講師：中川町会長、塩崎先生 対象：第 3 学年生 テーマ：カスリーン台風の避難生活を語り、ゼロメートル地帯の洪水と水害について質問を交えて説明。一方親水について世界各国の姿を説明する。
2 月 8 日	理事長石川金治さん逝去
2 月 12 日	副理事長徳倉真治さん逝去
2 月 24 日	韓国プサン大学研究員訪問 場所：大成化工（株）3F 会議室 参加者：6 名（研究員 4 名、随行 1 名、通訳 1 名）
3 月 15 日	西新小岩 3 丁目高台等整備勉強会が『新小岩公園高台化等に伴う提案書』を葛飾区役所に提出 場所：葛飾区役所都市整備部長室 出席者：6 名 （杉本部長、泉山計画調整課長、勉強会淵井会長、NPO 事務局員 3 名） 内容：(1) 新小岩北地域の輪中構造への整備 (2) 新小岩中学の浸水対策 西新小岩三丁目からの避難経路整備 河川防災ステーション整備に当たっての要望 関連・付帯する要望・堤防天端へのスロープ化等
3 月 17 日	輪中会議前打合せ。 場所：東大加藤研究室 参加者：7 名 （加藤先生、ゼロメートル市街地研究会員、NPO 事務局員）
3 月 17 日	第 2 回理事会で、理事 成戸寿彦さんを第 2 代理事長に選出。

3 月 20 日	第 9 回輪中会議を開催する。 場所：新小岩北地区センター1F センターホール 参加者：45 名 テーマ：地域での経験を共有し、掘り下げ、取り組みの輪を広げる 内容：新小岩北地区における各地域の活動報告 防災“も”まちづくり 日頃から交流の場づくり
4 月 9 日	モンチッチ公園開園式を開催する。 場所：西新小岩五丁目関口製作所跡地 参加者：約 1,000 名（地元町会、（株）セキグチ、上平井小学校、上平井中学校、葛飾区役所、青木区長、本田消防署上平井出張所、消防団、NPO2 名） 内容：敷地約 4,000 ㎡の内 120 ㎡が防災倉庫で、開園式に先立ち、備蓄品を使った消火訓練、モニュメント除幕式、記念演奏等を行う。
5 月 31 日	「新小岩北地区公共施設整備計画」説明会 場所：松上小学校体育館 参加者：約 50 名（西新小岩三丁目勉強会員 2 名、NPO2 名） 概要：保育、交流、学び、児童、保健等の施設を建て替え或いは新設するために、区の考えを説明し、地域の意見を聞く会を 2 回にわたり開く。
6 月 26 日	ア！安全・快適街づくりニュース（第 22 号）発行。
6 月 26 日	第 15 回総会開催 場所：新小岩北地区センター1F ホール 講話：東京大学生産技術研究所加藤孝明先生 テーマ：「水害リスクと賢く共生する親水都市へ」 参加者：52 名
6 月 30 日	「新小岩北地区公共施設整備計画」説明会（第 2 回） 場所：松上小学校体育館 参加者：約 50 名（西新小岩三丁目勉強会員 2 名、NPO2 名） 概要：保育、交流、学び、児童、保健等の施設を建て替え或いは新設するために、区の考えを説明し、地域の意見を聞く会を 2 回にわたり開く。
8 月 1 日	上平井中学校部活動「まち歩きと通学路点検」事前打ち合わせ 場所：上平井中学校 参加者：12 名（生徒 3 名、顧問教諭 1 名、内閣府 3 名、中川町会長、上小松町会副会長、東大 2 名、NPO1 名） 内容：災害時中学生の役割と期待、まち歩き手法と地図作り、葛飾の水害リスク、防災への地域の取組等
8 月 2 日	東京都建設局河川部計画課との話し合い。 場所：都庁第 2 庁舎河川部会議室 出席者：6 名（河川部低地対策専門課長、課長代理、主任、NPO 理事長、事務局員 2 名） 内容：(1) スーパー堤防事業化に際し、都の考え方。 (2) 堤防道路の整備には、時間を要する課題が多い。 (3) 大成化工（株）前の緩傾斜型堤防事業も時間を要する。
8 月 4 日	上平井中学校部活動「塩崎先生による講義」 場所：東大加藤研究室 参加者：8 名（生徒 3 名、顧問教諭 1 名、東大 3 名、NPO1 名） 内容：講義「災害の歴史から学ぶ」
8 月 9 日	上平井中学校部活動「通学路マップ作り」 場所：上平井中学校 参加者：10 名（生徒 3 名、OB1 名、顧問教諭 1 名、上小松町会 2 名、

	中川町会長、東大 1 名、NPO1 名) 内容：各自の通学路持ち寄り、室内で地図化する。
8 月 24 日	上平井中学校部活動「通学路マップ作り」 場所：上平井中学校と、町内を徒歩で調査。 参加者：11 名（生徒 3 名、OB1 名、顧問教諭 1 名、上小松町会 2 名、 中川町会長、NPO3 名） 内容：スマホアプリ「天才まなぶくん」を持って通学路の浸水深さを疑似体験する。
9 月 7 日	「新小岩北地域公共施設整備計画」に、勉強会として申し入れ。 場所：葛飾区政策経営部長室 出席者：9 名（石田特命担当部長、生井沢施設計画担当課長、福島係長、 淵井代表他 3 名、NPO2 名） 内容：防災機能の強化、屋上にヘリポート、避難所等を要望。
9 月 11 日	上平井中学校部活動「東新小岩七・八丁目町会ボート操作訓練」に参加。 場所：中川七曲り左岸森永乳業工場脇テラス 参加者：15 名（生徒 3 名、顧問教諭 1 名、七丁目町会 2 名、学校長、 葛飾区長、情野課長、東大 5 名、NPO1 名）
9 月 23 日	水害時避難場所高台等整備勉強会の提言について（回答） 葛飾区青木克徳区長から勉強会淵井恵子代表宛 新小岩北地域の輪中構造への整備…参考とする。 新小岩中学校の浸水防止…貴重な意見として承る。 西新小岩三丁目からの避難経路整備… 新小岩公園再整備と中川堤防整備の際、案として検討。 河川防災ステーション整備に当たっての要望… 公園全体の活用の仕方を含め検討。 避難経路の確保…検討 公共施設整備…荒川ハザードマップの浸水深を踏まえ安全な施設を整備 その他東京都関連施設…都に要望
10 月 17 日	出前授業と部活支援の今後の方向性について打合せ。 場所：東大加藤研究室 出席者：8 名 （加藤先生、理事長、ゼロメートル市街地研究会 4 名、NPO2 名） 内容：(1) 次世代へと繋がる出前授業の検討。 (2) 長期的取組みの持続性検討。 (3) 外部（教育委員会、葛飾区、PTA 等）との連携
10 月 22 日	上平井中学校で、校内学芸発表会が開催される。 場所：同校体育館 参加者：約 500 名（生徒、教職員、父兄、地域の方々、NPO） 内容：同校地域防災ボランティア部員による、ボート訓練始め乗船体験、 スマホアプリ『天才マナブくん』を持って通学路を浸水疑似体験しながらまち歩き或いは、川歩き等の調査・研究成果を発表
10 月 30 日	第 11 回コラボかつしかまつりに参加 場所：立石地区センター別館 参加者：約 1,500 名（NPO 事務局員 2 名） 内容：活動発表、展示、模擬店、シンポジウム
11 月 17 日	朝日航洋（株）鈴田さんが国土地理院から受託した「ハザードマップポータルサイト改良のための調査検討業務」で NPO 来訪。 対応：理事長、渡邊理事 内容：一般向け使い易いサイトに改良するため意見を伺う。
11 月 20 日	三氏（鈴木・石川・徳倉）を語る会 場所：かつしかシンフォニーヒルズ 5F レインボー会議室

	主催：新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会会長 成戸寿彦 出席者：76 名
11 月 24 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校で出前授業。 場所：同校工作室 講師：竹本東新小岩七丁目防火防災部長、塩崎東大院生 対象：70 名（4 年生 67 名、担任教諭 2 名、NPO1 名） 内容：雷に遭遇した体験を語り迅速な避難と、浸水・親水
11 月 26 日	葛飾区地域活動団体助成事業「うらら保育園講演」開催 場所：うらら保育園講堂 講師：中村先生、芝浦工大生 テーマ：大規模水害に備えた街づくり 参加者：41 名（保護者 33 名、教職員 7 名、NPO1 名）
12 月 6 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校で出前授業。 場所：同校集会室 講師：南先生（東大院生）、金先生（東大院生） 対象：第 6 学年生 テーマ：水と親しみながら災害の想像力を鍛えよう
12 月 8 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校。 場所：同校体育館 講師：中川町会長、塩崎講師 対象：98 名（6 年 94 名、担任 3 名、NPO1 名） 内容：カスリーン台風の体験と、過去の水害を問答形式で進め。浸水・ 親水を川が併せ持っている事を説明する。
12 月 15 日	新小岩北地区連合町会の河川工事現場見学 場所：立石八丁目「中川左岸耐震補強工事その 35 工事現場」 参加者：18 名（連合町会員 13 名、NPO1 名、都・施工会社 4 名）
2017 年（平成 29）	
1 月 8 日	◎朝日新聞朝刊 Vol.7 巨大災害「大災害 都市は耐えうるかの記事に中川町 会長、加藤先生の記事が掲載される。
1 月 14 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で特別授業。 場所：松上小学校体育館 講師：寺島玄先生（あらかわ学会） テーマ：新小岩のまちと水害について 対象：108 名（第 6 学年 76 名、担任 3 名、保護者 28 名、NPO1 名） 内容：新小岩の誇れる点を分かり易く話し、カスリーン台風を忘れない ように強調する。
1 月 31 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校。 場所：同校体育館 講師：寺島玄先生（あらかわ学会） 対象：99 名（6 年 94 名、担任 4 名、NPO1 名） 内容：新小岩のまちの歩みと水害の歴史を学ぶ。
2 月 18 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で講演会。 場所：松上小学校体育館 講師：中川先生、塩崎先生（東大院生） 対象：第 3 学年生
3 月 2 日	新小岩北地区の小学校での出前授業のあり方打合せ 場所：東大加藤研究室 出席者：加藤先生、中川・松本両町会長、ゼロメートル市街地研究室員 4 名、NPO 事務局員 5 名 目的：今の授業の在り方、今後の在り方を議論し、次の世代へ繋げる方

	策を見出し、目標を定める。
3 月 11 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で講演会。 場所：松上小学校体育館 講師：竹本東新小岩七丁目防火防災部長、南先生（東大院生） 対象：87 名 （第 5 学年生 82 名、担任教諭 3 名、校長先生、副校長先生、NPO1 名）
3 月 26 日	第 10 回輪中会議を開催する。 場所：新小岩北地区センター1F センターホール 参加者：約 100 名 テーマ：新たな経験を共有し、災害に向き合うも、地域の未来・親水都市も考える 内容：第一部 状況を共有する 町会、行政、加藤先生、上平井中学校、医師会、NPO からの報告 第二部 意見交換 未来を考える 実現方策を考える
4 月 27 日	カスリーン台風襲来 70 周年を振り返るシンポジウム打合せ 場所：都市整備部担当部長室 出席者：中川町会長、NPO 理事長、事務局員 内容：(1) シンポジウムへの区長、幹部職員の出席要請 (2) 会場、共催要請
4 月 27 日	葛飾区郷土と天文の博物館打合せ 場所：郷土と天文の博物 出席者：橋本学芸員、勝田専門調査員、理事長、中川町会長、事務局員 内容：カスリーン台風襲来 70 年シンポジウムへの協力要請。
5 月 24 日	◎建設通信新聞第 7 面に、加藤先生の「浸水対応型市街地構想」と題する記事が掲載される。
6 月 25 日	ア！安全・快適街づくりニュース第 23 号発行
6 月 25 日	第 16 回総会開催 場所：新小岩北地区センター1F ホール 講話：澤村英仁氏（地域活動家） 出席者：58 名 概要：第 7 号議案定款の一部改正を提案し、認められる。 スーパー堤防事業の文言を削除する。
7 月 13 日	機関誌「City&Life」取材申し込み 場所：大成化工（株）3F 会議室 対応：5 名（中川町会長、理事長、事務局員、スタッフ 2 名） テーマ：第 120 号「ライフスタイルとしての防災」 ケーススタディとして NPO を取り上げる。
7 月 31 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校地域防災ボランティア部と地元町会員による工事現場見学会開催。 場所：中川左岸葛飾区奥戸三丁目河畔 参加者：23 名（地域防災部員 5 名、顧問教員 1 名、 上小松、東新小岩五丁目、アーバンライフ各町会員 9 名、 東大院生 2 名、NPO1 名、東京都職員 2 名、施工者 3 名） 内容：都の監督員から全体説明を受け、3 班に分かれ、舁に乗る班、液状化観察班、現場内のテラス班がそれぞれ順に説明を受ける。
8 月 9 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校地域防災ボランティア部と地元町会員による「あらかわ号船上学習会」 場所：荒川下流河川事務所管内 見学区間：知水資料館→旧岩淵水門→志茂船着場（乗船）→綾瀬排水機場→小松川地区高規格堤防→荒川ロックゲート→番所橋（下船）

	参加者：27 名（地域防災部員 5 名、顧問教員 1 名、PTA2 名、 新小岩北地区町会員 14 名、東大院生 2 名、NPO1 名、 荒川下流河川事務所 2 名） 内容：船上座学（講話、説明、質疑応答等）、川から街を見る。
8 月 22 日	葛飾区地域活動団体助成事業「親から子に語り継ぐ大災害時の避難について」を上小松小学校が取り入れることについての打合せ 場所：上小松小学校校長室 参加者：伊藤校長先生、後藤評議員、東原連合町会長、小堀上小松町会副会長、ゼロメートル市街地研究会員、NPO 事務局員 内容：(1) 総合学習として取り組む。 (2) 地域主体として欲しい。 (3) 今年度は従来方式授業とする。来年度は工夫する。
9 月 9 日	シンポジウム開催について 場所：すみだリバーサイドホール
9 月 18 日	公開シンポジウム「災害から学ぶ」～カスリーン台風 70 年の節目に～ 場所：葛飾区男女平等推進センター（ウィメンズパル）ホール 参加者：約 200 名 内容：カスリーン台風の記憶と経験の共有（中川町会長の体験） 水害リスクと賢く共生する親水都市へ（司会：加藤先生）
10 月 7 日	西新小岩 3 丁目高台等整備勉強会有志 5 名が、町内で 2 階以上の建物を図上に表示する。
10 月 7～8 日	全国まちづくり会議 2017 in 横浜 場所：横浜市立大学金沢八景キャンパス YCU スクエア 参加者：約 300 名（NPO1 名、ゼロメートル市街地研究会員 2 名） 内容：ポスターセッションとプレゼンを行い、関心を集めた。
10 月 21 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校学芸発表会。 場所：同校体育館 出演者：地域防災研究部員 対象：約 400 名（生徒全員と保護者、教職員及び NPO5 名） 内容：地域防災研究部員 8 名による調査・研究成果を発表。
10 月 28 日	葛飾区地域活動団体助成事業うらら保育園講演会。 場所：同園講堂 講師：中村先生 対象：32 名（保護者と教職員及び NPO1 名） 内容：洪水と台風・避難、パネル展示とアンケート調査。
10 月 29 日	コラボかつしかまつり 場所：立石地区センター別館 参加者：約 1,600 名（NPO2 名） 内容：活動発表、展示、シンポジウム、模擬店
11 月 11 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校。 場所：同校体育館 講師：中川町会長、塩崎講師 対象：138 名（5 年 118 名、担任 3 名、保護者 16 名、NPO1 名） 内容：カスリーン台風の体験と、川が持つ浸水親水について
12 月 4 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校。 場所：同校家庭科室 講師：竹本東新小岩七丁目町会防火防災部長、南先生 対象：48 名（4 年生 45 名、担任教諭 2 名、NPO1 名）
12 月 9 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校。 場所：同校体育館 講師：塩崎先生

	対象：76 名（3 年生 70 名、担任教諭 2 名、保護者 3 名、NPO1 名）
12 月 19 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校。 場所：同校児童会室 講師：南先生、金先生 対象：54 名（6 年生 51 名、担任教諭 2 名、NPO1 名）
12 月 21 日	川づくり研究会「北小岩地区スーパー堤防見学会」開催 場所：江戸川区北小岩一丁目、東小岩三丁目の一部 施行面積：約 1.4ha 建物数：93 棟 参加者 8 名（理事長、事務局員 5 名、江戸川区土木部区画整理課長、 村上移転造成係長） 内容：江戸川と千葉街道及び JR 総武線に囲まれた住宅街を高規格堤防整 備事業と区画整理事業の共同施工で土地を造成し街を再生する。 事業期間は平成 23 年 5 月 17 日から令和 6 年 3 月 31 日まで
2018 年（平成 30）	
1 月 13 日	葛飾区地域活動団体助成事業上小松小学校出前授業。 場所：同校児童会室 講師：南先生、金先生 対象：54 名（6 年生 51 名、担任教諭 2 名、NPO1 名）
2 月 17 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校出前授業。 場所：同校特別教室 講師：寺島先生 対象 107 名（6 年生 103 名、担任教諭 3 名、NPO1 名）
2 月 17 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校出前授業。 場所：同校体育館 講師：竹本東新小岩七丁目防火防災部長、塩崎講師（東京大学） 対象：92 名（5 年生 88 名、担任教諭 3 名、NPO1 名）
3 月 9 日	浸水対応市街地の在り方の検討会 場所：加藤研究室 出席者：9 名（NPO 理事長、事務局員 5 人、 ゼロメートル市街地研究会加藤、会員 2 名） 概要：治水対策重点区間を治水検討区間として、構想を治水対策に絡め て報告する。報告には、構想のメリットデメリットを挙げ、市街 地側からの視点も記載し、近隣市街地への波及効果にも触れる。 更にワーキンググループを国・都・区で結成し、そこでは避難を柱 としたパイロットプランを得姿を含め、検討する。
3 月 10 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校出前授業。 場所：同校体育館 講師：寺島先生（荒川学会） 対象：72 名（6 年生 69 名、担任教諭 2 名、NPO1 名）
3 月 10 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校出前授業。
3 月 17 日	水害時避難場所高台等整備勉強会（第 38 回）休会を決定。
3 月 25 日	第 11 回輪中会議 場所：新小岩北地区センター 主催：新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会 キーワード：経験の共有・情報の共有 テーマ：親水・浸水とまちづくり及び人づくり 第 1 部：多様な活動報告 ・新小岩北地区連合町会活動報告 エンジン付きゴムボート 7 町会、小学校プールでのゴムボ ート訓練、西新小岩 3 丁目町会有志による勉強会、東新小岩七

	丁目町会発行『避難パンフレット』 ・上平井中学校地域防災ボランティア部活動報告 ・管内 4 小学校での出前授業報告 ・避難についての住民意識ヒアリング結果（大学） ・新小岩公園高台化と 5 区協議会（大規模水害）及び水陸両用 車購入について（葛飾区役所） ・荒川下流河川事務所から近況報告 第 2 部：親水・浸水とまちづくり及び人づくり 浸水対応型市街地形成について 加藤先生報告
5 月 17 日	ホームページの見直しを（第 190 回）事務局会議に理事長提案 見易く読み易いホームページとする。現在の活動内容に相応しいホームペ ージとする。
6 月 10 日	新小岩北地区連合町会水防訓練 場所：東立石緑地公園 （中川七曲り右岸と奥戸一丁目遊歩道テラス左岸） 参加者：約 200 名 （各町会員、葛飾区、本田消防署、同消防団、葛飾警察署、NPO） 内容：エンジン付きゴムボート操船、救援救助、搬送
6 月	緊急時ボート使用に関する協定書（三者協定） NPO 所有のボートを新小岩北地区連合町会が、緊急時或いは平常時の訓練 に、大成化工ホールディング（株）の了解のもと、同倉庫から搬出・搬入 する権限を委譲する協定である。
6 月 24 日	ア！安全・快適街づくりニュース第 24 号発行
6 月 24 日	第 17 回総会 場所：新小岩北地区センター 講話：岡田雅樹先生（極地研・第 58 次南極基地越冬隊長） 評議員会・理事会 総会：第 1 号議案から第 4 号議案が審議され承認された。 その後質疑応答があり午後 4：30 頃終了した。
7 月 15 日	合同ボート訓練実施 場所：中川左岸（西新小岩 3・5・1） 参加者：15 名（東新小岩 7 丁目町会 4 名、上小松町会 6 名、NPO5 名） ルート：乗船 中川→河口→隅田川→日本橋川→神田川→隅田川→ 河口→中川 下船 留意点：他の船との擦れ違いの際の波立ちに注意。 艇内へのしぶきを拭くタオル。十分な燃料準備。接岸用の竿。
8 月 16 日	事務局会議（第 193 回）開催 場所：東大加藤研究室 出席者：9 名 （加藤先生、理事長、ゼロメートル市街地協議会員、NPO 事務局員 6 名） 概要：ホームページの見直しを行い、帯（ナビゲーション・バー）のタ イトルは 7 項目、帯は 4 項目とし、それぞれの担当を決める。
8 月 26 日	浸水対応型市街地構想（案）説明会 場所：スマイルホーム西井堀 5F 地域交流スペース 参加者：約 200 名 （NPO 事務局員 3 名、ゼロメートル市街地協議会員 1 名） テーマ： 葛飾区まちづくりシンポジウム～浸水対応型市街地の形成に向けて～ 概要：挨拶 区長 講演 加藤先生 構想案の説明 目黒課長

	パネルディスカッション：建築関係 今井先生
8 月 29 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校地域防災ボランティア部と地元町会員による工事現場見学会開催。 場所：中川左岸本奥戸橋上下流区間 参加者：24 名（地域防災部員 7 名、顧問教員 1 名、新小岩北地区町会 7 名、東大院生 2 名、NPO1 名、東京都職員 2 名、施工者 4 名） 内容：立石緑地船着場で、都の職員から「耐震補強工事」の全体説明を受け、現場代理人の方から詳細な工事現場の説明があった。 続いて、掘削機械（模型）の実習班と液状化観察班に分かれ各自体験し合った。 その後、大型遊覧船に乗り、工事現場を間近から具に見学し、「迫力満点の経験をした。」との感想が聞かれた。
9 月 20 日	事務局会議（第 194 回）で、ホームページを活動毎に帯（ナビゲーションウインドウ）にタイトルを付し、担当を決める。
9 月 30 日	平成 30 年度広域避難推進シンポジウム開催 場所：足立区役所中央館 2 階ホール 参加者：約 350 名 主催：江東 5 区広域避難推進協議会 パネルディスカッション：パネリスト 加藤先生
10 月 20 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校校内学芸発表会 場所：上平井中学校体育館 参加者：約 400 名（全校生徒、保護者、地域の方々） 内容：地域防災ボランティア部員（8 名）による、調査、見学、体験等の成果をまとめ整理し結果を発表
11 月 10 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校校特別授業 場所：二上小学校体育館 講師：寺島先生（荒川学会員） 参加者：98 名（6 年生 94 名、担任教諭 3 名、NPO1 名）
11 月 10 日	西新小岩三丁目、一・二丁目町会、都営アパート自治会合同防災訓練 事前打合せ 場所：新小岩中学校家庭科室 出席者：15 名（各町会・自治会長、役員、青木校長先生、副校長先生、区役所職員、消防団、NPO1 名） 概要：訓練内容（AED、救援・救護、訓練場所、スタンドパイプ放水、給水浄化、簡易トイレ設置等）のチェック、パネル展示の位置確認、生徒の参加について
11 月 16 日	葛飾区有形文化財登録「古井戸」の復元と活用について申し入れ。 場所：東京都建設局三浦道路監室 出席者：4 名 （青柳新小岩北地区連合町会長、理事長、NPO 事務局員 2 名） 要旨：(1) 都営住宅建替え期間中の「古井戸」の保管・防護と復旧方法を検討頂きたい。 (2) 防護に関し、地震で倒壊しないよう出来るだけ元の姿に復元願いたい。 (3) 復元の際は、「古井戸」の意義を記した説明版を、小中学生も含む地元の方々の訪問を考慮し、安全策を講じて頂きたい。 (4) 復元に際し、地元を主体としたセレモニーを行う場合は、協力願いたい。
11 月 17 日	葛飾区地域活動団体助成事業上小松小学校出前授業 場所：上小松小学校体育館 講師：中川町会長、塩崎先生（東大院生）

12 月 1 日	葛飾区地域活動団体助成事業うらら保育園講演とパネル展示 場所：うらら保育園講堂 講師：中村教授（芝浦工大）、大学生 対象：27 名 （うらら保育園保護者 22 名、うらら・たつみ保育園教職員 5 名） 概要：新小岩の特性を語り、洪水時の逸早い避難を広域・避難場所・垂直と的確に判断する必要性を日頃から養う大切さを訴えている。
12 月 22 日	西新小岩三丁目、一・二丁目町会、都営アパート同防災訓練 場所：新小岩中学校 参加者：176 名 （各町会・自治会長、役員、青木校長先生、副校長先生、区役所職員、本田消防署上平井出張所、消防団、医師会、NPO3 名） 概要：訓練内容（AED、救援・救護、訓練場所、スタンドパイプ放水、給水浄化、簡易トイレ設置等）のチェック、パネル展示の位置確認、生徒の参加について
2019 年（平成 31 年/令和元年）	
1 月 19 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校出前授業 場所：二上小学校体育館 講師：中川町会長、塩崎先生（東大院生） 対象：129 名（5 年生 124 名、担任教諭 4 名、NPO1 名）
1 月 25 日	「浸水に対応した街づくり検討会」を受けての打合せ。 場所：東大加藤研究室 参加者：ゼロメートル市街地協議会（加藤先生、会員、新小岩北地区連合町会長、葛飾区役所、地元企業、NPO 理事長、事務局員） 概要：国の「重要インフラの緊急点検に関する関係閣僚会議」を受け、過日（1 月 10 日）関東地方整備局が主催する「平成 30 年度第 4 回事業評価監視委員会」荒川高規格堤防整備事業（西新小岩地区）が議題となり、検討の結果、本地区の事業を実施することが妥当であるとした。検討会は、1 月 24 日開かれ、今後新たな協議会立上げが予定されており、この協議会が地元対応をすると思われる。NPO としての立ち位置を考えて行く必要がある。
2 月 16 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校出前授業 2 コマ実施。 場所：松上小学校ワクチャレ室 講師：竹本東新小岩七丁目防火防災部長、南講師（東大院生） 対象： 第 2 時限：129 名（5 年生 124 名、担任教諭 4 名、NPO1 名） 第 3 時限：93 名（3 年生 89 名、担任教諭 3 名、NPO1 名）
3 月 1 日	輪中会議に向けて葛飾区との打合せ 場所：葛飾区都市整備部担当部長室 参加者：5 名 （荒川下流河川事務所 1 名、部長、担当課長、事務局員 2 名） 概要：参加団体のテーマや議題等を話し合う。
3 月 9 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校出前授業 2 コマ実施。 場所：上平井小学校児童会室 講師： 第 1 時限：竹本東新小岩七丁目防火防災部長、南講師（東大院生） 第 2 時限：南講師（東大院生）、金講師（東大院生） 対象： 第 1 時限：64 名（4 年生 58 名、担任教諭 2 名、父兄 3 名、NPO1 名） 第 2 時限：65 名（6 年生 65 名、担任教諭 2 名、父兄 9 名、NPO1 名）
3 月 9 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校特別授業（第 1 時限）

	場所：松上小学校体育館 講師：寺島先生（荒川学会） 対象：94 名（6 年生 85 名,父兄 4 名,担任教諭 4 名,NPO1 名）
3 月 24 日	葛飾区生涯学習援助制度対策「災害から身を守る！」 第三回特別プロジェクト 場所：立石地区センター別館 2F 会議室 主催：たまり場カフェ葛飾共催：NPO テーマ：最新デジタル技術で、災害から身を守る 講師：(株) キャドセンター企画室プランナー 古川修氏 参加者：35 名 概要：スマートフォンアプリ『天サイ！まなぶくん』を使って 今、自分が居る所の水深深さを疑似体験する。
4 月 7 日	輪中会議開催（第 12 回） 場所：新小岩北地区センター 主催：新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会 テーマ：親水・浸水×まちづくり×人づくり 概要：第 1 部 多様な活動報告 地域、小中学校、大学、行政、NPO 第 2 部 親水・浸水×まちづくり×人づくり 大学、専門家から 意見交換
4 月 7 日	五建敷地内の「古井戸」復元に伴うセレモニー打合せ 場所：NPO 事務室 参加者：青柳新小岩北地区連合町会長、中川町会長、葛飾区役所小出防 災係長、太田主事、理事長、事務局 2 名 概要：会場を古井戸のある駐車場と五建会議室の 2 個所とし、式の段取 を中心に、除幕式、上平井中学校吹奏楽部の演奏、ワークショッ プ、説明板の下書き等を行う。
6 月 30 日	ア！安全・快適街づくりニュース（第 25 号）発行
6 月 30 日	第 18 回総会 場所：新小岩北地区センター 講話：「デジタル表現技術における防災情報の捉え方と伝え方 —CADCENTER の防災分野への取り組み」 講師：(株) キャドセンター GIS グループ 空間情報デザインチームリーダー 河原 大氏 議題：評議員会において第 1 号議案から第 6 号議案迄が審議されいづれ も同意され、続く理事会、総会においても同意された。 尚、総会に於いて活発な質疑応答がなされ、予定を越えた、17 時 前に総会は終了した。
7 月 5 日	「新小岩公園再整備基本構想等の検討に関する説明会」を開催 場所：新小岩北地区センター4F ホール 主催：葛飾区都市整備部 参加者：25 名
7 月 10 日	「新小岩公園再整備基本構想等の検討に関する説明会」を開催 場所：新小岩地区センターホール 主催：葛飾区都市整備部 参加者：27 名
7 月 20 日	ア！安全・快適街づくりフリーディスカッション 場所：加藤研究室 出席者：9 名 （広域ゼロメートル市街地協議会 加藤先生、協議会員 2 名、 NPO 理事長、事務局員 5 名） 主な話題：輪中会議での発言整理とまとめ、従来の「街づくりニュース」

	と今の「ニュースレター」について、出前授業の感想文とワー クシートの整理、その他
7 月 26 日	◎朝日新聞夕刊 13 面に「地盤沈下の証し」の見出しで東京都第五建設事務 所駐車場に、復元された「古井戸」の記事が掲載される。
9 月 14 日	ア！安全・快適街づくり事務局会議（第 205 回） 場所：東大加藤研究室 参加者：12 名 （青柳新小岩北地区連合町会長、東原上小松町会長、中川東新小岩七丁 目町会長、上平井中学校太田先生、広域ゼロメートル市街地協議会加 藤先生、協議会南会員、NPO 理事長、同事務局員 5 名） 概要：(1) 「古井戸」復元セレモニーの内容説明と地元町会の協力方要請。 (2) 葛飾区地域活動団体助成事業（出前授業と上平井中学校地域防災 ボランティア部活動支援）の課題と今後の進め方 ① プレゼンの内容・構成見直し。 ② 誰でも講師が務まるパワーポイント作成。 ③ 出前授業記録のまとめと整理。 ④ ワークシートと感想文様式の見直し。 ⑤ 部活活動の記録整理とまとめ。
10 月 19 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校校内学芸発表会 場所：上平井中学校体育館 参加者：約 400 名（全校生徒、保護者、地域の方々） 内容：地域防災ボランティア部員（8 名）による、調査、見学、体験等の 成果をまとめ整理し結果を発表
10 月 24 日	ア！安全・快適街づくり事務局会議（第 206 回） 場所：東京都第五建設事務所大会議室 参加者：22 名 （青柳新小岩北地区連合町会長、東原上小松町会長、中川東新小岩七丁 目町会長、上平井中学校太田先生、同森山先生、同地域防災ボランテ ィア部員 5 名、五建松村副所長、同吉川統括課長代理、葛飾区役所小 出防災係長、太田主事、葛飾区広域ゼロメートル市街地協議会加藤先 生、協議会南会員、NPO 理事長、同事務局員 5 名） 概要：(1) 「古井戸」復元セレモニー式次第の手順確認 (2) 町会、区役所、五建、NPO が準備する物品の確認。 (3) 除幕式の段取と必要品の確認。 (4) 除幕式に綱を引く小学生の確認。 (5) 招待者への発送 (6) 第 1 会場から第 2 会場への移動。 (7) その他（悪天候、吹奏楽器運搬等）
11 月 9 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校校特別授業 場所：二上小学校体育館 講師：寺島先生（荒川学会員） 参加者：121 名 （6 年生 107 名、担任教諭 3 名、保護者 10 名、NPO1 名）
11 月 9 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校で出前授業 2 コマ。 場所：同校児童集会室 講師：竹本東新小岩七丁目町会役員、南先生（東大院生） 対象： 第 3 時限：4 年生 81 名 （生徒 58 名、担任教諭 2 名、保護者 20 名、NPO1 名） 第 4 時限：6 年生 93 名 （生徒 65 名、担任教諭 2 名、保護者 25 名、NPO1 名）

11 月 30 日	地盤沈下の生き証人「古井戸」を未来につなぐ会 ～復元を記念して～ 場所：東京都第五建設事務所 1F 屋内駐車場、3F 大会議室 セレモニー：上平井中学校吹奏楽部演奏 古井戸と説明板紹介 除幕式 ミニシンポジウム： ①上平井中学校地域防災ボランティア部員の説明版が出来るまでを紹介。 ②南氏による地盤沈下の実態と「古井戸」保存の意義。 ③山上氏による「古井戸」の保存・復元の経緯 ④石井氏による井戸と地域。 ⑤古川氏による IT など記憶継承のための新技術。 ⑥小豆嶋氏による話を聞いて感じたこと。 ⑦未来へつなぐためのコメント
12 月 6 日	城東ブロック災害ボランティアセンター研修会 場所：青戸地区センター4F ホール 対象：城東ブロック 5 区の社会福祉協議会職員、高齢者、障がい者、子育て、外国人支援などを行っている団体 参加者：約 200 名（青柳新小岩北地区連合町会長、NPO2 名） 概要： 基調講演：明城全国災害ボランティア支援団体ネットワーク事務局長 グループディスカッション：1 テーブル 10 数人が 10 テーブルに分かれ、各団体が活動内容や問題点を紹介し、互いに意見を出し合った。
12 月 7 日	葛飾区地域活動団体助成事業うらら保育園講演とパネル展示 場所：うらら保育園講堂 講師：中村教授（芝浦工大）、芝浦工大学生 対象：40 名（うらら・たつみ保育園 保護者 32 名、教職員 8 名）
12 月 14 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校特別授業。第 3 時限 場所：松上小学校体育館 講師：寺島先生（荒川学会員） 対象：96 名（6 年生 78 名,保護者 15 名,担任教諭 2 名,NPO1 名）
12 月 14 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校出前授業。第 4 時限 場所：松上小学校体育館 講師：竹本東新小岩七丁目防火防災部長、南講師（東大院生） 対象：112 名（3 年生 88 名,保護者 20 名,担任教諭 3 名,NPO1 名）
2020 年（令和 2）	
1 月 18 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校出前授業。 場所：同校 5 年 3 組教室 講師：中川町会長、南講師 対象：140 名（5 年生 110 名,担任教諭 4 名,父兄 25 名,NPO1 名）
2 月 8 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校出前授業。 場所：同校ワクチャレ室 講師：竹本東新小岩七丁目防火防災部長、南講師 対象：100 名（5 年生 75 名、父兄 20 名、教諭 4 名、NPO1 名）
2 月 17 日	葛飾区地域活動団体助成事業上小松小学校出前授業。 場所：同校体育館 講師：中川町会長、南講師 対象：116 名（5 年生 112 名,担任教諭 3 名,NPO1 名）
2 月 26 日	輪中会議最終打合せ 場所：加藤研究室 内容：3 月 8 日開催予定を変更する。

2 月 26 日	モザンビーク国ベイラ市防災関係者との交流及び研修会開催 場所：新小岩北地区センター1F 大ホール 出席者：ベイラ市防災関係者 10 名 ゼロメートル市街地協議会加藤先生、協議会会員 1 名 中川町会長、竹本東新小岩七丁目町会防火防災部長 NPO 理事長、事務局員 概要：①ハザードマップの整備・活用 ②行政側のマイ・タイムラインの作成と取組み ③住民側のマイ・タイムラインの記載方法 ④避難計画の策定 ⑤避難計画策定に関する相互連携の方策
3 月 5 日	台風第 19 号に関するヒアリング実施① 場所：葛飾区役所地域振興部危機管理課 対応：5 名（同課太田主事、NPO 事務局員 2 名、ゼロメートル市街地協議会 2 名）
3 月 10 日	台風第 19 号に関するヒアリング実施② 場所：東新小岩七丁目町会事務所 対応：6 名（中川町会長、竹本副会長、NPO 事務局員 2 名、ゼロメートル市街地協議会 2 名）
3 月 10 日	台風第 19 号に関するヒアリング実施③ 場所：二上小学校校長室 対応：5 名（景山校長先生、NPO 事務局員 2 名、ゼロメートル市街地協議会 2 名）
3 月 10 日	台風第 19 号に関するヒアリング実施④ 場所：青柳家具店 対応：5 名（青柳西新小岩五丁目町会長、NPO 事務局員 2 名、ゼロメートル市街地協議会 2 名）
3 月 18 日	台風第 19 号に関するヒアリング実施⑤ 場所：上小松町会会館 対応：6 名（東原上小松町会長、工藤役員、NPO 事務局員 2 名、ゼロメートル市街地協議会 2 名）
3 月 23 日	台風第 19 号に関するヒアリング実施⑥ 場所：新小岩北地区センター 対応：5 名（石丸センター長、NPO 事務局員 2 名、ゼロメートル市街地協議会 2 名）
6 月 16 日	令和元年度総会は、中止し議案は郵送とする旨の文書送付
7 月	ア！安全・快適街づくりニュース（第 26 号）発行
9 月 15 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校で出前授業 2 コマ 場所：同校くさのめブレイルーム 講師：竹本東新小岩七丁目町会役員、南講師（東大院生） 対象： 第 2 時限：4 年生 51 名 （生徒 46 名、父兄 1 名、教諭 2 名、副校長先生,NPO1 名） 第 3 時限：6 年 1 組 34 名 （生徒 31 名,担任教諭 1 名,副校長先生 1 名,NPO1 名） 第 4 時限：6 年 2 組 33 名 （生徒 31 名、担任教諭 1 名、NPO1 名）
10 月 13 日	葛飾区地域活動団体助成事業上小松小学校で出前授業 場所：同校体育館 講師：南講師（東大院生）

	対象：第 5 年生 113 名 (生徒 107 名、教諭 3 名、校長先生、副校長先生、NPO1 名)
11 月 16 日 ～20 日	葛飾区地域活動団体助成事業うらら保育園でビデオ講演 場所：うらら保育園応接室 講師：中村先生（芝浦工大教授） 対象：18 名（保護者 12 名、教職員 6 名） 内容：講師が作成した「葛飾区ハザードマップを読み解く」を定時に来園した保護者に視聴して貰い、その後園の先生と避難について話し合った。
12 月 7 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校地域防災ボランティア活動支援 場所：上平井中学校理科室 講師：中川町会長 参加者：9 名（部員 7 名、顧問教諭、東大院生） 概要：カスリーン台風体験者から当時の避難生活を聞き取る。
12 月 12 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校で出前授業 場所：同校体育館 講師：中川町会長、岸田講師（コンサルタント会社勤務） 対象：第 5 年生 119 名 (生徒 113 名、教諭 3 名、校長先生、副校長先生、NPO1 名)
2021 年（令和 3）	
1 月 16 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校で特別授業 場所：二上小学校体育館 講師：寺島先生（荒川学会） 対象：122 名（6 年生 117 名,担任教諭 3 名,副校長,NPO1 名）
2 月 13 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で出前授業 第 3 時限 場所：松上小学校体育館 講師：竹本東新小岩七丁目町会副会長、南講師（東大院博士課程） 対象：85 名（5 年生 80 名,担任教諭 3 名,副校長,NPO1 名）
2 月 13 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で出前授業 第 4 時限 場所：松上小学校体育館 講師：寺島先生（荒川学会） 対象：80 名（6 年生 75 名,担任教諭 3 名,副校長,NPO1 名）
3 月 6 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で出前授業 第 3 学年 場所：松上小学校体育館 講師：竹本東新小岩七丁目町会副会長、南講師（東大院博士課程） 対象：91 名（3 年 85 名,父兄 1 名,教諭 3 名,副校長,NPO1 名）
3 月 7 日	災害時逃げ遅れをゼロにするアプリ『天サイ！まなぶくん 2』実地検証 場所：東新小岩七丁目町会会館 対象：11 名 (東新小岩七丁目町会中川会長、役員 6 名、(株) キャドセンター 2 名、NPO2 名) 内容：各自のスマホにアプリを入れ、それぞれの役割に沿って、司会役の指示に従いスマホを操作して、救助を待った。
4 月 22 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校 場所：上平井中学校理科室 出席者：9 名（部員 8 名、顧問教諭） 概要：輪中会議準備、年間活動計画案作成。
5 月 9 日	第 14 回 WEB「輪中会議」（2021） 場所：新小岩北地区センター1F ホール テーマ：親水・浸水×まちづくり・ひとづくり×近所・近助 場所：自宅か新小岩地区センターか東新小岩七丁目町会会館

	内容：新小岩北地区連合町会、理事長挨拶 基調講話： ①加藤先生（浸水対応型市街地×流域治水×コロナ） ②早川荒川下流河川事務所長（近年水害と治水対策） ③情野都市整備部長浸水対応型拠点建築物などの取り組み状況 多様な活動報告と意見交換： ④各町会や地域活動から ⑤小中学校から ⑥大学から ⑦行政から ⑧企業から ⑨NPO から
5 月 9 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校 場所：新小岩北地区センター1F ホール 出席者：9 名（部員 8 名、顧問教諭） 概要：輪中会議 Web 参加。質疑応答で質問を行う。
5 月 13 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校 場所：上平井中学校理科室 出席者：7 名（部員 6 名、顧問教諭） 概要：輪中会議感想文作成、今後の活動方法議論。
9 月	ア！安全・快適街づくりニュース（第 27 号）発行
9 月 11 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井小学校で出前授業 2 コマ 場所：上平井小学校体育館 講師：荳野講師（東新小岩七丁目町会防火防災部長）、南先生 対象： 第 1 時限：第 6 年生 57 名 (生徒 52 名、教諭 2 名、校長先生、副校長先生、NPO1 名) 第 2 時限：第 4 年生 53 名 (生徒 48 名、教諭 2 名、校長先生、副校長先生、NPO1 名)
10 月 4 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校 場所：上平井中学校理科室 出席者：6 名（部員 5 名、顧問教諭） 概要：洪水を引き起こす川の上流を討議、源流域の議論を行う。
10 月 15 日	葛飾区地域活動団体助成事業上小松小学校で出前授業 場所：同校体育館 講師：中川町会長、南先生（東大院博士課程） 対象：第 5 年生 103 名 (生徒 97 名、教諭 3 名、校長先生、副校長先生、NPO1 名)
11 月 13 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校で出前授業 場所：同校体育館 講師：中川町会長、岸田講師（コンサルタント会社勤務） 対象：第 5 年生 113 名 (生徒 107 名、教諭 3 名、校長先生、副校長先生、NPO1 名)
11 月 15 日 ～19 日	葛飾区地域活動団体助成事業うらら保育園でビデオ講演 場所：うらら保育園応接室 講師：中村先生（芝浦工大教授） 対象：18 名（保護者 15 名、園長先生、主任先生、教職員 1 名）
12 月 11 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で出前授業 場所：同校体育館 講師：荳野東新小岩七丁目防火防災部長、南先生（東大院博士課程） 対象：第 5 年生 102 名 (生徒 91 名、担任教諭 3 名,校長先生、副校長先生、父兄 5 名、NPO1 名)
12 月 20 日	葛飾区地域活動団体助成事業上平井中学校 場所：上平井中学校理科室

	出席者：8 名（部員 7 名、顧問教諭） 概要：カスリーン台風の体験者（中川町会長）から避難生活について今年も新たな話を聞くと共に、現在町会が取り組んでいる避難訓練の様子も話して貰う。
2022 年（令和 4）	
1 月 15 日	葛飾区地域活動団体助成事業二上小学校で特別授業 場所：二上小学校体育館 講師：寺島先生（荒川学会） 対象：121 名（6 年生 113 名、担任教諭 4 名、父兄 1 名、校長先生、副校長先生、NPO1 名）
2 月 19 日	葛飾区地域活動団体助成事業松上小学校で出前授業 2 コマ 場所：同校体育館 講師： 第 2 時限：菅野氏（東新小岩七丁目）、南先生（東大院博士課程） 第 3 時限：寺島玄先生（荒川学会） 対象： 第 2 時限：3 年生 90 名 （生徒 84 名、担任教諭 3 名、校長先生、副校長先生、NPO1 名） 第 3 時限：6 年生 90 名（生徒 81 名、担任教諭 3 名、校長先生、副校長先生、出版社 2 名、フリージャーナリスト 1 名、NPO1 名）



学校から



新生「地域防災ボランティア部」

太田 恵理子
葛飾区立上平井中学校 顧問

上平井中学校地域防災ボランティア部は、創部 15 周年を迎えています。本年度は 12 名（1 年生 1 名、2 年生 6 名、3 年生 5 名）で週に 2 回、放課後の時間に楽しく朗らかに活動しています。4 月からの主な活動としては、壁新聞を作成し、防災に関する理解を進めてきました。記事をまとめる過程で備蓄の工夫について調べ学習を行い、普段から防災に備えた心がけで過ごすことの大切さを学びました。

机上の学習には限界がありますが、NPO「ア！」の皆様には、様々な学びの機会を与えていただき、より活動の幅を広げることができています。中学生にとって、人生の大先輩方と一緒に活動する体験は、この上ない学びの機会です。また東京大学の南先生によるきめ細やかなご指導のおかげで、生徒は防災に関する知識をより深めることができていますが、これらの知識を学校の生徒全体に伝えていくことが次のステップとなりそうです。今年は数年ぶりに学芸発表会も開催できる見通しとなり、地域防災ボランティア部として全校生徒を対象とした発表を行えることとなりました。コロナによる活動制限を乗り越えて、本年度は、また新たな気持ちで、輪中会議への参加、施設訪問、防災食試食など新たな取り組みに挑戦したいと考えています。

地域防災ボランティア部の活動

部長 浅賀 日菜美

私たち地域防災ボランティア部は、防災について学んだり、ボランティア活動に積極的に参加したりしています。現在は、全校生徒に向けた防災新聞を部員みんなで調べ作っています。また、今回 NPO「ア！」の活動に参加することができ、普段の活動では学ぶことのできないことや、貴重なお話を聞くことができたので、これからの部活動に生かしていけたら良いと思いました。大人の方々との、お話などを通して私たちが知らない事実や実際に体験された災害についてたくさん教えていただき、もっと災害について知りたいと感ずることができました。一緒に活動した NPO「ア！」の方々と地域の水害について真剣に考えることや、話し合うことができ、これから私たちがどのように対策すれば良いか改めて考えることができました。また、私は防災士の試験にも合格できました。これからも部活動を通して地域の皆さんと協力して色々な活動ができたら嬉しいです。

[各部員より]

- ・地ボラでは最年少の自分ですが、地域の一員として防災やボランティアなどの活動に取り組んでいきたいです。(1 年 勝又大喜)
- ・地ボラ部員として今後何かあった時に役に立てるように全力で活動を頑張っていきたいです。(2 年 尾崎坊苺奈)
- ・災害についての知識を少しでも多くの人に知ってもらえるように頑張っていきたいです。(2 年 鎌田怜来)
- ・近年増えてきている地震についてさらに詳しく知ること、いざという時に、得てきた知識を役立てられるようにしたいです。(2 年 熊田柚衣)
- ・私たちは月・木の放課後に図書室で活動しています。これからもたくさん調べ学習を進めていきたいです。(2 年 佐藤海瑠)
- ・地ボラに入って防災のことに少しだけ詳しくなれました。その知識を役立てて、いざというときに家族を守れるようにもっとたくさんを知りたいです。(2 年 鈴木里奈)
- ・私は地ボラに入って主に災害の対策や備蓄のことについて調べてきました。今年は、去年コロナの関係でできなかったボランティア活動に力を入れたいです。(2 年 4 組 芳賀優稀奈)
- ・地ボラに入部してから僕は、地域で起こる可能性のある災害やその対策について調べたり体験したりしてきました。引退した後も部活で学んだことを生かして、身近な災害について伝えていく活動をしていきたいです。(3 年 大場悠生)
- ・地ボラに入ったことで、僕はおそらく入っていなければ関わることのなかった人たちや世界に触れることができました。地ボラを通してこれからも地域の方々と接していきたいです。(3 年 中村亮太)



96

97

出前授業のこれから ～多様化・継承・連携へ～

南 貴久
東京大学生産技術研究所 加藤孝明研究室

本年度も NPO ア！安全・快適街づくりでは、新小岩地区の各小学校で、水害に関する出前授業を行った。本年度の大きな動きとしては、主に次の 2 つが挙げられる。

まず 1 点目として、講師陣の多様化が進んだことがある。以前から出前授業に関心を寄せてくれていた、上平井中学校地域防災ボランティア部 OB の小豆嶋勇誓さん、増渕桜太朗さん、勝又一喜さんの 3 名が、新たに出前授業の講師としてデビューを果たしたのだ。小豆嶋さんは大学 1 年生、増渕さんと勝又さんは高校 2 年生である。私も 30 代に差し掛かろうとしているいま、子供たちとより近い目線をもつ若い世代にも講師を継承していくことは非常に重要であると考えていたため、彼らが積極的に関わりたいと申し出てくれたことはとても大きな意味を持つ。

2 点目として、新たに小松南小学校での出前授業が開始されたことにより、新小岩地区（北・南）のすべての子供たちに出前授業を受ける機会が設けられることになった。これは、各小学校の先生方のご理解と、葛飾区役所のご協力、そして学校側との調整に尽力された NPO ア！事務局の増澤さんの存在があつてこそのものであることを付言したい。新たに出前授業が始まった小松南小学校では、校長先生の防災への関心が高いことにも驚かされた。校内でも独自の取り組みをされているとのことであったが、NPO との連携もより発展させていければと願っている。

つぎに、出前授業の今後の展望について述べたい。まず、今年度の NPO ア！では、これまでの出前授業で話してきた内容を冊子にまとめる「出前授業の副読本作成事業」が行われている。詳細は別稿で述べるが、本年度作成した NPO 独自の「副読本」の活用や改良について、次年度以降、各学校や区と研究する場を設け、より効果的な出前授業が実施できるように歩みを進めたい。

また課題として、近年出前授業の内容がマンネリ化している部分もある。基礎知識的な部分は「副読本」の配布によってカバーし、授業では議論やワークショップなど実践的な要素を積極的に取り入れ、アウトプットを重視した内容に転換していくことを検討したい。さらに、コロナ禍の収束に合わせて、かつて行っていたような校外学習（「天サイ！まなぶくん」を活用したまちあるきなど）も少しずつ取り入れていけると、さらに実践的な学習ができるのではないかと思う。そして、子供たちとの対話から、我々自身も学びを得る姿勢を忘れないことも非常に重要であると考えている。

防災・減災×アクティブラーニング

寺島 玄
あらかわ学会

私は「防災・減災」を切り口としたテーマがアクティブラーニングに適していると考えている。

アクティブラーニングとは主に学校教育の場において生徒たちが問題意識を抱いたテーマについて調べ、グループワークやディベートを通じて問題を解決してく新しい能動的な学習手法である。従来行われていた教師から生徒へとの「一方的」な、かつ試験のための暗記中心の「受動的」学習への反省から文部省が「学習指導要領の考え方」で推奨した平成 29 年度以降、多くの教育現場で導入されている。

私は数年来、松上小、二上小で出前授業を担当させていただいている。〈地域が災害ハイリスク地帯であること〉〈過去たびかさなる被災を経て地域の結束が強化され防災、減災活動が活発になされていること〉を知ってほしいとの狙いから「新小岩地区の防災活動の歩み」について、とりわけ横田実氏の手記『カスリーン台風風水害点描』を読み解くことに力点を置いて、6 年生に話をしている。

同テーマに関してはこれといった基本的な教材もなくほぼ「未開拓」の分野ともいえる。内容は防災にとどまらず、背景に触れざるを得ないことから、歴史、民俗、地勢をはじめ土壌、植生、機械工学、化学、社会科学、統計…へと及ぶ。いざ取り組むとなると「教科」の枠組みを超え、加えて先行例がないこともあり、まとまりがつかない対象ではあるが、その分本人の問題意識と意欲次第で主体性や創造性が発揮できる分野でもある。

くわえて、同テーマは生徒間（同地域で教鞭をとる教師にとっても）が共有しやすいテーマであることからグループワークやディベートにふさわしい。

生徒たちが授業後に寄せた感想に「新小岩について初めて知った」「この地域が防災活動が盛んなことを知った。街の誇りだと思う」「地域について調べてみたくなった」等が多いことに注目したい。身近な切実な問題に触れることで「能動的な学習意欲」が触発されたように思える。

以上、私的体験からの雑感で恐縮ではあるが、「防災・減災」を切り口としたテーマはアクティブラーニングに適した素材であると思われる。本 NPO には数年来の出前授業の成果が集積されている。このかけがえのない「資産」を活かし、「防災・減災」を切り口としてアクティブラーニングのカリキュラムを作成し、学校教育側に持ち掛けてみることも一考であると思う。

出前授業の講師を通して

小豆嶋 勇誓

武蔵野大学 文学部 日本文学文化学科
上平井中学校 地域防災ボランティア部 OB

1. はじめに

2022 年 10 月 15 日、上平井小学校の第 4 学年と第 6 学年を対象とした出前授業を、南さん、苅野さんと共に行いました。私の出前授業講師としてデビューの授業です。このような貴重な機会を与えてくださったこと、感謝いたします。講師としてまだ至らぬ点も多いかと思いますが、何卒宜しくお願い致します。

2. 出前授業を通じて

以前から、出前授業の見学はさせていただいていましたが、今回は私自身も自ら講師として初めて子どもたちの前で防災について授業しました。

はじめは非常に不安でした。初めて講師として前に立つにあたって、どうやって話していけばよいか、どうしたら子どもたちの興味を引き出し、考えてもらえるようにできるか……。私は大学で文学を専攻しているほかに、教育学を専攻して学んでいます。それゆえ、教育をするということの難しさや、子どもたちに対する接し方の難しさを、講義を通じて学んでいました。そのこともあり、さらに不安だらけで教壇に立ちました。

しかし、いざ子どもたちの前に立ってみると、その不安を吹き飛ばすかのような子どもたちの素直な目と、学ぶ意欲がひしひしと伝わり、実に充実した時間にすることができました。子どもたちは私たち講師陣が言わんとしていることをスパッと発言し、時に講師陣が驚きを隠しきれないほど予備知識が入っていることに非常に感心しました。ひとえに、現場教育における、防災教育の充実と、子どもたちの学習意欲にあると感じます。

宮城県名取市閑上地区の原稿でも述べましたが、こうした防災教育は非常に重要な役割を担っています。私たちの暮らす地域の危険性を適切に知り、適切に警戒心を持っておくこと、これがこれから起こりうる災害に対して減災につながるためには必要なことだろうと思っています。出前授業を通じて、こうした防災に貢献できること、非常に嬉しく思います。

3. これからの将来に対して

前述した通り、私は大学で文学を専攻している傍ら、教育学も専攻して、子どもたちの成長や教育の原理、教育現場の仕組み等、教育について学んでいます。私の将来の夢は教師となり、子どもたちを教えることです。教職課程で、実際に学校に赴き、教壇に立つ教育実習という授業もありますが、これ以前にこのように子どもたちの前で授業することができる機会は私にとって非常

に貴重な経験であり、勉強になることであります。子どもたちの反応、自分が発した言葉に対する子どもたちの答え、話の持っていく方どれもこれも今後につなげていけることです。

出前授業の講師陣の皆さんと一緒に講師ができることに感謝しつつ、これからもさらに幅を利かせた、授業を皆様と作り上げ、防災力に貢献していきたいと思っています。

二上小学校 5 年生による出前授業（2022 年 9 月 10 日）の感想文より抜粋

・自分の部屋が何 m かを言周べておき、
水害予想水位 と比べてみようと思います。
・カスリーン台風が来た時に、日本ではどれ位の
ひ害が出たのか、気になりました。

・味期限が味ろな非常食は食べてまた買
い足すと言っていて家の非常食とかをいって斤を
見たら、すべての食べ物水の 味其期限が味
いたので水害などが起こる前にはやめに買って
おこう と思った。

・ かつしか区は、水害が多いのは、台風や地しん
ではらんするから、そのために対策をしている。
・ ボートには、乗ったことないので体験したい。

水害やじしんなどが おこると電氣やガス
が止まってしまうから、し、かり食べ物や水、う
イト などのぼう災グッズをそろえていな
いといけないということが分かりました。

・葛飾区は、人が多く住んでたり、0m 地たい
だったりして、救助に時間がかかるってことを
学んだから、いざとなった時は、より高い所に
向かうようにしたいと思います。
・そなえておかないと、色々な問題が起きると
知ったので、さまめに非常食などの確にんをし
たいと思います。
水害がおきたら、今どんなじょうきょうなのかたしかめて
すぐひなんして、安全をすぐかくほしたいです。
自分の命が1番大切です。

いざ！という時に備えて…

堀内 康博
葛飾区立上平井小学校 校長

早いもので、本校に着任させていただき 5 年目、「ア！安全・快適街づくり」の皆様とのお付き合いも 5 年目となり、3 回目の原稿執筆をさせていただくこととなりました。本校も、近隣校同様に、皆様の力をお借りして、子供たちに防災教育を実施しております。ここ数年は、「マイタイムライン」を活用しながら、より実践的な学習に取り組ませていただき、ありがとうございます。
さて、今回の原稿では、5 月 26 日・27 日に行った 6 年生の宿泊体験学習「日光移動教室」での出来事をお話します。宿泊体験学習にあたっては、活動内容や行程、その他様々なことを検討し、子供たちの体験を充実したものにしようと、教員みんなで知恵を絞り、計画を立てます。しかし、我々教員の力ではどうにもできないことがあります。それは、「お天気」です。宿泊体験学習にとっては、「雨」が天敵になる場合がほとんどです。ですから、教員は、実施日が近づくと、天気予報が気になって仕方ありません。最近は、「2 週間予報」なるものが登場したおかげで、2 週間前からチェックを始めます。今回の「日光移動教室」の実施日の予報は、なんと！「雨」。…ですが、まだ 2 週間前。

「どうせ、当たらないだろう。」とたかをくくっていましたが、10 日前…1 週間前…3 日前…と、実施日が近づいても、「雨予報」が変わらないのです。運命の 5 月 26 日、雨ではなかったものの、曇天。「まあ、降らなかっただけ良しとしよう！」と気持ちを切り替えて出発。予定していたハイキングを無事に行うことができ、ホッとした初日でした。
しかし！そんな気持ちは、すぐにどこかへ。その日の夜から雨が降り出し、翌朝は豪雨。
二日目の活動は、「日光東照宮見学」です。もちろん、雨でも見学はできるのですが、この日は猛烈な雨です（データを振り返ると、この日の日光は、半日で 100mm 以上の雨が降ったようです。）「このまま計画通りに東照宮を見学するか？」「しかし、この雨の強さは尋常ではない。」「ここは日光。何度も訪れているとはいえ、馴染みのない土地。」「周りは山。山の天気は東京とは違うはず？」「万が一、ということも。」…と、不安が頭をよぎります。「予定通り見学するのか、それとも中止にするのか」決断しなければなりません。決断をする時に頼りにするのは「情報」です。しかし、ここは旅先。唯一の情報機器は、スマホのみ。「1 時間ごとの天気予報」「雨雲レーダー」と、情報は限られます。「ここは馴染みのない土地」「この辺りの天候の変化は？」「河川は氾濫するのか？」「土地の様子は？」等々、疑問が次々と頭に浮かびます。そんな中、ふと頭をよぎったのが、「ハザードマップ」です。すぐにスマホで、日光市のハザードマップを検索。出てきたマップは、「小さっ！」 老眼には応えます・・・が、メガネをかけて目を凝らすと、先程の疑問の答えが見えてきました。
・・・結論は、「見学中止」。マップによると、東照宮自体は、危険区域にはなっていないのですが、見学後に昼食場所の土産物店に向かう道中が危険区域として示されていました。「確かに、あの坂道から土砂が流れてきたら、かなり危険だな。」と、私が記憶している土産物店付近の地形とマップに示されている内容が合致しました。
見学先を変更して向かったのは、日光東照宮の「ミニチュア」が展示してある屋内施設。「ミニチュア」を見学していると、外の雨はますます激しくなり、雷まで鳴る始末。「ここにして良かった。」と、二日目もホッとしました。
天候に一喜一憂した二日間でしたが、改めて、「いざ！ という時」の判断の拠り所となる情報の重要性を認識しました。

出前授業の副読本作成事業

南 貴久
NPO ア！安全・快適街づくり

NPO ア！安全・快適街づくりでは、これまで 10 年以上にわたって継続してきた小学校への水害に関する「出前授業」の内容を副読本（小冊子）としてまとめる「副読本作成事業」に取り組んでいる。本稿では、副読本作成事業の目的や実施状況について報告する。

出前授業作成事業の位置づけ

今年で設立 20 周年となる弊 NPO は、過去 10 年余りに及び、ゼロメートル市街地に位置する葛飾区新小岩北地区の各小学校で、防災に関する出前授業等の学校支援に取り組んできた。本事業で行う副読本作りは、この出前授業の効果をさらに高めることを狙うほか、その作成過程においても様々な効果を期待している。

○ 目的Ⅰ：出前授業における「副読本」の活用

これまで NPO が取り組んできた出前授業では、大学院生や地域住民らが講師となって毎回スライドや配布資料を準備しており、**10 年分の蓄積**がある。これらは今や、地域の災害リスクや防災への取組みが網羅された良い資料となっているが、授業後には十分な活用がなされていない現状がある。

そこで本事業では、この資料を**再編集**し、出前授業の「副読本」として冊子化を行う。完成した冊子は、実際に本年度以降の出前授業で小学生に配布する。これにより、授業内容の理解が深まり、**継続的・発展的な学習**に繋がることが期待できる。

さらに、家庭に持ち帰って家族で活用してもらうことで、親世代を含めた地域全体の防災意識の向上に資することも期待される。

○ 目的Ⅱ：編集作業への多世代参画による連携の強化

我々が取り組む学校支援では、出前授業を受けた小学生が中学生になり防災に関する課外活動に取り組み、そして課外活動を経験した中学生が高校生や大学生になり中学生を指導するように仕向けるなど、やがては巡り巡って彼らが地域の重要な担い手に成長することを期待している。

特に中学校の部活動では、高校生・大学生の **OB・OG** と共に地域活動への参加や学習に取り組むなど、すでに世代間で連携した活動を行っている。しかし、小学生から中学生への橋渡しとなる活動の支援は、これまでやや希薄であった。

そこで本事業では、小学生時代に出前授業を経験した**中学生が専門家らと協働して、小学生向けの出前授業「副読本」の企画・編集**を行う。さらに、編集

作業に関わった中学生自身が、将来的に出前授業の講師として、学んだ事を小学生に伝えていくことも期待される。これらにより、前述の地域の担い手を育てる好循環をさらに活性化させることを第二の目的とする。

○ 目的Ⅲ：輪中会議入門編としての様々なレベルの学習書の基礎資料作成

輪中会議は、これまで 10 年間にわたり、地域のさまざまな経験・工夫・悩みの共有の場として、あるいは専門的な知見を得て互いに刺激を与えあう場として機能してきた。しかし、近年ではコロナ禍による実施方法の変更なども相俟って、新規参加者の増加、および既存の参加層のマンネリ化が進む状況にあり、今年度から「輪中地域会議」と「輪中会議シンポジウム」の 2 つの会議に役割を分け、さらに輪中会議に新たな層を巻き込むための「学習会」を設けた **2.5 層**のスタイルへの移行が決定している。

そこで、この新規層に対する「学習会」の基礎資料としての「学習書」を、既存の地域の知恵や知見を体系的にまとめる必要が生じている。これは、今回の「出前授業副読本」とも、レベルの違いはあれ、項目としては重なる部分が多いと考えられる。

そのため、本事業では、今後のこうした学習会等への応用も念頭に、小学校高学年「だけ」をターゲットとして素材を収集するのではなく、これまでの **NPO ア！**やその周辺の活動で得られた知見を体系的に整理することが重要である。

事業の実施方法

小学校高学年の児童が理解できる内容を念頭に、ゼロメートル市街地の特徴や地域の災害史、災害発生のメカニズム、避難の基礎知識など、地域の“浸水と親水”について網羅的に「楽しく学べる」内容の副読本を新たに作成し、出前授業で配布する。

この副読本の作成にあたっては、弊 NPO が十年来活動を支援している地元中学校の「地域防災ボランティア部」部員にも、編集委員会に積極的に参画してもらう。部員の多くは小学生時代に出前授業を受けており、その経験を元に若者の視点から企画・編集に関わってもらうほか、編集のための現地取材・文献収集等の調査研究にも専門家と共に積極的に参加する。調査研究の内容は、荒川沿川（上流・下流）の治水・防災施設や行政担当者、地元住民らへの取材や、図書館・郷土資料館等における過去の水害に関する資料収集等を予定している。さらに救命ゴムボートの操縦体験や災害対策支援船「あらかわ号」の乗船体験などの実践的な活動も行うことで、中学生のレポートも盛り込んだ臨場感のある冊子にするとともに、中学生自身も広く荒川全流域と自分たちの町の関係性について再認識してもらうことを目指す。この調査研究の成果を、これまでの出前授業で使用されたスライド・配布資料の内容に付加して再編集を行うことで、「副読本」の冊子を完成させる。

またこれらの活動を通して、川のマイナスの面である浸水の危険に対応するだけでなく、川のもう一つの側面である親水についても理解を深めるため、水に親しんだ写真を募集し、「副読本」内に掲載する。

事業の実施状況

2022/ 5 / 12	初回 Zoom 打ち合わせ
2022/ 6 / 4	第 1 回作成委員会 @たつみ集い交流館 和室 過去の出前授業の講義内容の共有、副読本作成の基本方針の決定
2022/ 6 / 25	第 2 回作成委員会 @新小岩地区センター ホール 既存資料の読み込みと整理（紙資料）
2022/ 7 / 9	第 3 回作成委員会 @葛飾区立上平井中学校 図書室 既存資料の読み込みと整理（Web 資料）
2022/ 8 / 22	第 1 回現地見学会 @埼玉県東松山市・ときがわ町
2022/12/ 26	第 4 回作成委員会 @上平井中学校 図書室
2023/ 1 / 14	第 5 回作成委員会 @にこわ新小岩
2023/ 1 / 28	第 2 回現地見学会 @首都圏外郭放水路、荒川第一調節池 他

副読本作成委員会は、NPO ア！、上平井中学校地域防災ボランティア部（現役・OBOG）、地元町会、葛飾区役所、加藤研究室らのメンバーで構成し、資料の収集やグループ学習、編集作業、現地見学会などを行った。

老若男女、地域内外からの参加者が集った作成委員会では、中学生の目線からのユニークな提案や、過去の水害経験者からの貴重な体験談など、多様な議論が交わされ、副読本の内容の充実につながった。

なお、埼玉県の令和元年東日本台風被災地を訪問した「第 1 回現地見学会」については、本誌後段の「荒川流域訪問・交流記」において報告しているので、あわせて参照されたい。また、副読本の具体的な内容および第 2 回現地見学会については、次号にて詳細を予定している。



副読本作成委員会（左：第 2 回、右：第 3 回）

※ 「出前授業の副読本作成事業」は、一般社団法人関東地域づくり協会の公益助成事業による支援を受けて実施しています。



地域から



うらら保育園の入っている建物全景
（象設計集団 Web サイトより）



うらら保育園 遊びの風景
（象設計集団 Web サイトより）

閑上から学ぶ防災意識と街づくり

小豆嶋 勇誓
武蔵野大学 文学部 日本文学文化学科
上平井中学校 地域防災ボランティア部 OB

1. はじめに

今年も輪中会議に参加させていただきました。早いもので、私も大学生になり、南さんをはじめ多くの方々と活動させていただき始めた時から 7 年ほど経ちました。この期間、多くの貴重な経験や、出会いを設けてくださり、非常に社会経験としても勉強させていただいております。ありがとうございます。

大学生になり、できることが増えた反面、責任の重さや経験不足などで、まだまだ未熟な部分が多々あります。皆様におかれましては、これからもご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

2. 宮城県名取市閑上地区 訪問記録

さて、私は今年 2022 年夏に学校の必修科目 FS（フィールド・スタディーズ）の一環で、宮城県名取市閑上に訪れる機会がありました。名取市は 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災において、地震や津波、火災等で甚大な被害を受けた街の一つです。被災地を実際に訪れ、実際に被災された方々のリアルな声を伺い、非常に貴重な機会となりました。訪問した記録を皆様にも共有したいと思います。

（1）閑上の被害

宮城県名取市閑上地区はもともと漁が盛んにおこなわれていた。そのため、日頃の生活に海や川が身近に存在していた街であった。古くからマグロやカツオが多く獲れ、港町として栄えた。

そんな街に突如として大地震が襲った。2011 年 3 月 11 日、東日本大震災だ。東北地方の太平洋沖を中心に、全国的に強い地震やそれに伴う津波、火災など、日本の歴史上類をみないほどの甚大な被害をもたらした。ここ、閑上でもその被害は例外でなかった。本震では、最大震度 6 強を観測。津波は浸水高が最大で 9.1m、最大浸水距離は 5.5km にも及んだ。死者・行方不明者は 963 名（うち 923 名は亡くなっている、H26.3.31 現在）と非常に凄惨な被害となった。当時、NHK がヘリコプターから現状を伝えていた津波の映像は、まだ記憶にある人も多いのではないだろうか。この映像に映し出された、川を真っ黒な波が瓦礫と共に逆流し街を飲み込んでいく様子。この川こそ、閑上に流れる名取川である。

（2）閑上から学ぶ防災意識

—閑上に津波は来ない—

閑上では、東日本大震災で発生した大津波により、700 名以上の尊い命が失われた。現地の方々からお話を伺うと、伺った方全員が口をそろえてこのような言葉を話されていた。

「閑上に津波が来るとは思わなかった。」

閑上の方々は、震災当時、地震が起こった際、その後津波が襲ってくるかもしれないという考えに至ることがなかったという。

地震については、東日本大震災前から、多くのメディアなどでも取り上げられており、地震への警戒は非常に強くなされていた。一方で、津波に関しては十分な知識がなく、「閑上には津波が来ない」と多くの人が考えていたのだった。「安全神話」とも言われ、震災の 1 年前に起きたチリ地震の津波でも被害がなかったことや、そのほか津波注意報が発表されても人的被害が出てこなかったことなども影響した。このことを教える資料として、お話を伺った語り部さんが見せてくださった一枚の写真があった。その写真には、二人の男性が海岸のコンクリートの端から海を眺めている姿が写されていた。その眺めている海の先には、縦に高くそびえたち、横に直線状に広がる波、大津波がまさに迫ってきているのだ。非常に衝撃的な写真であった。

—伝わらなかった昔の“警告”と“教訓”—

閑上の方たちは、津波に対して恐怖心がなかった、と語り部さんは語る。「閑上に津波は来ない」という根拠のないものが信じ込まれていたのだった。しかし、そんな閑上にも実際には過去に津波が押し寄せ、被害を出した事例は存在している。昭和 8（1933）年に起きた昭和三陸地震による津波である。幸いにも、人命には被害は出なかったが、当時この津波を経験した先人の方々は、この津波を将来の教訓にしようと石碑を建てた。

この石碑には、こう書かれていた。

〈地震があつたら津波の用心〉

しかしこの先人の”教訓”は、将来まで受け継がれることなく、津波の記憶も薄れ、子どもが石碑をよじ登る“遊び道具”のようなものと化していたのだった。

この過去の教訓が受け継がれ、津波という意識があつたら東日本大震災の被害も少なくできたかもしれないと語り部さんは語っていた。昔住んでいる地域に起きた災害は今現在でも起こる可能性がある、昔あった災害を知ることは防災の第一歩なのではないか。自分たちの街が安全だと思わないでほしい、と続けて語った。

(3) コミュニティの大切さ

閑上地区では、東日本大震災を受け、新しい都市計画が組み込まれている。

閑上地区の太平洋沿いは「災害危険地帯」に登録され、住宅を建てることに制限がかけられ、その地帯には人が住むことができなくなっている。新しく計画された住居地では、土地が3mほどかさ上げされたもので、「災害公営住宅」を中心に統一化された住宅が立ち並ぶ。

震災から今年で11年。「宮城県内で最も復興するスピードが遅い」と言われたこの街でも次第に復興が進み、今では道路の区画整備の進展もあり、非常に綺麗な街の印象を受けた。津波により多くの建物が流され、ほぼ更地状態のゼロからの復興も、街としての活気が戻りつつある。しかし、その復興の中でもよいことばかりではない。それはコミュニティの崩壊である。

―復興の陰には―

もともと閑上地区は港町として近隣の住民とのコミュニティが自然と形成されていた。震災後は、こうしたコミュニティは一度崩壊したが、震災後に新しく建てられた仮設住宅での新たなコミュニティが形成された。地元の高齢の方々は特にこうしたコミュニティが生きがいとなり、震災の傷を抱えつつも毎日の支えになっていた。一緒にお茶をしたり、作り余った料理を配ったり、朝獲れた新鮮な魚介を届けあったりと日々の娯楽と生活の一環だった。

しかし、復興が進むにつれ、こうした仮設住宅も撤去され、震災後一度崩壊したがやっともう一度取り戻したコミュニティが再び崩壊を始めているのである。このコミュニティを一番大切にしていた高齢者の方は、新しく建てられた「災害公営住宅」に引っ越しを余儀なくされ、高齢者の独居が問題視されているのだ。コミュニティが、こうした「災害公営住宅」により絶たれ、交流が少なくなっているという。

コミュニティは、近所の方々がどんな人なのかを知る一番の手段である。隣の人は高齢の一人暮らしであるということ、その隣の人は足に不自由がある、といった情報だ。これはいざとなった時の共助に直接つながってくる。実際に現在閑上では避難訓練を行っているそうだが、いくら避難訓練を行ったとしても、こうしたコミュニティが絶たれてしまっている状況では意味がない、とおっしゃる方もいた。隣近所の力、つながりは非常に大切な防災の一種なのだ。

(4) 閑上から学ぶ街づくり

2019年、閑上に新たなランドマークが開業した。「かわまちてらす閑上」だ。地元の鮮魚を中心に鮮魚を使った旬の味覚を楽しめるほか、スイーツを扱う店など、26店舗が集まっている。屋外には飲食スペースもあり、憩いの場としてにぎわいをもたせている。

そんな新たなランドマーク「かわまちてらす閑上」で注目したい点は、この建物が位置する場所である。この建物は、閑上に流れる川、名取川の堤防の上

に建てられているのだ。(図1)「かわまちてらす閑上」の遊歩道のすぐ下には川が流れ、そこから続く太平洋も見ることができる。もともと水辺に近く、港町として栄えた閑上が、震災後またこうして新たな形として水辺に近く水と親しむ、「親水」を感じる場所とともに、ハード面からもしっかり「浸水」対策がなされる一新した閑上が成長を遂げているのだ。この「かわまちてらす閑上」こそ、「浸水と親水」を体現したものであり、葛飾区が計画する浸水対応型市街地構想の理想形なのではないかと私は考える。



(画像1) 堤防の上に建てられたかわまちてらす閑上。

背景画像は『名取市観光物産協会 かわまちてらす閑上』より引用。

パワーポイントは小豆嶋作成。

―水辺空間の活用を葛飾にも―

葛飾区でも、豊かな水辺空間、水資源、美しい中川七曲りを有するものとして、より多くの水辺空間の活用が進むと、より魅力あふれる街に発展していけるのではないかと。河川の基盤工事により、非常に綺麗な遊歩道が整備された。途中にある展望デッキでは、そびえたつ東京スカイツリーと、夕方ごろのオレンジに照らされた夕焼けの、実に圧巻なパノラマを見ることができる。そこで『七曲りカフェ』たるものがあれば、親水面に大きな進展が期待できるのではないかと。

(5) 私たちの街でできることとは何か

今回、閑上地区への訪問を通じて、多くの方からさまざまなお話を伺った。防災に対する向き合い方、被災された方々への支援のこと、震災の悲惨さと現実。復興の裏にある陰、残された遺族の存在……。どれも生々しく、言葉一つ一つが心に突き刺さってきた。

—私たちの街では—

閑上の方々がお話されていたことをまとめると、昔起きた災害について知っておくこと、災害の歴史を将来に伝えていくことの大切さ、自分たちの街が安全だと思いきまないこと、コミュニティを大切にすること……。

これらは、今の私たちの活動のまさに中心核ともいえることではないだろうか。中川さんをはじめとして、過去に起きたカスリーン台風を体験されたお話や、教訓をお話されていたり、私たち地域防災ボランティア部の部員、OB、OG がお話を次世代へ伝えていく活動を行っていたりする。また、南さんをはじめとする講師陣が、小学生に対して行っている出前授業を通じて私たちの暮らしている街の危険性を発信していく活動も行われている。そして何より、この輪中会議がこの地域で行われていることによって、区の方々や、町会の方々、学生や地域の方々とのコミュニティが形成されている。地域が一丸となって自分たちの住む街の防災力を高めているのである。

閑上地区の訪問を通じて、私がいま携わらせていただいている多くの活動一つ一つが非常に重要な役割を担っていることと共に、これらの活動は防災において必要不可欠な要素であることを強く実感した。



（画像 2）葛飾 中川七曲りと閑上 名取川

3. おわりに

東日本大震災では多くの方が犠牲になり、日本の歴史上類をみないほどの未曾有の大災害に見舞われました。あの日から早 11 年。被災した現地は再び光を取り戻そうと、街が日々新しく整備され、人々の生活も取り戻されつつあります。しかし、その中でも、被災された方々、特に震災でご家族やご友人、ご

親戚を亡くされた方々は、11 年経った今でも心に大きな傷を負っていらっしゃると思います。また、復興が進むにつれ、街が一新するのと同時に、その街は昔の面影を消し去ります。「綺麗になった街が、元何だったか思い出せない。どこ見ても新しい景色で寂しくもあります。」と語り部さんは複雑な心境をお話してくださいました。名取市閑上では今でも行方不明者の方もいて、ボランティアなどの活動で捜索が続けられているそうです。

11 年経った今、今年小学 5 年生になる子どもから下の世代は東日本大震災を実際に経験していません。次第に記憶も薄れてしまう。しかし、こうした災害の記憶は絶対に忘れてはいけないことです。震災を知らない人たちへ伝えていくこと、それが私たちの宿命であり、伝えていく義務があると思います。これは東日本大震災に限った話ではありません。どの災害にも共通して言えることです。犠牲になられた方々の一つ一つの尊い命の少しでも無駄にすることはできない。

防災に関わる活動をさせていただいている以上、しっかりと伝えていく責任を果たしてこれからの活動をしていきたいと思っています。

貴重なお話を聞かせていただいた、閑上の方々に感謝の意を示し、ここに訪問記録として残したいと思います。

貴重な体験

増淵 桜太朗
東京都立農産高等学校

私は去年から NPO などの活動に参加させていただき、貴重な体験ができたと感じました。去年の東松山市や都幾川などを訪問した際は、台風で被災された方の体験談、建設されなかった大野ダムの話や、ダムが出来るはずだった場所を見させて頂いたり、今年に入っては首都圏外郭放水路を見学できらこのような体験ができた事に感謝しています。さらに今年から出前授業に参加させていただき、お話する機会も与えて頂くなど貴重な体験ができたと共にこれからもこのような活動に積極的に参加していきたいと思いました。



2019 年の 19 号台風から教えられたこと

久保 欣一
NPO ア！安全・快適街づくり 会員

2019 年 10 月の 19 号台風は多くのことを教えてくれました。

私の携帯電話に、突然、「自分の命は自分で守ってください」という避難情報が入ってきました。近所の人たちは『最寄りの小学校』へ避難していく人もおりました。私は自宅の 3 階の部屋で日々過ごしているのと、3・11 東日本大震災の時も 3 階に居り、本や備品等何の被害もなかったのも、在宅避難、垂直避難を主としておりました。

19 号台風は福島県、長野県は被害が大きかったが葛飾区は大きな被害なかった。荒川の水位が京成本線堀切架橋付近で危険水位に達したが、幸い引き潮で「難を逃れた」と、聞いた話ですと、①引き潮。②上流調整池の機能③荒川上流埼玉地区で河川氾濫等により『難を逃れた』。その後の対策として、国交省荒川工事事務所、東京都、東京消防庁、葛飾区、京成電鉄等で協議して、危険箇所へフェンス設置、危険水位前水嚢積みをする。そのため荒川河川敷での水防訓練、等徐々に対策立て、備えを始めておるようです。

私も危険箇所の探索や水防訓練の見学、水害対策の勉強、「シニアの水害に対する備え」講演会の企画、近所の高齢者と水害の備えの懇談等水害対策としての社会参加活動を行っております。

いつ起きるかわからない自然災害ですが、豪雨が予想される『線上降水帯』の予報が従来は河川氾濫予測段階で発表していたが、本年 6 月から半日前から予報になりました。私は、気象予報、災害情報を早めから注意して、大型台風、大規模水害が予想される場合は、広域避難の考えで他県の高台にある、親戚かホテルに家内と 1 次避難してみようと考えております。その判断を出すのは難しいと思いますが、NHK の気象情報と荒川河川事務所の『かわ知り』に注力を注ぎ、備えたいと思っております。

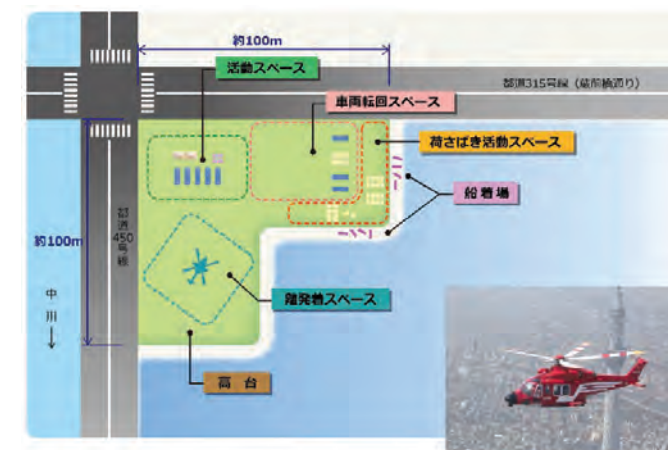


1960 年代の浸水対応型建築：現・葛飾区総合庁舎（JA+U ホーム ページより、本誌 24 号表紙ウラも参照）

行政から



浸水対応型拠点建築物への建て替えが完了した小松中学校



水害時の受援拠点のイメージ

荒川を舞台にした強くしなやかで 持続可能な地域づくりをみんなで取り組む！！ ～ River Basin Disaster Resilience and Sustainability by All ～

出口 桂輔
国土交通省荒川下流河川事務所 事務所長

「流域治水」という言葉をご存じでしょうか？気候変動に伴う水災害の激甚化・頻発化を踏まえて、従来の「治水」を転換し、国・都道府県・市区町村、地域住民・企業など流域のあらゆる関係者で協働して総合的・多層的に治水対策を行うことを意味する言葉です。サブタイトルとして記載した「River Basin Disaster Resilience and Sustainability by All」はこの「流域治水」の英訳で、河川・流域という運命共同体の中で、あらゆる関係者が協働し、まさに“by All”で強くしなやかで持続可能な地域づくりに取り組む必要があるという、関係者の想い・願いが込められています。首都・東京を貫流する荒川を管理する立場は重責ですが、事務所に関わる職員・パートナー企業が一丸となって、この「流域治水」を実践していきたいと思っています。

今年（令和 4 年／2022 年）の 9 月は週末のたびに台風が日本列島を襲いました。荒川本川への影響はほとんどありませんでしたが、当事務所も災害体制に入り綾瀬排水機場を稼働させ、綾瀬川の洪水を荒川に強制排水することで、綾瀬川流域の浸水被害を防いでいます。他方、台風 15 号では、静岡県管理河川で河川からの氾濫による浸水被害が生じたほか、土砂災害や長期間の断水など大きな被害が生じています。私たちの荒川地域では、令和元年／2019 年の台風 19 号の記憶が新しいところですが、あれを上回る規模の台風がもしかすると今年、来年、襲ってくるかもしれません。水災害のリスクを正しく認識し、いざという時の行動計画（タイムライン）を確認するなど、事前の備えを進める必要があります。私たち河川管理者も、防災・減災、国土強靱化のための 3 か年緊急対策、5 か年加速化対策等によりハード・ソフトの対策を進め着実に効果を発揮していますが、実施すべき対策は山積しており、計画的に継続した投資を行う必要があると考えています。

また、荒川は防災・災害時の顔だけではなく、都心部の貴重なオープンスペースとしての顔もあります。年間を通してみると、むしろこちらの顔をしている方が多いです。平時の荒川は、ランナーやサイクリスト、スポーツ・レクリエーション、防災教育、自然・環境学習の場として、多くの方に利用していただいています。かわまちづくりの取組を通じて、水辺を今以上に利用者に優しい・快適で居心地が良い場所に、水辺を見ながら飲食ができるような場所に、水害に備えた高台まちづくり等と両立させ、安全・快適街づくりを実践していきたいと思っています。

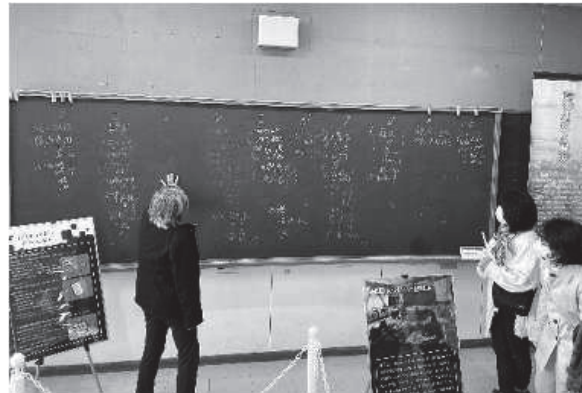
人口減少時代に突入し、世界的・社会的にも課題が複雑化・多様化していく中だからこそ、DX による行政サービスの高度化・効率化や働き方改革等に果敢に挑戦し、地域の皆様から感謝され、応援していただけるような河川事務所でありたいと思います。再来年（令和 6 年／2024 年）には荒川放水路が通水 100 年を迎えます。一度も決壊することなく首都圏の沿川都市の持続可能な発展を支え続けてきたこれまでの 100 年に想いを寄せつつ、これからの 100 年を考える機会として記念事業を実施する予定としています。私たちの荒川流域を強くしなやかで持続可能な地域として将来世代に引き継いでいくため、地域の皆様のご理解・ご協力をよろしくお願い致します。



川の手・人情都市「かつしか」の実現に向けて（5）

情野 正彦
葛飾区 都市整備部

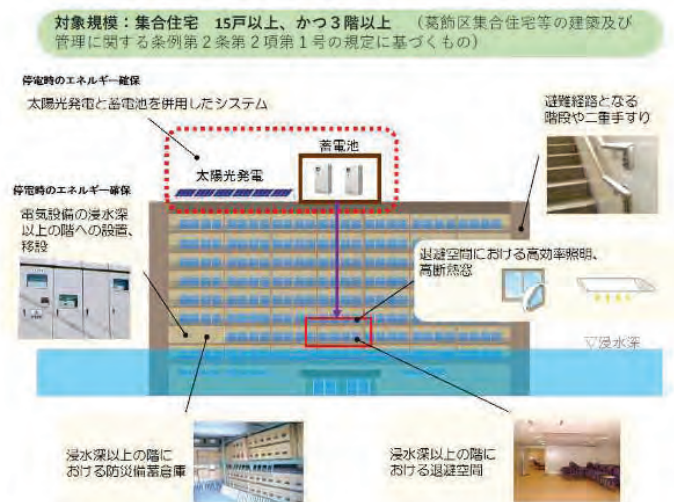
3年ぶりの何の規制もないゴールデンウィーク、皆様方も、マスクや密状態などを気にしながらですが、久しぶりに楽しい休日を過ごしたのではないのでしょうか。私は、家内と久しぶりに宿泊でツーリングに行ってきました。仙台の旧荒浜小学校周辺は、貞山運河の再生・復興が進められるとともに、県道塩釜亘理線のかさ上げ、大規模な避難の丘の整備など、最大クラスの津波の防御のための整備が完了していました。震災遺構となった学校のガイドの方から、「ここをかわいそうな地域と思って帰らないでください。震災はほんの一瞬で、その前後に、誇れる豊かな暮らしや地域の絆がありました。」との話を聞き、地域方々の強さ、そして地域への思いを強く感じました。



震災遺構 荒浜小学校

さて今回は、川の手・人情都市「かつしか」の実現に向けて（5）として、令和3年度に取り組んだ「葛飾区浸水対応型拠点建築物等普及事業補助金」と、東京都が中心となり進めた「広域避難施設」の確保について紹介します。

はじめに、浸水対応型拠点建築物等普及事業についてです。これまでは、小・中学校など、公共施設の浸水対応型拠点建築物への取り組みを進めてきましたが、昨年度は、民間施設の浸水対応型拠点建築物化の誘導について検討を進め、本年10月から、集合住宅や大規模小売店舗の新設・改修を対象として、大規模水害時の停電対策や、避難者の避難施設の整備等に要する費用の補助を開始することとなりました。



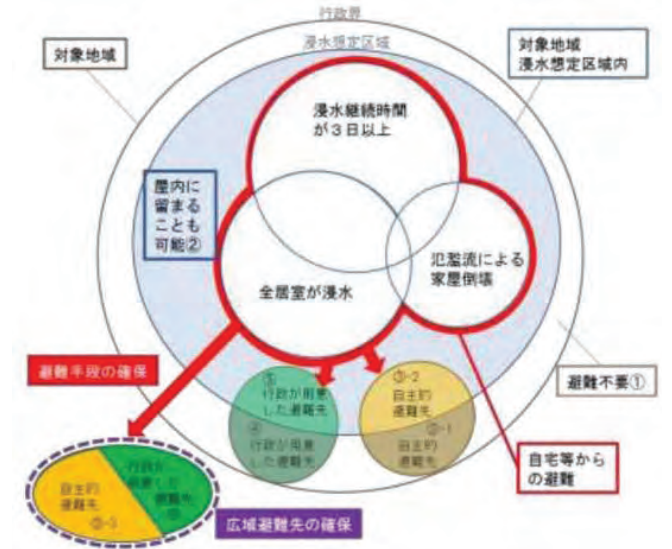
本事業による大規模水害の備えのイメージ（マンション）

また、今年度は、自宅の浸水を防ぎ、垂直避難可能な住宅の整備促進に向け、地区単位での浸水対策や、住居単位での浸水対策について、検討を進めていく予定です。

次に紹介するのは、広域避難施設の確保についてです。広域避難については、内閣府と東京都が中心となり、「首都圏における大規模水害広域避難検討会」が設置され、洪水・高潮からの大規模・広域避難に関する検討が進み、昨年の6月に一定の方向性が示されました。アンケート結果などをもとに、今後行政が確保すべき広域避難先の概数を74万人とし、この確保に取り組むとともに、避難手段の検討などを引き続き進めることとなっています。また、東京都では、令和4年3月末で、「国立オリンピック記念青少年総合センター」など、8法人13施設と包括協定を締結、10万人を超える規模の広域避難先の確保を進めたところです。

区では、5月14日から、ハザードマップの説明会を開始しました。説明会では、昨年度作成した避難ガイドを合わせて活用し、地域別のリスクや避難方法などについて、説明をしています。町会などに出向いての出前講座も随時受付していますので、興味のある方は連絡ください。

（危機管理課災害対策係 高橋・筒井（3695）1111（内線）3993・2274）



避難行動別整理表		区分	概数	
避難の必要なし		浸水想定区域外に居住	① 約230万人	
屋内に留まることも可能		浸水想定区域内に居住	② 約126万人	
自宅等からの避難	自らの自治体内での避難	住民自らが確保した避難先への避難	浸水想定区域外 ③-1	
		行政が用意した避難先への避難	浸水想定区域内 ③-2	
	他の自治体への避難 (広域避難)	住民自らが確保した避難先への避難	浸水想定区域外 ④	
		行政が用意した避難先への避難	浸水想定区域内(垂直避難) ⑤	
				約23万人
				③-1 ③-2 ④ ⑤ 約154万人
他の自治体への避難 (広域避難)	住民自らが確保した避難先への避難	浸水想定区域外 ③-3		
	行政が用意した避難先への避難	浸水想定区域外 ⑥		
		約74万人		

※一定の条件に基づいた試算であり、避難行動別の人数概数を大まかに把握するためのものである。

避難行動別の避難者概数の把握

令和3年度末までに包括協定を締結した施設一覧	
法人名	施設名
独立行政法人国立青少年教育振興機構	国立オリンピック記念青少年総合センター
独立行政法人国際協力機構	国際協力機構（JICA）東京センター
国立大学法人東京芸術大学	東京芸術大学（上野キャンパス）
学校法人中央大学	中央大学（後楽園キャンパス）
学校法人上智学院	上智大学（四谷キャンパス）
東京都立大学法人	都立大学（南大沢キャンパス）
株式会社東京テレポートセンター	台場フロンティアビル テレコムセンタービル 有明フロンティアビル
株式会社東京ビッグサイト	国際展示場（東京ビッグサイト） 有明パークビル TFTビル（東京ファッションタウンビル） タイム24ビル

京成本線荒川橋梁部における水防活動について

石合 一成
葛飾区 都市整備部 調整課

京成本線荒川橋梁掛替事業については、平成 16 年度に現地調査に着手し、その後、概略設計・環境影響評価・詳細設計を進め、現在、用地買収が鋭意進められています。令和 3 年 9 月に開催された第 1 回京成本線荒川橋梁架替に係る事業調整協議会では、葛飾区が水防対策として実施した大型土のう（写真 1）に代わる当面の対策として、令和 3 年度にパラペット擁壁（写真 2）の設置を進めることと、令和 4 年度に本体工事に着手することが表明されました。

一方、同年 12 月には、京成本線荒川橋梁掛替事業の再評価が行われ、工事完了の見込みは、令和 19 年度（工事期間：16 年間）となることが公表され、それまでの間は、パラペット擁壁が設置できない線路部について、区として、水防活動を継続して実施する必要があります。

区では、これまで常設した大型土のうと小型土のう・大型水のうを組み合わせ、水防活動を行うこととしていましたが、おおむね 2 時間以内に水防活動を終了させる必要があることから、より短時間で水防活動が完了できるよう大型の止水板（写真 3）と覆工板（写真 4）を導入することとしました。

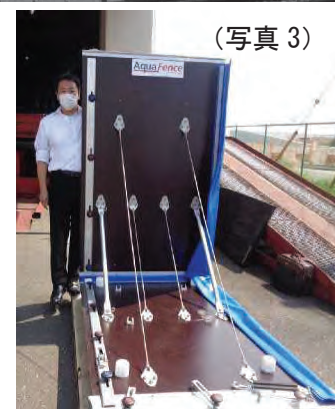
今年の 4 月から水元公園において、覆工板の敷設と、止水板の設置訓練を開始し、現地（京成本線荒川橋梁部）においても、夜間訓練（4 月 15 日、5 月 20 日、6 月 3 日）を実施したところです。



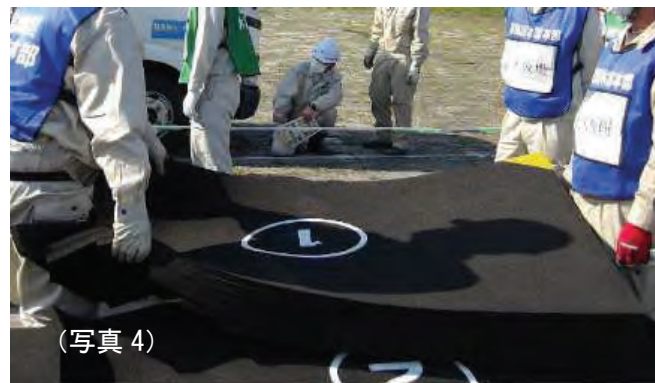
(写真 1)



(写真 2)

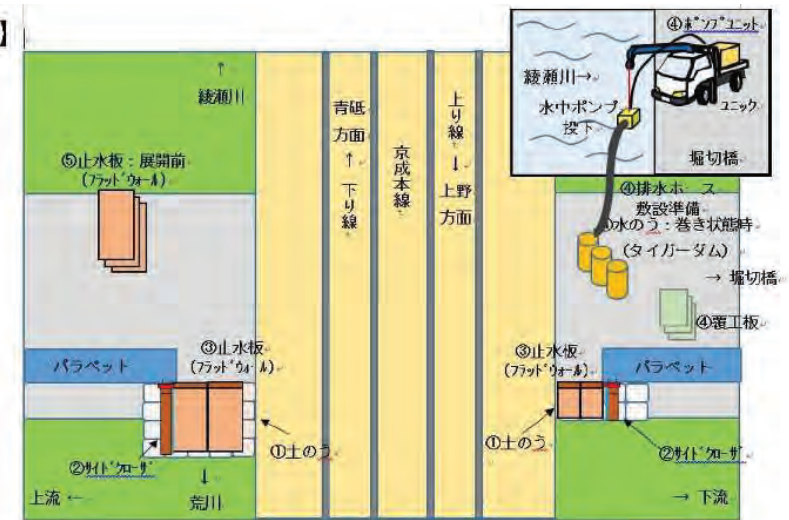


(写真 3)



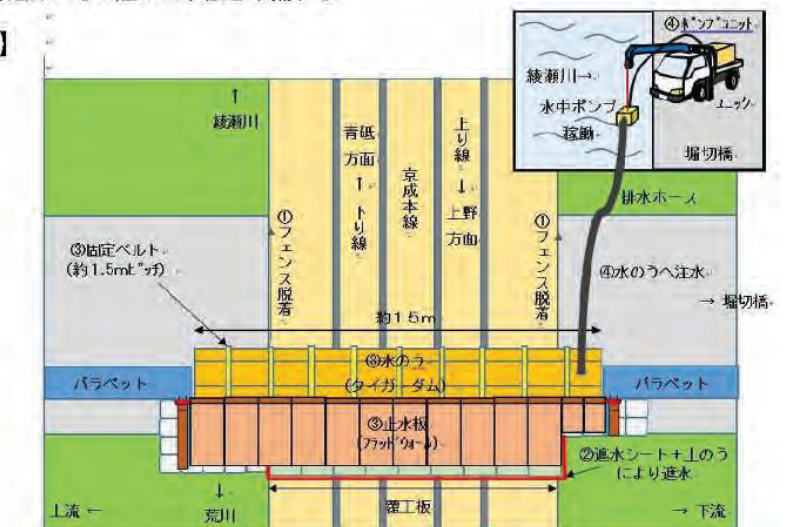
(写真 4)

【手順 1】



- ① 京成フェンスの脱着に支障がない範囲で土のうを設置し、上面を平たんに整形する
- ② パラペットに取り付け済みの端部アダプターに、パラペットと止水板をつなぐための、サイドクローザを接続する
- ③ 土のうの上面に止水板を設置し、サイドクローザと止水板、また止水板どうしを連結する
- ④ 掘切橋道路上でポンプ積載ユニット、下流側堤防に水のう、覆工板、排水ホースを準備する
- ⑤ 上流側堤防にその他の止水板を準備する

【手順 2】



- ① 京成電鉄職員による線路閉鎖確認の完了合図のもと、京成フェンスを脱着する
- ② 軌道敷内に遮水シートを敷き覆工板を設置、シートで覆工板を包み、前面に土のうを設置する
- ③ 覆工板の上に止水板を設置・連結させ、止水板の転倒防止として背面に大型水のうを設置する
- ④ 大型水のうへの注水は、ポンプを活用し、綾瀬川又は付近の消火栓等から行う



区としては、工事の進捗状況に合わせ、水防工法を適宜見直しするとともに、継続的に訓練を重ねることで、区民の安全・安心を確保してまいります。

東日本大震災 被災地訪問記



東日本大震災 11 年目の被災地訪問

南 貴久
東京大学生産技術研究所 加藤孝明研究室

東日本大震災の発生から 11 年半が経過した 2022 年 9 月、加藤孝明研究室のメンバー 5 名と、長年にわたって被災地との交流・対話を続けて来られた NPO ア！の渡邊喜代美さんの 6 名で、復興の現状を視察するための被災地訪問を実施した。復興状況は地域によって差異があることが予想されたため、岩手県・宮城県・福島県の 6 つの地区を主な視察対象とし、2 泊 3 日の行程で回った。

岩手県陸前高田市では、海岸部の「奇跡の一本松」周辺の整備状況や市街地の高台移転の状況の視察、宮城県との復興事業の比較等を行った。宮城県気仙沼市では、現地の伝承館の方の案内で復興状況の聞き取りを行ったほか、大規模な災害公営住宅を含む高台移転の状況等を視察した。同県南三陸町では、渡邊さんの知人であるかまぼこ店社長や神社の禰宜、語り部、農家など多様な方々と対話を行い、生業を含む復興の状況を聞き取った。同県東松島市野蒜地区では、旧野蒜駅にある伝承館を見学し、説明員から高台移転の状況等についての話を聞いた。同県亘理町では、大規模な高台移転をしなかった理由等を町職員から聞き取ったほか、メガソーラー等の復興の象徴的な施設の見学を行った。福島県双葉町では、原発事故からやっと住民が帰還しはじめるタイミングであり、町職員や研究者、実際に被災した方の話をもとに、今後の復興のビジョンや課題について話を聞いた。

次頁からは、視察に参加したそれぞれのメンバーから、各訪問先で見聞したことや、そこから得た考察等の報告を掲載する。なお、訪問先の位置関係については前頁の地図を、視察日程については表 1 を参照されたい。

表 1 視察日程の概要

	日付	スケジュール	内容
1 日目	9 月 7 日	7:56~9:58	移動（東京駅→くりこま高原駅、はやぶさ 103 号）
		10:00~10:30	レンタカー受け取り
		10:30~11:50	移動（くりこま高原駅→陸前高田）
		11:50~12:30	昼ご飯
		12:30~13:20	陸前高田被災地視察 ・高台移転による市街地復興 ・元地と高台地域の風景など
		13:20~14:00	移動（陸前高田→気仙沼）
		14:00~16:00	佐藤様の案内と説明（気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館）

2 日目		16:00~18:00	気仙沼被災地視察 ・高台移転による市街地復興 ・元地と高台地域での生活様子 ・インフラ整備状況の確認
		18:00~20:00	晩御飯
		20:00~	休憩
		7:50~8:00	集合
	9 月 8 日	8:00~8:30	移動（気仙沼→南三陸）
		8:30~11:00	南三陸視察（住民の方 3 人：及善さん、徳郎さん、一磨さん） ・高台移転による市街地復興状況の確認 ・元地と高台地域の風景など ・2016 年視察と比較し、復興と住民生活の状況を確認
		11:00~12:00	移動（南三陸→野蒜）
		12:00~12:30	昼ご飯
		12:30~14:20	野蒜視察（南さん案内） ・野蒜の震災復興伝承館 ・高台復興事例 ・復興の進捗状況など確認
		14:20~15:30	移動（野蒜→亘理）
		15:30~17:00	亘理視察 （熊田様（亘理町議員）、菅原様（亘理町役場）） ・高台移転せず、被災した現地での復興
		17:00~21:00	風呂（わたり温泉 鳥の海）、晩御飯（民宿 浜まつ） 熊田様との懇談会
		21:00~	休憩
	9 月 9 日	7:50~8:00	集合
		8:00~10:00	移動（亘理→双葉町） ※ 途中、山元町の被災地と移転先の新市街地を見学
		10:00~12:00	双葉町：静間様の案内と説明 ・双葉町のビジョン ・伝承館の見学
		12:00~13:00	昼ご飯
		13:00~15:10	双葉町：視察（静間様、山田様同行） ・事業対象地の視察 ・新しい産業の投資の現場視察 ・双葉町新庁舎の見学（13:30-）
		15:10~16:40	移動（双葉町→いわき駅）
		16:40~17:00	レンタカー返却
		17:21~19:43	移動（いわき駅→品川）

陸前高田の視察から見た「復興」と「復興事業」

金 裁澁（キム ジェホ）
東京大学生産技術研究所 加藤孝明研究室 特任研究員

□ 陸前高田被災地の初訪問

2022 年 9 月、東日本大震災被災地の復興の現状を視察するため、2 泊 3 日の日程で視察の企画をしました。筆者が東北地方の被災地に最近訪れたのが 2014 年頃でしたので、8 年ぶりの訪問でした。しかも陸前高田は、初めての訪問でしたので、楽しみでワクワクしていました。これまで被害を受けた地域はどのように変わったのか、復興事業はどのくらい進んだのか、被災した人々の生活はどのような様子なのか等々気になることが多かったです。

2022 年 9 月の朝、急いで新幹線に乗りに出ました。数時間の移動後、昼頃になって、ようやく陸前高田に到着しました。駐車して初めて目に入ったのは高田松原津波復興記念公園（以下、記念公園という。）の東日本大震災津波伝承館（以下、伝承館という。）でした。とても素敵で立派な建築物でした。

伝承館は、東日本大震災の教訓を後世に伝えるために建設された施設で、災害発生から約 8 年後の 2019 年 9 月に開館しました。津波によって大きな被害を受けたこの地域で、防災教育や災害の経験と学習が可能な空間です。



資料：伝承館ホームページ、<https://takatamatsubara-park.com/>

開館の初年度には、多くの人々が関心を持ち、1 ヶ月で最大約 33,000 人が訪れるほどでした。その後、2020 年、2021 年にはコロナ禍であったにもかかわらず毎月平均約 14,000 人が訪れ、年間約 17 万人が訪れる場所になりました。

1

実際に、私たちが訪問した時にも、多くの中学生が訪れ、2011 年の東日本大震災による被害の現場を見学し、説明員から被害の惨状とともに、記憶すべきことについて聞いていました。

□ 奇跡の一本松

記念公園と伝承館には、その時を記憶するための空間が多く造成されていました。その中で最も象徴的な空間は「一本松」だけがそびえ立っているところです。

この「一本松」は、東日本大震災の前は、太平洋に繋がる広田湾に面した空間に、約 350 年かけて植林されてきた約 7 万本の松群落地の内の一本です。

東日本大震災の時に、最大 17m の津波に直撃を受け、ほとんどの松が流され、消えてしまいましたが、西端近くの松の一本だけが、強力な津波の波高にも生き残り、そのまま立っていたことから、社会では、「奇跡の一本松」と呼ばれるようになり、これは、広い地域に甚大な被害の中、震災から復興への希望を象徴するようになっていました。



資料：筆者の撮影写真、津波にも生き残った松の一本

¹ 岩手県、東日本大震災津波伝承館令和 3 年度事業報告書、2021



資料：筆者の撮影写真、津波で被害を受けた建物

他の被災地にも、伝承館が建設・運営されています。訪れた先のほとんどの伝承館は、被害の状況を伝えるのが主な内容でした。もっとも陸前高田の伝承館は、災害被害のメッセージとともに、希望のメッセージも象徴的に発信し、東日本大震災の教訓を後世に伝えており、防災意識を高めながら、同時に災害後の復興においても何らかのメッセージを与えていると感じられ、伝承館として、非常に重要な空間と認識されました。



資料：筆者の撮影写真

災害発生から 11 年が経ちました。素敵な建物と綺麗に整備された空間に、災害の記憶と教訓を伝えようとするこれまでの復興事業の一面を見ることができました。

ただ、ぎりぎりの日程の中で長い時間見て回ることができなかったため、住民の暮らしはどうなったのかを見ることができなかった点は少し残念でした。

是非いつかまた訪れる際には、表面的な復興ではなく、地域で生きていく住民たちの被災後の暮らしがどうなっているのかをじっくり見ることができる機会があればと思います。

□ 気になったこと

今回の東北地方の被災地の視察は、陸前高田を含めて、6 カ所を訪問しました。各地域では、伝承館を含む「復興事業」の象徴的な場所を視察することができました。

こうした地域の復興事業は、経済的な側面においては、一定の成果が出ているのも事実でしょう。実際に、調査データを見ますと、外部からの訪問客が大幅に増えており、復興事業は地域経済の活性化にある程度寄与している部分もあります。

ただ、地域を見回しながら、一つ気になった点がありました。私たちも表面的な復興事業の成果だけを見て回ったので、全体を十分に分かっていないことを前提としますが、期待していた地域の「復興」という側面よりは、「復興事業」の方ばかり目についたことです。すなわち、復興がその地域の住民のためのものになっているのか気になりました。

岩手大学の五味松平准教授は「一本松」により一定の集客・経済効果が見込まれることは認めるものの、「一本松」が震災から希望の象徴となってしまったため、外部から訪れる人は「一本松」だけを見て、陸前高田の地域の被災と復興には関心を持たないことを指摘しています。住民は復興事業ではなく地域の復興過程の現在の姿を見てほしいのに、復興事業だけを見ていく訪問者との間にギャップが生じたと述べています。²

振り返ってみると、本当に外部の訪問者は多く見られましたが、地域の住民はほとんど見られなかった感があります（道の駅があるので買い物で地域住民もいたかもしれませんが....）。

今回の視察を通じて、一気に正解を出せる部分ではありませんが、もう一度、復興の対象が誰であるべきか、内容は何であるべきか考えてみるようになりました。

被災した住民が中心となり、物理的な空間も、住民の暮らしも元の状態に戻しつつ、新たな方向への展開という「復興」の本来の意味に合わせて、地域の住民の暮らしが改善され、地域の活性化を遂げる方向での「被災地の復興」を改めて考えてみる機会となったと思います。

² “奇跡の一本松、巨額費投入には賛否「生活再建は？」行政と温度差”、産経ニュース、2013. 7. 4.、
<https://sankei.jp.msn.com/region/news/130704/myg13070402330001-n1.htm>

未来の防災を発信する「宮城県気仙沼市」訪問記

キム ジュン
金 池潤

東京大学生産技術研究所 加藤孝明研究室 技術補佐員

陸前高田から双葉まで東北地方の6ヶ所の被災地をめぐる二泊三日間の旅程の中、二番目の訪問先であった宮城県気仙沼市³。ここで佐藤健一さん⁴と出会い、当時の被災及び避難の様相、そして復興に至るまでの幅広いお話を聞きました。本稿に佐藤さんのお話に加え現地視察の内容をまとめたいと思います。

1. 災害の記憶を伝える「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」

佐藤健一さんとの待ち合わせ場所は「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」のラウンジでした。この伝承館は東日本大震災で4階まで浸水した旧宮城県気仙沼向洋高等学校の一部校舎をほぼ震災当時のままで保存し、新たに整備された展示や映像上映などの施設とあわせて、震災の記録を公開しています（図1～5）。津波から命を守るための、教訓を伝え続ける拠点です。

様々なメディアから被災時の様子は何回も見た事ありますが、実際に被災した建物の中を歩きながら教室の真ん中に、波に流された車が打ち込まれている非日常的な光景を自分の目で確かめたら、自然災害の恐ろしさと傷ましさを肌で感じました。



図1 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館⁵



図2 伝承館の前での加藤研メンバー

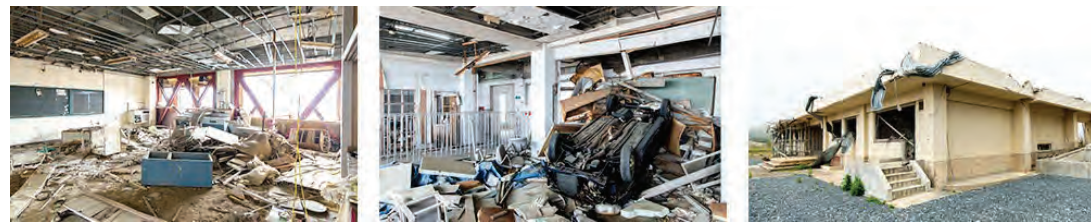
³ 東日本大震災における被害の状況（気仙沼市ホームページ参照）

⑩ 人的被害：1,355人（内訳：直接死1,033人、関連死110人、行方不明者212人）（住民登録ベース、令和4年4月1日時点）

⑩ 住宅被災棟数：15,815棟（平成26年3月31日時点）

⁴ 2011年の東日本大震災の時、宮城県気仙沼市の危機管理課長だった佐藤健一さん。2021年春、思いを伝えるため、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の館長に就任した。

⁵ 気仙沼観光推進機構（https://kesennuma-kanko.jp/densyokan_0310open/）

図3 被災されたままで保存した校舎⁶

4階に床から25センチ（地上からの高さは約12m）のところまでの錆が特に目立っていることが分かります。これは、この高さまで津波が到達した証拠です。

図4 錆びたレターケース（4階）



震災前、「電気磁気室」として使用されていた3階の教室（地上からの高さ約8m）。震災当時、津波によって車が運ばれてきました。

図5 津波に運ばれてきた車（3階）

2. 過去の教訓から学ぶ「避難行動」

佐藤さんは津波の避難が少なかった原因として①過剰な情報依存（津波を意識しつつも、気象庁などからの津波情報を待ち続け、避難をしなかった。）②正常化の偏見（「自らには危険は及ばない」という心理が作用した。）③過去の災害経験の固定化（「これまでの津波でも大丈夫だった」という経験が避難率を下げた。）を挙げました。津波の現象としての多様性への理解や想定外の規模の津波が起こる可能性、そして自らが経験した過去の津波が一つのケースに過ぎないことへの理解が重要だと語っていました。

佐藤さんのつらい経験談も聞かせていただきました。

「約60人が津波にのまれた高台を一時避難場所にしたのは私です。」

当時、市の危機管理課長だった佐藤健一さんは「高台なら安全」という住民の提案をもとに、杉ノ下地区の高台を一時避難場所として承認しました。宮城県沖地震の被害想定なども見て「大丈夫」と信じたそうです。想定を超える津波が押し寄せ、高台に避難していた約60人が犠牲になって、「あそこを避難場所にしなければ、住民は別の場所に逃げたのでは」「決裁の判を押さなければ」と何度も自分を責めたと語っていました。

「過去には」、「想定では」という発想では、命を守れないと強調していました。

3. 「天災は忘れた頃にやってくる」

佐藤さんは伝承館の館長をやってくれないかと、2020年、市から打診されたが「そんな資格はない」と何度も断ったそうです。しかし、「反省を伝える使命があるのではないか」と思い直したと話していました。

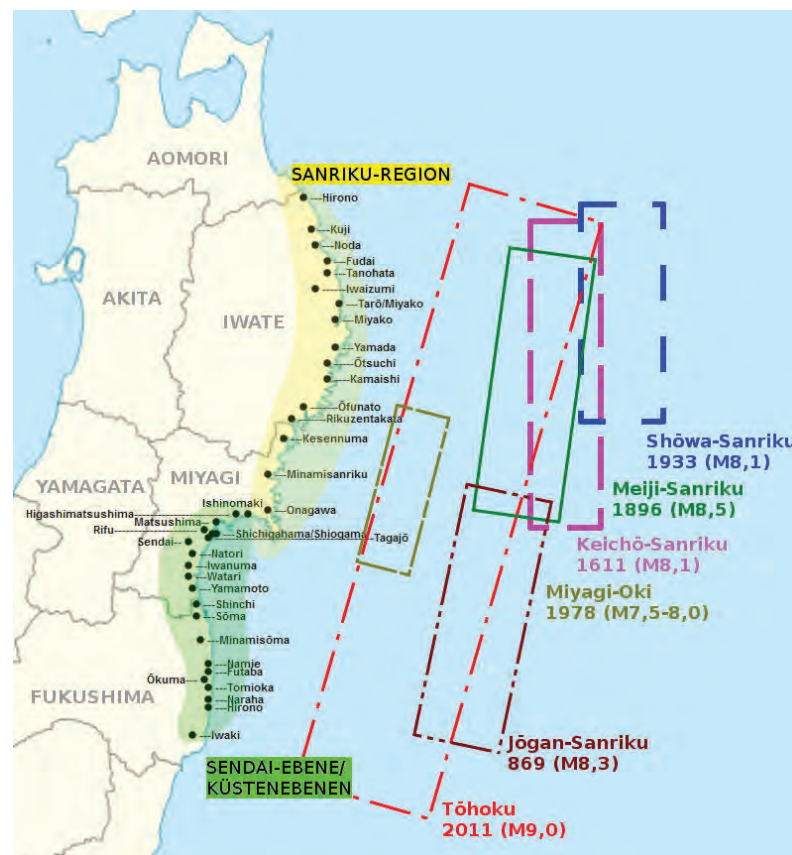
「天災は忘れた頃にやってくる」、科学者で随筆家の寺田寅彦（1878～1935）による言葉です。天災による被害を忘れることへの危険性を訴えた警告です。破壊された建物を残して当時の被災像を後世に伝える伝承館として活用していること、佐藤さんのような使命感を持った大人がその場所で自分の反省を踏まえた経験を伝えていることが心の奥深くに染みこみました。

韓国出身の私は東日本大震災のような大規模な地震は経験した事はありません。しかし、今回に気仙沼市で見せていただいた資料や聞かせていただいた体験談はこれからいつ起こるかわからない災害に対して自らちゃんと対応できるように考えてみるきっかけになりました。

⁶ 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（<https://www.kesennuma-memorial.jp/>）

「南三陸訪問の記」から、いろいろ

渡邊 喜代美



(2011 年 (平成 23 年) 3 月 11 日 (金曜日) 14 時 46 分 18.1 秒 (日本時間)、宮城県牡鹿半島の東南東沖 130 キロメートル (km) (北緯 38 度 06.2 分、東経 142 度 51.6 分、深さ 24 km) を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生した)

震災直後、何らかの支援活動ができないものか、私も理事をしている CHC (NPO コレクティブハウジング社) の仲間と話す過程で、南三陸町に行き着いた。岩手県、宮城県、福島県の臨海部を訪問して、南三陸町に行ったとき、不思議なご縁ですが、「かまぼこの及善さん」と小田原の知人の活動の一つ「小田原おでん」が赤い糸とやらでつながっていたのだった。

あれから 12 年、南三陸町訪問が度重なるうちに、素敵の方々との出会いがたくさんあった。今でも親しくお付き合いしている。今では、第 2 の故郷でもあるのが不思議だ。

支援初期は、毎月ぐらい訪問し、厳しい体験談を伺い、支援の内容も状況に合わせて進めた。



初期は衣類や日用品など、そうこうしているうちに、お話を聞くことが大事だと気付いた。

当時の訪問は張りつめていたからか、疲れ知らずの感じであったが、継続は“金”である。

そして、今も交流は続いている。

東京で支援活動の一つとしてシンポジウムを開いたりするときには、壇上に参加していただきパネリストにもお願いし、被災地から伝えたいことを直接お話していただいたりして交流を深めた。

また、この写真は、初期の活動の一つ「手仕事をしながらおしゃべりをする」シーンだ。



手仕事は「パッチワークする」ことでつなげた。

東京で布や針・糸など必要な物を集め (集めることで支援活動にもつなぐ発想)、南三陸町の集会所や神社の座敷を借りて、みなでしゃべったり、お茶菓子をいただいたりしつつ交流をふかめていった。

“しゃべる”ことは実に大事です。被災して何もかも流された強いストレス

を少しでも和らぐ足しになれば、と初めて見て、これは思いのほか効果もある良いことであった。

人と人のつながりは基本という原点が見える感じであった。

しかし参加は女子が中心で男子はあまり来ない。

そこで各集落訪問を展開した。

「つて」をたどって、バトンタッチしていただきながら進めた。

そのうちに「渡邊さんたちがきているよ」と伝わることもあった。うれしかった。

この、各集落訪問も実によい経験であった。

どんな暮らし方があったのか知ること、次の支援の内容は深まった。

また、そこで出会った方々とのつながりも膨らんでいった。

そして今も交流は続いている。

1冊の本になるぐらいの内容かもしれない。

災害復興は、どのぐらいの時間が必要かは、その場所によって異なるかもしれないが、第1期は10年ぐらいで「立ち上がり期」、第2期は「その後あらたな成熟を期待しつつ」

10年ぐらい、そして、安定期をどのように新たに創造していくか

だが、災害からの復興は生易しいものではない、というのが、体験から深く学んだことでもある。

大都市圏の災害は、おそらくもっと厳しいと、超！予感もする。想定しておかなければならないことが非常に、あまりにも非常にたくさんある。

また、NPOのような活動になにができるか、たえず議論しておきたいことでもある。

いちど「輪中会議」で議論しておきたいことでもある。

行政はどんな準備をしているのか、

地域はどんな準備をしているのか

各家庭や集合体はどうか

各個人はどうか

一度の議論では、到達はできないことが多い気もするが、提案しておきたい。

「2022 再訪問の記」追記

昨年9月8日 南三陸町に久しぶりの訪問を果たした。連れ合いを見送って、ほだほだ落ち着いてきたので、加藤研の皆さんとご一緒に東日本へ。そして南三陸町へ。

被災後は縁もあってその年7月から、毎月のように訪問していたからか、故郷に帰ったような錯覚であった。いつもは町内に宿をとっての滞在だったが、

この時は限られた時間で駆け巡った。

懐かしい面々の元気な様子だけは確認したく駆け足で回ったというところだ。

徳郎さんはハウスで作業中、ハウスでの栽培は順調の様子。

一磨さんの高台の家からは海も見わたせ、訪問時は穏やかな海が広がっていて気持ちよかった。

真弓さんは宮司の位も高くなって落ち着いた雰囲気があった。

及善さんは、販路も広くなった様子で自信に満ちていた。

内海さんのお店も繁盛しているようすだった。たしか昼食をとった記憶である。

とにかく、たくさんの方々とひさしぶりにお会いしても、突然の訪問にもかかわらず、みなさん気持ちよく、やーやーとむかえてくださった。

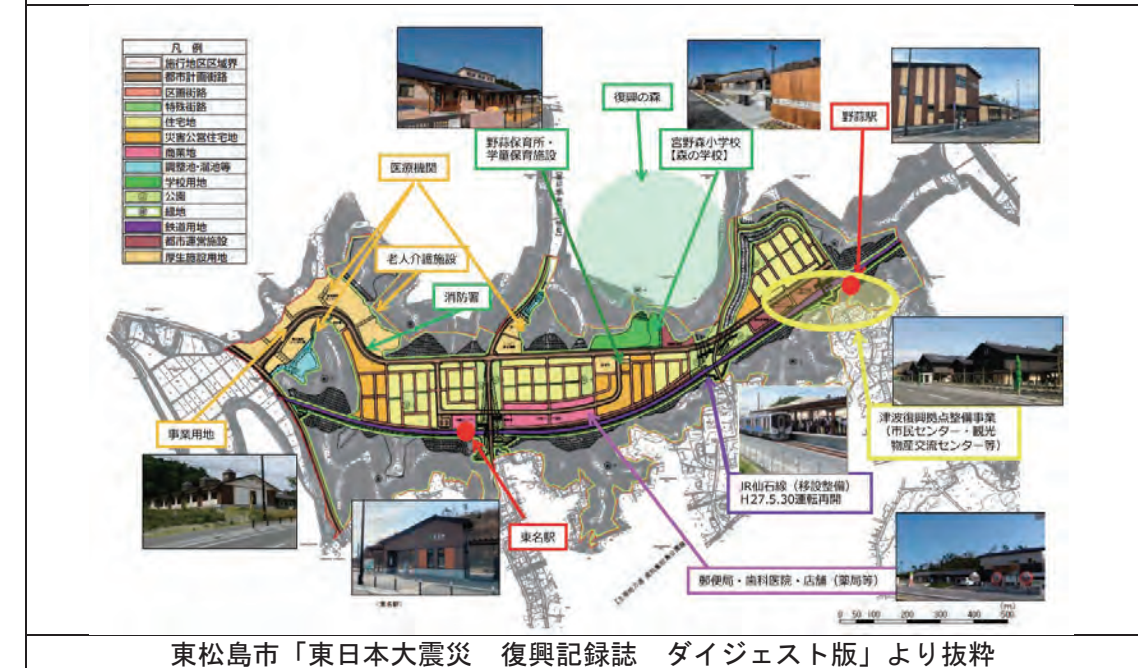
車でめぐっていると、ときどき手を振ってくださる方もいて、「あー覚えていてくださっているんだなー」と、うれしかった。

津波でさらわれた町と、高台で暮らした新たなまちと、やはり海の近くにもどっての暮らしと、いろいろあったが、あれから12年たった今、新たな構成で落ち着いてきていることも感じられた。しかし100年、200年、の積み重ねられた「コケ」のような美しさは、これからであろうかと感傷的にもなった、ひさびさの訪問でもありました。



東京大学生産技術研究所加藤孝明研究室
吉満 隆裕

野蒜北部丘陵地区の復興計画は、地域を構成するものは建物だけではなく、また、単なる人だけではなく、地域のつながり、すなわち、コミュニティそのものであることに着目し、市街地機能をまるごと移転することで地域自体を移転することに成功している事例だと言えます。



私は、現在、災害関連死について色々と調べていますが、災害関連死の死因の中でストレスが大きな割合を占めています。ストレスが発生する原因は、災害後の短期間における関連死であれば、災害によるショックが主な原因となりますが、災害後しばらくたった後の関連死のストレスの原因の一つは、私は、社会的なつながりの欠如による孤立化にあるのではないかと感じています。そのような孤立化を防ぐためには、なによりコミュニティの維持が重要であると考えます。核家族化が広がり成熟社会となった今の日本においては、互助の精神で成り立つコミュニティを新しく形成することはなかなか難しいものといえ

ます。そうだとすれば、既存のコミュニティをそのまま移転することが孤立化を避け、ひいては関連死を防ぐうえで重要なことではないかと思います。そういう意味では、野蒜北部丘陵地区の復興計画は、コミュニティの維持と防災を両立し、海と人間が共存していく形の最良な形の一つを示しているのではないかと思います。

今回、東松島市その中でも野蒜北部丘陵地区に焦点を当てましたが、今回の東北研修においては、NPO ア！安全・快適街づくりの渡邊さんや南さんのご協力を得たことで、多くの地区を回ることができ、自然の恐ろしさとともに人が共存していく方法を随所で学ぶことができるとても良い機会となりました。今回の研修の学びを活かし、今後も防災に関して微力ながらも貢献することができるように日々邁進していきたいと思っています。



震災遺構 （左）津波で破壊された 旧・野蒜駅の券売機 （右）旧・野蒜駅のホーム



（左）伝承館として使われている 旧・野蒜駅 の駅舎前で語り部の説明を聞く
（右）伝承館内に展示された 震災発生時刻で止まっている時計

私と東日本大震災と亘理町

南 貴久

東京大学生産技術研究所 加藤孝明研究室

今回の東北被災地研修の 2 日目の夕方から 3 日目の朝にかけて、宮城県の亘理町（わたりちょう）を訪問した。亘理町は、東日本大震災の被災地の中で、私が最も深い関わりを持ってきた地域である。年に 1～2 回、定期的に訪問する機会があり、その中で復興の過程も実際に目にしてきた。しかし、コロナ禍により、今回は約 3 年ぶりの訪問となった。

本稿では、私と東日本大震災、私の亘理町との関わりを踏まえたうえで、今回の訪問で得た知見を整理し、亘理町の災害復興の特徴についてまとめる。

1. 私と東日本大震災

2011 年 3 月 11 日——。私は高校卒業を目前にした時期であり、また東京大学の入学試験（後期日程）の受験を 2 日後に控えていた。国語の先生から試験対策の面談を受けた後、高校の教室で友人と話しているときに激しい揺れを体感した。その日は電車が動かず帰宅することができなかったため、高校の近くに住む友人の家にお世話になった。帰宅できたのは翌日の夕方であった。3 月 13 日の入試を何とか無事に受験し、4 月からは晴れて大学に進学をすることが叶った。

入学後、専攻する分野を決めかねていた私であったが、東日本大震災からの復興とまちづくりに関する授業を履修し、我々の住む街や住まい方をデザインする都市工学という分野に興味を持った。その授業の担当教員の中には、今お世話になっている加藤先生もいらしゃった。元々気象や災害分野に関心があったため、理学系の分野と迷う部分もあったが、人間や社会と直接関わる仕事がしたいという強い思いがあり、都市工学科への進学を決めた。

このように、私の半生において、東日本大震災は色々な意味で 1 つの大きなターニングポイントになったことは間違いない。

2. 私と亘理町

私が震災後はじめて東北を訪れたのは、2012 年 3 月のことであった。仙台に住んでいる友人の家に遊びに行き、その後名取市、岩沼市、亘理町の津波の被災跡を歩いた。当時はまだ津波の直撃を受けた建物や積み上げられた瓦礫がそのまま残されており、道路にも土が被っていた。名取市閑上地区では、復興商店街がプレハブで建っているなど、生業の復興は始まっていたが、街の本格的な復興にはほとんど着手されていないような状況であった。

その後、私が個人的に関わっていた NPO 法人ガリレオ工房の復興教育支援

事業の一環で、2013 年以降、亘理町の公民館や図書館に毎年 1～2 回訪れることとなり、現地住民と交流する機会も多くなった。さらに、2016 年と 2018 年には「亘理町防災キャンプ」に参加し、小学生や中高生とともに避難所での生活を疑似体験し、多くの学びを得た。（街づくりニュース第 22 号 P.39-40 の拙稿を参照）

3. 亘理町の被災状況と復興の特徴

亘理町では、東日本大震災において津波により町域の 48%にあたる 35km² が浸水し、306 名の犠牲者が出た。亘理町は仙台平野南部に位置し、東部は非常に平坦な土地が広がる。そのため、海岸線から 4km 以上にわたって浸水することとなった。とくに北東部にあたる荒浜地区では壊滅的な被害を受けた。一方、人口の集積する町の中心は JR 常磐線の西側の内陸部に位置しており、浸水を免れた。

亘理町では、被災から約 9 か月後の 2011 年 12 月に震災復興計画が公表され、2020 年度までの 10 年間を計画期間として復興への道のりがスタートした。亘理町では、L2（500～1000 年に 1 度の大津波）での最大浸水深が 2m 以上と想定されるエリアは災害危険区域に指定され、高台移転の対象となった。しかし、今回訪問した他の自治体とは異なり、大規模な集団移転や新たな高台造成は行わず、より内陸の既存の住宅街の周辺などにいくつかの災害公営住宅を建設したことに特徴がある。これについて、町の担当者は「山元町等の駅ごと被災された市町村とは異なり、駅の被災がなかったため、生活拠点自体を移動させることはせず、荒浜地区・吉田地区の行政区長・町民との話し合いを重ね、復興へのスピードも重視し大規模な造成は行わなかったそうです。被災された場所に住居を再建するか、駅近くの下茨田南災害公営住宅・西木倉災害公営住宅に移るかは、町民それぞれに選択いただいたようです。」と説明されている。



荒浜地区内に建てられた西木倉災害公営住宅
(Google ストリートビューより)

また、L2 での災害浸水深が 2m 未満の地域については、東日本大震災で浸水したエリアであっても現地再建が行われたり、より沿岸部からの移転先にもなっている（荒浜地区など）。これは、町の担当者によると「被災者の意向を尊重し、浸水区域内でも避難経路を十分に確保できるため」であるという。実際、亘理町では内陸部では農業が盛んであるが、荒浜地区などの沿岸部では漁業を

生業にしている方も多くいらっしゃるようで、漁港や漁協関係の施設が建ち並んでいたため、内陸部への移転を希望しない住民が多くいたことは想像に難くない。なお、移転先の用地はほとんどが民有地であり、被災をしなかった内陸住民にも交渉して町が土地を購入したとのことである。

4. 特徴的な復興事業

亘理町で特徴的な復興事業として、「いちご団地」「メガソーラー」の建設が挙げられる。

(1) いちご団地

亘理町は東北地方の中では比較的温暖な気候であり、果樹や花卉等の栽培が盛んであった。特にいちごの栽培は東北一の生産高を誇った。しかし、東日本大震災により面積ベースで約 93%が被災し大打撃を受けた。

いちご栽培復活のため、町ではビニールハウスを集約化した「いちご団地」を町内 3 箇所に建設し営農再開を促した。いわば、農業の集団移転である。



上空から見たいちご団地（亘理町提供）

亘理町では津波の塩害により土耕栽培ができなくなったため、「いちご団地」では高設栽培に切り替えた。さらに温度管理や水やりなどを自動化した統合環境制御が導入されたことにより、栽培の効率化が実現し、農家 1 戸あたりの生産量や出荷額は震災前よりも高くなっているという。

(2) メガソーラー

亘理町南部沿岸の吉田地区では、防災集団移転の移転元地と圃場整備事業により捻出された土地を活用し約 79 ヘクタールの広大な太陽光発電所（メガソーラー）がつくられている。このうち約 75 ヘクタールは民間事業者が運営し、年間発電量は町内全世帯の 1 年間の使用電力量に相当するほどである。売電収入の一部は町に寄付され、基金として農業支援等に活用されている。また、残りの約 4 ヘクタールは宮城県により運営されており、売電収入は農業水利施設の運用等に活用されている。



吉田地区に設置されたメガソーラー（南撮影）

さらに、太陽光パネルが設置されている空間は、降雨時には調整池の機能も果たすように設計されている。1 ヘクタールあたり 750t 以上を貯水することができ、水路の氾濫を防いでいる。また、周辺には津波等から逃れるための避難高台を擁した防災公園が整備されている。



◇ 追悼 熊田芳子さん ◇

私が先述の 2016 年の「亙理町防災キャンプ」で出会って以来交流を続けており、今回の訪問でもお会いした亙理町議会議員の熊田芳子さんが、2022 年 11 月 19 日に急逝されました。熊田さんは大変気さくなお人柄で、出会った初日に阿武隈川の水防訓練に連れて行ってくださったり、ご自宅で名物「はらこめし」を振る舞ってくださるなど、とてもご親切に接していただきました。



防災キャンプでは、人形劇や紙芝居などを駆使して、子供たちに災害への対応の仕方について、分かりやすく、時にユーモアも交えながら一生懸命伝えていたのが非常に印象的でした。また、小学校前での子供たちの見守り活動を長年続けておられたほか、近年では心身に傷を負った女性のサポート活動などにも献身されていたとお聞きしました。

実は、私の所属する研究室の加藤先生も、熊田さんに一度お会いしています。2018 年に亙理町で開催された「みやぎ防災フォーラム」において、加藤先生が基調講演を行った際に、熊田さんも出席されており、後日「南くんのおかげで東大の先生とお話できたよ！」と嬉しそうにお話されていたのをよく覚えています。

熊田さんは生前、紙芝居で取り上げていた「稲むらの火」の資料館（和歌山県広川町）を訪れるのが夢だとおっしゃっていました。「稲むらの火」のモデルとなった濱口梧陵は、私財を投じて防潮堤を建設するなど、後世に名を残す偉人ですが、地域のための活動を地道に積み上げて来られた熊田さんの功績も非常に大きいものがあります。立場や地域は違えど、その遺志を私も引継ぎ、社会に貢献できる人間になれるよう努めていきたいと思います。

3つの「けど」の視点から考える原発事故の復興過程

杉山 高志

東京大学生産技術研究所 特別研究員

福島県・双葉町に 2022 年 9 月 9 日に訪問し、3 種類の「けど」の表現を用いた思いを耳にした。いずれの表現も、双葉町の復興過程や復興の現状、課題を象徴していた。

1 つ目の「けど」の表現は、「生まれ故郷だから帰ってきたけど、いつかは出ていく」という 70 代男性（以下、仮名で A 氏と表記）の言葉である。私が A 氏と出会ったのは、一般社団法人ふたばプロジェクトのスタッフが常駐する「双葉駅の情報発信・休憩スペース」だった。全町避難が唯一続いていた双葉町で、2022 年 8 月 30 日に双葉駅を中心とする特定復興再生拠点区域（復興拠点）の避難指示が解除された。そして、双葉駅の西側では 2022 年 10 月 1 日より入居が予定されていた災害公営住宅の槌音が響き、街全体が復興に向けた舵を少しずつ切ろうとしていた（図 1 参照）。その中、A 氏は 2022 年 1 月に先んじて双葉町に戻り生活を始めていた数少ない住民の一人だった。A 氏は、25 年間福島第一原子力発電所に勤め、東日本大震災の発災後は南相馬市などで避難生活が続けていた。A 氏は、妻や子どもと一緒に生活していたものの単身で故郷の双葉町に帰ってきて、海で漁をしながら暮らしていた。「前の町の風景から全部変わっ」という A 氏の言葉に象徴されるように、A 氏は不安を抱えながら双葉町の生活をしていた。「生まれ故郷だから帰ってきたけど、いつかは出ていく」と耳をすましてやっと聞こえる声量で、A 氏は私につぶやくように話した。そのような生活の中、A 氏にとって心の拠り所になっていたのが、双葉駅の情報発信・休憩スペースだった。ふたばプロジェクトの女性スタッフとゆったりと会話をしていた様子を見て、双葉町の復興の光を感じた。



図 1 建設中の災害公営住宅

2 つ目の「けど」の表現は、「日立に住んでいたけど、そこは私が住む場所ではなかった」という 50 代男性（以下、仮名で B 氏と表記）の言葉である。B 氏は、私が双葉町を訪問した 4 日前の 2022 年 9 月 5 日に業務を再開した新庁舎に勤める行政職員である（図 2 参照）。もともと住宅の営業職をしていた B 氏は、東日本大震災が発災する 4 年前に新居を双葉町に建てていたものの、東日本大震災で被災した。加須市の騎西高等学校などで避難生活が続けながら、被災後各地に散り散りになった約 7,000 人の双葉町の住民に、1 年かけて電話で安否を確認し続けた。その後、日立市に B 氏の家を建てたものの、「日立に住んでいたけど、そこは私が住む場所ではなかった」と感じていたようだ。今は、双葉町のワンルームのアパートに住み、双葉町の新庁舎で業務に奮闘している。



図 2 2022 年 9 月 5 日に業務を再開した新庁舎

3 つ目の「けど」の表現は、「経験していないけど、双葉の事故を語り継ぎたい」という 60 代男性（以下、仮名で C 氏と表記）の言葉である。C 氏は、東日本大震災当時は双葉町外で勤めていて原発事故の影響を大きく受けなかったそうだが、「経験していないけど、双葉の事故を語り継ぎたい」という思いから、東日本大震災・原子力災害伝承館で語り部活動を行っていた（図 3・図 4 参照）。私は、東日本大震災・原子力災害伝承館で C 氏の語り部を聞き、自らの経験を和歌に込めて話す姿に惹き込まれた。東日本大震災・原子力災害伝承館の研究員に伺ったところ、原発事故の影響を大きく受けていない人が、東日本大震災・原子力災害伝承館で語り部活動を行う例は C 氏の他にもあるようで、原発事故を伝承したいという思いは多くの人々に共有されていることがわかった。

以上のように、私は双葉町で三者三様の復興過程を垣間見た。生活背景や生い立ちも異なる 3 人だが、3 人とも共通して「けど」という話法を用いて自ら

の復興過程を表現していたことが印象的で、双葉町の復興を象徴していた。「X からの疎外／X への疎外」の重層関係を基盤とした見田（1996）の疎外論を援用すると、A 氏はかつての故郷から疎外され、B 氏は住んでいた場所から疎外され、C 氏は被災経験から疎外されていた。X からの疎外、つまり「X がない」という形式で語られる地域社会の様相は、宮本（2016）や矢守ら（2018）が指摘しているように被災地で共通した課題であり、本稿で紹介した 3 つの「けど」の視点から双葉町の復興を考えることは、原発事故のみならず東日本大震災の復興過程を見通す上でも重要である。



図 3 東日本大震災・原子力災害伝承館

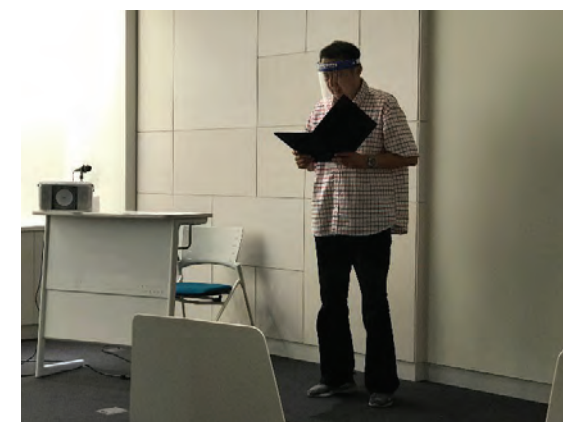


図 4 C 氏の語り部活動の様子

参考文献

- 見田宗介（1996）現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来 岩波書店。
 宮本匠（2016）減災学がめざすもの 矢守克也・宮本 匠（編）「現場でつくる減災学」新曜社 pp. 165-188.
 矢守克也・李勇昕（2018）「X がない，Y が X です」—疎外論から見た地域活性化戦略— 実験社会心理学研究, 57(2), pp. 117-127.

荒川流域訪問・交流記



埼玉県都幾川流域 現地見学会の記録

NPO ア！安全・快適街づくり

- テーマ : 荒川上・中流域の治水と台風 19 号被災現場見学
- 日時 : 2022 年 8 月 22 日 (月) (10:00 東武東上線 東松山駅改札前 集合)
- 参加者 : NPO ア！事務局、地元中・高・大学生、東京大学加藤研究室 ほか関係者
- 日程
- 10:00 東武東上線 東松山駅 改札前 集合
- 11:00- 都幾川源流部 (ときがわ町 大野) 見学 (松本浩一氏の案内)
@松本浩一さん NPO 法人 チーム東松山 代表
台風 19 号復興支援をはじめ、地元のまちづくり活動をされている。
○ 「木のむらキャンプ場」で源流部の豊かさを見学 (実感) 上流部の親水空間について議論
○ ときがわブルワリー駐車場にて源流部で起こった「ダム建設問題」の紹介 (松本氏)
○ ときがわブルワリー (ときがわ町や近隣の農産物を使ったジュース類を作っている醸造所) の見学
- 12:30- 手打ちうどん「やすらぎの家」にて昼食後、東松山市街地へ移動
- 13:55 (午後から参加の方は、高坂駅東口にて合流)
- 14:00- 台風 19 号による被災現場 (東松山市早俣) 見学 (千代田氏、東松山市職員案内)
@千代田美紀さん
2019 年台風 19 号で都幾川の決壊で床上 2m ほど浸水、語り部活動も始めている。
現在、納屋を「語り部カフェ」にするための工事をしている。
@東松山市役所 危機管理防災課職員
台風 19 号による被災・復興概要、防災まちづくり等についてご説明いただく。
@大東文化大学防災サークル STERA 鴨田氏 も同席
- 16:30 東武東上線 高坂駅にて解散 (予定)

■ 目的

葛飾区の小学校高学年以上向け「出前授業副読本」の編集にあたって、荒川の(支流を含む)上・中流域を訪問し、葛飾区をはじめとした下流部との関係性や、治水の現状について理解を深める。また、近年の水害で被災した現場を実際に見学し、現地の方の話を伺うことで、水害をより身近な問題として捉えるための契機とする。さらに、資料の収集、写真の撮影、現地の行政担当者や住民への聞き取りを行い、副読本の内容の充実に資することを目的とする。

令和元年台風 19 号による東松山市被災状況の視察記

理事長 成戸寿彦

1. 千代田さんの被災報告

1 階部分が浸水するという大変な被害を受けたにもかかわらず、ボランティアの力を借りながらも、悪臭の中 14 枚の畳を運び、骨組みだけを残して解体し復旧するという大変なご苦勞を淡々と話していただきました。

そうしたなかにも関わらず、力仕事だけでなく子供の面倒をみたり写真の洗浄をしたりするボランティアの種類の多さを観察したりする客観的な力をお持ちなのに感心しました。

避難勧告が出た段階では大丈夫だろうと思って逃げなかったが、逃げるのは自分一人の安全のためではない、逃げないとそれを見守る人が危険にさらされるのだと気づいた、と話してくださったのも印象的でした。

なにより感心したのは、あのような被害を被ったにもかかわらずこのように体験談を話してくださったり、日頃の地域のつながりの大切さに気づき自分の家の納屋をカフェにして集いの場を提供しようとしていることです。

暑いなか時間をいただいたことに感謝しつつ、地域の連帯感が強くなることを願っています。

2. 堤防決壊か所の視察

その後、NPO 法人チーム東松山の代表理事松本浩一さまの案内で、今回の決壊か所を視察しました。

幅広い河道敷をもちながら堤防を越流したことには驚きましたが、堤防が前後より一段低く復旧されていたことが目を引きました。

多分この場所より越流するように誘導されているのでしょう。即ちこの周辺は調整地になっているのでしょう。松本さんは承知していないとのことですが、田の所有者にはあらかじめ説明されていることと思います。

再び洪水が発生する前には、調整地の周囲を高く盛らねばなりませんので、工事は急がれます。

暑い中での慌ただしい見学でしたが、荒川の下流部の洪水に気を配っている NPO として、上流部でどのようなことが起こったのかまたどのような対策が取られようとしているのか、身近に感じられることができました。

今回の見学会を企画していただいた南さんにご案内いただいた松本さんに、感謝申し上げます。

荒川源流への旅

山上 忠

NPO ア！安全・快適街づくり

「荒川源流への旅」と聞いて、面積も経済圏も日本最大の関東平野を形作ったその主役に会いに行く期待が高まる。東武東上線東松山駅から車で 1 時間いつの間にか広大な平野は丘陵に、そして起伏の激しい森に覆われた山間地となり「木のむらキャンプ場」に到着。川原に降りて荒川源流に親しく接した後「ときがわブルワリー」で後続組と合流。標高 500m の高台から地元特産のジュース「柚子の贅沢」で喉を潤した後 NPO チーム東松山松本浩一代表理事から周辺の地理や洪水の歴史のほか「幻の大野ダム（高さ 60m、巾 165m、貯水量 120 万 m³ 2000 年に中止を決定）」のダムサイトを見下ろしながら講話を興味深く拝聴した。



午後は東松山市危機管理防災課大塚勝仁主任ほかの紹介で、2019 年台風 19 号早俣地区で罹災した千代田美紀子氏を訪問。1 階天井まで水没したという家屋の庭で千代田氏を囲んで罹災当日から翌日およびその後復旧までの約 2 か月の状況を 3 時間にわたって詳しく傾聴した。罹災家屋を目の当たりにしての生々しい体験談に圧倒されると共に淡々と語るまだ若い主婦の健気さには敬意を感じた。そのあと溢水箇所を見学、早俣地区は荒川の源流甲武信ヶ岳から東京湾まで総延長の 173 km の丁度半分の場所に位置している。平常時に見る景色に堤防を越水した状況はどうしてもつながらず自然災害に対する脅威を新たにした。

今回は NPO、東京大学、芝浦工業大学、葛飾区、葛飾区住民、高校生など総勢 16 名による防災副読本づくりのための調査旅行であり、一般社団法人関東地域づくり協会の助成金を使用したものである。さらに次回予定として今秋の環状 7 号線地下洪水調整池やカマキリ遊水地公園（荒川彩湖公園）などの見学学習を予定している。



20 年の取り組みを振り返って (令和元年台風第 19 号被災現場等見学会を通じて)

情野 正彦

葛飾区 地域振興部（危機管理・防災担当）

NPO ア！安全・快適街づくり 設立 20 周年、おめでとうございます。

私自身も、設立当初の段階から企画課の係長として関りを持ち、その後も、街づくり部門、危機管理部門の管理職として、共に歩んでまいりました。

当初は、地球温暖化に伴う気候変動により、豪雨災害の激甚化などが進展する話を聞いても、余りピンとこないまま、取り組みを進めてきましたが、平成 27 年 9 月関東・東北豪雨では、本区において、初めての経験となる「避難準備情報」の発令、令和元年東日本台風ではこれも本区では初めてとなる「避難勧告」の発令と、水災害の頻発・激甚化の進展を実感しているところです。

本区においては、別途紹介いたしました「浸水対応型市街地構想」や「広域避難」の実現に向け、取り組みを進めているところでありますが、引き続き、NPO の皆さんと、連携・協力して、取り組みを推進したいと考えています。

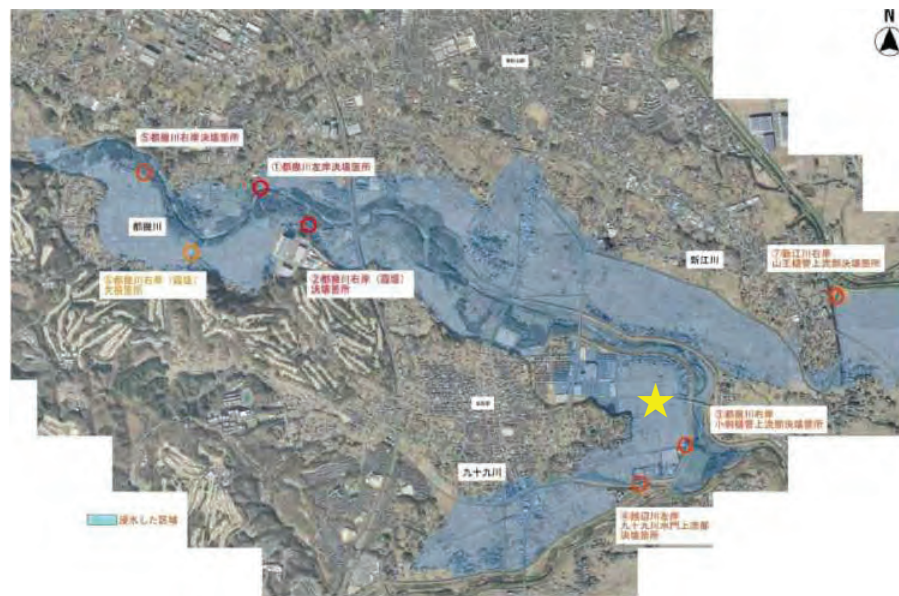
ここでは、8 月に NPO が実施した「令和元年台風第 19 号被災地見学会」について、簡単にレポートします。

当日は、東武東上線東松山駅に集合し、NPO が用意したマイクロバスで、午前中は都幾川の源流、午後は都幾川の堤防決壊箇所などを見学し、NPO 法人チーム東松山の松本代表や、被災を経験した千代田さんなどから、話を聞きました。

このレポートでは、午後

の都幾川決壊箇所について記載します。

都幾川沿いの早俣地区（92 世帯全壊：水深 3m、上図の星印）にお住いの千代田さんは、結婚してこの地に住み始め、近所付き合いは、PTA としての活動



令和元年台風第 19 号の浸水状況（国土交通省資料より）

で同年代はあるが、同地区内に住んでいる方は、ほとんど知らなかった。

被災当日は、避難情報が発信されても、避難するつもりはなかったが、主人から電話で、近くの高台にある実家へ避難するよう強く言われ、一泊遊びに行くつもりで避難、消防団の方が、避難を促すため、世帯を訪問したが、なかなか避難してもらえず、最終的には強制的に避難をさせることもあったと聞いている。**自分が避難することは、自らの命を守るだけでなく、他の人の命を守ることに繋がることを実感した。**

翌日、自宅に戻ると、本宅床上浸水、納屋 2 階まで浸水。見ても驚きしかなかった。その後、ボランティアの方の手伝いもあり、復旧に着手。1 階の壁の壊しや、乾燥・消毒とほとんどのことをボランティアとともに実施。

もともと話をすることが好きであったこともあり、この経験を次世代に繋ぐこと、平時から身近にお住まいの方が集まれる場所を提供することを目的として、納屋を改装したカフェの開設の準備中。（明治大学のボランティアの方と改装中）

これまでは自治町会活動なども活発ではなかったが、19 号を契機に町会としての防災訓練などが始まる。

次に、東松山市役所の危機管理防災課の関根さんから、発災時の対応から、現在の復旧・復興状況について、説明をいただきました。

堤防決壊による被害は、カスリーン台風以来はじめてとのことですが、堤防越水による浸水は、平成 3 年台風 18 号、昭和 57 年台風 18 号など度々ある。

今回の決壊以前から、国や県に対し要請活動などを進めていたが、優先順位

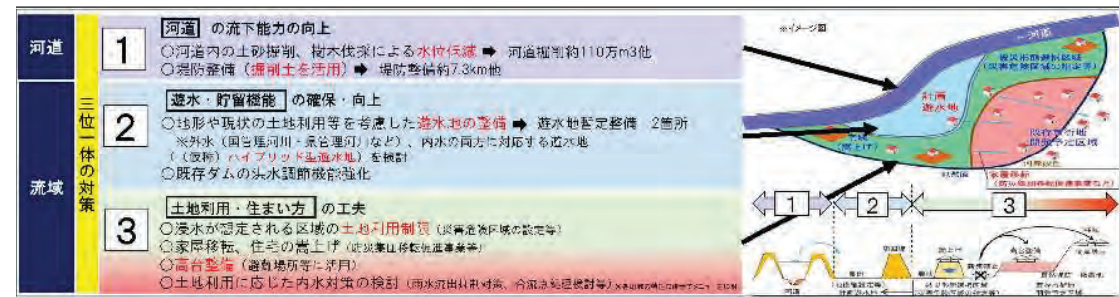


都幾川沿いの早俣地区（早俣地区内）



段階	プロセス	概要図
Step 1 激しい降雨 河川水の上昇	・多量の降雨により河川水位が上昇する。	
Step 2 越水の開始	・さらに河川水位が上昇するとともに、越水が発生したと推定される。	
Step 3 堤防前面の減少	・時間の経過とともに、越流水の作用により川筋法尻の洗掘や天端の侵食が進行し、堤防前面が徐々に減少する。	
Step 4 決壊	・さらに川筋法尻部の洗掘が進み、又はその途中で川表側からの水圧に耐えきれず堤防が決壊したと推定される。	

が低いということで実施には至らなかったが、台風 19 号を契機に「入間川流域緊急治水対策プロジェクト」が策定され、①河道の流加能力向上、②遊水・



貯留機能の向上、③土地利用住まい方の工夫を柱に、対策に着手。①については復旧を含め、着々と推移。②については、調節池の整備も提案（地元説明）されているが、どのように貯めるかについて、具体的なイメージまでは地元とは共有できていないよう。③については、市街化調整区域内の災害イエローゾーンにおける開発行為の厳格化がスタート。

松本氏によると、これまで都幾川源流部で500mm程度の豪雨では大きな災害とはならなかったが、台風19号のように600mm以上の降雨の場合、今後とも注意が必要。台風19号では、入間川が氾濫した



ことが、下流部の自治体にとっては幸いであったと感じており、氾濫に代わる中流部での対策(②・③)の実現が必要。堤防整備だけでは、下流部での氾濫に繋がるのではないかと危惧している。

今回の見学会は、NPO ア！安全・快適街づくり、東京大学生産技術研究所加藤研究室、芝浦工業大学学生、上平井中地域ボランティア部 OB（高校生）、町会、本区職員と、多様な世代・立場の方と意見交換でき、新たにスタートした流域治水として、上流部・中流部・下流部に住む地域住民として、それぞれが、流域の治水や生活などを真剣に考えていく時期に来ていることを改めて確認する有意義な機会となりました。

NPO 法人チーム東松山の松本さん、早俣地区の千代田さん、東松山市役所の皆さん、暑い中、本当にありがとうございました。

令和元年台風 19 号の都幾川堤防決壊（東松山市早俣地区） 現場と浸水被害家屋を訪ねて

増澤 一朗

NPO ア！安全・快適街づくり事務局

8月22日（月）正午を過ぎる頃、それまでの曇り空から一転強い日差しが照り付ける夏空となり、一行は被災された千代田さんのお宅へと向かった。

奥様は、「台風の影響で当日も雨が降り続いていましたが、暗くなりかける頃、消防団の『避難して下さい！』と呼び掛ける声、そして主人の『一刻も早く避難しなさい！』の電話で漸く決心がつき近くの高台に避難しました。

翌日、水が引き家に戻ると、二階の床まで水が来た痕跡が残り、家財道具・電気製品をはじめ、天井や床・畳・壁が水に漬かった後の光景を目の当たりにした時は、文字通り茫然自失の想いでした。

気を取り直し片付け始めると、市役所の方や社協の方が見え、何かと助けて下さり、数日後にはボランティアの方々が床下の泥を掻き出す作業までして下さいました。この間の悪臭は、酷かったですが床を張り替え、壁も塗り替え元通りになったのは11月末頃でした。

今度の水害で、日頃からの近所付き合いが大切なんだと思い知らされ、又、ボランティアの方々の労を惜しまない一連の作業と、別れ際に『有難う御座いました。』と言われ、深く心を動かされました。」と実感を交々と語られ、当方の質問にも丁寧に答えられ、被災写真や、浸水痕が残る居間も見せて下さいました。

最後に、「子供からお年寄りまで誰でもボランティアが出来ます。」の言葉は、それ迄自分がとかく抱いていた対岸の火的思いを一掃して下さいたと、感謝しつつお宅を後にした。

次の現地は、NPO 東松山代表の松本さんの案内で、決壊現場（都幾川右岸0.4 km付近「早俣地先」）復旧の堤防天端に立って、川表側を見ると高水敷は、一面樹木の河畔林で覆われ、川面も見えない自然豊かな川が、都幾川だった。

松本さんが、「ここから越水し、一帯が浸水しました。」と言われた場所を改めて見ると、天端道路は、上・下流がある地点（「小剣樋管」決壊延長L＝90mの中間付近）に向かって傾斜していた。

何故ここが低いまま復旧してあるのか不審に思っていると、松本さんは、『この辺は水田地帯で、国交省の図面には遊水池の○印が付けられています。住んでいる方々は知っているかどうか？』と話された。

とすると、河川は流水を阻害することなく、下流に流す働きと想っていたが

川を見る限りでは、樹木伐採、河床浚いが行われていても尚記録的降雨量の際は、恣意的にここから越水させる意図で窪地にしているのだと思い直した。

「水田地帯ですが近年、道路沿いに商業施設や、家電量販店が土盛りして建ち、その分浸水深も増し、昔からの家が水没する。一方、上流部で洪水になれば下流部が助かるのでは。」とさりげなく松本さんが言われる頃、夏の陽も陰り出した。

最後に、「上流の子供と下流の子供との交流が図れたら。」の言葉は、新小岩北地区の小学校等でここ 10 年「親子で語り継ぐ大雨時の避難について」の出前授業等に携わる者として同感の意を強くし、現場見学を終えた。

千代田様・松本様・東松山市役所様ご案内・ご説明有難う御座いました。

自然の力の恐ろしさを改めて再認識

吉満 隆裕
東京大学生産技術研究所

私は現地見学会に午後から参加させていただきました。千代田さんのお話をお聞きして、その後、決壊し、復旧した堤防を見てきました。

千代田さんのお話は被災した写真を交えながら、当時の状況、被災後から復旧までの状況を事細かに話してくださり、とても学びの多いものでした。特に、被災前の大丈夫だろうという心境から、被災後に、地域のつながりと助け合いの重要性へと思いが至る心境の変化の過程や、助け合いの重要性に気づいたからこその今の地域のつながりの希薄さの危険性の認識・改善の重要性などについてのお話は防災の根幹問題に関して具体的なケースとともに学べる実りの多いものでした。堤防の見学においては、通常時の川の水位からはとても決壊するようには見えず、自然の力の恐ろしさを改めて再認識する機会となり、大変有益なものとなりました。このような素晴らしい見学会を企画し、参加させてくださった NPO ア！安全・快適街づくりさんに深く感謝します。ありがとうございました。



千代田さん宅の被災状況（千代田さん提供）

広域連携で治水を考える ～荒川上中流域との交流から～

南 貴久
NPO ア！安全・快適街づくり

ここまでのレポートにあったように、2022 年 8 月 22 日（月）、副読本作成委員会の第 1 回現地見学会として、荒川の支川・都幾川の流域を訪問した。現地では、地元で NPO 活動をされている松本浩一氏や、2019 年の令和元年東日本台風（台風 19 号）で被災をした東松山市早俣地区の住民 千代田美紀氏らに案内していただき、上流・中流部の暮らしや被災体験、今後の治水対策等について話を伺った。

この見学会は、副読本を作成するうえで「浸水・親水」を葛飾の中だけの問題として捉えるのではなく、荒川や江戸川の流域全体との関係性の中に位置づけたいと考え、実施を構想した。荒川の上流との関係について理解する第一歩として、2019 年の台風 19 号の経験は葛飾区の方々にも記憶に新しいことから、この台風で被災を経験した埼玉県東松山市を訪問することが有効であると考えた。そこで、2021 年 11 月に行われた「第 1 回荒川流域防災住民ネットワーク会議」で出会った森良氏に相談をしたところ、現地の住民とネットワークを持つという松本氏を紹介していただき、松本氏のご厚意で見学会が開催できることとなった。見学会の内容については、他の方々からの報告が多数あったため、ここではその後の東松山市や流域住民との交流について報告したい。

10 月 15 日（土）の輪中会議（次号で報告予定）では、千代田氏宅で出会った、東松山市を拠点に活動する大東文化大学公認防災サークル「STERA」の嶋田さんが遠路はるばる出席してくださり、互いに知識や経験を共有した。11 月 20 日（日）には、板橋区の舟渡小学校で行われた「第 2 回荒川流域防災住民ネットワーク会議」に NPO ア！の宇賀氏、山上氏とともに出席した。午前の講演では、千代田氏が加藤先生、金藤純子氏（倉敷市真備町で西日本豪雨被災、輪中会議にも参加）とともにトークセッションを行った。また、「STERA」のメンバーが「開会映像」や全体の進行を担当されていた。分科会では、板橋区や江戸川区の住民グループらとともに、要支援者の避難に関する課題について意見を交換した。翌 11 月 21 日（月）には、金藤氏らが主催する防災ボードゲーム「LIFE」の体験会に、大学生の小豆嶋さんとともに参加した。スタッフとして「STERA」のメンバーも参加されていた。12 月 11 日（日）には、千代田氏宅の「語り部カフェ」に参加し、現地住民や「STERA」メンバー、明治大学の学生らと交流を行った。

このように、板橋や東松山での出会いが次々に繋がりが合い、我々の NPO にも他地域の方々との「ネットワーク」が形成されつつある。こうした繋がりを

大切にしながら、2023 年度はさらに「広域連携」を重視した治水の取組みを行っていく予定である。具体的には、東松山市をはじめとする荒川の流域住民にお声掛けをし、互いの地域の訪問や流域治水施設の見学、ミニシンポジウムなどを共同で実施することで、視野を広げた活動を展開していくことを目指している。



ものつくり大学(行田市)の調整池は、令和元年東日本台風により満水となった
(宮本伸子・撮影)

特別寄稿



中川のテラスに整列するユリカモメたち (古川修・撮影)

災害関連死の裁判例について

吉満 隆裕
東京大学 生産技術研究所 加藤孝明研究室 研究生

1 私は現在、加藤孝明研究室にて防災について学んでいます。今回は、私が法学部出身という背景から法学と防災の交錯するものとして、災害関連死に関する裁判例を整理し、分析していきたいと思います。

2 災害関連死とは、一般的には、災害「による」死亡といえるもので、災害弔慰金が支給されうるものをいいます。「災害により死亡した」（筆者追記：災害弔慰金の支給等に関する法律第3条）とは、災害と死亡との間に相当因果関係が認められることをいう」（熊本地裁（筆者注：地裁は地方裁判所の略）令和2年10月28日抜粋）とされます。

3 裁判例に関する論文やまとめ

裁判例を分析しているものは、[宮本, 2013]や[小口, 2017]などがあります。また、裁判例をまとめているものとして内閣府の災害関連死事例集などがあります。[宮本, 2013]は裁判例の分析のほかに法律成立・改正経緯、支給審査の概要なども述べられています。

4 裁判例のまとめ表（内閣府 HP 災害関連死事例集・裁判例を参考に筆者が作成）

県名	対象	因果関係	死亡理由など	判決	判決日
兵庫県	男性 75 歳	否定	平成 7 年 1 月 11 日に腎不全による消化管出血	請求棄却（神戸地裁）	平成 9 年 9 月 8 日
		肯定		請求認容（大阪高裁）	平成 10 年 4 月 28 日
福島県	男性 65 歳	否定	平成 24 年 5 月 29 日に自殺	請求棄却（福島地裁）	平成 26 年 5 月 27 日
宮城県	男性 76 歳	否定	平成 23 年 10 月 20 日に胃がんにより死亡	請求棄却（仙台地裁）	平成 26 年 9 月 9 日
		否定		請求棄却（仙台高裁）	平成 27 年 4 月 10 日
宮城県	女性 85 歳	肯定	平成 23 年 8 月 7 日に播種性血管内凝固症候群にて死亡	請求認容（仙台地裁）	平成 26 年 12 月 9 日
		肯定		請求認容（仙台高裁）	平成 27 年 6 月 25 日
宮城県	男性 99 歳	肯定	平成 23 年 3 月 18 日に脳梗塞による急性呼吸器不全にて死亡	請求認容（仙台地裁）	平成 26 年 12 月 17 日
宮城県	女性 76 歳	否定	平成 23 年 7 月 29 日に肺炎で死亡	請求棄却（仙台地裁）	平成 27 年 1 月 21 日
		否定		請求棄却（仙台高裁）	平成 28 年 4 月 26 日

		否定		請求棄却（最高裁）	平成 29 年 1 月 17 日
岩手県	男性 56 歳	肯定	平成 23 年 12 月 28 日に心疾患により死亡	請求認容（盛岡地裁）	平成 27 年 3 月 13 日
岩手県	男性 80 歳	否定	平成 24 年 3 月 26 日に胆のう腫瘍により死亡	請求棄却（盛岡地裁）	平成 27 年 4 月 23 日
		否定		請求棄却（仙台高裁）	平成 28 年 1 月 20 日
		否定		請求棄却（最高裁）	平成 28 年 7 月 5 日
宮城県	女性 90 歳	否定	平成 24 年 1 月 22 日に肺炎で死亡	請求棄却（仙台地裁）	平成 29 年 12 月 26 日
		否定		請求棄却（仙台高裁）	平成 30 年 6 月 14 日
		否定		請求棄却（最高裁）	平成 30 年 11 月 6 日
岩手県	女性 82 歳	否定	平成 23 年 9 月 29 日に肺炎で死亡	請求棄却（盛岡地裁）	平成 31 年 4 月 25 日
熊本県	女性 99 歳	否定	平成 28 年 10 月 11 日に急性呼吸不全で死亡	請求棄却（熊本地裁）	令和元年 12 月 4 日
熊本県	女性 93 歳	否定	平成 28 年 7 月 28 日に肺炎が原因の心不全で死亡	請求棄却（熊本地裁）	令和 2 年 9 月 23 日
熊本県	女性 94 歳	否定	平成 28 年 8 月 20 日に間質性肺炎で死亡	請求棄却（熊本地裁）	令和 2 年 10 月 28 日

5 裁判例について（判断基準の傾向）

ここでは、実務上影響力が大きいであろう裁判例を 4 つほど紹介したいと思います。(3)(4)は最高裁までいきましたが、上告不受理のため、いまだ一般に影響力のある裁判例（最高裁判所の判断）は存在しません。[宮本, 2013]は下記(1)を、[小口, 2017]は下記(1)と(3)をリーディングケースとして挙げ分析しています。今回は下記(1)と(3)に加えて、下記(2)は因果関係の程度を示したものとして、下記(4)は最新の高等裁判所の判断として取り上げます。なお、仙台高裁平成 27 年 6 月 25 日、仙台高裁平成 28 年 1 月 20 日は、いずれも特徴ある基準を示していなかったため、ここでは取り上げませんでした。

(1) 大阪高裁平成 10 年 4 月 28 日

A（男性・75 歳）は病院に入院していて、いつ死亡してもおかしくない状態でした。阪神淡路大震災の発生で、病院が停電し A に装着されていた人工呼吸器や自動輸液流入ポンプが停止したため、医師 B が治療を行いました。震災発生後 1 時間後に死亡しました。A の遺族は災害弔慰金の支給を申請しましたが不支給決定を受けたため、不支給決定の取り消しを求めた裁判です。

第 1 審の神戸地裁平成 9 年 9 月 8 日は、「震災当時、いつ死亡してもおかしくない状況にあり、震災がなくても数時間ないし数日のうちに死亡していたことは確実と認められる。」ことなどから、地震と A の死亡の因果関係を否定しました。

これに対して、大阪高裁は「死期が迫っていたか否かは右相当因果関係の存否の認定を左右するものではない」とし、本件は「なお延命の可能性があり、少なくともその時期には未だ死亡という結果が生じていなかったものと認められる」として、因果関係を肯定しました。

この判例のように延命の可能性を重視すると、地震が死亡にある程度寄与すれば、因果関係が認められ、因果関係を認める基準としてはかなり緩やかな基準に読めます。

(2) 仙台高裁平成 27 年 4 月 10 日

C (男性・76 歳) は胃がんにより死亡しました。C が死亡したのは C が余震に怯えるなどして不安を抱え不眠症になった上、アルコールを多飲するようになって食欲が低下したことによって死期が早まったものであるから、C は本件震災により死亡したものであるとして C の遺族が災害弔慰金の支給を申請しましたが不支給決定を受けたため、不支給決定の取り消しを求めた裁判です。

第 1 審の平成 26 年 9 月 9 日は、「C が本件震災及びその後の余震に対して不安やストレスを感じていたのだとしても、一般に不安やストレスが身体の不調に影響を及ぼす可能性があるというに過ぎず、これだけで、本件震災が C の胃がん発症又はその進行に影響を及ぼしたとまで認めることはできない。」などとして、因果関係を否定しました。

これに対して、仙台高裁は、「災害と疾病による死亡との間に相当因果関係があるというためには、死亡の原因となった当該疾病の発症が災害に起因するものといえるか、又は、当該疾病が災害により増悪した結果死亡に至ったと認められることが必要」とし、「本件震災によるストレスが C の胃がんを通常の進行速度を超えて進行させた（震災が既往症を増悪させた）とは認められない。」として、因果関係を否定しました。

この裁判例では、「医学的な見地から厳格な因果関係を要求すべきではな」といする C の遺族側の主張を採用せず、基準を適用するにあたって「医学的知見を前提にすると」という「医学的知見」があることを前面に押し出している点で、相当因果関係があるためには医学的知見が必要であることを示したように読めます。医学的知見という言葉を推し進めると個別に対応した医師の意見では足りず、医学界で常識化していなければ、因果関係を認めないということになりかねず、研究が進んでない分野と進んでいる分野での不公平感が出る恐れもあるように思います。

(3) 仙台高裁平成 28 年 4 月 26 日（最高裁平成 29 年 1 月 17 日は上告不受理）

D (女性・76 歳) は、要介護 3 の認定を受けていました。東日本大震災の発生で、自宅から避難し、親族の家で避難生活を始め、その後徐々に体調が悪化し、肺炎を発症し、死亡しました。C の遺族は災害弔慰金の支給を申請しましたが不支給決定を受けたため、不支給決定の取り消しを求めた裁判です。

第 1 審の仙台地裁平成 27 年 1 月 21 日は、D 「の生活状態は・・・比較的安定していたということができ、肺炎発症の要因となるような事情もうかがわれないこと」から、D の直接の死因である「肺炎が本件震災による肉体的かつ精神的な負荷の蓄積を原因として引き起こされたとまで認めることは困難である」として、因果関係を否定しました。

これに対して、仙台高裁は、1 審と異なり D の生活環境の変化が誤嚥性肺炎発症のリスクを高めたことを認めつつも、「相当因果関係を肯定するため（「災害による死亡」というため）には、震災が当該疾病発症の最有力原因であるといえなければならない、震災がなければその時期には発症していなかったという事実的因果関係があるだけでは足りない。」として、既往症などを併せて考えると、生活環境の変化は最有力原因ではないとして、因果関係を否定しました。

この判例は、震災がなければその時期に発症していなかったという事実的因果関係があるだけではたりないとしていることや震災が最有力原因といえなければならないという点で、大阪高裁平成 10 年と比べて、因果関係を認める基準は厳格になっているように読めます。また、この判例は、大阪高裁平成 10 年の裁判例を「当該疾病が災害によりその通常の経過を超えて著しく増悪した結果死亡に至ったと認められる」場合の極限的なケースとして、本件事案にはあてはまらないとしました。このような大阪高裁平成 10 年の適用範囲を絞った点からも基準の厳格化が読み取れます。

(4) 仙台高裁平成 30 年 6 月 14 日（最高裁平成 30 年 11 月 16 日は上告不受理）

E (女性・90 歳) は、慢性心不全とアルツハイマー型認知症を発症していました。東日本大震災で、自宅が被災し、息子及びその妻 F を亡くしました。自宅から避難所へ避難し、その後入院し、入院先で肺炎を原因として死亡しました。E の遺族は災害弔慰金の支給を申請しましたが不支給決定を受けたため、不支給決定の取り消しを求めた裁判です。

第 1 審の仙台地裁平成 29 年 12 月 26 日は、E 「は、本件震災による大きなストレスやショックによって精神的・肉体的に衰弱したと認められる。」しかし、亡 E は肺炎を発症するより「5 か月以上前に、」「退院可能な状態と判断されている。」など亡 E の状態は「比較的安定していたといえるから、」E 「が、本件震災により精神的・肉体的に衰弱して肺炎を発症したと認めるのは困難である。」として、因果関係を否定しました。

これに対して、仙台高裁は、「災害と死亡との間の因果関係として、少なくとも、災害に被災しなければ、その被災した住民が、死亡の時点においてなお生存していたであろうことが認められることが必要であると解するのが相当である」とし、E が「本件震災の被災により持病が悪化し、被災による持病の悪化や同居していた長男の死亡等の生活環境の変化に伴う入院や施設生活を通じ、相当の精神的・肉体的なストレスを受け、また体力の低下が生じたことは認められるものの、そのことがなければ、」E「が本件震災の 9 か月後である平成 24 年 1 月 2 日頃に肺炎を発症することがなかったであろうと認めることはできないし、また、そのことがなければ、発症の約 20 日後である同月 22 日に肺炎により死亡することはなかったであろうと認めることもできない」として、因果関係を否定しました。

この判例は、因果関係を認める基準としては、大阪高裁平成 10 年と同じような緩やかな基準をとるようにも読めます。そうすると、大阪高裁平成 10 年の基準をもとに、体力低下が肺炎の発症を少しでも早めることは普通に考えられるとして、因果関係を認める方向にいくはずです。しかし、仙台高裁平成 30 年は、基準の適用に当たって、ストレスや体力低下と肺炎との間の関係を認めるか否かについて、一般的にそう言えるという関係性を超えた、より厳格な関係性を求めており、明らかに大阪高裁平成 10 年より厳格な基準をとっています。基準を導く根拠として、「災害弔慰金の財源は、市町村の財政を通じて住民全体が負担するものである」という財源は限られているから給付金を与えられる人も絞られるというような論法に良く使われる財源論が出ているあたりも基準を厳格に適用しようとする意図が読み取れます。

(5) 裁判例の基準に関する傾向としては、大阪高裁平成 10 年と比べて、仙台高裁平成 27 年は医学的知見があることを求め、仙台高裁平成 28 年は最有力原因といえることを求め、仙台高裁平成 30 年は基準の運用を厳格化するなど、裁判においては、震災と死亡の因果関係を認める基準は時代とともに厳格になってきているように思われます。

6 その他の裁判例（事実認定の傾向）

因果関係を肯定した裁判例としては、大阪高裁平成 10 年 4 月 28 日、仙台地裁平成 26 年 12 月 9 日、盛岡地裁平成 27 年 3 月 13 日、仙台高裁平成 27 年 6 月 25 日（1 審も肯定）があります。前記大阪高裁平成 10 年の事例を除いて、いずれも生活環境の変化を詳細に認定して、因果関係を肯定しています。1 例として、仙台高裁の事例を紹介します。

仙台高裁平成 27 年 6 月 25 日（第 1 審：仙台地裁平成 26 年 12 月 9 日）は、第 1 審の地裁が「本件震災後の A（筆者注：女性・85 歳）の生活状況について

みると、」「本件震災及びその後の余震により、本件自宅について、敷地にひび割れや陥没が生じ、土台部分が損傷して建物が傾き、外壁に多数の亀裂が生じ、外壁に設置されていたガス管やガス給湯器が外壁の傾きと共に破損するなど、大きく損傷した上、電気、水道及びガスが停止したため、原告らは本件震災後 3 月 15 日まで原告の軽自動車内で生活したこと、3 月 15 日に電気が復旧したことから、原告らは、本件自宅の玄関や窓ガラスの応急の調整をした上で、同日より居間で寝泊まりするようになったものの、本件自宅には隙間風が吹き込んでくる状態であり、また A は自力で歩くことができなかったため、1 日中こたつに入って過ごしていたこと、水道の復旧が遅れたため、原告らは必要最小限の水しか使わないようにして生活していたこと、ガスの復旧も遅れ、A は C への通所が再開した 3 月 28 日まで入浴することができなかったことがそれぞれ認められる。」「本件震災により A の生活環境及び住環境が著しく悪化し、A の心身に多大な負担が掛かったことがその大きな要因となったものと合理的に推認することができる。」と生活環境の変化を詳細に認定し因果関係を肯定したことに対し、「当裁判所も、」A「は、本件震災後の生活環境の著しい悪化の影響で、心身への多大な負担を余儀なくされて嚥下障害となり、誤嚥性肺炎を起こして栄養が悪化したため、体力が低下して敗血症に罹患し、これを原因とする播種性血管内凝固症候群により死亡したもので、本件震災と」A「の死亡との間には相当因果関係が認められる」として、因果関係を肯定しています。

これに対して、因果関係を否定した裁判例としては、本文に取り上げてないものをみると、福島地裁平成 26 年 5 月 27 日、熊本地裁令和元年 12 月 4 日、熊本地裁令和 2 年 9 月 23 日は生活環境の変化についての認定は薄く、盛岡地裁平成 31 年 4 月 25 日、熊本地裁令和 2 年 10 月 28 日は、生活環境の変化について肯定例ほど詳細ではありませんが、ある程度の認定をしています。しかし、盛岡地裁の方は高齢（82 歳）・既往症（糖尿病）などから、熊本地裁の方は、高齢（94 歳）・要介護（要支援 2）など他の要因の死に与える影響を考慮して、それぞれ地震と死亡との因果関係を否定しています。

これらの裁判例からは、肯定例は生活環境の変化について悪化が明確に認められれば、因果関係を認める傾向を示していたのに対して、最近の裁判例では、盛岡地裁平成 31 年や熊本地裁令和 2 年のように、生活環境の変化について悪化したことをある程度は認めながらも、死亡に対する影響は大きくないとして、因果関係を否定しています。裁判所は生活環境の変化ということに一定の配慮を示しつつも、因果関係を認めることに消極的な方向へと向かっているように思われます。

7 以上のように災害関連死の裁判例を見ていくと、基準は厳格化傾向にありますが、一部抜粋したものだけでもかなり詳細な思考過程が判断した材料や知

見などとともに示されています。細かければよいということではないですが、詳細なものであればあるほど、一つ一つの積み重なった事実のつながりが見えてくるともいえ、そのようなつながりが蓄積されれば、より公平かつ透明性のある判断や明確な基準の定立が可能になってくると思います。もっとも、裁判例は 13 事案しかなく、災害関連死者数約 5000 人（阪神淡路大震災・新潟中越地震・東日本大震災・熊本地震）と比べてかなり少ないです。さらに、裁判例以外もので公開されているものは内閣府の災害関連死事例集ぐらいしかありません。災害によって起きた不幸に対して納得感を持って、残された人たちが前を向いて進み始めるためにも、また具体的な対策の必要性を明確にし、推進し同じような不幸を発生させないためにも、裁判例以外の判断内容を蓄積・分析・整理していくことが必要だと思います。

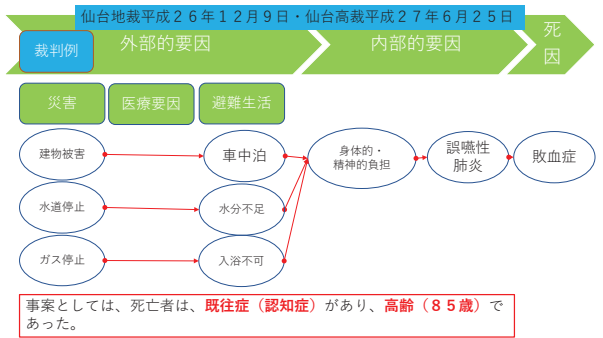


図 仙台地裁平成 26 年 12 月 9 日・仙台高裁平成 27 年 6 月 25 日で示された関連性（吉満作成）

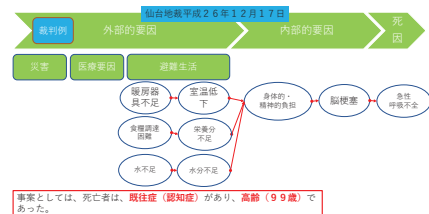


図 仙台地裁平成 26 年 12 月 17 日で示された関連性（吉満作成）

参考文献

宮本ともみ. (2013). 災害関連死の審査について—東日本大震災における岩手県の取組から—, アルテス リベラレス , 92, 67-86.

小口幸人. (2017). 災害弔慰金の制度と裁判. 復興, 36.

活動のダイナミクスで「Extreme Events（極端現象）」をサバイブ

ジャーナリスト 河野 博子

これまで見たことがないような活動が展開されている——NPO 法人 ア！安全・快適街づくり（以下、「ア！」と記載します）の取り組みをいくつかの場面で見ていただき、私はそう思いました。

いま日本の社会で、あるいは世界的に問題となっているのが、「違う種類の人々と意見を交わすことなく、同じような価値観、考え方の人たちだけでやりとりしている」という状況です。国際的に「格差分断社会の進行」が指摘され、SNS などの情報発信・共有ツールができたことでかえって「現代版ムラ社会」が広がっているのです。

その点、「ア！」が中心になって重ねてきた「輪中会議」は、葛飾区、東京都、国土交通省などの行政、大学の研究者などの専門家、町会という地域コミュニティ、小中学校、企業といった多様な主体が参加して、経験や考えをぶつけあう稀有な場といえます。ほかの市民団体をみると、ともすれば、行政の足りないところを批判し、要望する活動が多いのですが、「ア！」は輪中会議をベースにして、防災アプリの開発など新しい活動に着手し、独自の取り組みを進めています。

気候変動（地球温暖化）が進み、世界各地で「Extreme Events（極端現象）」と呼ばれる気候災害が頻発しています。巨大台風、洪水、暴風雨、熱波、干ばつ、竜巻、氷河の決壊、土砂崩れ——。日本では、猛暑日が増加し、短時間強雨の頻度が上がり、風水害に「これまで経験のない」という形容詞をつけての警戒の呼びかけを耳にするようになりました。

1,000 年に 1 度といった規模の風水害は、早期警戒情報を得て共有し、避難することが基本になります。

戦後、昭和から平成の時代にかけて、インフラストラクチャーの整備が進んだことにより、台風で甚大な被害が出るケースも少なくなりました。特に大都市に住む私たちは、かつて水害に見舞われたことを忘れ、そんなことは起こるはずがない、と思いがちです。ところが気候変動による影響により大規模水害が起きる可能性が出てきました。そこで、過去の大水害の記憶を伝えることが重要になってきます。

「ア！」は、小中学校での出前授業を進めてきました。中川榮久さん（86 歳）（東新小岩七丁目町会の前町会長）が 70 年前のカスリーン台風の経験を話し、東京大学の南貴久さん（29 歳）が海、川、水害について説明しています。新住民が増え、町が大きく変わる中で、過去の経験が語り継がれれば、その教訓を

学び、備えることにつながります。

最後に。「ア！」に参加する町会の活動を見て、私が「そうなのか」と「腹落ち」した点があります。様々な課題を解決しようとする時、「頭でわかっても、現実がついていかない」ことがあります。「観念論先行型」といいましょうか。「頭でっかち」だと、活動は続かないのです。

昨年 11 月、中川で行われた東新小岩七丁目町会のゴムボート訓練を見せてもらう機会がありました。町会の防災担当副会長を経て、現在町会長となった竹本利昭さん（55 歳）のリーダーシップのもと、進められてきた活動です。

私にとってはいくつかの気づきがありました。ボートに空気を入れる電動ポンプが作動しないというトラブルが起き、それを解決する様子を見て、「いつでも動けるように準備をしておくことは大事で、問題を把握しておくためにも訓練は欠かせない」とわかりました。また、ゴムボートで隅田川まで遠征する、小学校のプールで親子参加の訓練を行う、など遊びの要素を取り入れて楽しんで活動をしている点に感心しました。確かに、楽しくなければ訓練は続きませんよね。そして何よりも、訓練が終わった後、町会会館でお弁当を食べながらの雑談に混ぜてもらい、本音ベースの議論の大切さを知りました。

NPO 設立 20 年、おめでとうございます。

いつ起こるともしれないとんでもない災害をも生き抜けるよう、さらに全国各地のお手本となる活動を続けてください。

インタビュー：防災活動と日常生活のレジリエンス

東京大学工学系研究科 都市工学専攻
Dashti Soheil（ダシュティ・ソヘイル）
（聞き手・日本語訳：南 貴久）

加藤研究室に所属するイラン人留学生のソヘイルさんに、葛飾との関わりや、彼自身の最近の体験について、同僚である南がインタビューを行いました。

南： まず、ソヘイルさんは今年度、副読本作成委員会に参加するために、初めて上平井中学校を訪問しましたね。中学生とも交流をしたと思いますが、どんな印象を持ちましたか？

ソ： 中学生が大学生や大人たちと交流を持つことは、（彼らの学習にとって）非常に効果的だと感じました。中学生は他に関心があることがたくさんあるため、防災について論理的には重要だと思っていても、相対的に関心を持ちにくいという面があると思います。それでも彼らが参加し続けてくれていること、年上のメンバーと議論していることはとても素晴らしいことだと思います。しかし、1 つ改善点を挙げるとすれば、高校生や大学生などの「中間層」によるサポートを強化する必要があると思います。彼らは中学生とも大人とも繋がりができているため、橋渡しの役割を果たしてくれると思います。

また、継続性の問題もあります。大人のメンバーは、いずれ高齢になって参加が続けにくくなることが考えられます。また、中高生もいずれ大学生、社会人になって別のフィールドで活躍するようになると、継続的な参加ができなくなる可能性があります。そうすると、知識の交流が止まってしまうです。

南： まさにその点は、私たちがいま議論しているところです。先日加藤研究室に来てくれた大学生の小豆嶋くんは、ソヘイルさんが訪問した上平井中学校の卒業生ですが、今でもこの活動に関心を持ち続けてくれています。彼の専攻は防災ではなく文学ですが、とても広い関心を持っています。将来は学校の先生を目指しているそうです。彼はまさに今、年上のメンバーと中学生とを結ぶ橋渡しの役目を果たしてくれています。

ソ： おそらく、「中間層」の役割を果たす学生は、必ずしも防災に関する分野でなくてもいいと思います。日本の大学はサークルや部活動の文化が強いように感じます。彼らが自分の体験を仲間たちに話すことによって、ネットワークを広げてくれる可能性もありますね。

南： じつは、私たちの NPO でも、埼玉県の大学生との交流がはじまってい

ます。8月の東松山市での見学会で出会ったのがきっかけなのですが、彼らもサークルとして活動しています（編注：大東文化大学「STERA」、別稿を参照）。

ソ： それはとてもいいですね。私たちにもいいモチベーションになりますね。

南： 来年度は、葛飾の子供たちと彼らとの交流の機会も設けられるといいと思っています。荒川のまわりの現地見学なども一緒にできるといいかなと。

ソ： いいですね！現地見学は、中学生も関心が持ちやすいイベントだと思います。現地で得た知識をもとに、中学生に災害のシナリオを考えてもらうワークショップを企画するのもいいかもしれないですね。たとえば、このポンプが動かなかったらどうすればいいか…など。彼らはより創造的なアイデアを持っているので、答えを定めない問い（Open Question）を投げかけてみると面白いと思います。絵や動画にしてみるのもいいですね。

南： そうですね。彼らは本当に創造性をもっているので、我々も彼らから学ぶことも多いと思っています。

ソ： また、中学生の関心を引き寄せるためには、彼らが興味を持っている物事に関連付けをすることも必要だと思います。たとえば、体力をつけたいとか、家族を助けたいとか、ボートを漕いでみたいとか…。防災そのものに関心がなくても参加したくなるような仕掛けがあるといいですね。

それから、学校がこういったフィールドワークやスポーツなどの体験活動を単位として認めるようになるといいなと思います。

南： 大学によってはそういう単位認定をしているところもありますね。日本では中学校は単位制でないことがほとんどなので難しいと思いますが、自発的な課外学習がしっかり評価されるようになるべきだというのは完全に同意見です。

話は変わりますが、ソヘイルさんは国際会議で12月にタイに行きましたが、何か印象に残っていることはありますか？

ソ： いろいろな観点から面白い経験でした。地元のアジア工科大学をはじめ、いろいろな国の学生や研究者と話すことができたのも勿論面白かったのですが、自然景観や人々の振舞いが日本とは全く異なっていることが一番印象的でした。

南： 具体的には、どんな違いを感じたんですか？

ソ： 第一に、リスクを認知する度合いが日本より低いことです。都市はカオスに慣れています。自動車交通、歩行者、店舗、公共施設、屋台、すべての物事が混ざって1つになっています。そこに秩序は存在していませんでした。そのような状況なので、人々は「これがうまく機能しないなら、この部分を変えればいい」「この人が自分の進路にやってきたら、私が別の

方向に避ければいい」といった臨機応変な対処に慣れているようです。だから、災害時の混乱によって感じるストレスの度合いは逆に小さいのではないかと思います。

南： いわば、普段から災害時のような状況にあるということですね（笑）。イランの都市は日本とタイのどちらの状況に近いんですか？

ソ： タイよりもはるかに（カオスの度合いは）低いです。

もう1つ（タイで）面白かったのは、建物の相容れない建ち方がみられたことです。高密高層のビルの間に低層の住宅が挟まれていたり、そのすぐそばに雑草の生い茂った荒地があったり。非常に脆弱な土地利用になっていると思いました。インフラも互いに絡み合っているので、システムの1ヶ所に問題が起こると連鎖的に他の部分も機能しなくなると思いました。

また、私が見た限りではバンコクの川辺の管理状況もあまりよくなく、洪水の対策がされていないようでした。川沿いには新宿ゴールデン街のような木造の小さな店が並んだ通りがあり、短い橋を渡ると小さな木造の港がありました。そこにはタクシーボートがとまっていました。港は洪水対策が一切されておらず、川との境はロープ1本で仕切られていました。堤防はとても低く、洪水が起きたら木造の店舗はすべて浸かってしまうでしょう。クレイジーです。

南： 今の話を聞くと、たしかに人々はカオスな状況に慣れていそうですね。

ソ： 彼らはある意味、無頓着な（easygoing）人なんだと思います。彼らの中に「災害への備え」という概念は存在しえないかもしれない。

南： これは面白い観点になりそうですね。（日本とタイの）どちらのタイプの方が災害に“強い”のか。

ソ： 彼らの強みは、より柔軟であることだと思います。でも、備えの度合いは小さい。

南： イランの人々はどちらのタイプですか？日本と同じ？

ソ： いや、タイ型ですね。そこまでカオスではないですが。日本よりも柔軟ではあると思います。

南： それがベストなタイプですね！

ソ： イランにも問題はありますよ！特にインフラはまだまだ脆弱です。

南： なるほど、どの国の状況にもそれぞれ課題がありそうですね。お互いの強みを参照し合いながら防災を考えていけるとよさそうですね。今日は多様な議論ができて楽しかったです。来年度も、お互いの意見や経験を共有していきましょう。葛飾の活動への参加も待っています！

ソ： こちらこそ、ぜひよろしくお願いします。



事務局から



「天サイ！まなぶくんⅡ」機能拡張について

古川 修

NPO ア！安全・快適街づくり

天サイ！まなぶくんⅡは「誰一人取り残さない社会をみんなで実現」をコンセプトに、避難時の共助に着目した新しいアプリとして運用を開始しました。そして東新小岩北地区の皆様のお力を借りて現地テストを行い、改善要望などを取り入れ、基本的な機能の拡張を行いましたのでその内容をお知らせいたします。

■安否確認機能
見守り用途でも利用可能な無事ですを確認させるボタン

■管理画面強化
赤旗・オレンジ・青の旗を地域から検索して一望できるように管理画面をカスタマイズしました。

■救助履歴・マイステータス機能
自分が赤旗をたてたり助けられたりされた履歴を確認できます。

■複数町会の管理機能
自治体や町会単位の切り分けができるようになりました。

町会区分	
5件見つかりました。	
ID	町会区分名
1	東新小岩七丁目町会（東京都葛飾区）
2	上小松町会
3	町会 3

■会員情報の修正
会員が情報を修正できるページを追加しました。

天サイ！まなぶくんⅡを使って支援が必要な人の存在を近隣のみんなで共有しましょう。

アプリ開発の現状と今後の展開

山上 忠
NPO ア！安全・快適街づくり事務局

1. アプリの名称と性能

名称は天サイ！まなぶくん 2 です。性能は Web ブラウザを使って支援が必要な住人がスマホで助けを求め、町会組織がこれに応じていつでも支援に応えるというシステムです。町会組織に組み込み平時にも災害の混乱時にも有効に稼働する事を目的としています。実用にあたって利用者は町会組織の一員であることが求められます。また事前登録にあたっては家族の個人情報の提供を求められます。このようにして町会加入者が拡大していけば町会の活性化につながる一助になると考えられます。

2. アプリ開発の必要性

NPO は 2019 年台風 19 号発生に伴う行政・町会・住民など広い範囲を対象にヒアリングを行いました。その結果①公助（区役所）と②地元住民（自助）の間に立って③町会長（共助）に過大な負担が掛か掛かることが判明しました。これを受けて極度の混乱の中で役立つ町会長アシストツールとしてスマホで使えるアプリ天才まなぶくんⅡの開発を決定しました。

＜開発の資金＞ 一般社団法人関東地域づくり協会の公益助成事業に応募し難関でしたがアプリ開発の必要性が認められて令和 2 年度に 100 万円、令和 3 年度に 150 万円の助成金を確保しました。

3. 開発の進捗

開発は令和 2 年度 3 年度とも実績のある（株）キャドセンターに発注し、加藤孝明研究室のバックアップを受け、毎月の開発会議を開催しながら進め、令和 3 年度は葛飾区東新小岩 7 丁目町会において数回習熟訓練を行っています。令和 3 年 3 月および令和 4 年 3 月にそれぞれの成果品を関東地域づくり協会へ納品しました。

4. 現状

令和 4 年度もアプリの実用化を目指す一環として調査研究を主題にして進める予定です。また、8 月と 11 月に 7 丁目町会に予定しているこども祭りや防災訓練などに提供しながら住民の中に登録者数の拡大を予定中です。

開発は未だ実用段階には達しておらず今後も性能拡大を目指して進めていくことを課題としています。

葛飾区地域活動団体助成事業 「親子で語り継ぐ大雨時の避難について」

増澤 一朗
NPO ア！安全・快適街づくり

NPO 故理事長は日頃から「貧乏で十分な活動が出来ない。お金の入る口を考えよう。それには行政や団体が募集する助成事業にエントリーしよう。」の話から平成 19 年度葛飾区が平成 20 年度に助成する「葛飾区協働事業」に応募することとなった。

幸い、一次・二次審査を通過平成 20 年度と 22 年度そして平成 24 年度の 3 回に亘り、ハザードマップのアンケート調査、パネル展示を区役所本庁舎と新小岩北地区センターで行った。

殊に平成 22 年度は区役所本庁舎を皮切りに、12 地区センターで各会場 1 週間展示する事業を実施した。

各地区センターでの展示と説明は、センター長さんと新小岩北地区町会役員の方々のご協力で当初計画通りの展示を行うことができた。

その頃、故副理事長は四谷消防博物館に展示してあった「稲村の火」に感銘を受ける一方、故理事長は平成 23 年 3 月 11 日発生した東日本大震災で「釜石の奇跡」と「大川小学校の悲劇」を知り、当 NPO 活動の原点を改めて見直す必要を痛感した。

新小岩を東京一番の緑豊かで安全・安心なまちづくりに、全世代とりわけこれからの次代を担う子供世代を含めるべきと判断し、それまでの地元町会に加え、新小岩北地区の小中学校へも活動の輪を広げることとした。

早速、上平井小学校と上平井中学校を訪ね、以前から活動していた新小岩学園（松上小学校、新小岩中学校）と二上小学校を加え、三小学校と二中学校に講演とパネル展示を行い、令和 3 年度も一保育園（うらら）、四小学校（松上 {3・5・6 年生}、上平井 {4, 6 年生}、二上 {5・6 年生}、上小松 {5 年生}）、一中学校（上平井）で、講演、出前授業、部活動支援等の活動を行っている。

一方、葛飾区は平成 24 年度で協働事業助成制度を廃止し、平成 25 年度から地域活動団体助成事業を新たに創設し、今に至っている。

当 NPO は、東日本大震災の教訓「誰でも命だけは助かる究極『てんでんこ』を根っこに置いた「親子で語り継ぐ大災害時の避難について」をテーマに、この助成制度募集に毎年度エントリーし、幸いこれまで連続 10 回ノミネートされている。

今年度は、これまでの一保育園、四小学校、一中学校に一小学校（南小松小学校 {4 年生}）が加わり、講演や出前授業更には中学校部活動支援をコロナ禍

でも休むことなく続けている。

先ず講演会は、芝浦工業大学中村仁教授様がうらら保育園の子育て講座に毎年ボランティアで出講して下さり、五小学校へはカスリーン台風体験者の中川榮久前東新小岩七丁目町会長様はじめ、荒川学会員寺島玄様、竹本利昭東新小岩七丁目町会長様、日本能率協会コンサルティング主任研究員岸田暁郎様、菅野二郎東新小岩七丁目町会防火防災部長様、そして上平井中学校部活動支援と小学校出前授業も担当されている南貴久様東京大学加藤研究室所属で、同大学院博士課程と多様な講師陣が本事業を支えている。

これからも、当 NPO は、葛飾区地域活動団体助成事業が続く限り、エントリーし、ノミネートされるため、学校等や地域の方々と一緒に、地道且つ愚直に本事業に関わって行きたい。



前田利郎先輩を悼む

増澤 一朗

NPO ア！安全・快適街づくり 事務局

3 月を迎え、日差しも春めいた快晴のこの日、新年早々突然旅立たれた故前田利郎先輩の四十九日忌に御線香を上げたく、船山さん共々ご自宅に伺った。奥様と娘様の出迎えを受け、にこやかに微笑んでおられる、享年 90 歳とは思えぬ御遺影と対面した。

昨年暮れ、風邪をこじらせて入院された後、回復に向かい付き添いのご家族も安心し、一旦お宅に戻った途端、呼び戻され容体が急変、そのままお亡くなりになられた由、奥様・娘様は、唯々吃驚され、慌ただしいまま今日に至った御様子で、「今でも信じられずひょっこり帰って来るのではと錯覚する毎日です。」と仰られた。

衷心よりお悔やみ申し上げます。

故人は、いつも物静かで冷静、落ち着いた方で、研究熱心進取の気風をお持ちでした。八十路の半ばを過ぎてもなお頭脳明晰・記憶力の良さに驚かされ、衰えを知らない強靱なお体をお持ちの先輩と、誰もが畏敬の念を抱いていました。

昭和 30 年代は足立区役所に勤められ、雨に弱い東京東部低地帯の様子を克明に記憶され、時折私共に当時の話を聞かせてくれました。

その後都庁勤務となり、長いこと面整備に携わり、区画整理、再開発両事業の第一人者となられ、勸奨退職後も文系でありながらゼネコン大手のプランナーに迎えられる一方、当 NPO 立ち上げに加わり、故石川理事長・故徳倉副理事長悲願の「西新小岩地区スーパー堤防」事業実現を夢見て奔走されました。

設立直後当 NPO が主宰し、成戸現理事長が座長を務めた「街づくり研究会」の知恵袋として、国・都・区及びコンサルタント会社の担当者と共に取り組まれました。

平成 20 年代の中頃、以前から故徳倉副理事長が提唱していた「新小岩公園高台化」が、故石川理事長発案により区役所・地元有志の方々と、当 NPO 事務局員からなる「水害時避難場所高台等整備勉強会」が組織されるや文字通り、会の中心的役割を担って来られました。

月 1 回土曜日の夜「上平井集会所」で、勉強会を計 36 回主導し、その間要望書を作成、葛飾区長へ提出しました。その大半が区で公表した「新小岩公園再整備構想案」に盛り込まれ葛飾区は、同公園再整備に向け他の事業者と協議

中のことと思います。

この勉強会が一定の成果を見た後も、公園高台化と密接な関係のある中川の耐震対策事業や、堤防道路と蔵前橋通りとの平面交差化事業にも強い関心をお持ちで、引き続き会を引っ張って行こうとされましたが、一旦暫く休みましようとなってる間に旅立たれてしまわれました。本当に残念です。

勉強会が休むと決まる前、前田様は以前大成化工（株）工場南側 80 余名の権利者宅を一軒一軒尋ねられた際の様子を熱心に語られました。

一方、故人が携われた「街づくり勉強会」の成果が、現在荒川下流河川事務所施行の「荒川西新小岩地区スーパー堤防事業」として位置付けられています。

前田様のご尽力・ご努力に御礼申し上げ、心からご冥福をお祈り申し上げます。合掌

荒川に関する書籍が刊行されました！

NPO ア！安全・快適街づくり 事務局

荒川について歴史・治水・利水などさまざまな側面から網羅的に触れられた、小学校高学年～を対象とする本『人がつくった川 荒川——水害からいのちを守り、暮らしを豊かにする』（旬報社）が 2022 年 7 月に発売されました。

刊行に当たっては NPO ア！も著者の長谷川敦氏から取材を受け、第 4 章「今の時代の荒川と、わたしたち」の中で、出前授業や上平井中学校地域防災ボランティア部の活動、輪中会議などの取り組みが紹介されています。菅野さん（東新小岩七丁目町会）、寺島さん（あらかわ学会）、南さん（東京大学）などの出前授業講師陣のコメントも掲載されています。

荒川流域を理解するための入門書として、大人が読んで面白い内容になっていますので、よろしければぜひ手にお取りください。

長谷川 敦 著『人がつくった川・荒川——水害からいのちを守り、暮らしを豊かにする』旬報社、200 頁、2022 年 7 月 25 日発売、ISBN: 978-4845117703



編集担当から



中川のテラスで釣りをする古川くん（古川修・撮影）

NPO ア！安全・快適街づくり ～葛飾区新小岩北地区における取り組み～

作成：NPO ア！安全・快適街づくり
東京大学 加藤孝明研究室

新小岩北地区での取り組みの概要

広域ゼロメートル市街地（ゼロメートル地帯に広がる市街地）は、水害発生時の避難や被災後の復旧・復興に大きな課題を抱えている。

広域ゼロメートル市街地に位置する葛飾区新小岩北地区では、新小岩北地区連合町会、当NPO、葛飾区、専門家など、多様な主体が協働して、「防災“も”まちづくり」によって、大規模水害に備える取り組みを進めてきた。

新小岩北地区では、定期的に、多様な主体が一堂に集い、それぞれの取り組みにおける経験や工夫を共有する「輪中会議」を開催し、次の展開を話し合っている。

世代を超えた持続性を創出するために、当NPOは、大学、地域と協働して、小学校への出前授業や中学校の部活支援も行っている。

浸水への備えを有し、かつ、河川の恵みも活かした「浸水対応型市街地」を長期的に形成する方法についても議論が始まっている。



たとえば
も ← 豊かな暮らし + 親水まちづくり + 高齢社会対応 + 防災 + 色々

「防災^もまちづくり」 防災“だけ”のまちづくりではなく、
防災“も”含めた総合的な視点で取り組むまちづくり

防災“も”まちづくりを持続的に進めるためのキーワード 4 + 1

①総合性

- 防災以外の地域課題、他の目的もあわせて取り組むこと

②内発性

- 自分たちで必要だと思うから、やりたいと思うから取り組むこと

③自律発展性

- 取り組みの内容が雪だるま式に膨らんでいくこと

④多様性

- 参加者の立場やキャラクター、参加組織、活動内容が多種多様であること

+

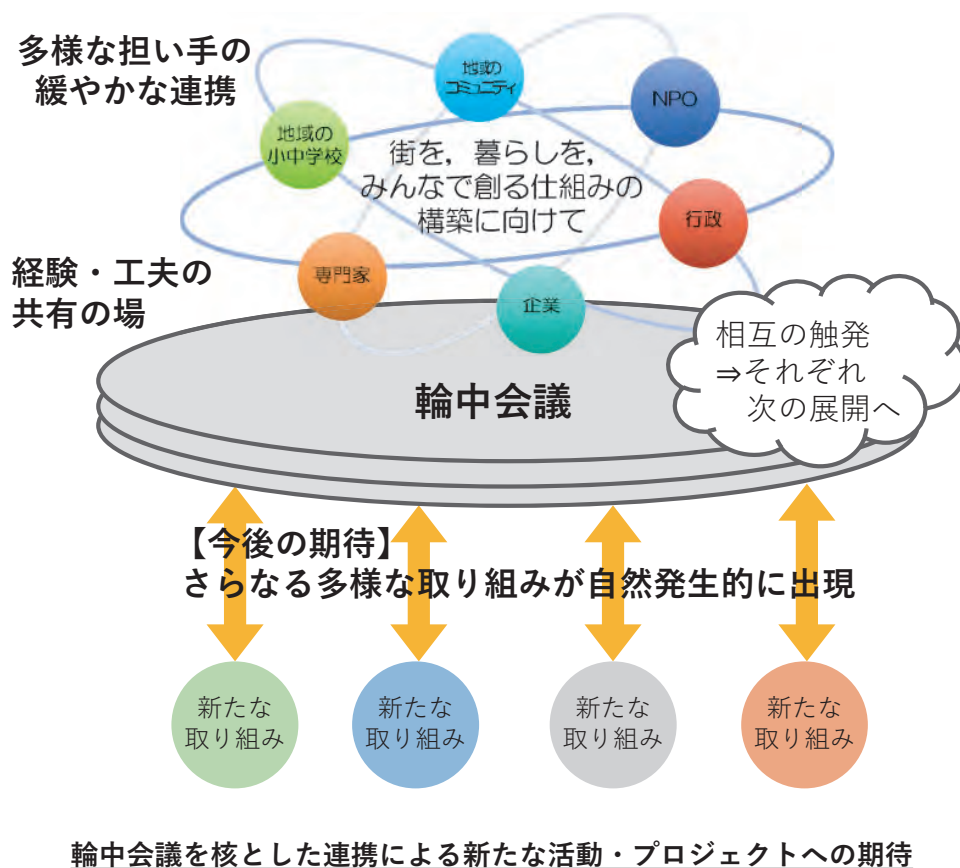
⑤市民先行・行政後追い

- 先行的な市民の取り組みを、後から行政がきちんとサポートすること



輪中会議

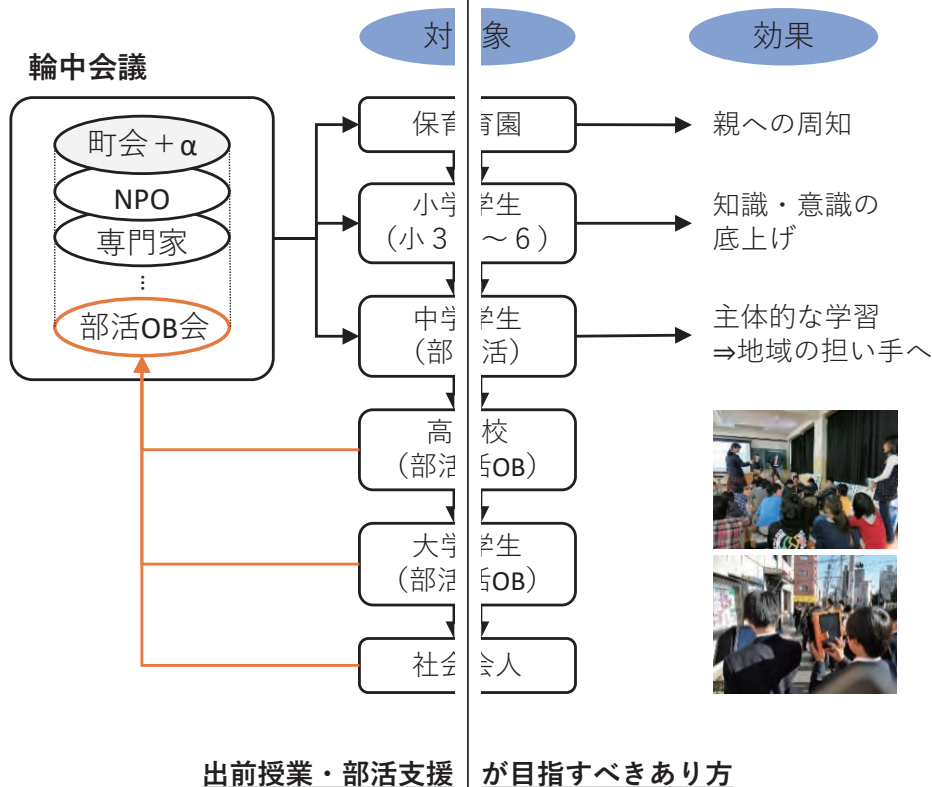
= 多様な主体によるまちづくり



世代を超えた持続性の創出

= 小学校への出前授業・中学校部活支援

⇒ 地域の担い手を自律発展的に育む循環の構築



浸水対応型市街地の検討

= 水害リスクと賢く共生する親水都市へ



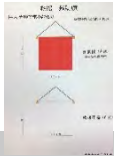
が目指すべきあり方

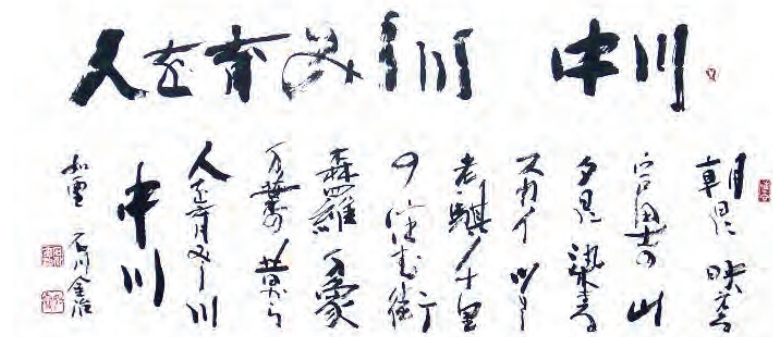
新小岩北地区における活動の系譜 ～防災“も”まちづくり～

作成：塩崎由人・渡邊喜代美・南貴久
(NPOア！安全・快適街づくり)

多様な主体による取り組み

	知る 「情報・経験を共有する」	考える 「対策を検討する」	協働体制をつくる	研究する (専門家・大学)	俯瞰する
2002 }	2004年 川の冷気の測定 / 2005年 水位表示ポールの設置				
2005 }	ワークショップ	第1～5回ワークショップ 地域の洪水リスクや行政の防災体制の現状を勉強した。それらを踏まえ、水害発生時に備えた自助・共助のあり方、被災生活のイメージ、水害に強い市街地の目標像を議論・検討してきた。	ワークショップ開始時 NPO ア！安全・快適街づくり 地域 新小岩北地区 専門家 広域ゼロメートル市街地研究会	・ワークショップの支援 ・水害リスクに関するデータの作成 ・水害リスク学習ツールの開発	2008年 5月 シンポジウム「大規模水害に備える」 10月 全国まちづくり会議 in 恵庭
2006 }	第1回 2006年12月 第2回 2007年1月 第3回 2007年4月 第4回 2007年12月 第5回 2008年2月				2009年 9月 全国まちづくり会議 in 川崎 パネル展示
2009 }	第6回 2009年4月 第7回 2009年5月	町会の方がGISを活用して、町会の人たちと水害リスク情報を共有	新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会 【役割】 ・統括・事務局・基金 ・近隣関係継続計画策定・被災地交流支援 ・広域ゼロメートル市街地研究会 【役割】 ・近隣関係継続計画策定・被災地交流支援 ・葛飾区 【役割】 ・地域防災計画との調整・地区街づくり計画との調整 ・NPO/日本都市計画事務所 【役割】 ・専門家派遣支援・被災地交流支援		6月 国際交流イベント 「水害に備える安全・快適まちづくりシンポジウム」 10月 全国まちづくり会議 in 熊本
2010 }	第8回 2011年2月 第9回 2011年3月	世代を超えた持続性の創出 地域の大人と中学生がともに地域の洪水リスクについて学習	新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会の設立 安全・快適まちづくり輪中会議	2011～2013年度 浸水対応型市街地研究会 ・必要な避難空間の推計 ・高台、浸水対応型建築物のあり方の検討 ・浸水対応型市街地の形成戦略の検討	1月 国際交流イベント 全国まちづくり防災フォーラム 10月 全国まちづくり会議 in さいたま
2011 }	2013年8月 未来の大人まちづくり会議 in 東大 (葛飾・南三陸・茅ヶ崎・伊座利)		輪中会議	・防災アプリの開発 「天サイ！まなぶくん」	3月 シンポジウム 「街を、暮らしを、みんなでどう守るか」 9月 全国まちづくり会議 in 神戸
2012 }			現在の協働体制 地域の小中学校 地域コミュニティ NPO 行政 企業 街を、暮らしを、みんなで創る仕組みの構築に向けて		3月 シンポジウム 「大規模水害に備えて街を、暮らしを、みんなでどう守るか」 10月 全国まちづくり会議 in 長岡
2013 }					3月 シンポジウム 「これからの協働のあり方を考える」 10月 全国まちづくり会議 in 北上
2014 }					10月 全国まちづくり会議 in 東京
2015 }					11月 三氏を語る会 「地域のこれからを語る」
2016 }					9月 シンポジウム「災害から学ぶ」 第一部 カスリーン台風の記憶と経験の共有 第二部 水害リスクと賢く共生する親水都市へ 10月 全国まちづくり会議 in 横浜
2017 }					9月 全国まちづくり会議 in 東京
2018 }					
2019 }					
2020 }					
2021 }					
2022 }					

NPO		町会	小中学校	PTA	福祉施設 民生児童委員	地域の有志	行政
2002 ?	2002年 NPOア！安全・快適街づくり設立						
2005	機関誌「ア！安全・快適街づくりニュース」 2005年 水位表示ポールを設置	ワークショップ の主催	町会独自の取り組み				
2006 ?	2007年11月 ボード乗船下船・親水体験 「葛西海浜公園へ行こう」	● ● ● ● ●					2007年～洪水ハザードマップの配布（区） 
2009	2008年3月 「川から街を見る」 		2009年11月 松戸市21世紀の森と広場への避難訓練 西新小岩3丁目公園での炊き出し訓練 				2009年 区民や事業者等への水害出前講義の開始（区） まるとまちごとハザードマップ（国）
2010			避難用ボード使用訓練 				大規模水害対策検討委員会設置（区） 中川テラス開園（区）
2011	<u>ゼロメートル市街地協議会の運営</u> ・シンポジウムの企画 ・輪中会議の運営 <u>小中学校での出前講座</u>	● ●	水害も考慮した 避難所運営会議 	上平井中学校 地域防災ボランティア部の 取り組み （NPO・大学も支援） 小学校での 出前授業	学習支援の連携		都市計画マスタープランの改訂による 高台避難場所の位置づけ（区） 「事業継続計画作成のすすめ」 を作成（国）
2012				2012年8月 第56回全国特別活動研 究協議大会にて発表 「水害の調査研究」			「水害時における民間集合住宅との 一時避難締結に係わるガイドライン」 を作成（国）
2013		赤旗白旗救援訓練 			ふたがみこどもまつり でのボート体験 	松上小学校への避難訓練 （たつみ保育園） 東京都認可保育園 BCP作成の義務化	水害時避難用高台整備勉強会 （西新小岩3丁目有志） おれたちの朝旅 
2014			民間マンションとの 水害時一次協定締結 中学生と共同で防災訓練 スタンドパイプの練習会		アレルギーガイドライン 非常食アレルゲン除去食 の購入 高齢者向けの防災講演会 水防法改正の説明会	高台整備事例：東京理科大 葛飾キャンパス 1.5m程度の盛土を実施 	防災アプリ「天サイ！まなぶくん」 配信開始（区） 高台整備事例：東京理科大 葛飾キャンパス 1.5m程度の盛土を実施 
2015							洪水緊急避難建物への備蓄物資配備（区） 水害に強い建物を促進する街づくりルール検討中（区） 消防団へのゴムボートの貸与（区） 江東5区大規模水害対策協議会
2016			内閣府・災害避難カード ワークショップ 〔東新小岩7丁目町会、 内閣府、葛飾区、 NPO、大学〕	防災マップの作製 		勉強会から区への提言 ↓ 区からの回答の受理 	要配慮者利用施設を対象とした水害時の 避難計画作成支援（区） 新小岩公園の高台化へ（区） 内閣府・災害避難カードワークショップ
2017			↓ “犠牲者ゼロ”の実現に 向けたワークショップ				浸水に対応した街づくり検討会（区）
2018							“犠牲者ゼロ”の実現に 向けたワークショップ（区）
2019	モザンピーク 研修生受入れ		東新小岩7丁目 市民消防隊 女性隊結成	子供たちの マイタイムライン づくり	地域住民と連携した 避難体験		「古井戸」の復元（区・都）
2020	Web 事務局会議	「古井戸」の活用 説明板づくりWS （2019年11月）	広域避難訓練 マイタイムライン 台風19号での避難体験				ハザードマップの見直し（区）
2021							
2022							



書と作詞は石川金治。「人を育みし川、中川」の詩文全体は、北新小岩地域を流れる、中川の豊かさを、いつも感じているので、その讃辞の詩。この“老キ千里”の文言は、私達と一緒に活動の屋台骨を支えている人の顔を想像しやすい

文言を探した結果です。また作詞のもう一つの動機は、“事務局会議終了後、渡邊さんと塩崎さんと 3 人で、夕日の中のスカイツリーを見た時の感動が大きかったから、その感動が原動力となって、作詞をしました”と石川さんは語った。そのとき渡邊が老騏、老驥とは、と問うたら、馬小屋に寝ていても志は千里にあり、老騏、老驥は個性あふれる表現という。石川さんは千の風にのって逝ってしまったが書は今も生きている。中川があるかぎりしばらく表紙に登場いただく。

2016 年、鈴木町会長、徳倉会長、石川理事長と惜別するも、3 人の志は今も活動の中で生き、引き継がれた人たちによって新たな展開をしている。今、2023 年。

..... ♪ 28 号 編集後記 ♪ 2023・03

▼NPO ア！創設から 20 年▼今号では 20 年分の活動記録を収録した▼20 年は「ア！」という間であったが、振り返ってみると濃密な活動を続けてきた▼コロナ禍中といえども、地域の学校出前授業、部活支援▼出前授業の副読本作成には中学生も参加した▼多世代の多様な人々による議論は新たな視点が生まれて非常に面白い▼また部活 OB の高校生・大学生も出前授業の講師デビュー▼輪中会議にも中学生・高校生・大学生が揃い踏みをしており、世代を超えた継承がはじまっている▼近年水害被害も超多発。地球環境はますます災害の巨大化が進む方向に▼災害ニュースは水害、火災、地盤の崩壊、世界共通の被害が続発している▼災害と避難は、コロナ禍が加わって、新たな局面をむかえる。こちらも世界共通の課題▼南は 2022 年秋にコロナ感染を経験した▼家族とも隔離され、1 週間ほど部屋から出られない生活が続いた▼水害時の垂直避難によるサバイバル生活の疑似体験となった▼普段当たり前のことができない状況に何日まで耐えられるかを考える機会となった▼待ち遠しかった入浴は隔離から 5 日目に▼災害時にはさらに劣悪な環境になるだろう▼これから“災害リスクと賢く共生した親水都市”“浸水対応型市街地形成”“浸水対応型建築”“避難のかたち”も議論を重ねるだろう▼そして世界へ発信することにもなろう▼私たちの暮らし方の問題も大きい▼誰でも使える「天サイまなぶくんⅡ」の完成も待たれる▼さて今号もコロナ禍にもめげずに、多様貴重な寄稿をいただいた。感謝いたします▼南さんは博士論文に挑戦中▼渡邊は介護体験から新たなことごとを学び、まとめたいている▼高校生・大学生の力も借りて ZOOM で編集作業！▼“ZOOM で編集”も毎週になりますが(笑)▼最終校了は南・渡邊で行いました▼今号もすばらしい総集編となりました▼皆よく頑張っている♪いいね！▼180 ページ超えとなった冊子はまた“重い”けどかなりおもしろい▼楽しんでご覧ください(渡邊・南)

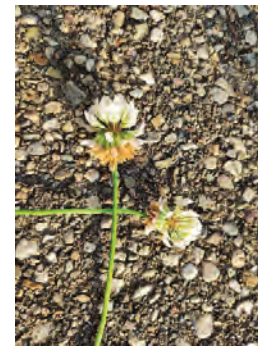
編集会議：渡邊喜代美(総括)・南貴久・小豆嶋勇誓・増渕桜太郎・勝又一喜

「特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり」
〒124-8535 東京都葛飾区西新小岩三丁目5番1号
電話 / FAX 03-3696-7480
ホームページ: <http://www.banktown.org/>

■シロツメクサの花かんむりの作り方

① 芯をつくる

花を 2 本 90 度交差し
て持つ



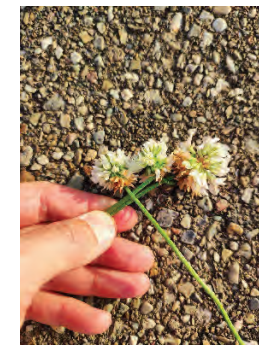
② 巻きつける

2 本目を下からぐるっ
と巻きつける



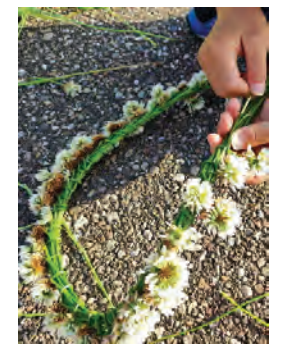
③ 巻いていく

次の花を上置き下
からまわす



④ 更につなげる

同様にどんどんつな
げていく



⑤ 輪っかにする

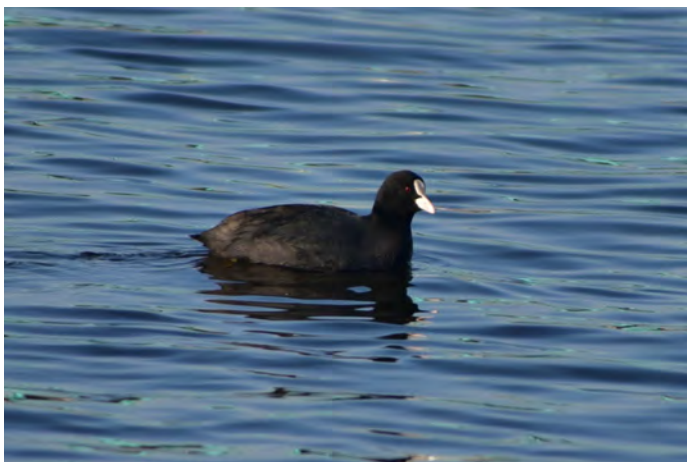
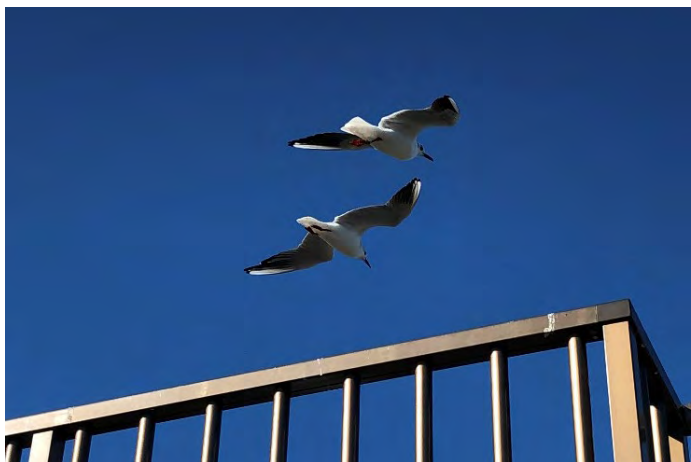
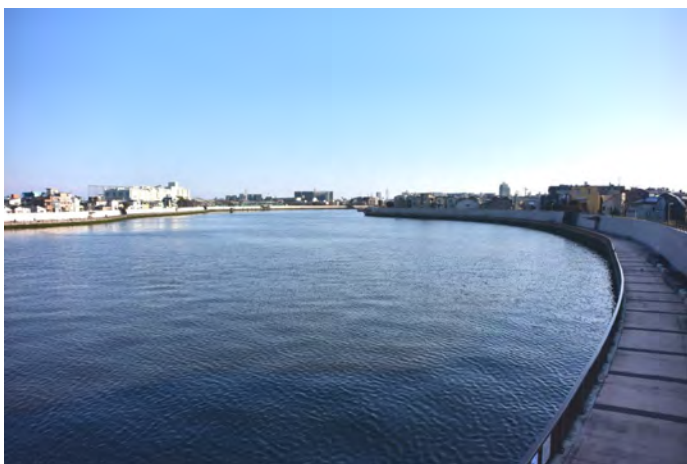
好みの長さになったらはじめと終わりを重ね
て輪っかにしてとめます。



⑥ 完成！

長くすればネックレス、短くすれば王冠にな
ります。





この冊子は（一社）関東地域づくり協会の助成を受けて作成しています。